熊本県文化財調査報告　第224集

Na Ka Ka Ta　Sho U Ji

中片小路

Site

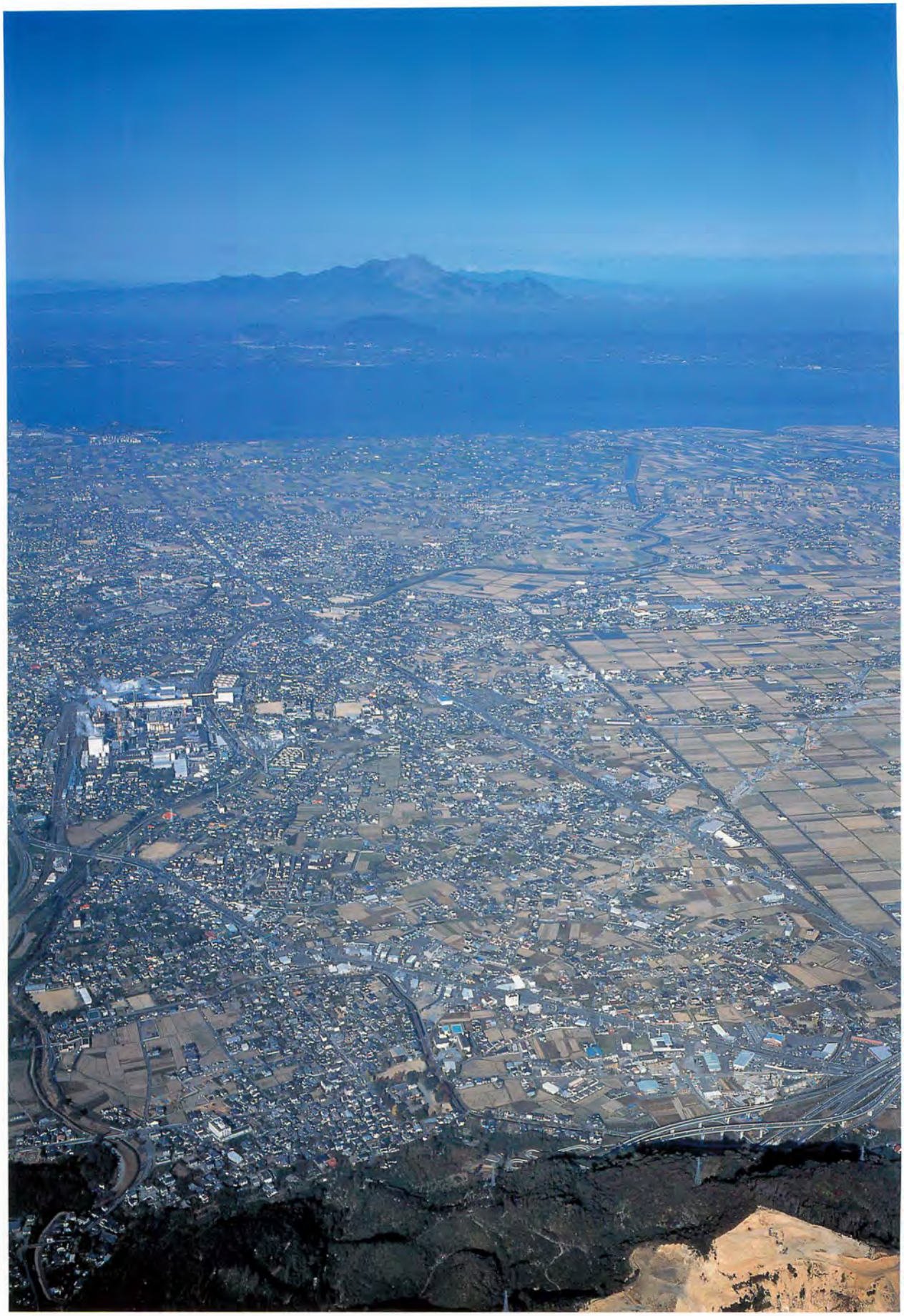
遺跡

九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う
埋蔵文化財調査

2005

熊本県教育委員会

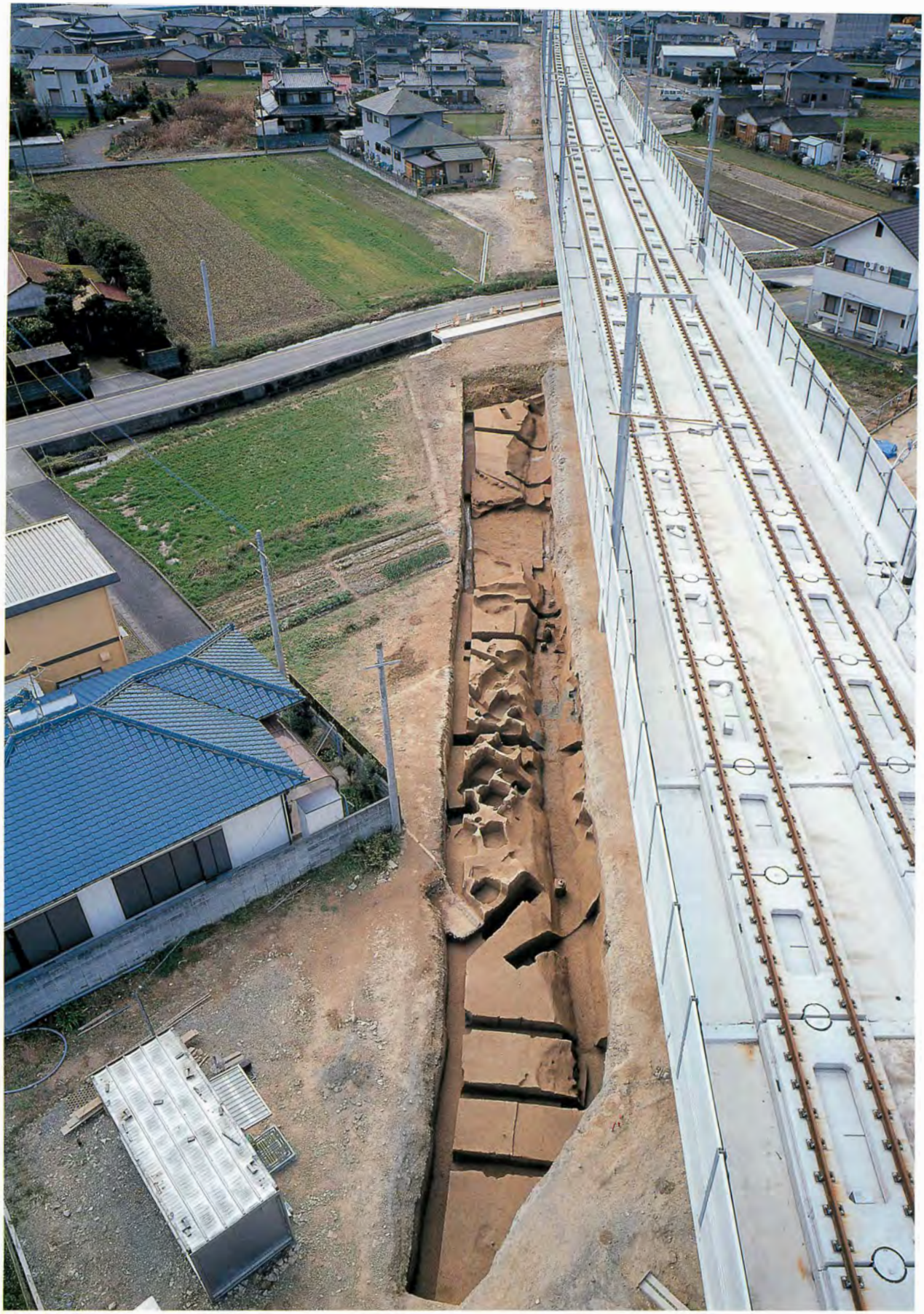
中片小路遺跡周辺垂直写真



八代市街遠景（東より）

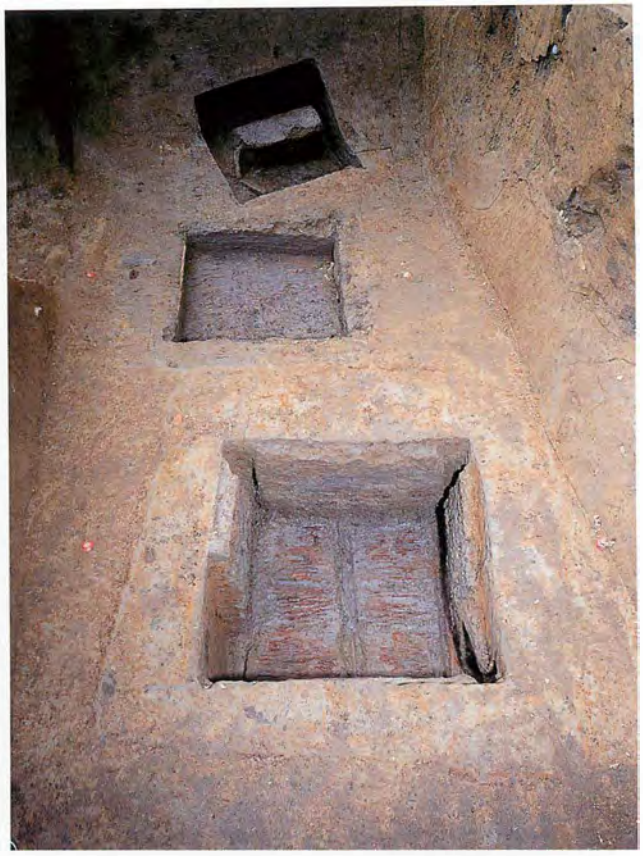
中片小路遺跡Ⅲ区全景（北から）

中片小路遺跡Ⅳ区 近世墓完掘状況（北から）



中片小路遺跡調査Ⅳ区 古墳時代初頭〔溝 SD007〕完掘（北から）

墓　ST002

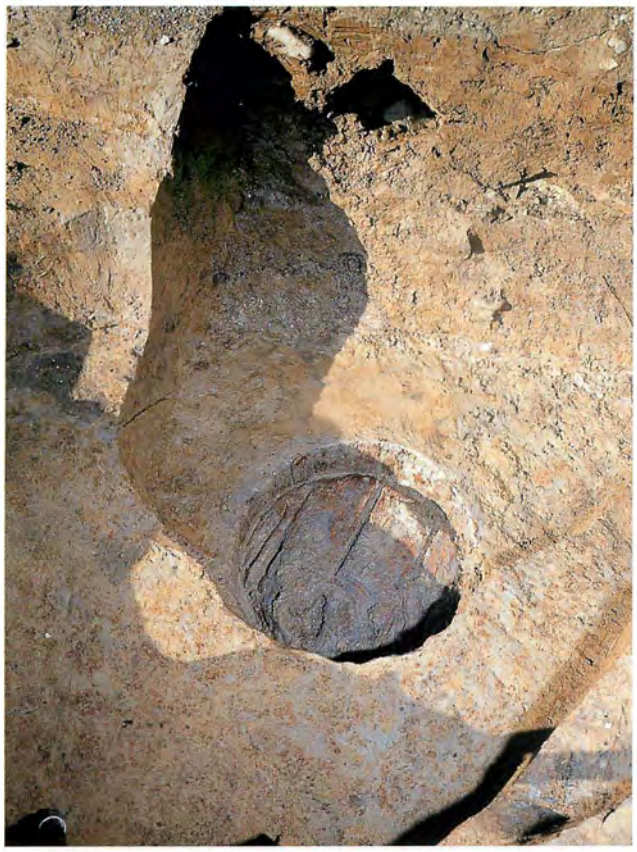


墓　ST009

墓　ST031

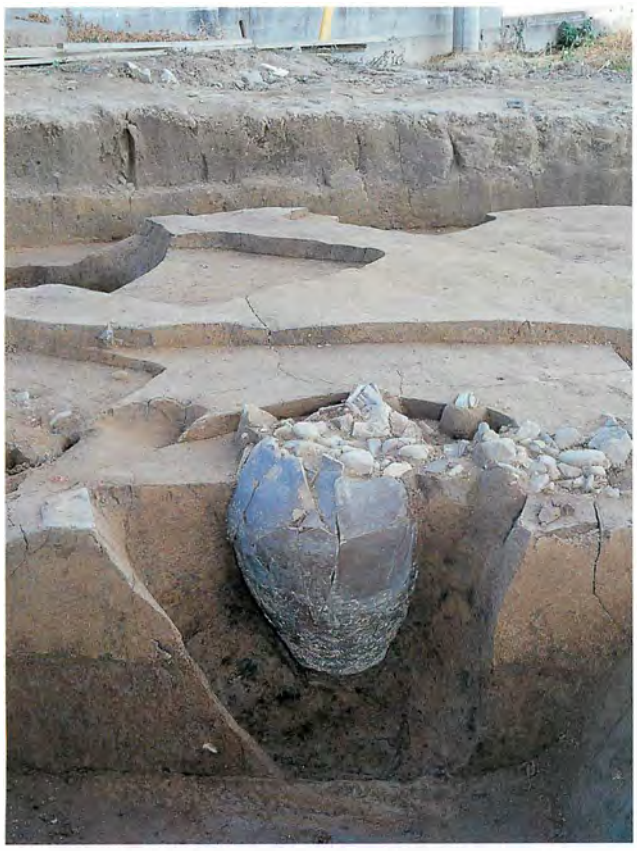
墓　ST036

近世墓検出状況　―箱式木棺―



樋棺　　墓 ST037

樋棺　　墓 ST056



甕棺　　墓 ST012

甕棺　　墓 ST043

八代平野上より九州山地を望む（奥は球磨川）※矢印が中片小路遺跡

熊本県文化財調査報告　第 224 集

Na Ka Ka Ta　Sho U Ji

中片小路

Site

遺跡

九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う
埋蔵文化財調査

2005

熊本県教育委員会

序　文

平成12年に始まりました、八代市内における九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事の発掘調査が平成15年度をもって終了しました。

新幹線ルート内には「八代市指定史跡　古麓城跡」を始め、中世八代の風景を色濃く残す古麓城下の「宮地地区」やその他、多くの文化財が知られています。

今回発掘調査を実施した遺跡のなかには、八代市在住の歴史家だった故江上敏勝氏により発見された遺跡も多く含まれています。早くから、沖積地である八代平野に注目されており、それを裏付けるように本事業の工事に伴い新八代駅周辺からは弥生時代前期から古墳時代初頭にかけての遺跡が多数発見されています。

本報告書は、新八代駅の南側に位置する中片町で新幹線本線に隣接する側道敷設工事に先立ち、調査を実施した遺跡の報告です。

遺跡からは、近世の墓地をはじめ中世・古代・古墳時代と多様な遺構が検出されました。また、縄文時代晩期の刻目突帯文土器が出土しており八代平野への人々の進出が縄文時代まで遡ることが判明しました。

最後に、本報告書を基礎資料として、今後の八代地域での研究が大きく飛躍することを願うとともに、文化財保護が前進することを期待いたします。

平成17年３月31日

熊本県教育長　柿塚純男

例　言

1　本報告書は熊本県教育委員会が2002年（平成14年）12月２日から2003年（平成15年）３月28日にかけて、八代市中片町字小路において実施した発掘調査の成果を報告するものである。

2　本遺跡名は当初「中片町遺跡」として、日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局（現：独立行政法人　鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局　以下、「鉄道支援機構」と言う。）と埋蔵文化財の保存・調査に関する協議を実施していたが、平成13年から平成14年にかけて八代地域における県文化課の試掘・確認調査が終了したのを受け、八代市教育委員会と県文化課の協議の結果、平成14年６月25日付け教文第814号で遺跡地図へ追加登録（遺跡範囲・名称変更）を経て「中片小路遺跡」に変更された。

3　この調査は「九州新幹線建設工事」に伴うものとして、鉄道支援機構の依頼を受けて熊本県が実施した。

4　発掘調査は長谷部善一・高田英樹を担当者として、松尾 茂・村中智絵の協力を得て遂行した。

5　写真撮影は遺構を長谷部・松尾・村中が撮影し、遺物は長谷部が担当した。また、モノクロ写真の焼付けは、独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 平城宮跡発掘調査部写真資料調査室にて牛嶋 茂専門職員、杉本和樹氏・鎌倉 綾氏の指導・協力を受け長谷部・洲崎明子が行った。近世墓については一部に杉本氏が焼付けを行ったものも含まれる。

6　遺物の実測は主に稲葉貴子・唐木ひとみが行い、一部を宇田員将・上髙原聡・村中智絵が行い、製図を横田 愛・森 愛華・戸田紀美子（県文化財資料室）が行った。

7

赤羽一郎氏にご教示頂いた。

8　本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に準じている。

9　遺構図の座標値は、平面直角座標系Ⅳ系による。2002年４月１日からの改正測量法の施行に伴い、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、八代地域での発掘調査は日本測地系によっているので本書の平面座標も日本測地系により表示している。また、標高は、東京湾平均海面を基準とする海抜高であらわす。（日本水準原点：Ｈ＝24.4140m）

10　本書で使用した地図は、八代市都市計画課の承認を得て使用している。

11　本書中での人名は、すべて敬称を省略させていただいた。

12　本書中で表記している遺物の器種を表わす用語として「椀」「杯」については、木偏で統一している。

13　報告書の編集は、文化財資料室長 野田拓治の指導のもとに、長谷部がおこなった。

本調査に伴う業務委託一覧

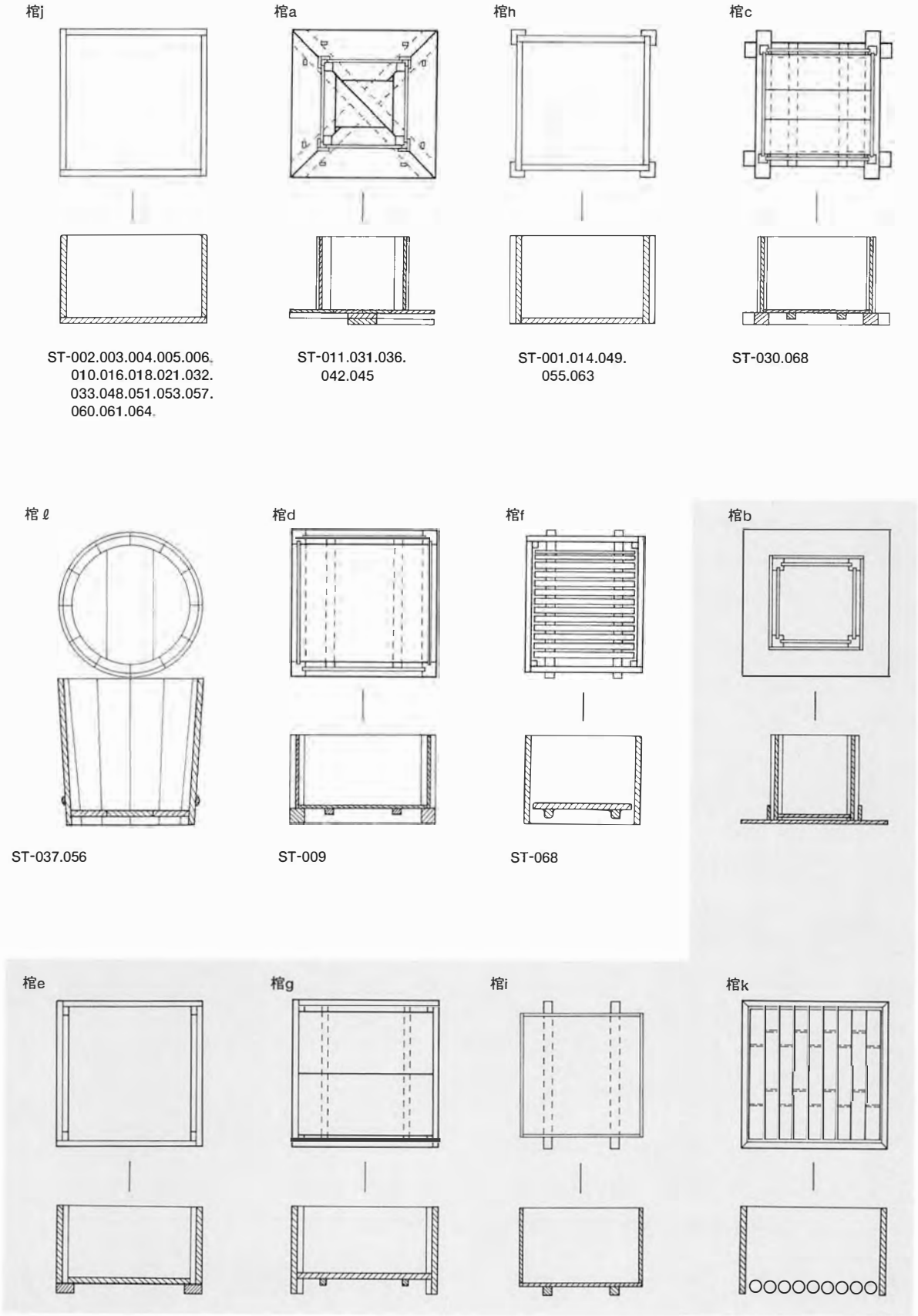
【現地調査】

・４級基準点測量及びメッシュ杭設置業務　有限会社　和樹コンサルタント

・遺構実測業務　株式会社埋蔵文化財サポートシステム　熊本支店

【報告書作成】

・デジタルトレース業務　株式会社埋蔵文化財サポートシステム　熊本支店



本遺跡に於ては、棺b.e.g.i.kの出土例なし。

Fig. 1　近世墓木棺模式図

本文目次

序　文
例　言

第Ⅰ章　調査の契機と経過
第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
第２節　調査組織 …… 1
第３節　確認調査と本調査の経過について …… 1
1　確認調査の概要と遺跡名について
2　本調査の経過
第４節　報告書作成業務の経緯 …… 2
第５節　九州新幹線（新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財調査の概要）
…… 3

第Ⅱ章　遺跡の概要
1　遺跡の地理的環境 …… 9
2　遺跡の歴史的環境 …… 9

第Ⅲ章　調査とその成果
第１節　調査の概要 ……13
第２節　Ⅲ区の土層 ……13
第３節　各調査区の設定 ……14
第４節　Ⅲ区の調査成果 ……14
1　近世の遺構 ……14
2　中世の遺構 ……20
3　Ⅲ区の出土遺物 ……21
第５節　Ⅳ区の調査成果 ……35・36
1　近世の遺構 ……35・36
近世墓の調査 ……43
1）溝・土坑・その他の調査 ……69
2）出土遺物 ……72
2　中世の遺構 ……79
中世の出土遺物 ……85
3　古墳時代の遺構 ……94
出土遺物 ……94

第Ⅳ章　考　察 ……97
参考文献

挿図目次

Fig. 1　近世墓木棺模式図
Fig. 2　中片小路遺跡位置図 …… 4
Fig. 3　周辺地形図 …… 5
Fig. 4　中片小路遺跡周辺地形図 …… 6
Fig. 5　中片小路遺跡周辺遺跡分布図 …… 7
Fig. 6　中片小路遺跡周辺字図 ……12
Fig. 7　Ⅲ区　遺構配置図及び土層断面図 ……15・16
Fig. 8　Ⅲ区　SK001・003・004・005・006遺構実測図 ……18
Fig. 9　Ⅲ区　SE001遺構実測図 ……19
Fig. 10　Ⅲ区　出土遺物実測図 ……25
Fig. 11　Ⅲ区　出土遺物実測図 ……26
Fig. 12　Ⅲ区　出土遺物実測図 ……28
Fig. 13　Ⅲ区　出土遺物実測図 ……29
Fig. 14　Ⅲ区　出土遺物実測図 ……30
Fig. 15　Ⅲ区　出土遺物実測図 ……31
Fig. 16　Ⅳ区　遺構配置図及び土層断面図 ……33・34
Fig. 17　Ⅳ区　近世墓配置図 ……35・36
Fig. 18　Ⅳ区　近世遺構配置図 ……37・38
Fig. 19　Ⅳ区　近世「大田の井出」用水路完掘図及び土層断面図 ……39・40
Fig. 20　Ⅳ区　近世墓実測図　－1－ ……41
Fig. 21　Ⅳ区　近世墓実測図　－2－ ……42
Fig. 22　Ⅳ区　近世墓実測図　－3－ ……43
Fig. 23　Ⅳ区　近世墓実測図　－4－ ……44
Fig. 24　Ⅳ区　近世墓実測図　－5－ ……45
Fig. 25　Ⅳ区　近世墓実測図　－6－ ……46
Fig. 26　Ⅳ区　近世墓実測図　－7－ ……47
Fig. 27　Ⅳ区　近世墓実測図　－8－ ……48
Fig. 28　Ⅳ区　近世墓実測図　－9－ ……49
Fig. 29　Ⅳ区　近世墓実測図　－10－ ……50
Fig. 30　Ⅳ区　近世墓実測図　－11－ ……51
Fig. 31　Ⅳ区　近世墓実測図　－12－ ……52
Fig. 32　Ⅳ区　近世墓実測図　－13－ ……53
Fig. 33　Ⅳ区　近世墓実測図　－14－ ……54
Fig. 34　Ⅳ区　近世墓実測図　－15－ ……55
Fig. 35　Ⅳ区　近世墓実測図　－16－ ……56
Fig. 36　Ⅳ区　近世墓実測図　－17－ ……57
Fig. 37　Ⅳ区　近世墓実測図　－18－ ……58
Fig. 38　Ⅳ区　近世墓実測図　－19－ ……59
Fig. 39　Ⅳ区　近世墓実測図　－20－ ……60

Fig. 40　Ⅳ区　近世墓実測図　―21―　……61
Fig. 41　Ⅳ区　近世墓実測図　―22―　……62
Fig. 42　Ⅳ区　近世墓実測図　―23―　……63
Fig. 43　Ⅳ区　近世遺構実測図　……71
Fig. 44　Ⅳ区　近世出土遺物実測図　……74
Fig. 45　Ⅳ区　近世出土遺物実測図　……75
Fig. 46　Ⅳ区　近世出土遺物実測図　……76
Fig. 47　Ⅳ区　近世出土遺物実測図　……77
Fig. 48　Ⅳ区　近世出土遺物実測図　……78
Fig. 49　Ⅳ区　中世遺構配置図　……81・82
Fig. 50　Ⅳ区　中世遺構配置図（旧河川）　……83・84
Fig. 51　Ⅳ区　SK023遺構実測図　……85
Fig. 52　Ⅳ区　SK022・024遺構実測図　……86
Fig. 53　Ⅳ区　遺構実測図　……87
Fig. 54　Ⅳ区　中世出土遺物実測図　……88
Fig. 55　Ⅳ区　中世出土遺物実測図　……90
Fig. 56　Ⅳ区　古代～中世の出土遺物実測図　……91
Fig. 57　Ⅳ区　中世出土遺物実測図　……92
Fig. 58　Ⅳ区　古墳時代出土遺物実測図　……93
Fig. 59　Ⅳ区　SD007出土遺物実測図　……94
Fig. 60　Ⅳ区　出土遺物実測図　……95
Fig. 61　Ⅳ区　出土遺物実測図　……96

表目次

Tab. 1　九州新幹線新八代・西鹿児島間建設に伴う埋蔵文化財発掘一覧表 …… 3
Tab. 2　周辺遺跡地名 …… 8
Tab. 3　Ⅲ区土器観察表(
Tab. 4　Ⅲ区陶磁器観察表(
Tab. 5　Ⅳ区土器観察表(
Tab. 6　Ⅳ区陶磁器観察表(
Tab. 7　Ⅳ区土器観察表

図版目次

巻頭カラー
PL. 1　Ⅲ区 SE001　土層断面
PL. 2　Ⅲ区　出土遺物
PL. 3　Ⅲ区　出土遺物
PL. 4　Ⅲ区　出土遺物
PL. 5　Ⅲ区　出土遺物
PL. 6　Ⅲ区　出土遺物
PL. 7　Ⅲ区　出土遺物
PL. 8　Ⅲ区　出土遺物
PL. 9　Ⅳ区　ST001　002　005　006
PL. 10　Ⅳ区　ST007　009　011　012
PL. 11　Ⅳ区　ST014　016　020　021
PL. 12　Ⅳ区　ST022　023　024　026
PL. 13　Ⅳ区　ST028　029　031　032
PL. 14　Ⅳ区　ST033　034　036　037
PL. 15　Ⅳ区　ST038　039　040　041　042
PL. 16　Ⅳ区　ST043　044　045　047
PL. 17　Ⅳ区　ST048　049　050　051
PL. 18　Ⅳ区　ST052　053　054　055
PL. 19　Ⅳ区　ST056　057　058　059
PL. 20　Ⅳ区　ST060　061　063　064
PL. 21　Ⅳ区　ST066　067　068　070
PL. 22　Ⅳ区　ST071　S072
PL. 23　表土剥ぎ時出土墓石
PL. 24　Ⅳ区　中世流路６・７完掘状況
SD015完掘状況
SK015遺物出土状況
PL. 25　Ⅳ区　SD007遺物出土状況
土層断面
PL. 26　Ⅳ区　近世陶器
PL. 27　Ⅳ区　出土遺物
PL. 28　Ⅳ区　出土遺物　天目茶碗
PL. 29　Ⅳ区　出土遺物
PL. 30　Ⅳ区　出土遺物　瓦質土器　擂鉢
PL. 31　Ⅳ区　出土遺物
PL. 32　Ⅳ区　出土遺物
PL. 33　Ⅳ区　出土遺物
PL. 34　Ⅳ区　出土遺物
PL. 35　Ⅳ区　出土遺物　石鍋
PL. 36　Ⅳ区　古墳時代　出土遺物
PL. 37　Ⅳ区　出土遺物

第Ⅰ章　調査の契機と経過

第１節　調査に至るまでの経緯

日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局（現：独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局以下、「鉄道支援機構」）は、昭和48年11月13日に整備計画の決定された新八代・西鹿児島間建設事業を計画し、事業予定地内の埋蔵文化財の有無について文化課に照会した。

それを受けて文化課は、事業予定地内の分布調査を実施し、中片小路遺跡を含む12遺跡を確認した。これらの遺跡は新幹線建設工事に伴い、事前に路線変更・現地保存について協議を実施した結果、路線変更が不可能であると判断されたため、工事に先立ち記録保存を目的とし発掘調査を実施した。その後、日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局、文化課で遺跡の取り扱いについて協議を行い、平成８年度から用地取得等の条件が整った箇所から事前調査（踏査・試掘・確認調査）を断続的に実施した。

調査は、日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局から熊本県教育委員会（文化課）への受託事業として実施し、平成12年４月より八代地域における発掘調査を開始した。

中片小路遺跡の確認調査は、平成11年度に実施していたが、その後、本線部分の発掘調査を平成12年度に、当調査区の隣接部（西側）にあたる本線部で実施した。その結果を踏まえて、今回、本調査を平成14年12月４日から平成15年３月12日まで取り付け道路部（側道）付設工事に先立ち発掘調査を実施した。

第２節　調査組織

2002年（平成14年度）　発掘調査

調査責任者　成瀬烈大（文化課長）
調査事務局　小田信也（課長補佐）
　　中村幸宏（主幹兼総務係長）
　　天野寿久（主任主事）
調査総括　　島津義昭（課長補佐）
調査企画　　髙木正文（主幹兼文化財調査第１係長）
調査担当者　長谷部善一（主任学芸員）
　　高田英樹（主任主事）
　　松尾　茂（調査員）
　　村中智絵（調査員）
調査協力者（敬称略　順不同）
　吉永　明、西山由美子（八代市教育委員会）
　出田久斉、宮部武典、米村 大、上髙原聡

2004年（平成16年度）　整理報告書作成

報告書責任者　島津義昭（文化課長）
報告書事務局　吉田　惠（課長補佐）
　　爛杭正義（主幹兼総務係長）
　　天野寿久（主任主事）
　　小谷仁志（主事）
整理総括・指導　野田拓治（主幹兼文化財資料室長）
報告書担当　　長谷部善一
　　横田　愛、森　愛華
整理協力者　　高田英樹（現：県立鹿本農業高等学校）
　青木勝士（県私学文書課）
　池田朋生（県立装飾古墳館）
　宇田員将、上髙原聡、村中智絵、松尾　茂、
　洲崎明子、戸田紀美子、稲葉貴子、唐木ひとみ、
　山崎秀子、田口綾子、北原美奈子

第３節　確認調査と本調査の経過について

１　確認調査の概要と遺跡名について

本調査を実施した八代市中片町字小路地区は、今回の事業にあたって県文化課が試掘調査を実施し確認した遺跡のひとつである。試掘調査は平成11年７月16日に県文化課にて実施し、８世紀後半から９世紀前半の須恵器・土師器、14世紀から15世紀にかけての中世須恵器・土師器・陶器、18世紀頃の陶器・磁器等の出土があり、各時代において柱穴や溝等の遺構を検出している。

その結果を踏まえて遺跡の時期は、古代・中世・近世とし、遺跡名を「(仮) 中片町遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地として認知した。その後、平成14年６月25日（教文第814号）で八代市内の新幹線事業に伴い確認された遺跡名称の整理を行い、“中片小路遺跡”と改称し現在に至っている。

2　本調査の経過

今回本調査を実施した場所は、平成12年度・平成13年度に発掘調査を実施している新幹線本線部の隣接地にあたり、その時確認された遺構の広がりが予想された。そのため当時の調査担当者の助言を受け、図面等により遺構を確認し本調査に臨んだ。発掘調査の総面積は1,200㎡で、調査を要する時代(遺構面)は近世・中世・古墳時代の３時期であった。本調査は2002年(平成14年)12月７日より始まり、2003年(平成15年)３月28日に終了した。

以下、その経過を調査区・月毎に記す。

3　区

【12月】 表土剥ぎ後、調査を開始する。明確な撹乱を除去後、近世以降の溝・土坑を中心に検出・掘り下げ作業を行う。また、調査区内に南一北方向のトレンチを設定して土層を確認しつつ遺構面を把握し、調査方針を検討しながら調査を進める。

【１月】 4.5.6グリッドを中心に顕著に見られるⅣ１－ａ層の掘り下げを行う。Ⅳ１－ａ層除去後、Ⅳ１層面で井戸状遺構等、中世の遺構を検出。南一北トレンチから一貫した土層状況が見受けられなかったため、さらに東西にグリッド毎のトレンチを設定した。中世遺構完掘後、Ⅳ１層を掘り下げる。中世面調査終了後、高所作業車による全景写真撮影を実施。

【２月】 Ⅳ１層掘り下げ終了。Ⅳ２層面での遺構は確認出来なかった。その後、各トレンチの土層断面実測を行い、調査を終了する。（松尾）

4　区

【12月】 12月５日より重機による表土剥ぎ作業を始める。近世墓付近は上部からの撹乱が多数入っており遺構面の確認が困難であったため、一部に深掘をして土層確認をした後、表土剥ぎを終了した。その際、深掘した埋土中及び土層の断面から、近世墓が３基明瞭に確認され、近世墓が良好な状態で残っていることが予想された。

表土剥ぎの後、国土座標（日本測地系）による基準杭を設置し発掘調査を開始した。

【１月】 １月８日より本年の調査を開始する。近世墓が所在する場所は、本調査区のなかで一番の高所にあたり、地形の復元のため等高線測量を実施しながら調査を進める。近世墓からは木棺土坑墓・甕棺墓が出土し、内部からは人骨のほか副葬品である、数珠・古銭・櫛（プラスチック製）・入歯等、多数出土。近世の旧河川からは五輪塔、多数の陶器・磁器が出土した。ほかに、近現代の畑区画の溝や土坑など約30基を検出し調査を実施する。

【２月】 引き続き、近世墓の調査を実施する。月の中頃には近世墓の調査も終わり、引き続き中世の遺構調査を実施する。３区を調査していた調査員(高田・松尾)が合流し残されていた調査区南側(近世の旧河川)の調査を進める。２月19～26日まで長谷部は(独)奈良文化財研究所　専門調査課程『中世陶磁器研修』受講のため奈良へ出張する。

２月28日には近世・中世までの調査が終了したため、高所作業車による近、中世面完掘状況の写真撮影を行う。撮影後、Ｂ－８ Gridで調査区東西に下層の遺構確認のためのトレンチを入れ、古墳時代の遺物を伴う溝を検出する。

【３月】調査区際に残っていた近世墓と中世の遺構調査を行いながら、南北に走る古墳時代の溝状遺構の検出作業を行う。３月12日には近世墓の墓石撮影と高所作業車による古墳時代遺構完掘撮影を行う。（村中）

第４節　報告書作成業務の経緯

中片小路遺跡の調査報告書作成に伴う作業は、平成14年度の八代地区における「宮地小畑・観行寺遺跡」（側道部）の発掘調査中から八代において遺物の水洗、注記、接合等の１次整理を行い、平行して遺物実測図等の作成にあたった。その後、八代地区における発掘調査が終了した平成14年12月から文化財資料室にて製図作業、文章作成等、報告書作成に係わる整理作業を実施した。

第５節　九州新幹線（新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財調査の概要）

九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は、平成９年12月８日に水俣市「長野遺跡」から始まり、平成15年10月29日に八代市宮地町「宮地小畑遺跡（側道）」で終了した。

九州新幹線建設に伴う発掘調査は、一覧表のとおりである。

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査員	時代	主な遺構・遺物
1	長野遺跡（本線） 調査面積1,500㎡	水俣市長野町	H9. 12. 8～ H10. 3. 31	村崎孝宏・中川裕二	縄文・弥生 中世	掘立柱建物２棟 縄文後期～晩期土器、石器 楔形石器、石核、剥片類 龍泉窯系青磁椀
2	古麓城跡 （本線） 調査面積3,800㎡（H12年度） 調査面積2,200㎡（H13年度）	八代市古麓町	H12. 12. 5～ H13. 5. 31 H13. 10. 9～ H14. 4. 30	出田久斉・米村　大 古城史雄・水野哲郎 青柳博晃・松尾　茂 宮崎　拓	中世	五輪塔群 須恵・土師、瓦器 龍泉窯系青磁椀
3	古麓能寺遺跡 （本線及び変電所） 調査面積4,528㎡	八代市古麓町 字能寺	H13. 4. 28～ H14. 3. 20	青木勝士・松尾　茂	古代・中世 近世	竪穴住居跡、貝塚、石組井戸 掘立柱建物跡、柵列、墓壙 須恵・土師、龍泉窯系青磁 景徳鎮系染付・福建系陶器 朝鮮王朝系白磁 常滑系陶器
4	古麓城下遺跡 （本線） 調査面積505㎡	八代市古麓町 字砥崎	H14. 1. 8～ H14. 4. 20	青木勝士・米村　大 松尾　茂・本多麻紀	古代・中世	溝、土坑、柵列 須恵・土師・龍泉窯系青磁 景徳鎮系染付・瓦質土器等
5	宮地観行寺遺跡 （本線） 調査面積1802.7㎡	八代市宮地町 字観行寺	H13. 10. 9～ H14. 5. 14	山城敏明・池田朋生 宇田員将・豊原加奈子 角田賢二・濱田教靖	古代・中世 近世	配石遺構、溝、竪穴住居址 掘立柱建物址、土坑等 須恵・土師器・龍泉窯系青磁等
	（側道） 調査面積352.4㎡	八代市宮地町 字観行寺	H15. 5. 6～ H15. 9. 30	高田英樹・宇田員将	古代・中世	製鉄関係遺構（炭窯、溝） 敷石溝、土坑等 須恵・土師器 鉄滓、鍛造剥片等
6	宮地小畑遺跡 （本線） 調査面積1072.1㎡	八代市宮地町 字小畑	H14. 2. 1～ H14. 6. 3	坂田和弘・水野哲郎 長谷部善一・宮部武典 坂口圭太郎・米村　大 和田敏郎・宇田員将 上髙原聡・洲崎明子 西山由美子・内田成香 村中智絵・本多麻紀	古墳・古代 中世・近世 近代	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴等 埋没河川、貝塚（中世） 須恵・土師器、龍泉窯系青磁 同安窯系青磁、緑釉陶器、木器 人骨・獣骨・貝等
	（側道） 調査面積1530.4㎡	八代市宮地町 字小畑	H15. 4. 1～ H15. 10. 12	長谷部善一・和田敏郎 三宅一生	古代・中世 近世	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴等 埋没河川 須恵・土師器、龍泉窯系青磁 緑釉陶器等
7	宮地池尻遺跡 （本線）	八代市宮地町		八代市教委		
8	キリシタン寺院跡 （本線）	八代市宮地町		八代市教委		
9	宮地年神遺跡 （本線）	八代市宮地町		八代市教委		
10	中片小路遺跡 １区・２区 （本線） 調査面積3,700㎡	八代市中片町 字小路	H12. 8. 2～ H14. 3. 31 H13. 10. 1～ H14. 2. 28	出田久斉・米村　大 坂口圭太郎・森　貴史	古墳・中世 近世 中世・近世	近世掘立柱建物跡、近世墓 旧河川等、中世溝・土坑 掘立柱建物、井戸、溝等
	３区・４区 （側道） 調査面積1,200㎡	八代市中片町 字小路	H14. 12. 4～ H14. 3. 12	長谷部善一・高田英樹 松尾　茂・村中智絵	縄文・古墳 中世・近世	縄文の遺構は未確認 古墳初頭（溝） 中世（土坑・流路） 近世（墓、流路）
11	西片稲村遺跡 （本線） 調査面積2,800㎡	八代市西片町 字稲村	H13. 4. 15～ H13. 9. 28	坂口圭太郎・森　貴史	弥生・古代 中世	井戸、住居址、掘立柱建物等 須恵・土師等
12	西片百田遺跡 （駅舎及び本線） 調査面積6,282㎡	八代市西片町 字百田	H12. 8. 7～ H14. 4. 3	長谷部善一・緒方智子 上髙原聡・洲崎明子 松本博幸・荒木隆宏	弥生後期 古墳初頭	竪穴住居跡、溝、土坑 弥生中期（重弧文土器） 古墳時代初頭土師器
13	上日置女夫木遺跡 （駅舎） 調査面積3,000㎡	八代市上日置 町字女夫木	H13. 11. 1～ H14. 3. 31	中村幸弘・高谷和生 後藤貴美子・古閑　敬 和田敏郎・濱田教靖	弥生前期	方形周溝墓・円形周溝墓 弥生後期 住居址 弥生土器、土師器等
14	島田遺跡（本線） 調査面積1530.4㎡	八代市島田町	H13. 8. 6～ H14. 3. 29	野田英治・西山由美子 荒木隆宏	弥生前期 弥生後期	住居址、土器溜、溝 弥生土器、石器等

Tab. 1　新八代～西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

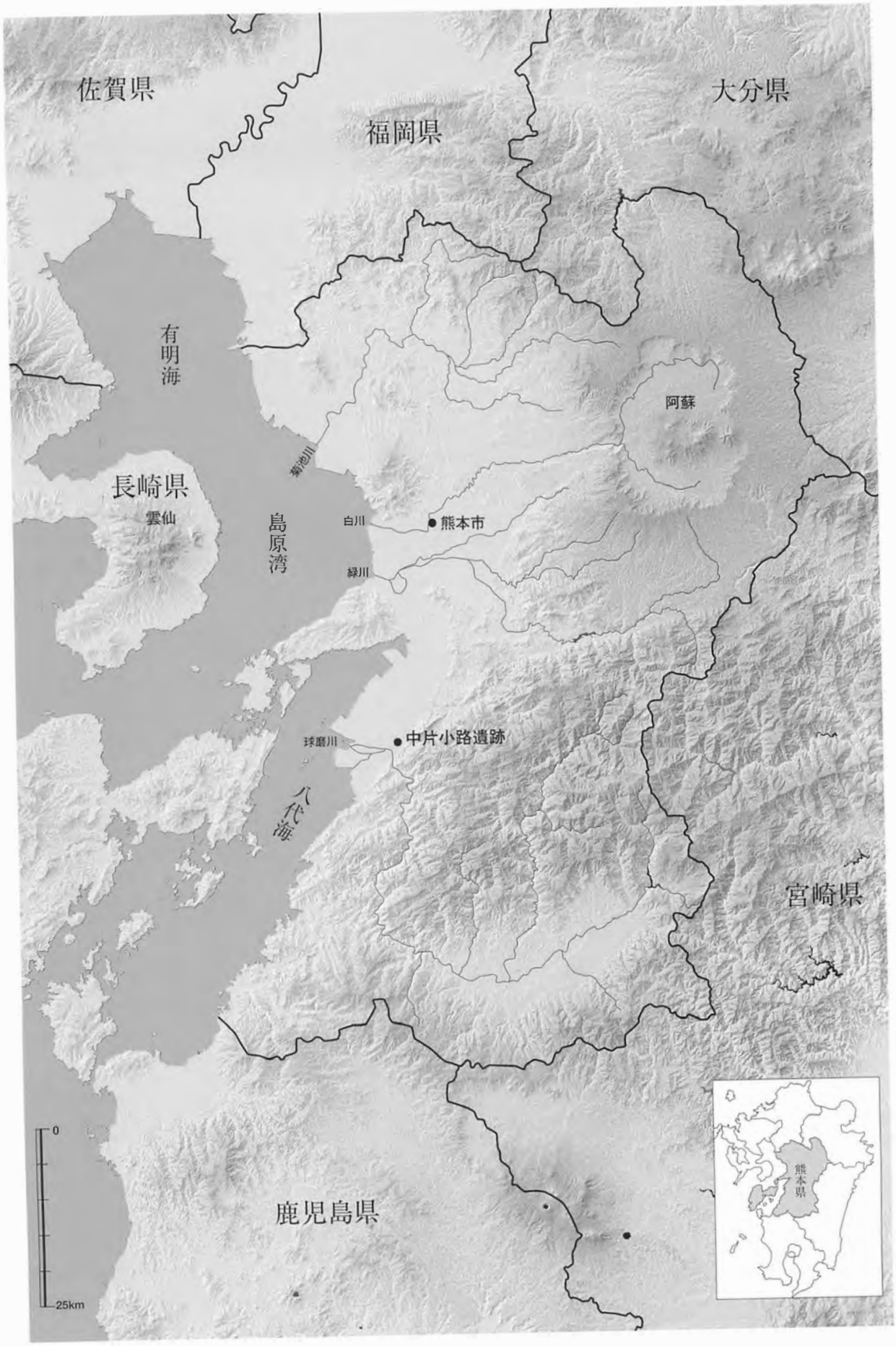


Fig. 2　中片小路遺跡位置図

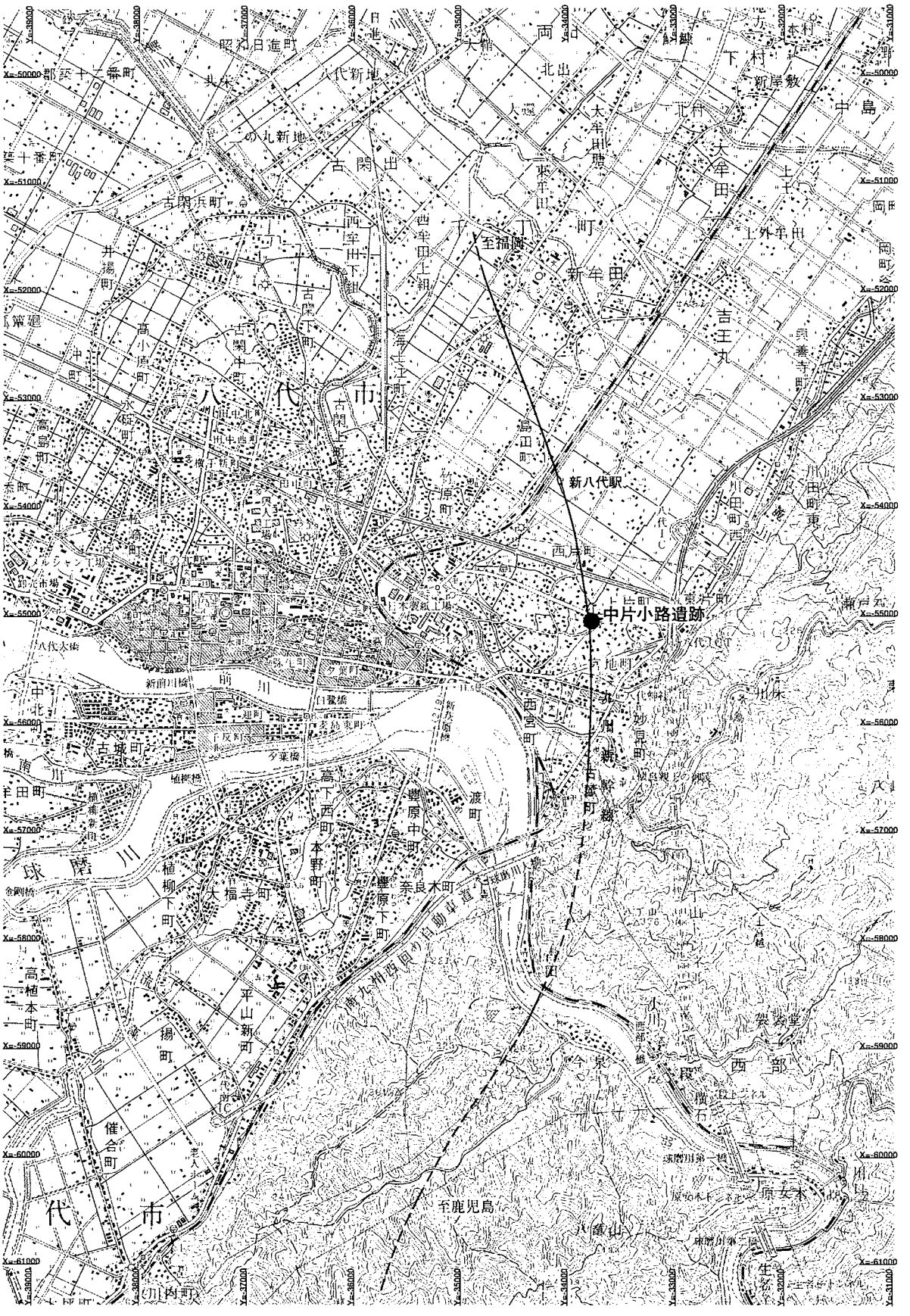

中片小路遺跡
新八代駅
八代市
球磨川
至鹿児島
至福岡
古閑出
古閑浜町
古閑下町
古閑中町
古閑上町
古閑中町
高小原町
高島町
松崎町
竹原町
西片町
東片町
西宮町
妙見町
古城町
高下西町
本野町
豊原中町
豊原下町
奈良木町
渡町
植柳下町
大福寺町
平山新町
揚町
催合町
高植本町
今泉
西部
横石
原女木
八代大橋
新前川橋
白鷺橋
夕葉橋
植柳橋
大牟田
上外牟田
吉王丸
新牟田
北出
大牟田
中島
下村
新屋敷
北村
大還
大牟田塘
東牟田
西牟田上組
西牟田下組
海士江町
島田町
大鞘
昭和日進町
八代新地
丸新地
郡築十二番町
井揚町
高小原町
水碇町
松崎町
中北町
南川
前川
球磨川
八代市

Fig.3　周辺地形図

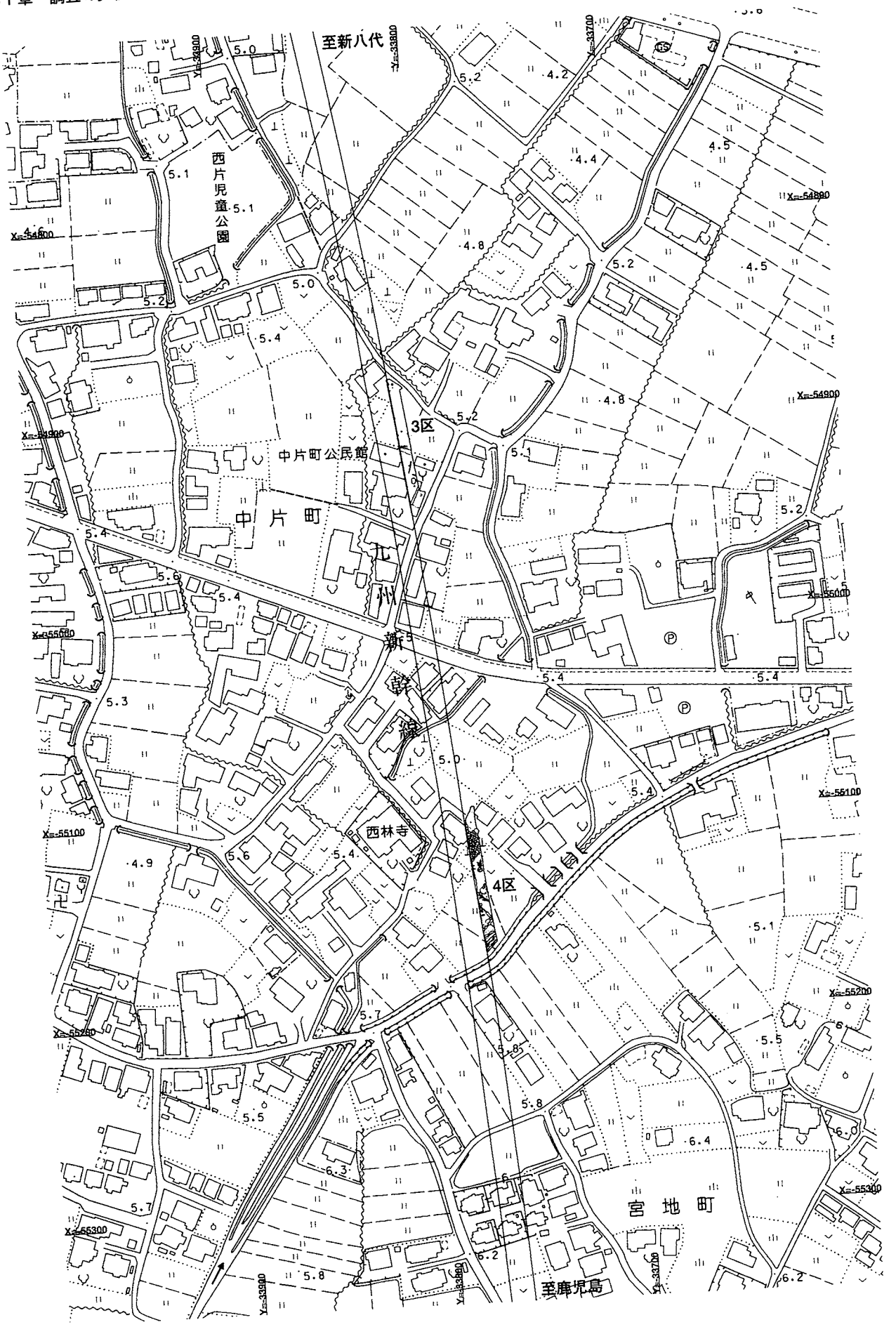


Fig. 4　中片小路遺跡周辺地形図

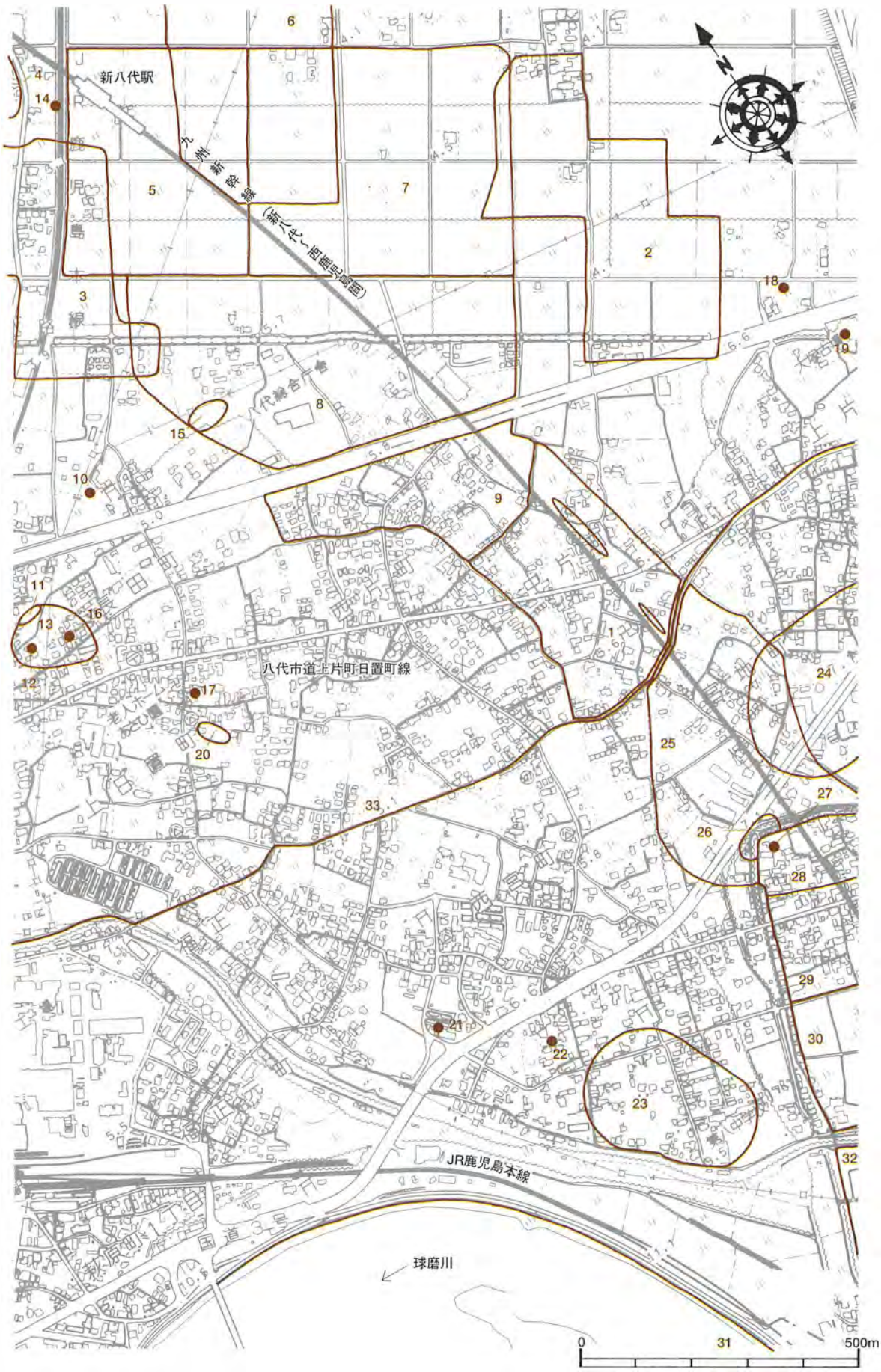


Fig. 5　中片小路遺跡周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
1	中片小路遺跡	中片町　小路	古墳～中世	集落		
2	八代平野条里跡	中片町	古代、中世	生産		
3	八代平野条里跡	島田町	古代、中世	生産		
4	島田遺跡	島田町	弥生～古墳	集落		
5	上日置女夫木遺跡	上日置町　女夫木	弥生～古墳	集落、墓地		
6	八代平野条里跡	西片町	古代、中世	生産		
7	西片百田遺跡	西片町　百田	弥生～古墳	包蔵地		黒髪・野部田式土器、須恵器、土師器
8	西片園田遺跡	西片町　園田	弥生～古墳	集落		
9	西片稲村遺跡	西片町　稲村	弥生～近世	集落		
10	いら塚古墳	井上町　正里	古墳	古墳		須恵器、円墳
11	鐘楼堂貝塚	井上町　鐘楼堂	弥生～古墳	貝塚	市	黒髪・免田・野部田式土器、土師器、須恵器、土錘
12	鐘楼堂古墳	井上町　鐘楼堂	古墳	古墳		石室は埋没、上に堂が建つ
13	鐘楼堂遺跡	井上町　鐘楼堂	縄文～古墳	包蔵地		夜臼式土器、土師器、須恵器、磨製石斧
14	用七古墳	長田町　用七	古墳	古墳		剣、箱式石棺、石材を石碑に転用、線路西側に移設
15	長田町遺跡	長田町　一本橋	縄文～古墳	包蔵地		黒髪・野部田式土器、土師器、須恵器
16	長田町古墳群	長田町　白石	古墳	古墳		巨石横穴石室、円墳
17	虚空蔵古墳	長田町　大間	古墳	古墳	市	鬼の岩屋式石室
18	長塚古墳	上片町　下野森	古墳	古墳		土師器、須恵器、円筒埴輪、前方後円墳
19	大塚古墳	上片町　下野森	古墳	古墳	市	須恵器、人物埴輪（女性）、市内最大の前方後円墳
20	白石貝塚	上日置町　白石	弥生～古墳	貝塚		黒髪武土器、土師器、須恵器、土錘、布目瓦、人骨
21	宝泉院勝延行者の墓	西宮町　小寺	近世	墓地		板碑（正保二年銘）
22	正法寺跡	西宮町　階下	中世	寺社		礎石、井戸
23	階下古墳群	西宮町　西階下　他	古墳	古墳		土師器、須恵器、小型円墳12基
24	乙丸古墳群　第１号墳	宮地町　五反田	古墳	古墳		
	第２号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		
	第３号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		土師器、須恵器、白磁、青磁、天目
	第４号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		
	第５号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		石室一部残存
	第６号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		前方後円墳、墳丘一部残存
	第７号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		
	第８号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		
	第９号墳	宮地町　二反田	古墳	古墳		
	第10号墳	宮地町　二反田	古墳	古墳		
25	宮地年神遺跡	宮地町　歳神	弥生～古代	集落		
26	キリシタン寺院跡	宮地町　歳神	弥生～中世	集落		キリシタン瓦
27	村上河内屋敷跡	宮地町　池尻	近世	包蔵地		五重塔一部残存
28	宮地池尻遺跡	宮地町　池尻	古代～中世	集落		
29	宮地小畑遺跡	宮地町　小畑	古墳～近世	集落		須恵、土師器、緑釉陶器、布目瓦
30	宮地観行寺遺跡	宮地町　観行寺	古墳～古代	集落		須恵器、土師器、円面硯、布目瓦
31	球磨川はね	宮地町　萩原町	近世	建造物		石ばね、石段、敷石
32	古麓城下遺跡	古麓町　砥崎	中世	集落		土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、建物跡多数
33	薩摩街道	——	近世	街道		

Tab. 2　周辺遺跡地名表

第Ⅱ章　遺跡の概要

1　遺跡の地理的環境

中片小路遺跡は、熊本県八代市中片町字小路に所在し、地理的には八代平野南部に位置している。

八代平野は、不知火海東岸に発達した沖積平野であり、九州山地から流れ出す球磨川、水無川、氷川や砂川によって形成された複合三角州とその先に発達した干潟を人工的に埋め立てた干拓地によって構成されている。

八代市北部地域では、平野部分の西端からほぼ3km付近までが自然に陸化した地域であるが、球磨川の河口付近はその堆砂量が大きいため、約4.5km先まで陸化しており八代市街地西端まで広がっている。

平野東側には益城町小池から芦北町海浦沖に延びる日奈久断層が存在しており、九州山地西端に直線的な断層崖を形成し三角末端面をみることができる。この断層崖には幾筋もの谷が形成され、崖錐や小規模な扇状地が発達している。

また、大分県臼杵から竜峯山の東側を通り八代市宮地町にかけて、中央構造線の延長部として内帯と外帯をわける臼杵一八代構造線がある。この構造線の北側には内帯である白亜系の堆積岩類や古生界の変成岩類からなる肥後帯、南側には外帯である中生界の黒瀬川構造帯や三宝山帯等の堆積岩類がある。水無川の流路はこの構造線に伴う破砕帯の影響を受ける一方、球磨川は外帯の複雑な構造帯の地域を、深く谷を削り込みながら八代海に注いでいる。

今回調査した中片小路遺跡は、九州山地西端から西に約1 km、水無川及び球磨川の北方0.9～1.1kmで、幾度となく発生した土石流や洪水による堆積物により自然に形成された標高約5 mの陸地にある。この地の人々は、これらの自然現象と密着して生活し、綿々と生活の場を形成していったと思われる。　（高田）

2　遺跡の歴史的環境

八代市内では、現在まで旧石器・縄文時代の遺跡は確認されていない。しかし、縄文時代の遺物は後期から晩期の土器が八代市史等に多く報告されている。弥生時代以降の遺跡は市教委による発掘調査も行われており、少しずつではあるが弥生時代の八代の姿が浮かび上がってきている。また、中世以降は、古文書等の文献資料が多く残されており八代市の歴史を窺うことができる。

以下、時代ごとにその概要を記す。

【縄文時代】

八代平野では、現在まで縄文時代の遺跡の確認例は少ない。しかし、遺跡が立地する球磨川右岸では、鐘楼堂遺跡（井上町）から夜臼式土器が、川田小筑遺跡（川田町西）からは縄文晩期の土器が出土している。

また、球磨川左岸には五反田貝塚（敷川内町）、田川内貝塚（日奈久新田町）からは縄文中期～後期の土器が出土している。 沖積地が発達しているこの地域において豊富な食料となる魚介類を求め、海（干潟）への進出は当然の事ながらあったものと思われる。確認されている遺跡からも読み取れるが小規模な貝塚が点在していたようである。熊本県上益城郡城南町の浜戸川流域に見られるような黒橋貝塚、阿高貝塚、御領貝塚等の大規模かつ長期間営まれたような生活痕跡は見られず、比較的小規模な集落が多く点在していたものと思われる。

【弥生時代】

この時期の遺跡は球磨川を中心に、九州山地の山麓から沖積平野の一部まで多くの遺跡が確認されている。山麓部から形成され低く延びる丘陵先端に位置する島田遺跡（島田町）からは、前期の土器が出土し、同一丘陵に位置する西片百田遺跡（西片町）からは多くの後期の竪穴式住居跡が確認され重弧文土器（免田式）が多く出土している。また、西片園田遺跡（西片町）からは埋没河川内より西片百田遺跡と同時期の土器が出土している。

また、沖片遺跡（西片町）と長田遺跡（長田町）からも後期の土器が、東川田遺跡（川田町東）、川田京坪遺跡（川田町西）、鐘楼堂遺跡、竹原遺跡（竹原町）からは中期から後期にかけての土器が出土している。

以上のことから、縄文後期から始まった沖積平野への進出が、途切れることなく弥生時代になっても続いていたことが窺える。遺跡数の急激な増加は、人々が安心して住める条件の整った自然陸地化の進む沖積平野上に広がり、農耕に適した肥沃な土地への変化があったと思われる。

【古墳時代】

古墳時代になると八代平野には山麓裾部から平野部にかけて多くの古墳群が築造されている。

主に古墳が立地する中片町周辺には、県指定史跡

「八代大塚古墳」（前方後円墳）、茶臼塚古墳、高取上の山古墳（いずれも上片町）があり、古墳時代後期の古墳群の変遷が窺える。また、その周辺には乙丸古墳群や大塚古墳群、東片町古墳群など円墳を主体とし、横穴式石室を有する小規模な古墳が数多く残されている。八代平野ではこの時期特筆すべきものとして、球磨川左岸地域に箱式石棺や横穴式石室の壁面に円文や鋸歯文を刻み込んだ初期の装飾古墳が見られる。

【奈良時代～平安時代】

八代郡は奈良時代の「和名類聚抄」では「夜豆志呂」と表記され、「木行・高田・小河・肥伊・豊福」の五郷を載せる。このうち「高田」は奈良木町一帯と考えられ、駅路の「朽網」は二見本町、「片野」は上片町に比定され、上片町の北隣の川田京坪遺跡（川田西）では「川大」と篦書きされた土師器が出土している。

興善寺廃寺（興善寺町）、五反田遺跡、宮地観行寺遺跡（宮地町）、古麓能寺遺跡（古麓町）、護神寺跡、妙見上宮跡（妙見町）等では布目瓦が表採され、沖片遺跡（西片町）、宮地池尻遺跡、宮地観行寺遺跡（宮地町）、古麓能寺遺跡（古麓町）では円面硯が出土しており、御内遺跡（古麓町）からは瑞花双鳳八稜鏡が表採されている。

護神寺跡と興善寺廃寺からは塔心礎が発見されており、興善寺廃寺に建立されている明言院には平安初期の作とされる毘沙門天立像が伝来している。

「続日本紀」には、「八代郡正倉院」での記事の他に、宝亀３（772）年10月11日条で「肥後国葦北郡人家部嶋吉、八代郡人高分部福那理、各献白亀」が見える。天養元（1444）年頃の肥後国訴状写（高野山文書）に「当国住人八代藤三重永、同所従家四郎別当舎弟」が「久万郡住人貞倫並舎弟六郎重平等」に与力して高城内の雑物人馬を押取り、田畑所領を押領したことが知られる。また、仁安元（1166）年には平清盛に大功田として「肥後国御代郡南郷」が与えられている。

【鎌倉時代】

鎌倉時代には、平家領であった八代庄は、平家没官領として建久３（1192）年11月に一条能保室に譲られた。文永７（1270）年２月の預所沙弥某宛行状（小早川文書）に「三箇所村内八千把中九郎跡名跡云々」とあり、建治２（1276）年10月７日付の兵庫助某宛行状（小早川文書）に「八代庄三ヶ所村内八千把村新開事」とあるので、13世紀中盤頃までに八代海に面した八千把村（八千把町）周辺までが八代庄の荘域として開発が進み、開田が行われていたことがうかがわれる。

また、正和３（1314）年４月日付の八代庄伊賀左衛門入道代光蓮申状（舛田文書）では「八代庄三ヶ所村弥松」が見え、北条得宗家人の伊賀左衛門入道が八代庄の管理者であることから、八代庄が他の肥後国の郡名荘園と同様に北条得宗領の中に組み込まれていたと推定される。

この時期に当たる同安窯系並びに龍泉窯系青磁が、悟真寺（妙見町）、辻遺跡（西片町）、西片稲村遺跡（西片町）、中片小路遺跡（中片町）、鐘楼堂遺跡（井上町）から出土しており、これらの遺跡が八代庄の一角をなす荘村であったことが推定される。

【南北朝期・室町時代・戦国期・豊臣期】

南北朝期には、名和義高は後醍醐天皇から八代庄地頭職を与えられ、現地支配代官として内河義真を派遣し、南朝方に属して転戦していたが、北朝方の争奪も激しく、貞和３（1347）年９月12日付の少弐頼尚預状（相良家文書）では八代庄三ヶ所村郷弥松村・同郷大村（大村町）・大田郷杭瀬村（古麓町）・同郷内福正原村（福正寺町）・同郷萩原村（萩原町）・同郷吉王丸村（千丁町吉王丸）・同郷内京泊等を北朝方の相良定頼に「萩原城料所」として預け置かれている。その後、明徳２（1391）年９月日付の武雄大宮司跡代新兵衛尉軍忠状（武雄神社文書）では、同年７月２日に北朝方の今川了俊方が「八町嶽城」を攻撃し、南朝方の名和顕興を降伏させている。

室町期の八代は名和領と推定されるが、名和顕忠が文明16（1484）年３月７日に相良為続によって「八代三ヶ所城」を攻撃され、没落したため、相良為続が八代を領有した。明応８（1499）年には肥後国守護職の菊池能運の仲介で名和顕忠が一時的に八代に復帰したが、文亀元（1501）年11月15日に相良長毎の攻略を受け、永正元（1504）年２月５日に名和顕忠は宇土城（宇土市）に移り（八代日記）、相良長毎が八代に進出し、以降天正９（1581）年12月１日の相良義陽の討死まで八代は相良氏の支配領域の中に組み込まれることになった。天正10年からは島津勢が駐屯し、肥後口攻略拠点となり、島津義久が島津義弘を八代地頭職に任じたが（上井覚兼日記）、実質的な行政は従来の旧相良氏八代老者であった蓑田信濃守が担っていたようで

ある（相良家文書）。天正15（1587）年４月には豊臣秀吉が島津勢を駆逐し、福島正則を八代城番に任じている。また、この時期に当たる龍泉窯系青磁や景徳鎮系染付等が、古麓城跡、古麓能寺遺跡、古麓城下遺跡（古麓町）、宮地小畑遺跡、宮地池尻遺跡（宮地町）から出土している。

しかし、天正16年閏５月３日に小西行長が肥後南半国の領主として豊臣秀吉から派遣されると、麦島に豊臣期八代城（麦島城）が建設され、中世八代城（古麓城）とその城下町は廃絶し、麦島に機能移転した。

【江戸時代】

慶長５(1600)年９月に小西行長が関ヶ原合戦により除封された後、肥後国(球磨郡を除く)を加藤清正が治めた。加藤清正は八代地方の支配防衛拠点として豊臣期八代城(麦島城)を改修し、吉村橘左衛門・堤権右衛門を城番に配した。城番は野尻久左衛門・蟹江与三兵衛に交代したが、慶長17年６月14日に加藤忠広が就封すると加藤右馬允正方を城代として配した。加藤忠広は元和８(1622)年８月に松江に近世八代城(八代城)を建設し、引き続き加藤正方を城代とし、麦島から松江に支配拠点を移転させた。しかし、加藤忠広が寛永９(1632)年に除封され、肥後国は同年10月４日に細川忠利が治めることになり、細川忠興が八代城主になり、八代は細川忠興領「八代御領」となった。細川忠興は同年12月25日に八代城に入城したが正保２(1645)年に没すると、細川光尚は細川立孝と忠興旧臣を宇土に移し、松井佐渡守興長を八代城守衛に配し、以後八代は松井氏の知行となった。

八代城下を除く八代は、細川藩政では種山手永と高田手永で行政区分されたが、海岸線では明暦元（1655）年に松崎村地先の「山城殿手開」と呼ばれる松井氏主体の干拓を始め、細川氏と松井氏による干拓が積極的に進められ、八代平野西部は幕末まで干拓地によって拡大している。

交通網も豊臣期八代城築城に伴い整備が進められたと推定され、中世八代城（古麓城）の城下を通過していた中世薩摩街道が方見堂（上片町）で西進するように改変されている。さらに近世八代城築城に伴い出町で八代城下に引き込む近世薩摩街道が形成されている。さらに十里木から550ｍ西の地点で「荻原通り」と呼ばれる八代城下を通過せずに荻原渡で球磨川を渡河し、豊原村（豊原下町）に南下する「新道」に分岐している。この道は「薩州之御家中、御隣国之御飛脚」（永青文庫「町在」）が利用する近世薩摩街道の新設バイパスとしての機能を担っており、島津氏の参勤交代にも使用されている。

十里木のある中片野川村（中片町）は、慶長12（1607）年作成の「肥後豊後検地諸帳目録」に見られ、「元禄肥後国絵図」では「下片野川村之内中片野川村」と記載されている。「肥後国誌」でも高田手永に属する「大田郷」のうち「下片野川村ノ内」と記載されている。石高は735石で、寛永21年７月付細川忠興宛行状で下片野川村のうち300石を蓑田平七に知行させている。また、宝暦年間（1751～64）の肥後国中寺社御家人名附に「直触医師本郷意伯」が見える。

なお、明治８（1875）年に下片野川村（西片町）と長野村（長野町）と合併し片長村となり、隣接する上片野川村（上片町）と北片野川村（東片町）は合併して片野川村になっている。

【縄文・弥生・古墳　長谷部、それ以降は青木勝士による】

参考　熊本県埋蔵文化財調査報告第216集
「古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡」

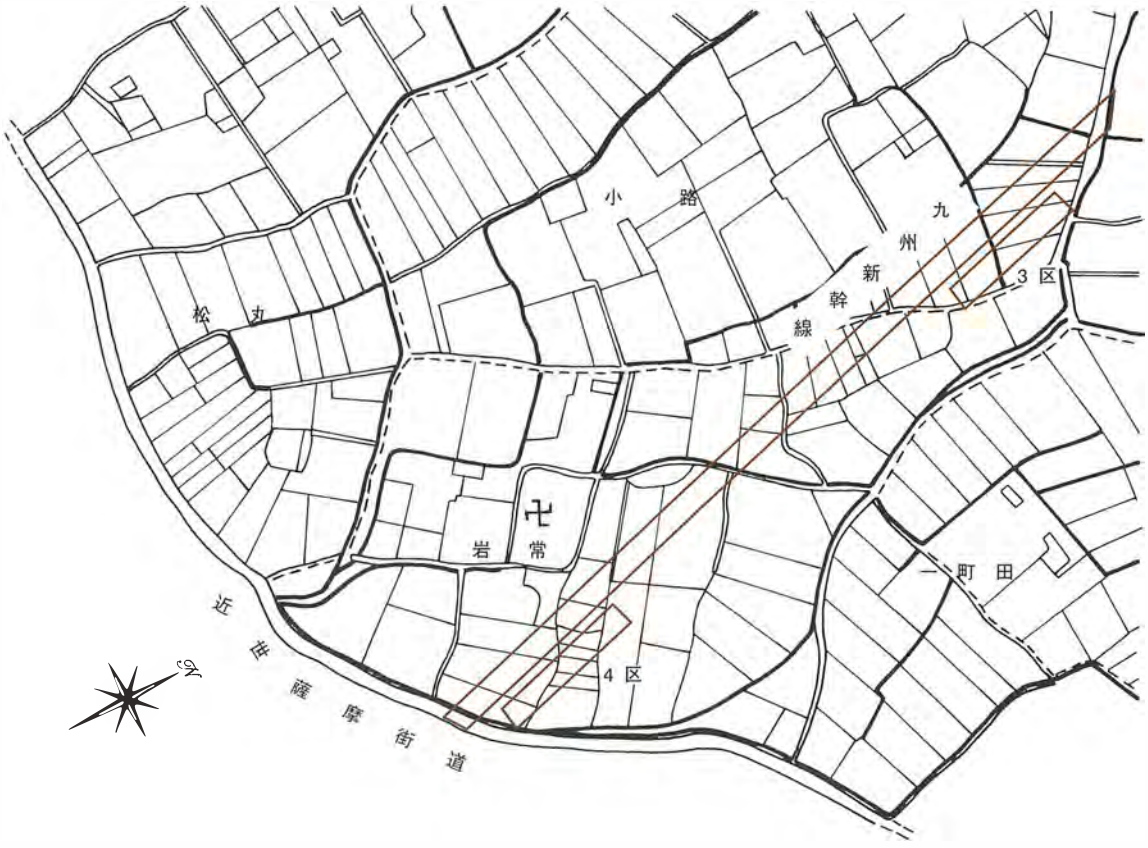


Fig. 6　中片小路遺跡周辺字図「太田郷町土地寶典」より

Ⅳ区　作業風景

第Ⅲ章　調査とその成果

第１節　調査の概要

今回の調査は本線部（平成12・13年度）に沿う側道部（東側）の調査のため、本線調査の際に設定されていた調査Ⅰ・Ⅱ区に引き続き、北側（新八代駅側）の調査区をⅢ区、南側（近世薩摩街道側）の調査区をⅣ区と設定した。調査区周辺は新幹線建設が始まるまでは個人住宅が建ち並び、周囲に水田が点在する典型的な農村風景が広がる場所に位置していた。そのため、調査区内には近現代の撹乱が多数検出され、その多くが中世以前の遺構を切るように掘り込まれていた。

３区は、平成13年度に行われた調査区の隣接地にあたり、その際に検出された遺構の広がりが予想された。しかし、調査の結果から遺構の性格に一部見解の相違があり、疑問点もあったが概ね遺跡の時期については同様の見解が得られたと思われる。

調査では、表土直下から近世の畑畦が検出できたが畦の埋土中から出土した遺物が近現代のものと判断されたため今回の調査対象からは除外した。その後、包含層として取り扱う北部層を掘り下げ遺構の検出を行い、井戸・土坑・溝等を確認した。これら北部層上面で確認された遺構の調査を行ったのち、グリッド毎にトレンチを設定し下層に遺構・遺物がないことを確認して調査を終了した。

Ⅳ区も平成12年度に本線部分（Ⅰ区）の調査が実施されており、その際に近世薩摩街道に沿うように、近世の大型掘立柱建物が検出されており、今回の調査で同様の遺構の検出が予想されたが、近世の遺構は溝、土坑、墓のみであった。墓は副葬品や埋葬の形態から近世から現代の墓と判断された。（以下、近世墓）

近世墓はそれぞれ木棺土坑墓（円形・方形）、甕棺墓、土坑墓の３様に分類され、木棺土坑墓は板の組合せ、木棺外郭の作り等で更に数種に分類ができた。中世の遺構はⅠ区の調査で確認されていた溝が調査区を東西に横切る形で検出され、その北側で土坑及び柱穴が多数検出された。さらに中世遺構に切られ調査区西側（本線部）に沿うように、南北に延びる古墳時代初頭期の溝を確認し調査を終了した。

第２節　Ⅲ区の土層（Fig.7）

Fig

定土層ではないため、北から北部層（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ～）砂礫層（１・２・３～）南部層（①・②・③～）に大別できる。最も古く安定した北部層を基本土層と考え、これに相対・類似の点で砂礫層・南部層に北部層位を付加した。

起点から36～52mに堆積する砂礫層を境にして北側（北部層）と南側（南部層）とは異なる堆積である。共に砂→シルトに級下層理を示す洪水堆積物ではあるが、北部層、砂礫層、南部層が不整合で接するため、古い方から順に北部層、砂礫層、南部層となる。砂礫層のうち一部の砂層についても、北落ちの傾斜を示すクロスラミナが見られること、Ｂ－６グリッド付近には凹状の堆積構造があることなどからＢ－６グリッドを中心に窪地形があり、水が流れていた時期もあったと考えられる。それらより古い時代の北部層については、南に行くにしたがって砂質が富む傾向にあり、以前から南側が低かったのではないかと考えられる。　　（高田）

第３節　各調査区の設定

発掘調査にあたっては、鉄道支援機構が設置している建設工事に伴う１級基準点数値を、国土座標系（日本測地系）に変換し、調査区内各２箇所に４級基準点を設定し、メッシュ杭（５ｍ×５ｍ）を設置した。

第４節　Ⅲ区の調査成果

１　近世の遺構（Fig

近世の遺構は主に土坑（SK）である。近世遺構の調査に先立ち表土剥ぎ後の検出作業で、近現代の畑畦が検出できたが、最近まで耕作されていた田面（床土）とほぼ同一レベルであったため平面図を作成し掘り下げを行った。

その田面（床土）を掘り下げると、近世の遺物を含む土坑（SK001～ SK006）を主体とした遺構が検出された。また、調査区南側からは溝状遺構（SD001～ SD002）が直交するように規則性を持ち検出されている。その他、現代の撹乱と判断されるものも多くあるが報告にはあげていない。

土坑 SK001　調査区の北側に位置する土坑である。軸は東西に取る。長軸0.99m、短軸0.90m、深さ0.18mで不定形楕円を呈する。埋土は２層に分層でき、１層にオリーブ褐色砂混じりシルト層（2.5Y ４/３）、２層に褐色シルト混じり砂（10YR ４/６）が堆積している。遺物は１層に土師器片をわずかに含むが、小片であったため器形等は確認できなかった。

土坑SK002　遺構の半分が本線部分にあたっている。遺構は1.76m ×0.97m で楕円形を呈する。土坑南側で内部にもう一段掘り込みを持つ。土坑は埋土の状態が SK001と同じであり、出土遺物は無い。

土坑 SK003　調査区中央よりやや北側に位置している土坑である。主軸は東西にとる。長軸0.71m、短軸0.50m、深さ0.11m で不定形楕円を呈する。埋土は３層に分層できた。

１層は黄灰色土（2.5YR ４/１）で砂質が強い土である。２層は暗灰黄色土（2.5YR ４/２）、３層は黄灰色土（2.5YR ５/１）である。下層に行くに従い粘性が強くなる。

土坑 SK004　調査区のほぼ中央に位置し､SK005・SK006と並び検出した土坑である。主軸はほぼ南北にとる。長軸1.58m、短軸0.89m、深さ0.19m を測り長方形を呈する。埋土は上下２層に分層でき、１層に明黄褐色～黄褐色シルト（10YR ６/６）、２層に褐色シルト混じり砂（10YR ４/４）が堆積している。２層埋土中から同安窯系陶器片（Fig.

土坑 SK005　SK004・SK006に挟まれた位置で検出した土坑である。主軸はほぼ東西にとる。長軸1.12m、短軸0.86m、深さ0.34m で楕円形を呈する。最深部はやや西側に寄っており東側に１段ステップを持つ。埋土は暗灰黄色粘質土（2.5YR ４/２）の単層である。出土遺物は土師器椀（Fig

土坑 SK006　SK004・SK005と並び検出された遺構（土坑）で西端（本線側）に位置する。主軸はほぼ南北にとる。長軸1.02m、短軸0.90m、深さ0.29m で楕円形を呈する。埋土は上下２層で、１層が灰褐色シルト、２層に褐色シルト（10YR ４/４）が堆積している。２層埋土中にコブシ大の礫が入っていたが使用痕はなく、坑内に置かれた状態でもなかったので取上げていない。

溝 SD001・溝 SD002（Fig

U 字型の断面を呈する溝状遺構である。２つの遺構は平面で直行するように検出できており、同時に存在していた遺構と思われる。遺構中より土師皿や同安窯系青磁が出土しているが、現地で埋土の状況を観察する限り中世の遺構ではないと判断できたため、近世の遺構として報告している。

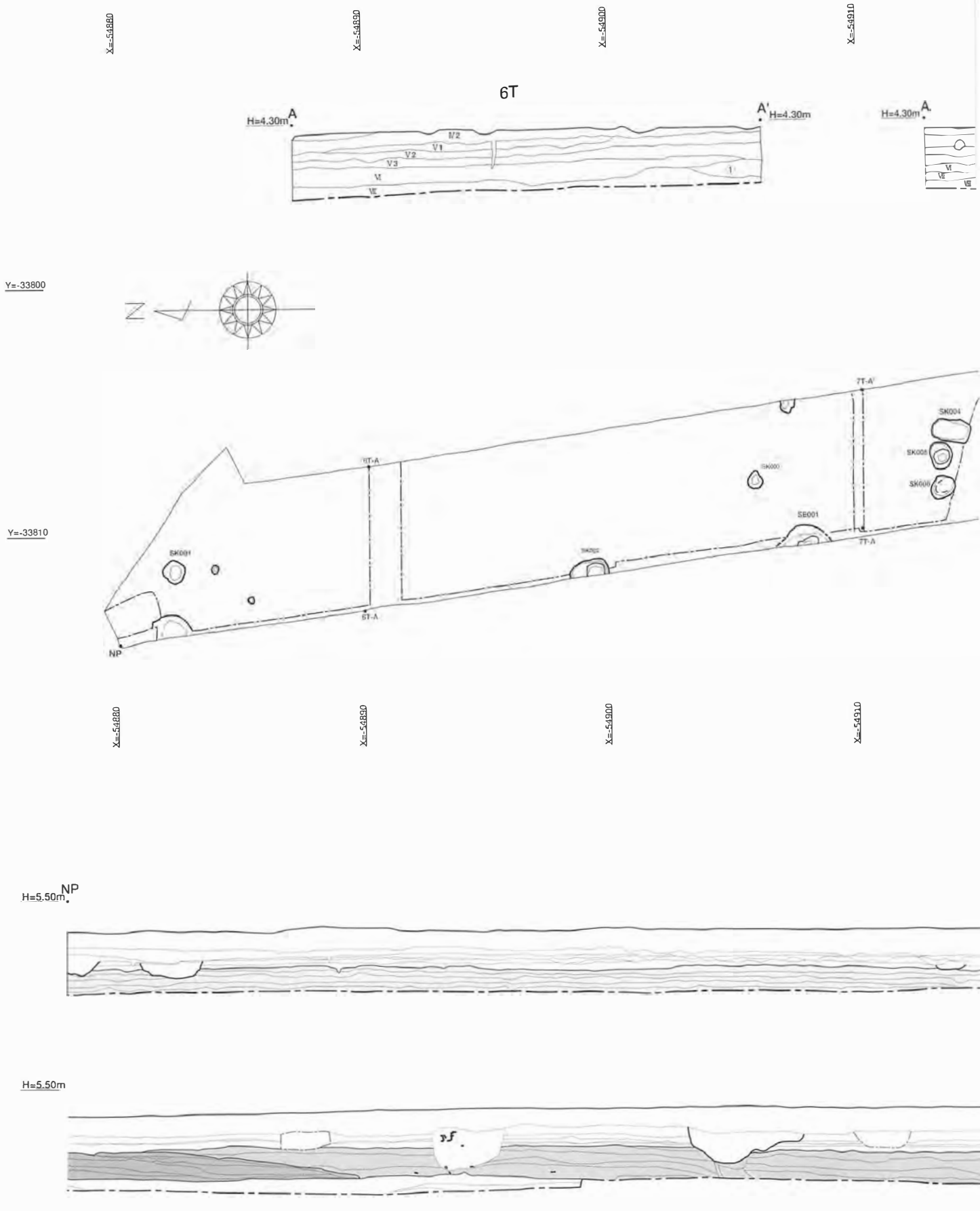
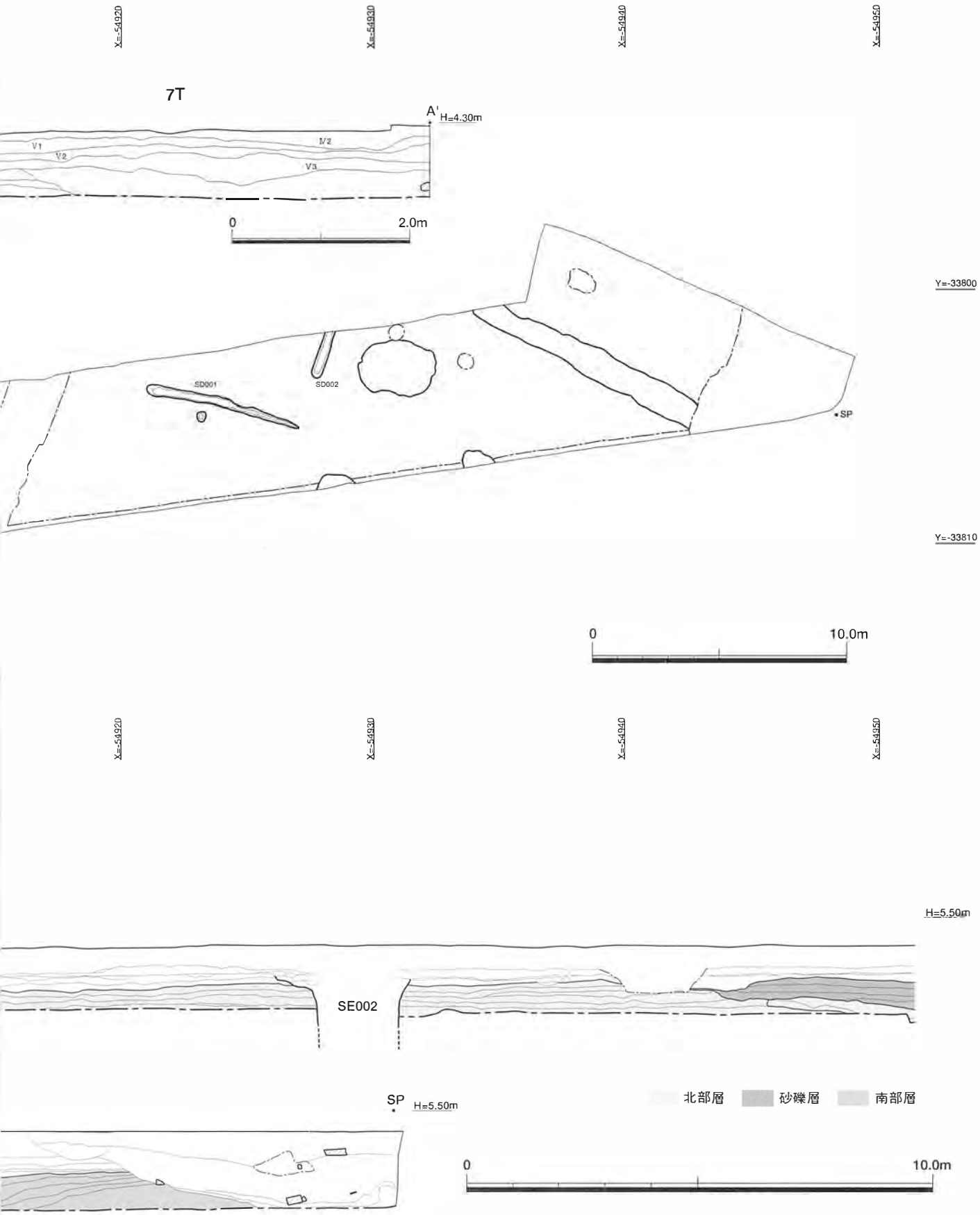

X=-54880
X=-54890
X=-54900
X=-54910
6T
H=4.30m A
A' H=4.30m
H=4.30m A
Y=-33800
Y=-33810
7T-A'
7T-A
6T-A
SK004
SK005
SK006
SE001
SK001
NP
H=5.50m NP
H=5.50m

Fig.7　Ⅲ区遺構配置


X=-54920
X=-54930
X=-54940
X=-54950
7T
A'
H=4.30m
V1
V2
V2
V3
0
2.0m
Y=-33800
SD001
SD002
SP
Y=-33810
0
10.0m
X=-54920
X=-54930
X=-54940
X=-54950
H=5.50m
SE002
SP
H=5.50m
北部層
砂礫層
南部層
0
10.0m

図及び土層断面図

Ⅲ区

西壁　北部層　床土層において、粘性が強く全体に酸化物が沈着している。

上層部ではマンガン粒が全体の40～60％ほど含まれ、大小様々な粒子をみることができる。中層部では、締まりがあり粘性が強い。上層よりマンガン粒は小粒である。下層部では、締まりがあり粘性弱で細砂質の強い土。鉄分、沈殿物が塊物（～2 cm 大）した物が顕著に見られる。

砂礫層　上層部では中粒砂。ややゆるい逆級下層理。

砂礫層ではややしまっている。基質は、中粒砂 3 ～ 5 mm の円礫が多く混じり 6 層以上を数える。累層状態で砂の酸化物の沈着の度合いで色が異なる。

北落ちの傾斜のクロスラミナが全体に広がっている。

下層部では、しまりがあり細粒砂が混じりシルト。酸化物が沈着しているほか植物痕が見られる。

南部層　上層部から中層部にかけて「マンガン粒沈殿層」。

炭化物マンガン粒を多く含み酸化物が沈着する。

やや粘性がありしまっている。中層部から下層部にかけて粘性なくややゆるい。

南北トレンチ付近の一括遺物のほとんどは、この層から出る。

下の方がより粗粒で級下層が見られる。

6 T

Ⅳ 2 層　暗灰黄色土　(2.5Y 4 / 2)
しまりがある。粘質強。
Ⅳ 1 層に比べてやや軟土。
マンガン粒を全体に30～40％位含む。

Ⅴ 1 層　黄灰色土
しまりがある。粘質強。
ほとんどマンガン粒が含まれる。

Ⅴ 2 層　黄灰色土
しまりがある。粘質中。
Ⅴ 1 に比べて軟らかい土　少量の砂質がある。

Ⅴ 3 層　黄灰色土
しまりがある。粘質弱。
Ⅴ 2 層に比べて砂質が強い。

Ⅵ層　黄灰色土　(2.5Y 5 / 1)
しまりがある。
粘質弱。砂質の強い土。

Ⅶ層　暗灰黄色土　(2.5Y 4 / 2)
しまりがある。粘質中。

①層　黄灰色土　(2.5Y 5 / 1)
細砂。鉄分の乱れが著しい。

7 T

Ⅳ 2 層　黄灰色土　(2.5Y 4 / 2)
しまりがある。粘質強。
Ⅳ 1 層に比べて軟土マンガン粒全体に30～40％位含む。

Ⅴ 1 層　黄灰色土
しまりがある。粘質強。
マンガン粒が含まれない。

Ⅴ 2 層　黄灰色土
しまりがある。粘質中。
Ⅴ 1 に比べて軟らかい土。砂質を少量含む。

Ⅴ 3 層　黄灰色土
しまりがある。粘質弱。Ⅴ 2 層に比べて砂質強。

Ⅴ 4 層　黄灰色土
しまりがある。粘質弱。
砂質を少量帯びマンガン粒の乱れが著しい。

Ⅵ層　黄灰色土　(2.5Y 5 / 1)
しまりがある。粘質弱。砂質の強い土。

Ⅶ層　暗黄灰色土　(2.5Y 5 / 2)
しまりがある。粘質弱。

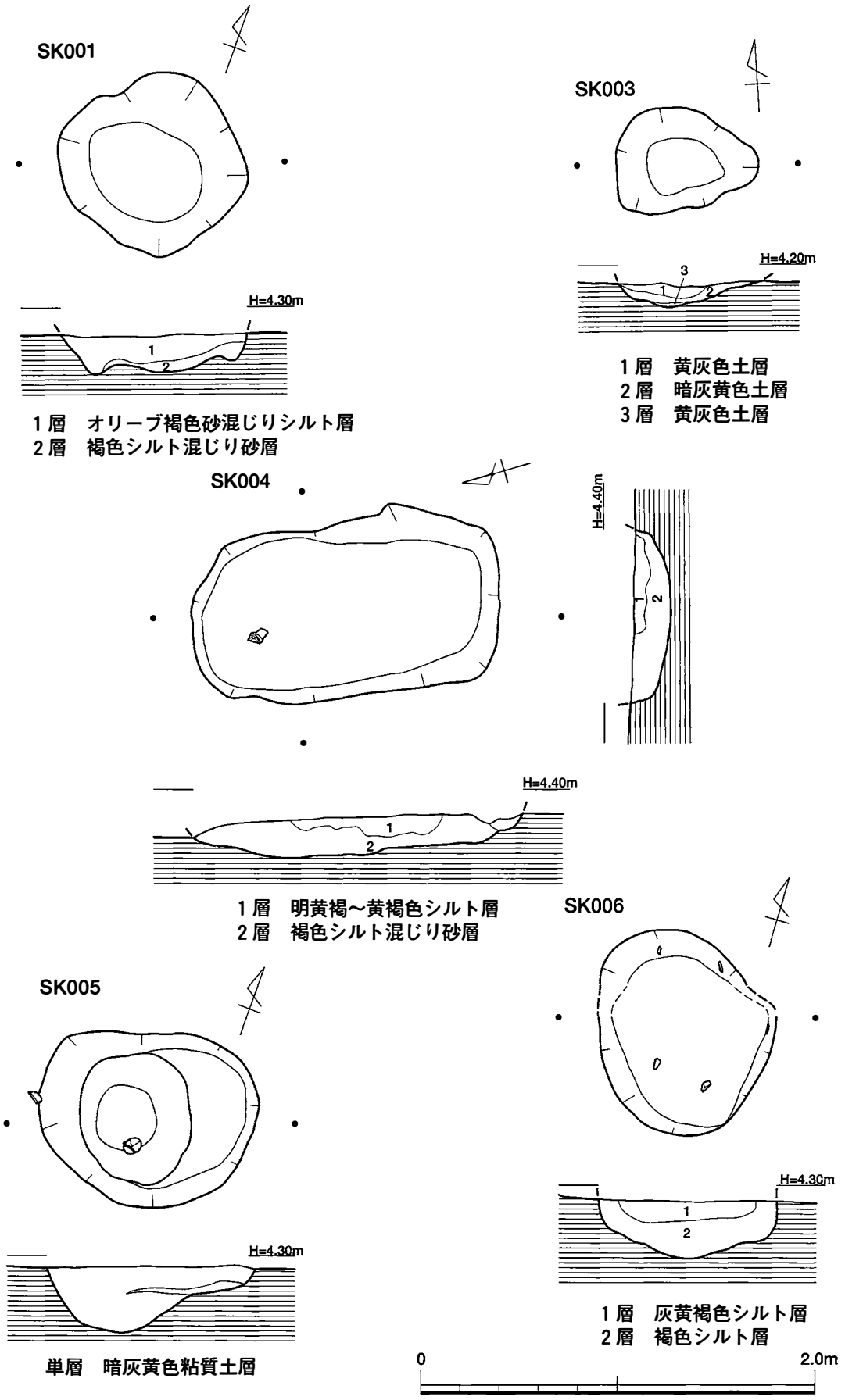


Fig. 8　Ⅲ区　土坑 SK001・003・004・005・006遺構実測図

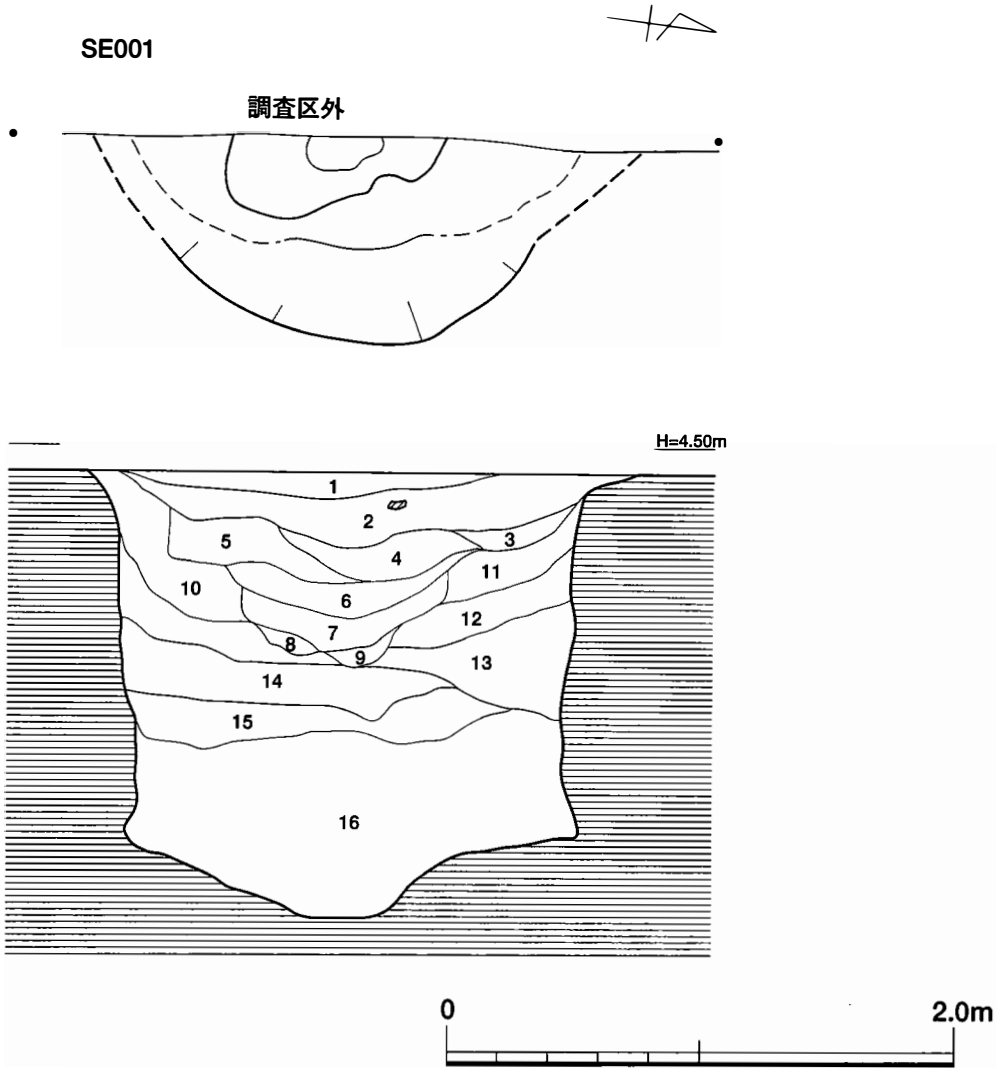


Fig. 9　Ⅲ区井戸 SE001遺構実測図

1層　暗灰黄色土（2.5 Y 4／2）
粘質強。全体に炭化物、遺物を含み、砂質ブロック（1～5 cm 大）も含む。

2層　暗灰黄色土（2.5 Y 4／2）
3層に比べて砂質土、粘性は弱。

3層　暗灰黄色土（2.5 Y 4／2）
全体に砂質の黄色ブロックを含み、粘性は強。少量の炭化物、遺物を含む。

4層　黄灰色土（2.5 Y 4／1）
微量の炭化物をまばらに含み、粘性は強。

5層　黄灰色土（2.5 Y 2／1）
6層に比べて砂質の黄色ブロックを全体に含み、粘性は強。少量の炭化物、遺物を含む。

6層　黒褐色土（2.5 Y 2／1）
砂質の黄色ブロックを全体に含み、粘性は強。多少の炭化物含む。

7層　黄褐色土（2.5 Y 5／3）
砂質がやや強い粘質土。

8層　黄灰色土（2.5 Y 5／3）
粘質は強いが、やや砂を含む。黄色ブロック（1～2 cm）を含む。

9層　黄灰色土（2.5 Y 5／3）
8層と同じ。

10層　黄灰色土（2.5 Y 5／1）
粘質はやや強い。11・12層よりも砂質が強くなる。

11層　暗灰黄色土（2.5 Y 4／2）
10層と同じ
12層　暗灰黄色土（2.5 Y 4／2）
粘質は弱。
13層　黄灰色土（2.5 Y 5／1）
12層と同じだが13層からさらに砂質強くなる。
14層　黄灰色土（2.5 Y 4／1）
砂質少量含み、粘性は強。炭化物・遺物を少量含む。
15層　黄灰色土（2.5 Y 4／1）
16層と比べてやや砂質。
16層　灰色土（10 Y 4／1）
水性堆積による粘土層。
下層部に小礫が広がる。

2　中世の遺構（Fig. 9）

井戸SE001　調査区のほぼ中央部に位置し、遺構の大部分を調査区外（本線部）に有する井戸状遺構である。これまでの近世の遺構埋土と違い、シルト混じりの土は見られず粘質系の土を主体とする埋土であり、4区も含めたところでの中世の遺構と（黒色土系）判断される埋土を有しているため、中世の遺構としている。

本調査区で検出できたのは、断面の形状から井戸本体に付属する掘り方の断面である。主軸及び全体規模は不明である。確認できた遺構規模は、最大深度1.74m、上部幅2.18m、底部幅は1.80m を測る。

井戸枠等の残りは見られないが、7層に相当する土層断面ラインが直角に検出されていることから、井戸枠だった可能性はある。また、8層から9層にかけてやや不規則な堆積を呈しており井戸本体だったのではないかと推定できよう。遺物は埋土中（出土層不明）であるが、須恵器椀（No. 15）が1点出土している。

Ⅲ区　発掘状況

3　Ⅲ区の出土遺物

土器類は、本調査区でコンテナ３箱分が出土している。しかし、その大半が近世の撹乱及び新しい土層からの出土として取上げている。また、遺構から出土した遺物も埋土中に含まれていたものが大半で遺構そのものの時期を示すものは無い。そのため、ここでは遺物を図示し、今後この地域で新たな資料が示された際に参考になるよう、時期の判断される遺物を中心に示している。

須恵器（Fig.10）

No.1　蓋　復元口径15.4cm　８世紀前半

近世の包含層から出土した須恵器で蓋口縁の一部である。内外器面とも回転篦削り後、横ナデ調整。口縁部は、口縁端部を内側に折り曲げ先端を撫でる。内外器面とも灰色、焼成は良好堅緻で胎土は砂粒が少なく僅かに長石を含む。

No.2　蓋　復元口径15.4cm　８世紀前半

調査区内トレンチ出土の須恵器で蓋口縁の一部である。体部は水平に伸び低い器高を呈する。内外器面とも回転篦削り後、横ナデ調整。口縁端部は、直角に折り曲げ先端を撫でる。内外面とも灰色、焼成良好堅緻で胎土は砂粒が少なく僅かに長石を粒状に含む。

No.3　杯　口縁直径12.6cm　８世紀前半

調査区一括として取上げている須恵器杯である。全体に器面は磨耗しており焼きの甘さからきているものと思われる。底部は平底で回転篦削りが施される。内外器面とも回転篦削り後、横ナデ調整。口縁部は直線的に立ち上がり、薄く仕上げている。焼成はやや不良。胎土は砂粒と長石を粒状に少量含む。

No.4　杯　口縁直径12.6cm　８世紀後半

調査区一括として取上げている須恵器坏である。全体に器面は粗く篦削り痕が明瞭に残る。底部は平底で回転篦削りが施される。内外器面とも回転篦削り後、横ナデ調整。口縁部は直線的に立ち上がり、薄く仕上げている。焼成はやや不良、胎土は長石が多く含まれる。

No.5　杯　復元底部8.0cm　８世紀前半

調査区内トレンチ出土の須恵器杯の底部片である。内外器面とも回転篦削り後、横ナデ調整。底部中央部付近には手持ち篦削りが粗く残る。底部から口縁に向かって立ち上がり屈曲する体部は丸みを帯びる。内外器面とも灰色、焼成良好堅緻で胎土は僅かに長石を粒状に含む。

No.6　杯　復元底部径5.2cm　８世紀前半

調査区内のトレンチ出土の須恵器杯の底部片である。内外器面とも回転篦削り後、横ナデ調整。内底部中央には手持ち篦削りが粗く残る。底部から口縁に向かって立ち上がる体部は緩やかな弧を呈する。内外器面とも灰色、焼成良好堅緻で胎土は僅かに長石粒を含む。

No.7　杯　復元底部径8.6cm　８世紀後半

調査区内一括の杯である。出土した部分は底部から体部にかけての一部であり、全体像を窺うことは難しいが、底部から胴部にかけての削り痕が完形の土師杯にある事などから杯として報告する。底部は平底で回転篦削りが僅かに残る。内外器面とも灰色、焼成良好、胎土は長石粒を多く含む。

No.8　杯　復元底部径6.8cm　８世紀後半

Ｂ－５ Grid出土である。全体形は小片であり不明であるが、底部の回転篦削りから杯の一部として報告する。底部には粗い回転篦削りが残され、一部体部の調整にまで削りが及んでいる。色調は内外器面とも暗灰色、焼成は良好堅緻で胎土には長石粒が僅かに入る。

No.9　鉢　8世紀前半

調査区内の近世包含層中より出土した鉢底部である。内外器面とも回転篦削り後、横ナデ調整。底部は粘土が厚く残り、体部上端にかけて削られ薄くなっている。体部は緩やかに弧を呈する。色調は内外器面とも灰白色、焼成不良。胎土は僅かに長石を含む。

No.10　皿　8世紀後半

調査区内の近世包含層中より出土した皿胴部の一部である。内外器面とも回転篦削り後、横ナデ調整。口縁部は端部近くで薄く引き上げられながら外反する端正な作りである。外器面の底部には立ち上がり部に2条の沈線が浅く巡る。色調は外器面が乳灰色で内器面は灰色、焼成良好堅緻で胎土には長石を磨り潰しているかと思われるほどきめの細かい長石粒がまんべんなく含まれる。

No.11　杯　復元口径11.6cm　8世紀後半

調査区内トレンチから出土した杯の一部である。逆台形の高台が貼り付けられ、底部は垂直に立ち上がる。口縁端部は薄く仕上げられ丁寧なナデが施される。色調は内外器面とも暗灰色、焼成は良好堅緻で、胎土には長石粒を含む。

No.12　椀　復元底部径8.0cm　8世紀前半

調査区内の近世包含層中より出土した椀である。出土した部位は、体部立ち上がりの粘土接合面から外れた底部と貼り付け高台である。底部は丁寧な回転篦削りを施した後、高台が貼り付けられる。内器面底部は回転篦削り後、粗い横ナデ調整を施す。色調は外器面が灰色で内面は灰白色、焼成は良好緻密で胎土には長石粒を多く含む。

No.13　椀　復元底部径9.2cm　8世紀前半

調査区内トレンチより出土した椀である。出土した部位は、底部から体部へ立ち上がる部分である。底部は回転篦削りを施した後、横ナデ調整後に底部に高台を貼り付ける。高台は内外器面とも丁寧なナデが施される。色調は外器面が暗灰色で内器面は灰色、焼成は良好緻密胎土には長石粒を多く含む。

No.14　椀　復元底部直径10cm　8世紀後半

B－4 Gridから出土した椀である。高台は内外器面とも両端に丁寧にナデが施される。色調は外器面が暗灰色で内器面は灰色、焼成は良好緻密で胎土には長石粒を多く含む。

No.15　杯　復元底部径8.8cm　8世紀後半

井戸SE001埋土中より出土した杯である。井戸の年代を直接示す遺物ではないが図示する。出土している部位は底部から胴部に至る部分である。底部は回転篦削りを施した後、横ナデ調整後に底部に高台が貼り付けられている。高台は内外器面ともに丁寧なナデが施される。色調は内外器面とも灰色、焼成は良好堅緻で胎土には長石粒を僅かに含む。

No.16　無蓋高杯　8世紀前半

撹乱のなかから出土した無蓋高杯脚部である。遺構・包含層からの出土ではないが当遺跡からは他に出土していないため図示する。出土した部位は脚部から杯部にかけての部位であるが、脚端部は欠けて無い。脚部は短く杯部の接合面から脚端部に向かって急に太く広がる。杯部は脚部成形後、個別に作られていたものが接合されていたようである。脚部外面にはほぼ半分に灰が被っており暗灰色を呈している。灰が被っていない部分は灰色で、杯部の内面は灰白色を呈する。焼成は良好緻密で胎土は長石粒を少量含む。

No.17

調査区内トレンチから出土した高杯脚部である。杯部、脚部端部は残っておらず、詳細な法量は確認できない。長く伸びる脚部は緩やかに端部に向かい外反する途中に、2条の沈線が施される。内外器面とも暗灰色を呈し焼成は良好堅緻で胎土は長石粒を僅かに含む。

No.18　皿　復元口径12.8cm　復元底部径10.2cm　8世紀後半

調査区内の近世包含層から出土した皿の一部である。底部から口縁部にかけての部位のみが出土している。緩やかに立ち上がる口縁部はやや内に入りながら僅かに外反している。端部の成形は丁寧でやや厚みを帯びる。色調は内外器面とも灰色を呈し、焼成は良好堅緻で胎土は長石粒を少量含む。

No.19　皿　復元口径18.6cm　8世紀後半

調査区内の一括として取上げている遺物である。破片での出土であったが口径が復元できる資料であったため図示する。体部は緩やかに外反し立ち上がり、胴部の稜を境に外反し垂直に立ち上がる。口縁端部の成形及び体部のナデ調整は丁寧で口縁端部はシャープに仕上げてある。色調は外器面が暗灰色、内器面は灰色を呈し、焼成は良好堅緻で胎土は長石粒を少量含む。

No.20　長胴瓶　復元底部径10cm　8世紀後半

調査区内のトレンチから出土した瓶底部から胴部にかけての部位である。底部から広がりながら胴部にかけて立ち上がる。底部には箆削り痕跡が残り一部にナデ痕跡も見られる。胴部外器面には回転箆削り後横ナデ調整が施される。内器面には灰白色の灰が被る。焼成は良好堅緻で胎土は長石粒を僅かに含む。

No.21　甕　復元口径　24.0cm　8世紀後半

調査区内のトレンチから出土した広口甕の口縁部である。口縁部は緩く外反しながら直線的に口唇部へ至る。外面口唇部下に回転箆削りで成形した1条の凸線を見る事ができる。調整は内外器面ともに回転箆削り、横ナデ調整を施す。焼成は良好堅緻で胎土に長石粒を僅かに含む。

土師器（Fig.11）

No.22　蓋　直径17

調査区内のＢ－７

まみは後に貼り付けられており、つまみ基部は丁寧にナデが施される。平面に成形されたつまみは、上面を僅かに窪ませる。表面は回転箆削りが施され内面は削りの後、丁寧にナデが施される。色調は内外器面とも橙色。焼成は良好、胎土は長石粒を多く含む土が使用されている。そのプロポーションから須恵器を模倣し、その手法を取り入れた作りが窺える。

No.23　杯　復元直径12.8cm　8世紀後半

調査区一括として取上げた杯である。外器面には粗い箆による削り痕が残り、内器面は丁寧なナデが施される。色調は内外器面ともにぶい褐色をなし外面には黒斑が見られる。口縁端部は内外器面とも丁寧な横ナデが施される。焼成は良好、胎土は細かい砂粒を少量含む。

No.24　手捏土器椀　8世紀後半

SK003出土の手捏土器椀の口縁部である。No.23と同じ丸底を呈するものである。外器面には粗い箆による削り痕が残り、内器面は丁寧なナデが施される。色調は明るい橙色。口縁端部は内外器面とも丁寧な横ナデが施される。焼成は良好、胎土は細かい砂粒を少量含む。

No.25　椀　復元底部径6.6cm　8世紀

調査区内トレンチから出土した底部から胴部にかけての椀片。内外器面とも回転箆削りが施され、内器面はさらに丁寧なナデが見られる。底部から胴部に立ち上がる屈曲部分は、明瞭な角を意識し削られている。色調は内外器面とも淡い橙色。焼成は良好で、胎土は長石粒を僅かに含んでいる。

No.26　杯　復元口径10.0cm　器高3.9cm　8世紀後半

調査区トレンチ内から出土した杯。内外器面とも回転箆削りが施され、口縁端部は薄く仕上げ丁寧な指ナデを施す。色調は内外器面とも淡い橙色。焼成は良好。胎土は長石粒を少量含む。

No.27

内外器面共に横方向の篦削りで調整後、指ナデが施される。口縁端部は緩やかに外反している。色調は内外器面共淡い橙色。焼成は良好。胎土は砂粒が多く粗い。

No.28　杯　復元底部径8.0cm　9世紀

調査区内のトレンチから出土した杯。内外器面とも摩滅が激しく調整手法は不明。高台は杯の製作後に貼り付けられ逆台形状に成形される。接合面の周辺は丁寧なナデが施される。色調は内外器面とも明るい橙色。焼成は良好。胎土は長石粒を僅かに含む。

No.29　杯　9世紀

調査区内トレンチ出土の杯。高台が接合面から剥がれ欠損している。底部は篦削りが施され、胴部にも明瞭な篦削りが見られる。内器面は篦削り後に横ナデが施される。色調は内器面が煤による黒色を帯び、外器面は灰白色を呈する。焼成は良好。胎土は砂粒を多く含み粗い。

No.30　杯　復元口径15.6cm　器高4.1cm　8世紀後半

調査区内Ｂ－6 Grid から出土した杯。内器面の底部にモミと思われる組織痕が残される。高台は貼り付け高台で先端が尖る。底面は篦削りによる成形痕が明瞭に残る。体部の調整は篦削り成形後、横ナデを施し整える。色調は内外器面共にやや淡い灰白色。焼成は良好。胎土は砂粒を少量含む。

No.31　椀　復元口径18.4cm　器高4.1cm　8世紀後半

調査区内包含層一括で取上げてある椀。体部は内外器面とも横ナデが施され、器壁は薄く端正な器形である。高台はやや外に開き気味で、断面形は三角をなす。色調は淡い明灰色。焼成はややあまい。胎土は小石を少々含む。

No.32　椀　復元口径13.0cm　9世紀

調査区内包含層出土の椀。外器面は横ナデの痕跡が明瞭に残り、内器面は痕跡が残らないようにナデが施される。色調は内外器面共に淡い橙色。焼成は良好。胎土は砂粒を僅かに含みやや粗い。

No.33　椀　口径12.6cm　底径6.6cm　器高6.6cm　9世紀

調査区内Ｂ－6 Grid から出土した椀。外器面は丁寧な横ナデが残る。内器面は横ナデ後にナデによる調整が施される。色調は内外器面とも明橙色。焼成は良好。胎土は長石、雲母を多く含んでいる。

No.34　椀　復元底部径8.7

調査区Ｂ－4 Grid から出土した椀。体部の器壁は薄く丁寧な回転篦削りが施される。内外器面共に赤彩が施され、特に外器面には良好な状態で残されている。内器面底部から器壁に向かい煤が付着している。色調は明るい褐色を呈する。胎土は精製されたきめの細かな土が使われている。焼成は良好。

No.35　皿　復元底部径13.6cm　13世紀

調査区Ｂ－4 Grid から出土した皿。体部は底部との境に明瞭な稜を付け丁寧な回転篦削りを施している。口唇部が残っていないため器形ははっきりしないが、盤の可能性もある。色調は内外器面とも褐色を呈している。胎土は精製された土が使われ、小石等の混入は認められない。焼成は良好。

No.36　小皿　復元底部径6.7

土坑SK005埋土内出土の小皿。口唇部は残っていないため器高は不明であるが、底部からの立ち上がりを見ると、低い口縁を持つ小皿であると思われる。底部は今では摩滅して観察できないが、当初は糸切り底であったようである。色調は内外器面とも褐色を呈している。胎土は精製された土が使われ、小石等の混入は認められない。焼成は良好。

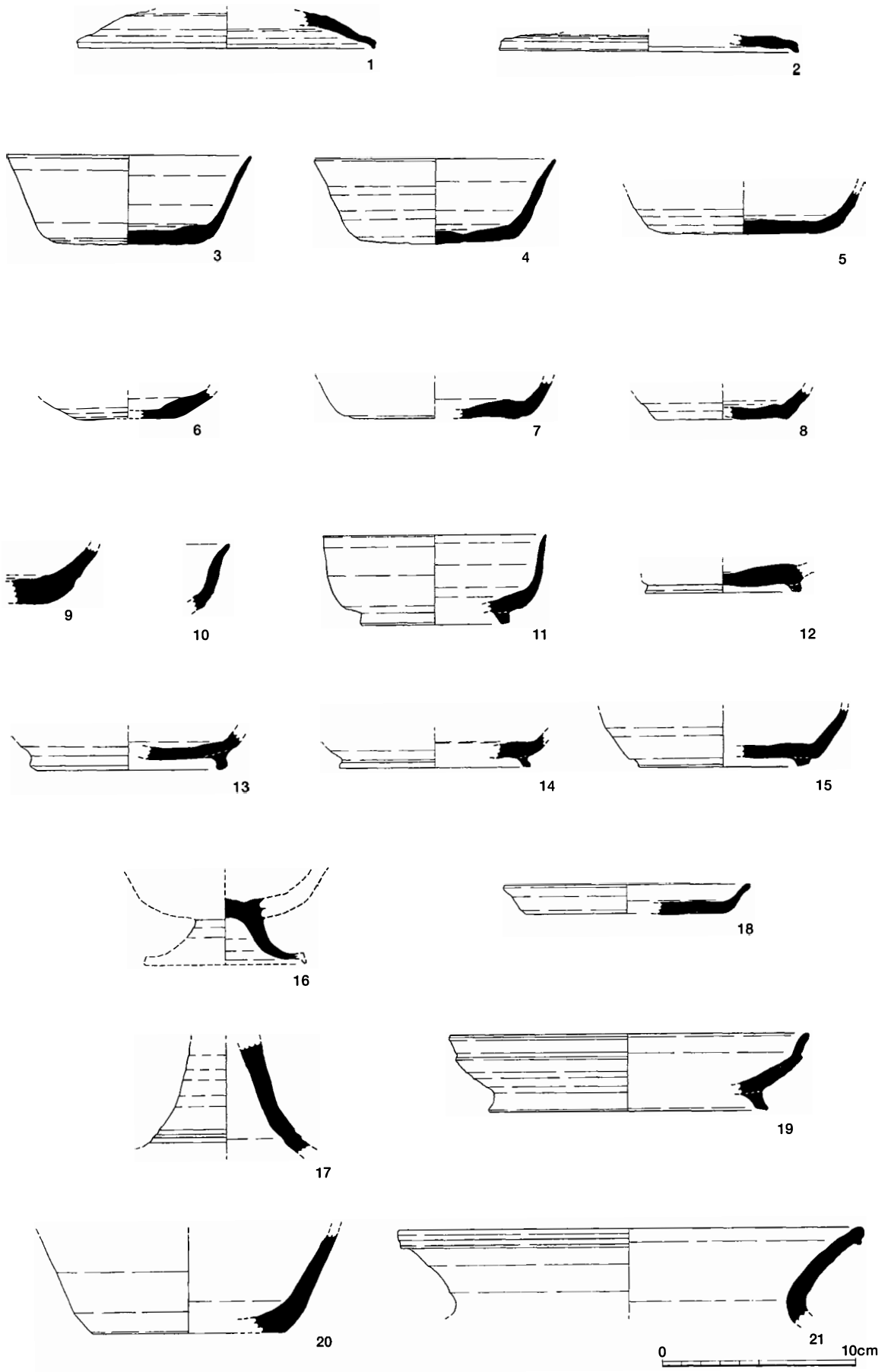


Fig. 10　Ⅲ区出土遺物実測図

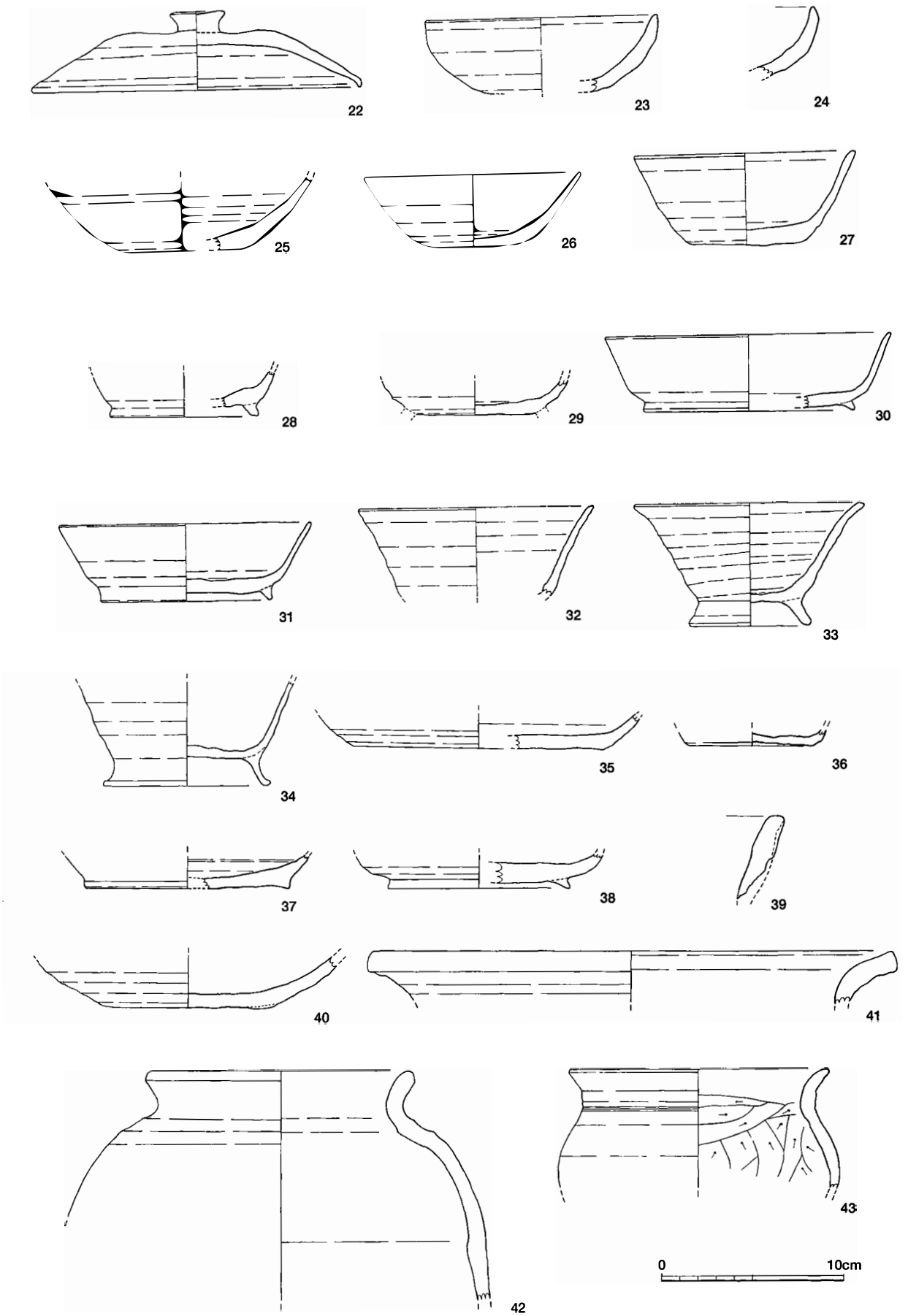


Fig. 11　Ⅲ区出土遺物実測図

No.37

調査区内Ｂ－４ Grid 出土の皿で、底部のみの出土である。張り出している底部端部は削り出され、平底をなす。底部は一部がやや上げ底気味であり、糸切りの痕跡が残る。色調は内外器面とも褐色を呈している。胎土は精製された土が使われ、小石等の混入は認められない。焼成は良好。

No.38　椀　復元底部径10.0cm　13世紀

調査区内でトレンチを拡大した際に出土した椀。高台は器を成形後に貼り付けられ断面は三角形を呈する。底部はやや厚く、上に行くにしたがい薄く成形される。色調は内外器面とも褐色を呈する。胎土は小石を少量含むが全体にきめの細かい土である。焼成は良好。

No.39　壺　時期不明

調査区内包含層出土遺物である。器形は壺の口縁である。器面の粘土が著しく剥離しているため製作年代の特定はできない。粘土は器壁の外器面から貼り付けられており、貼り付け面から剥離している。色調は外面が暗褐色で内器面は淡い褐色を呈する。胎土は小石・長石を多く含むが、特に小石の数が多い。焼成はやや不良。

No.40　鉢　時期不明

調査区内Ｂ－４ Grid の遺物包含層から出土した須恵器技法を利用した土師質土器である。平底であるが、残存部に僅かに盛り上がる脚らしい突起が認められる。外器面の削りは丁寧である。

No.41　甕　復元口径28.4cm　13世紀

調査区内包含層出土の甕。器形は、短くやや外反する口縁を持ち、厚い器壁を有し胴部がやや長い。外器面は箆削り後にナデが施され、なめらかな器面をしている。内器面も同様に口縁部から胴部肩部まではなめらかにナデがあり、下部にいくに従い箆削りが残る。外面には胴部から口縁部にかけて煤が付着する。色調は外器面が褐色を呈し、内器面は淡い灰色となる。胎土は小石、長石を多く含む。焼成は良好。

No.42　壺　復元口径14.1cm　９世紀

調査区内の近世撹乱から出土している壺。口縁部の一部で、強く外反する。外器面には削りの際の痕跡が粗く残る。内器面は丁寧なナデが施される。色調は外器面が橙色、内器面は淡い橙色である。胎土は雲母を多く含む。焼成は良好である。

No.43　小型甕　復元口径14.0cm　９世紀

調査区内Ｂ－６ Grid 出土の小型甕。外器面は箆削り後に丁寧なナデが施されるが、内器面は粗い箆削りが残る。内器面削りは基本的に下から上になで上げられ、屈曲部近くで横方向の削りへと向きを変える。口縁部は内外器面ともナデが施され、削り痕跡を見ることはできない。胎土は長石を多く含み、雲母も全体にまんべんなく含んでいる。焼成は良好。

輸入陶器・磁器（Fig.12・13）

No.44　皿　白磁（白磁Ⅲ－１類）　復元口径9.7c

調査区内Ｂ－６ Grid 遺物包含層から出土した白磁皿である。胎土は砂粒が少なく細やか。色調は白色。内外器面共に横ナデ調整を施した後に施釉。釉薬は灰白色。

No.45　椀　白磁（白磁Ⅴ－４ａ類）　復元底部径6.3cm　12世紀～13世紀

調査区内Ｂ－７

内器面に円形の沈線を施す。内外器面共に横ナデ調整を施した後施釉。釉薬は灰色。

No.46　椀　白磁（白磁Ⅴ－４ａ類）　復元底部径6.1cm　12世紀～13世紀

調査区Ｂ－６ Grid の遺物包含層から出土した白磁椀である。胎土は砂粒が少なく細やか。色調は灰色。内器面に一筋の沈線を施す。内外器面共に横ナデ調整を施した後施釉。釉薬は灰色。

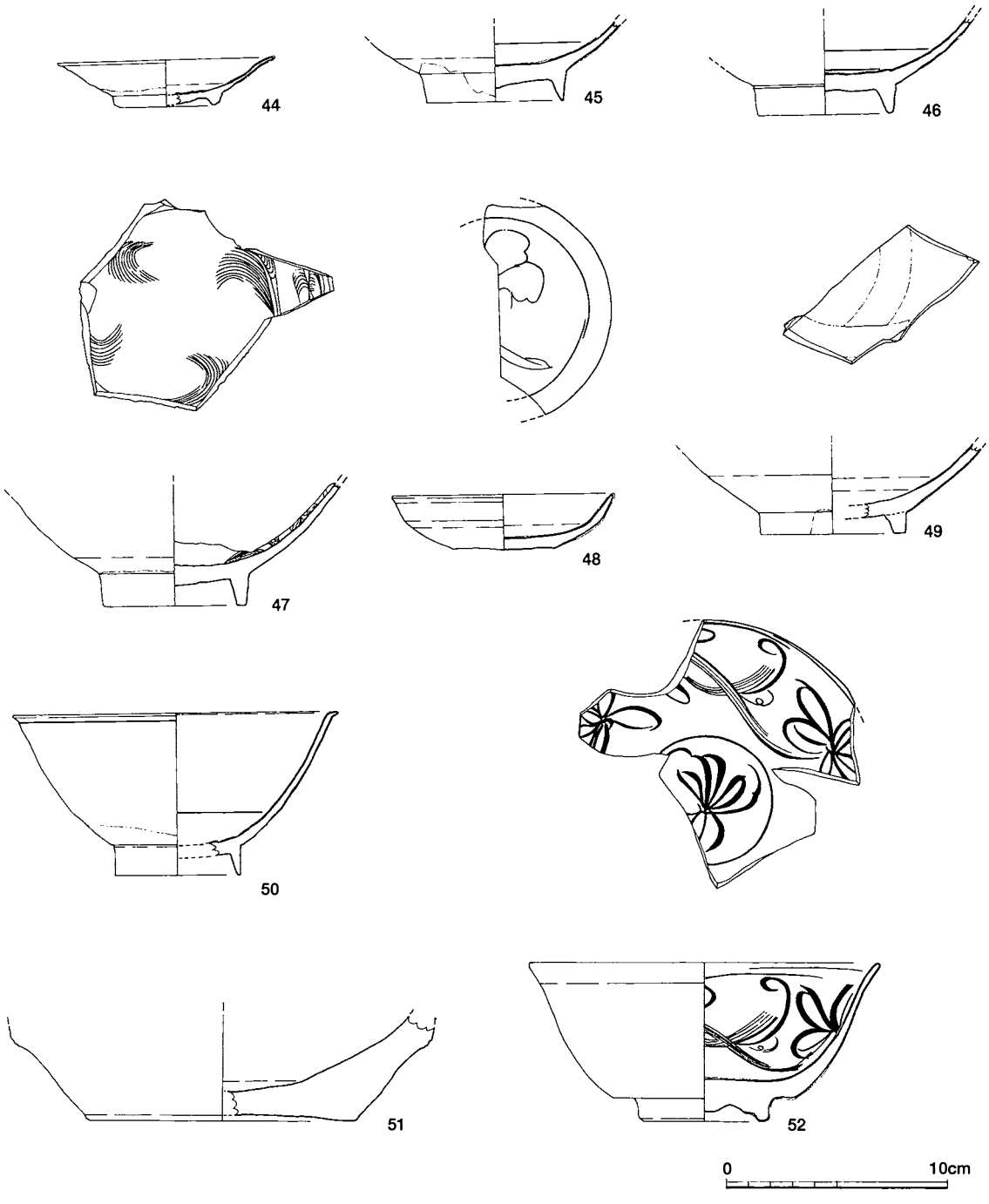


Fig. 12　Ⅲ区出土遺物実測図

No.47　椀

調査区内トレンチより出土した白磁椀である。胎土はやや粗く、釉を通してみても小石が見えてくるほど不純物が多い。内器面底部には４箇所に配した櫛目があり、また口縁部直下にも櫛目が入る。色調は灰色。内外器面共に横ナデ調整を施した後施釉。高台付近には釉はかからない。釉薬は灰色。

No.48　皿　白磁（白磁Ⅶ－１ｂ類）　復元口径10.2cm　底部径4.8cm　器高2.5cm　13世紀

調査区内の遺物包含層から出土した白磁皿である。胎土は精選され細やか。内器面底部には箆描きと思われる花文がある。色調は灰色。内外器面共に横ナデ調整を施した後施釉するが底部のみ釉を掻き取る。釉薬は灰色。

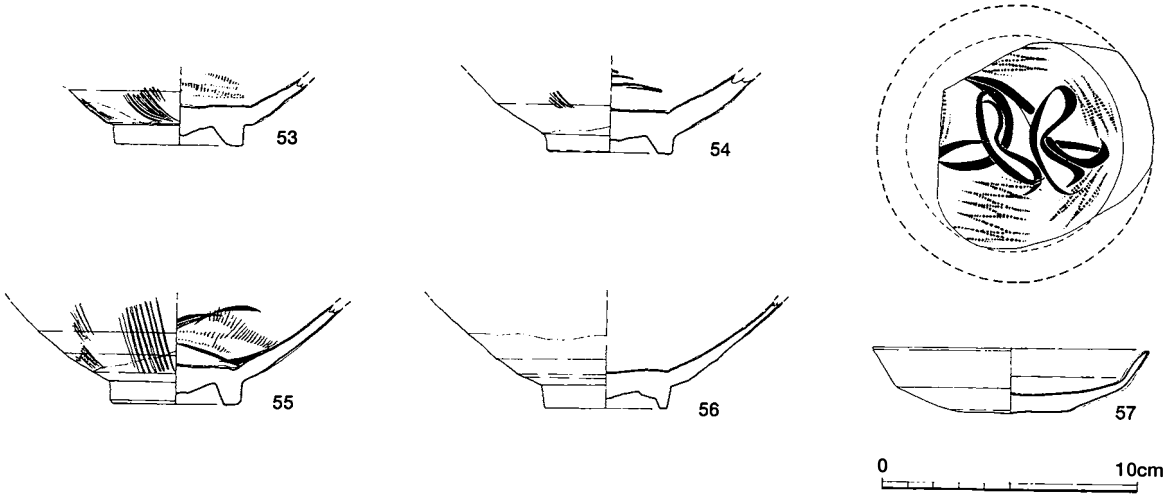


Fig. 13　Ⅲ区出土遺物実測図

No.49　椀　白磁（白磁Ⅴ－4 a類）底部口径6.7c

調査区内A・B－Gridの遺物包含層出土の白磁椀である。胎土はやや粗く、釉を通してみても小石が見えるほど不純物が多い。内器面底部からやや上がった部分に浅い沈線が廻る。色調は灰色。内外器面共に横ナデ調整を施した後高台付近を除き施釉する。釉薬は灰色。

No.50　椀　白磁（白磁Ⅴ－4 a類）復元口径14.6cm　器高7

調査区内B－6 Gridの遺物包含層出土の白磁椀である。胎土は精選され細やか。内器面底部からやや上がった部分に浅い一条の沈線が廻る。色調は灰色。内外器面共に横ナデ調整を施した後高台付近を除き施釉する。釉薬は灰色。

No.51　鉢　底部径　12.0cm　時期不明

調査区内A・B－2 Gridから出土した陶器である。底部は粗い削りでやや上げ底である。体部は無釉で緩やかに広がる。

No.52　椀　龍泉窯系青磁（青磁Ⅰ－2 a類）復元口径15.9cm　底部径6.0cm　器高7

調査区内B－4 Gridの遺物包含層から出土した青磁椀である。内外器面とも成形後の調整は回転篦削り、指ナデ仕上げの後に施釉。内器面には篦彫りで片彫りの蓮花文を施す。また、底部にも蓮花文を描く。胎土は精選され細やか。

No.53　椀　同安窯系青磁（青磁Ⅰ－1 b類）底径5.0cm

調査区内、井戸SE001埋土中から出土した青磁である。底部から直線的に延びる胴部までの破片で、口縁部は残っていない。胎土はやや粗く、小石が観察される。内外器面共に篦削りで成形、指ナデの後に施釉。釉薬は灰緑色。内外器面に櫛目文により施文が施される。同遺構の直接の年代を示すものではない。

No.54　椀　同安窯系青磁（青磁Ⅰ－1 b類）底径5.0cm

調査区内B－7

縁部は残っていない。胎土はやや粗く、小石が観察される。内外器面共に篦削りで成形、指ナデの後に施釉。釉薬は灰緑色。内外器面に櫛目文により施文が施される。

No.55　椀　同安窯系青磁（青磁Ⅰ－1 b類）底径4.9cm

調査区内、土坑SK004の埋土下層から出土した青磁である。底部から緩やかに直線的に延びる体部は上部に行くに従い薄く成形される。胎土はやや粗く、小石が観察される。内外器面共に篦削りで成形、指ナデの後に施釉。釉薬は灰緑色。内外器面に櫛目文により施文が施される。

Fig. 14　Ⅲ区出土遺物実測図

No.56　椀　同安窯系青磁（青磁Ⅱ類）底径4.9cm

調査区A・B－3 Gridの遺物包含層から出土した青磁である。内外器面共に篦削りで成形後、内器面は指ナデによる成形、外器面は粗い削りがそのまま残される。胎土は精選されて細やか、色調は灰色。釉薬は灰緑色、外器面は釉が体部の半分までしかかからない。

No.57　皿　同安窯系青磁（青磁Ⅰ－2ｂ類）復元口径10.8cm　底径4.6cm　器高2.4cm

調査区内の遺物包含層一括で出土している青磁である。胎土は精選され細やか。内器面底部には篦描きによる蓮花文がある。色調は灰色。内外器面とも横ナデ調整を施した後施釉するが底部のみ釉を掻き取る。釉薬は灰緑色。

その他（Fig. 14）

No.58　土錘　長さ4.1cm　最大径1.1cm　孔径0.3cm　重さ4.1g

調査区内A－3 Gridから出土した土師質の土錘である。焼成は良好。色調は浅黄色で、全体的に指ナデを施し成形。

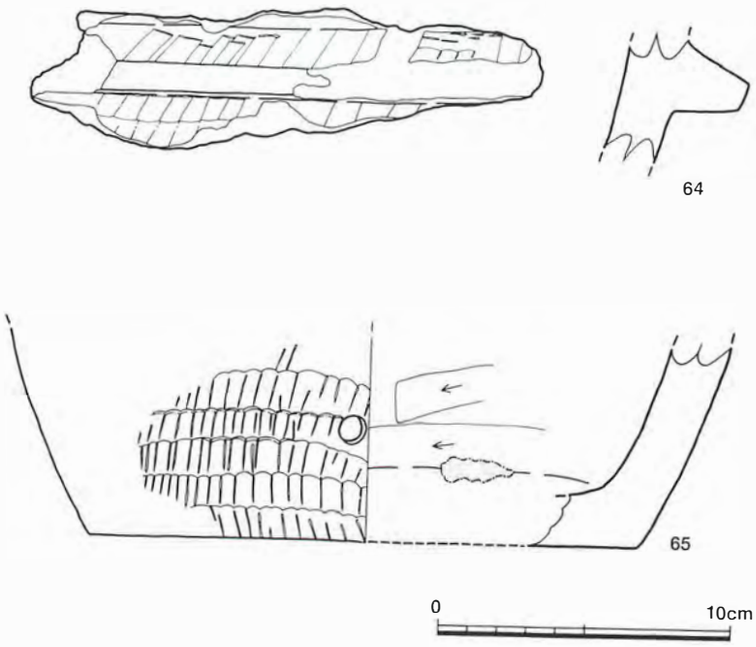


Fig. 15　Ⅲ区出土遺物実測図

No.

No.60　鉄滓　長さ3.2cm

No.61　土製品　調査区内の遺物包含層から出土した土師質の遺物である。焼成前に穿孔されている。焼成は良好。色調は浅黄色で全体的にナデ調整が施される。

No.62　布目瓦　残存長7.4cm

調査区内A・B－2 Gridの遺物包含層から出土した布目を施した丸瓦。焼成は良好。色調は凹凸面共に灰色。凹面に布目圧痕を残す。凸面は丁寧なナデ調整を施す。

No.63　徳利　残存高21.2cm

正面　○に「さ」宮崎酒店

左側面　八代本町○○（不明）通

右側面　戌十一万六十三号

調査区内、近世の撹乱より出土した遺物である。本体は、白色の磁器に藍色を用いて店名、所在地、顧客番号が記入される。

石製品（Fig.15）

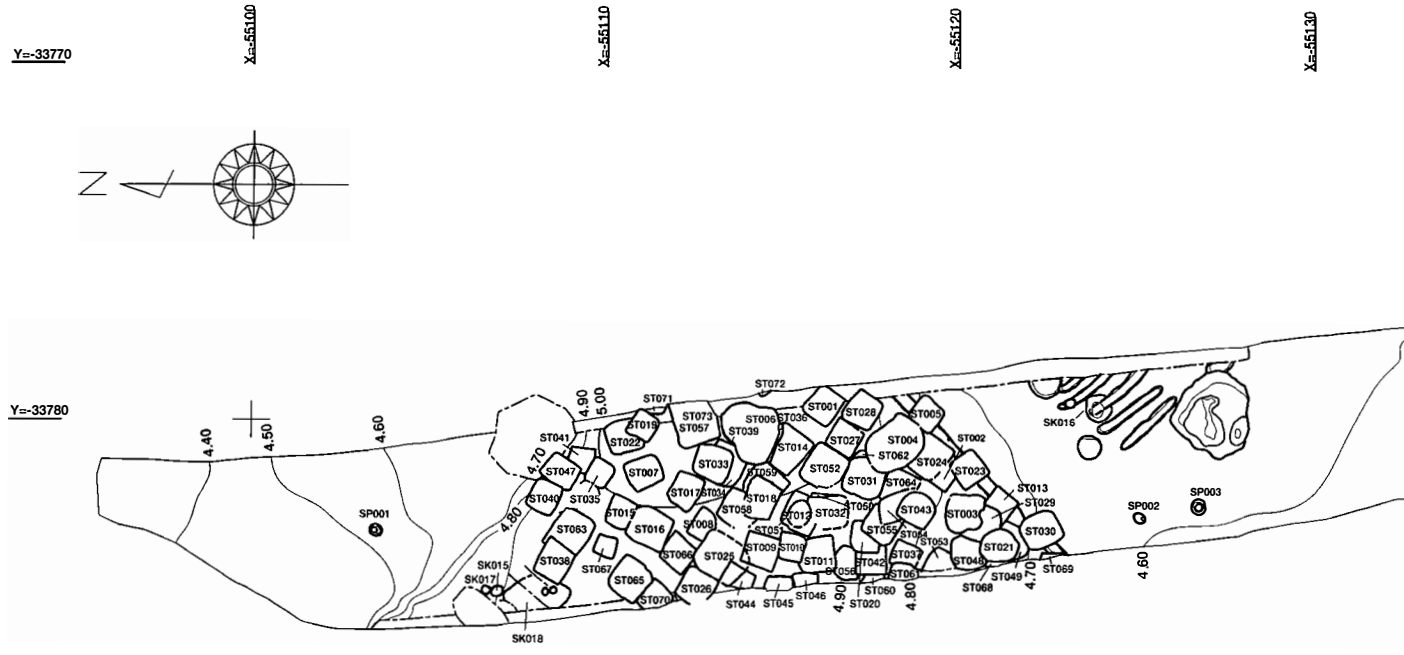
No.64　石鍋

調査区内B－3 Gridの遺物包含層中から出土した滑石製石鍋である。出土した部位は石鍋体部の鍔の一部である。体部は底部に向かい傾斜するように内傾し、外面は幅約1 cm程度の削り痕跡を多数残されている。内器面は使用の結果からか、削り痕跡は残っていない。外面には煤が付着し使用された様子が窺える。色調は灰色を呈する。

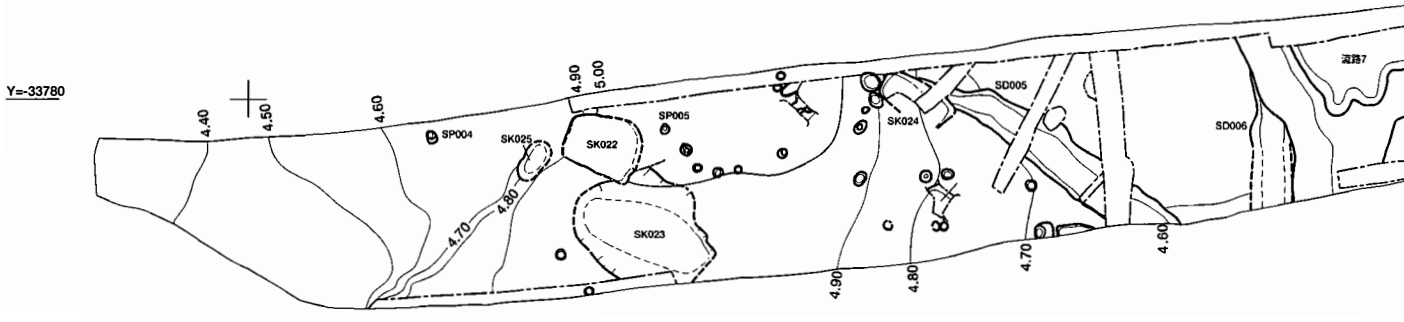
No.65　石鍋

調査区B－6 Gridの遺物包含層から出土した石鍋底部である。器壁は厚く1.8cmをはかる。向かうに従い開き気味である。外器面には幅約1 cm程度の削り調整の痕跡が内器面には一部に炭化物が残る。横方向約2 cm程度の幅を持つ削りも観察さて煤の付着が著しい。

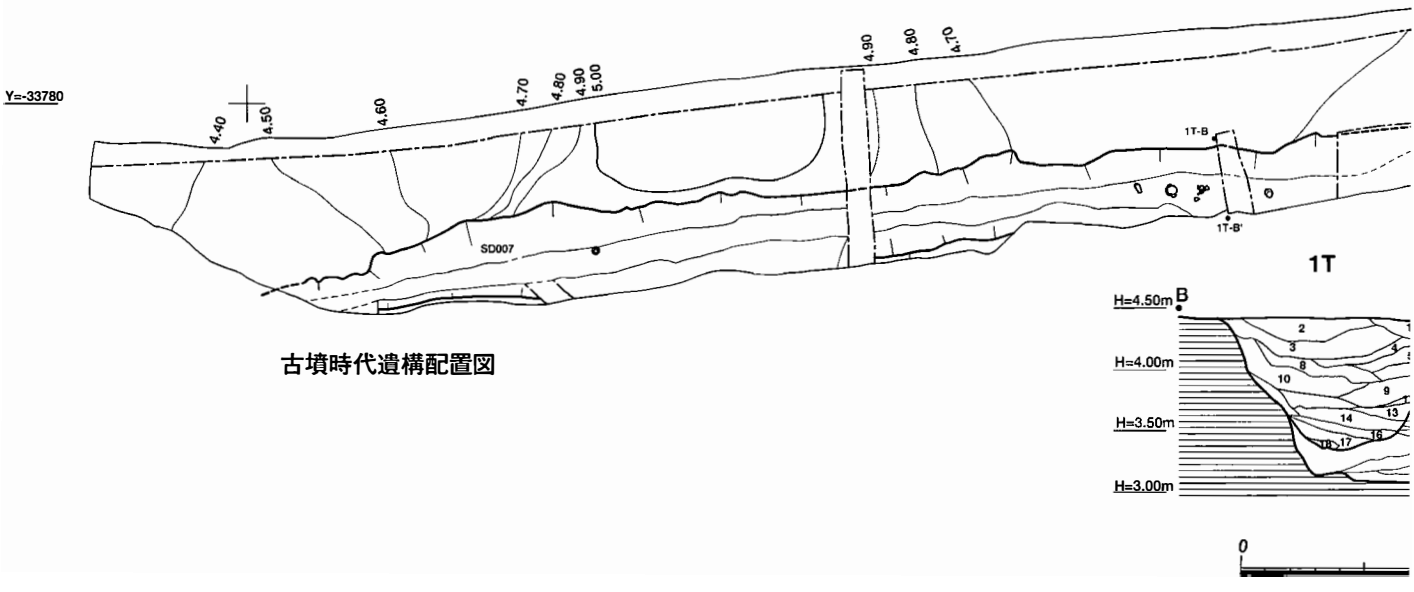
中片小路遺跡Ⅲ区全景（八代平野方向を望む）



近世遺構配置図

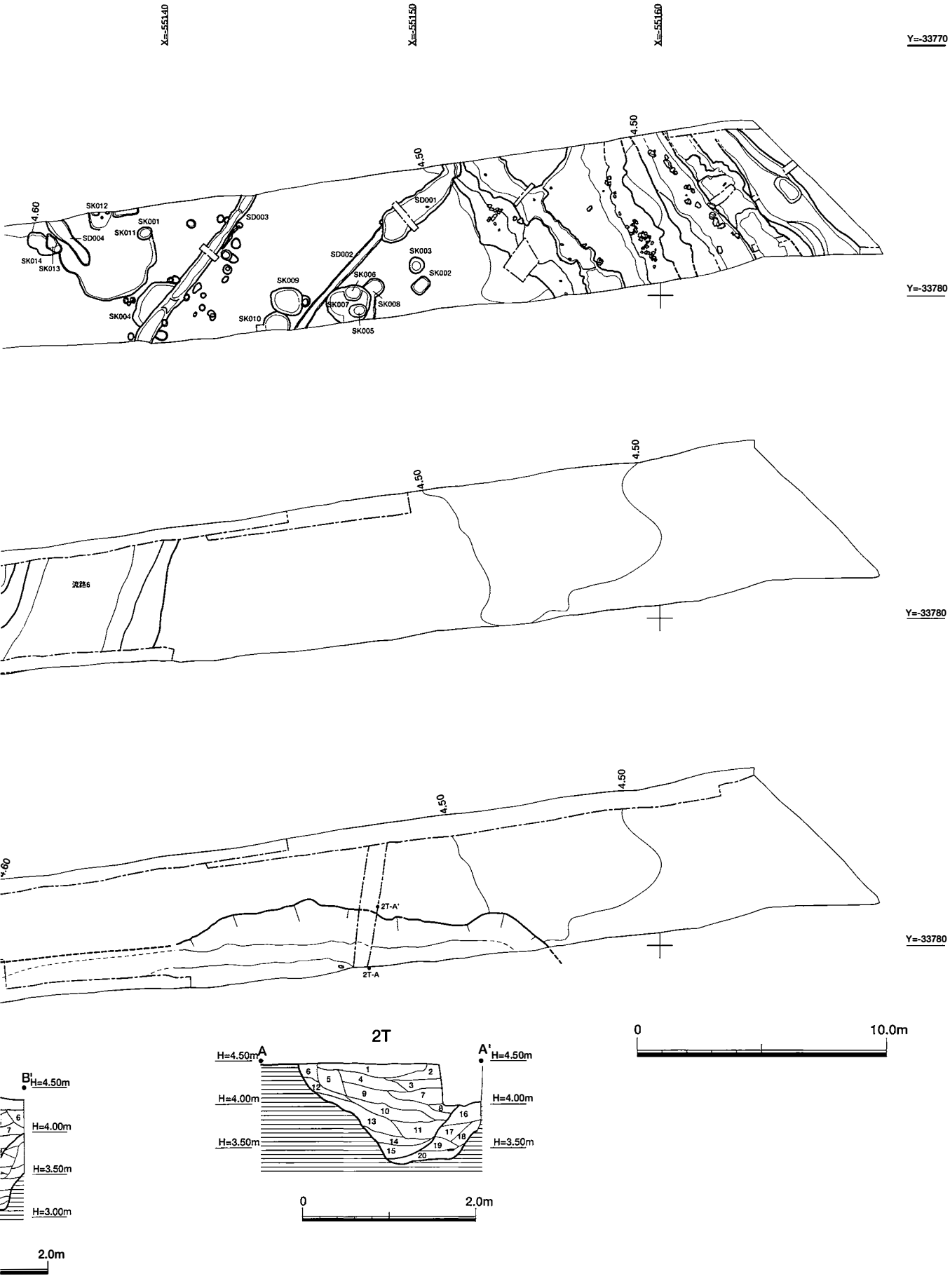


中世遺構配置図



古墳時代遺構配置図

Fig.16　Ⅳ区遺構配置


X=-55140
X=-55150
X=-55160
Y=-33770
Y=-33780
Y=-33780
Y=-33780
4.60
4.50
SK012
SK001
SK011
SD004
SD003
SK014
SK013
SK004
SK009
SK010
SD002
SK006
SK007
SK008
SK005
SD001
SK003
SK002
流路6
2T-A'
2T-A
2T
H=4.50m
H=4.00m
H=3.50m
H=3.00m
A
A'
B'
0
10.0m
2.0m

図及び土層断面図

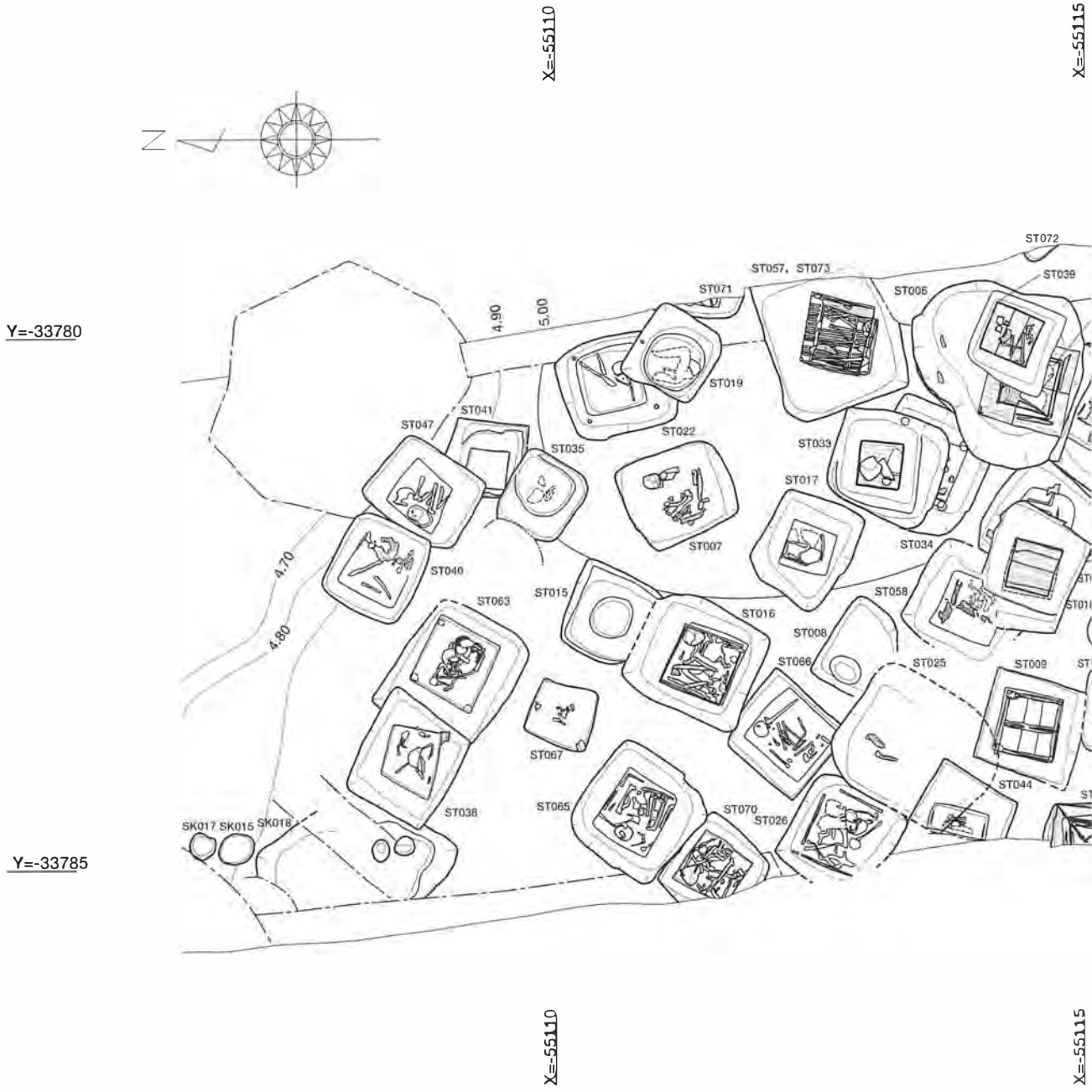


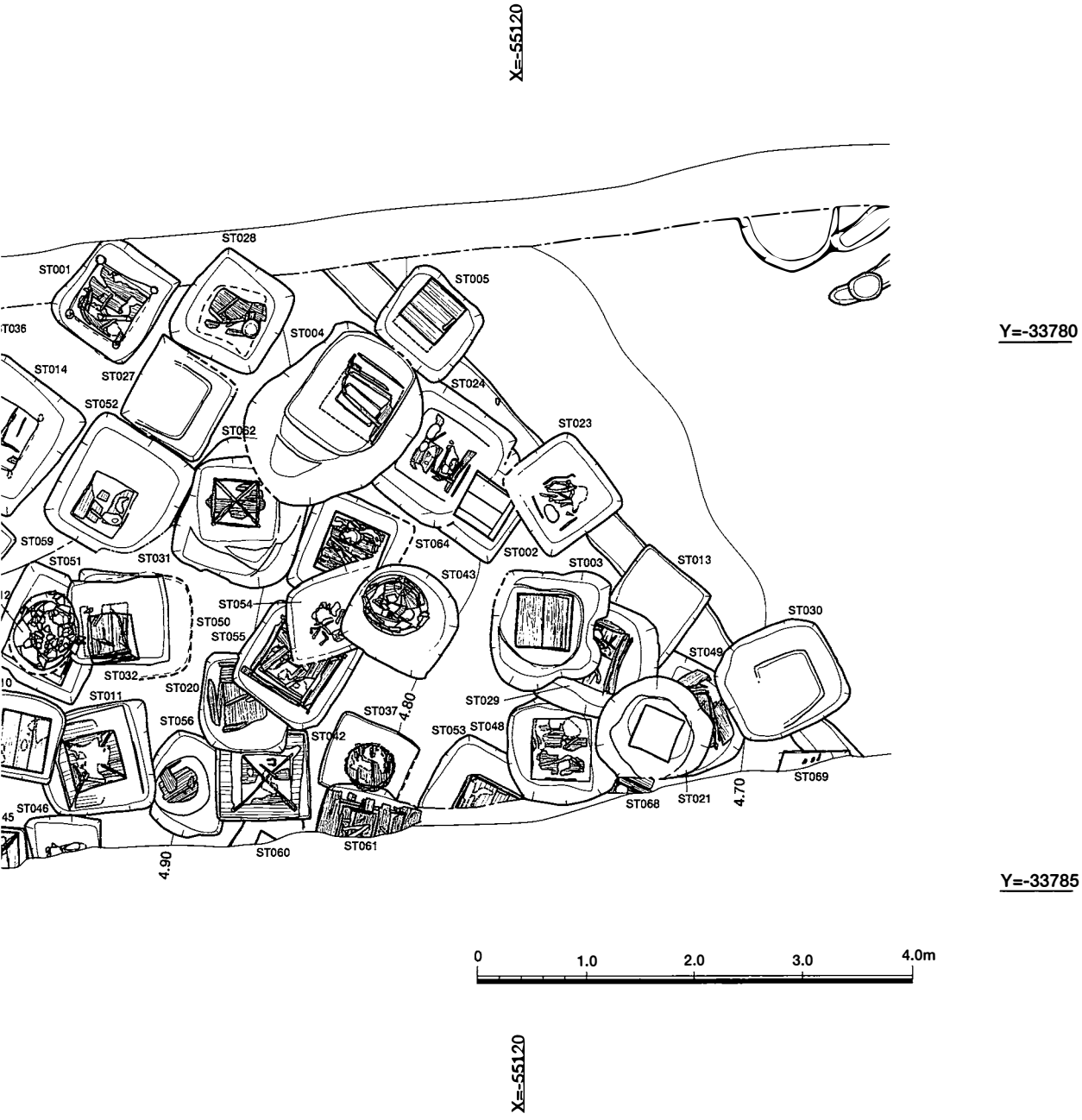
Fig.17　Ⅳ区

第５節　Ⅳ区の調査成果

１　近世の遺構（Fig.16～20）

近世の遺構は、墓と旧河川及び土坑・柱穴を検出している。墓地は調査区の北側を中心に広がり、調査区内最高地を中心に形成されていた。旧河川及び柱穴は墓地から延びる南側緩斜面上に位置する場所で検出された。調査区の最南端は近世薩摩街道に平行して流れている大田井手（用水路）にあたり、それを超えると現在の行政区割りによる宮地町にあたる。

墓地は新幹線本線建設に伴う用地の買収が終了した段階で近隣の墓地へ改葬が行われている。その際墓石は持ち出され、調査に入る時点では平地と化していた。


X=-55120
Y=-33780
Y=-33785
ST001
ST028
ST005
ST004
ST014
ST027
ST052
ST062
ST024
ST023
ST059
ST051
ST031
ST064
ST002
ST003
ST013
ST043
ST054
ST050
ST055
ST030
ST049
ST032
ST020
ST011
ST056
ST037
4.80
ST029
ST053
ST048
ST042
ST069
ST068
ST021
4.70
ST046
ST060
ST061
4.90
0
1.0
2.0
3.0
4.0m

近世墓配置図

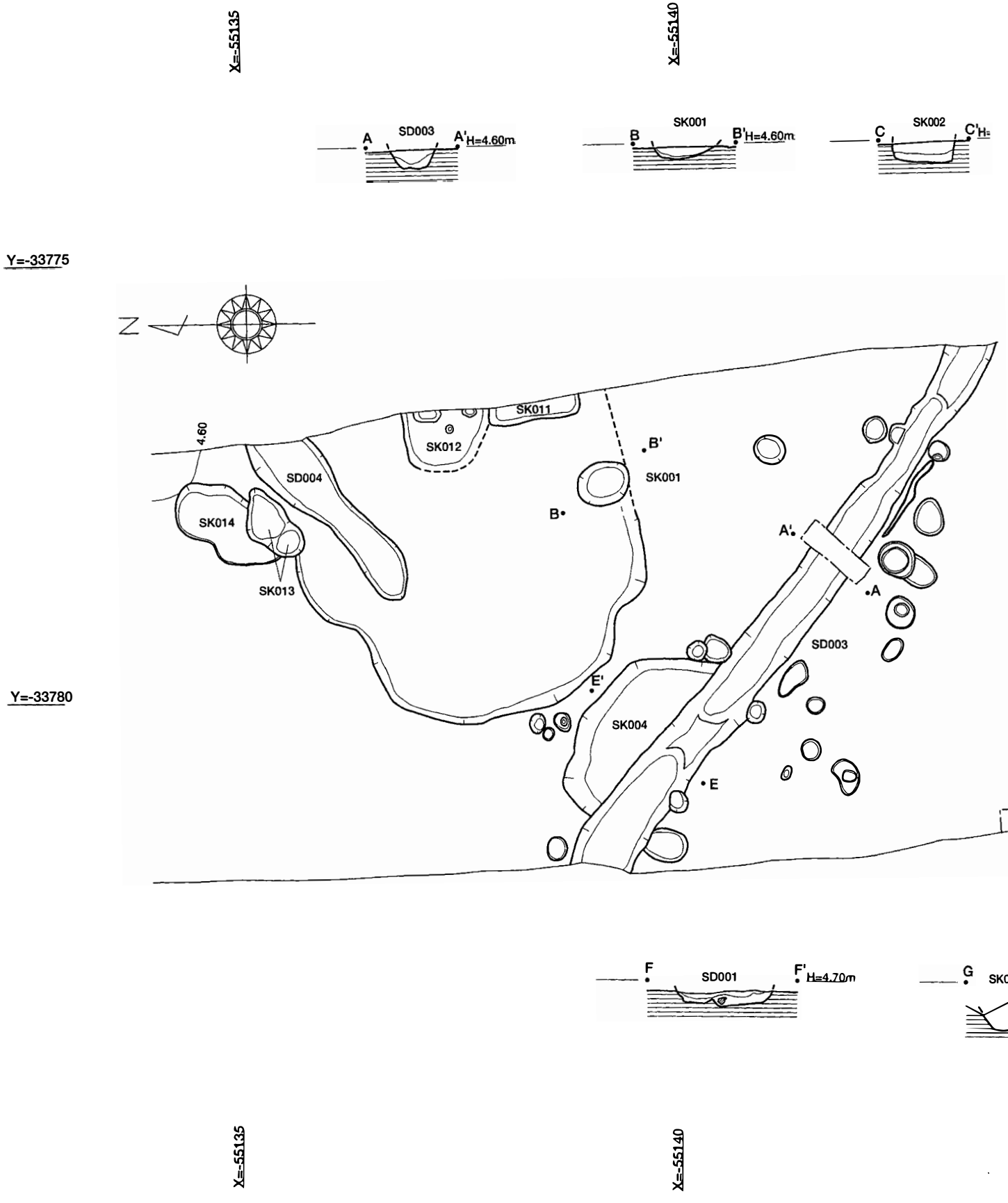
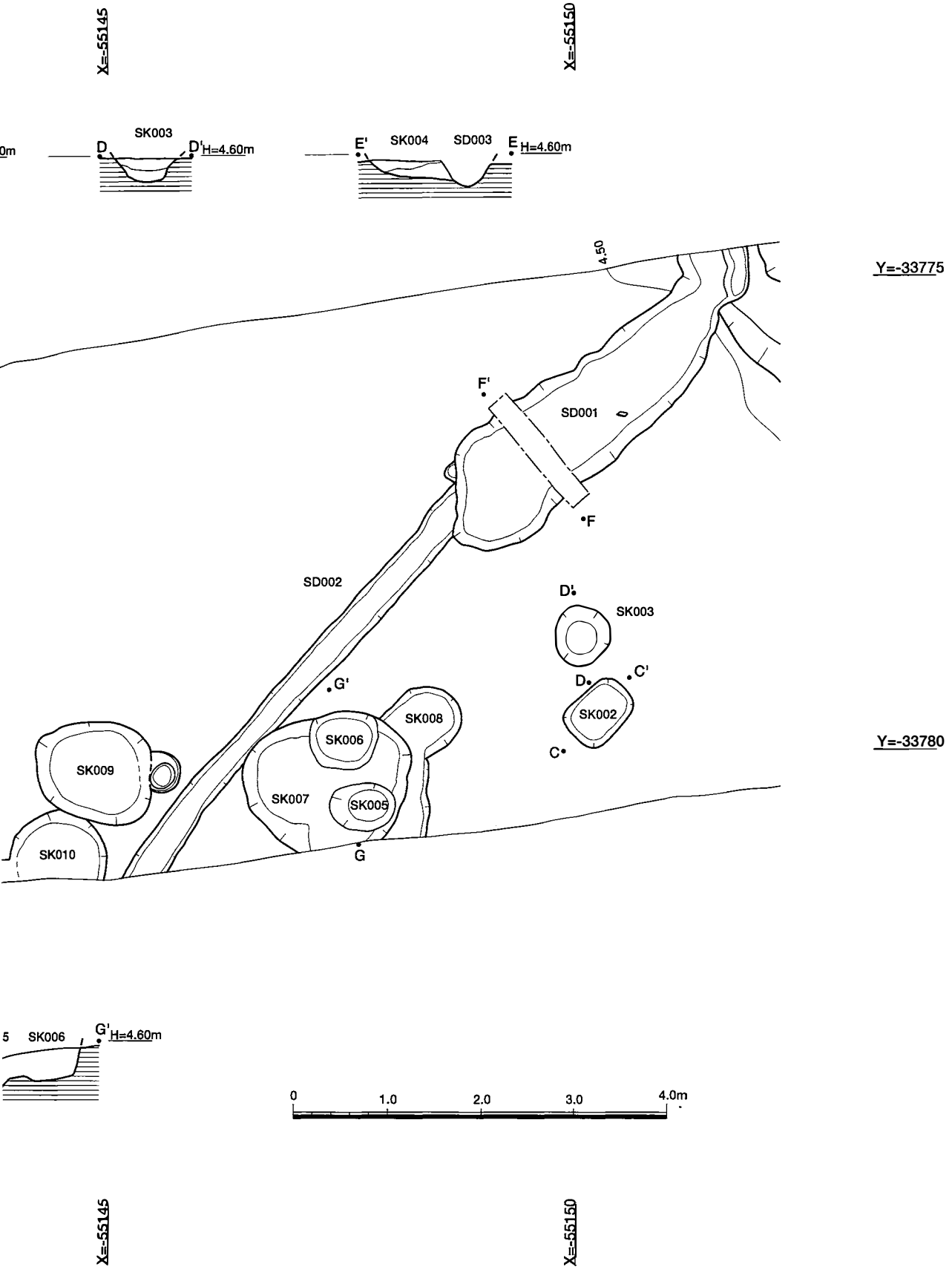

X=-55135
X=-55140
SD003
A
A'
H=4.60m
SK001
B
B'
H=4.60m
SK002
C
C'
Y=-33775
Y=-33780
N
4.60
SK011
SK012
SK014
SK013
SD004
B'
SK001
B
A'
A
SD003
E'
SK004
E
SD001
F
F'
H=4.70m
G
X=-55135
X=-55140

Fig.18　Ⅳ区　近


X=-55145
X=-55150
SK003
D
D'
H=4.60m
E'
SK004
SD003
E
H=4.60m
Y=-33775
4.50
F'
SD001
F
SD002
D'
SK003
D
C'
SK002
C
Y=-33780
G'
SK008
SK006
SK009
SK007
SK005
SK010
G
SK006
G'
H=4.60m
0
1.0
2.0
3.0
4.0m
X=-55145
X=-55150

世遺構配置図

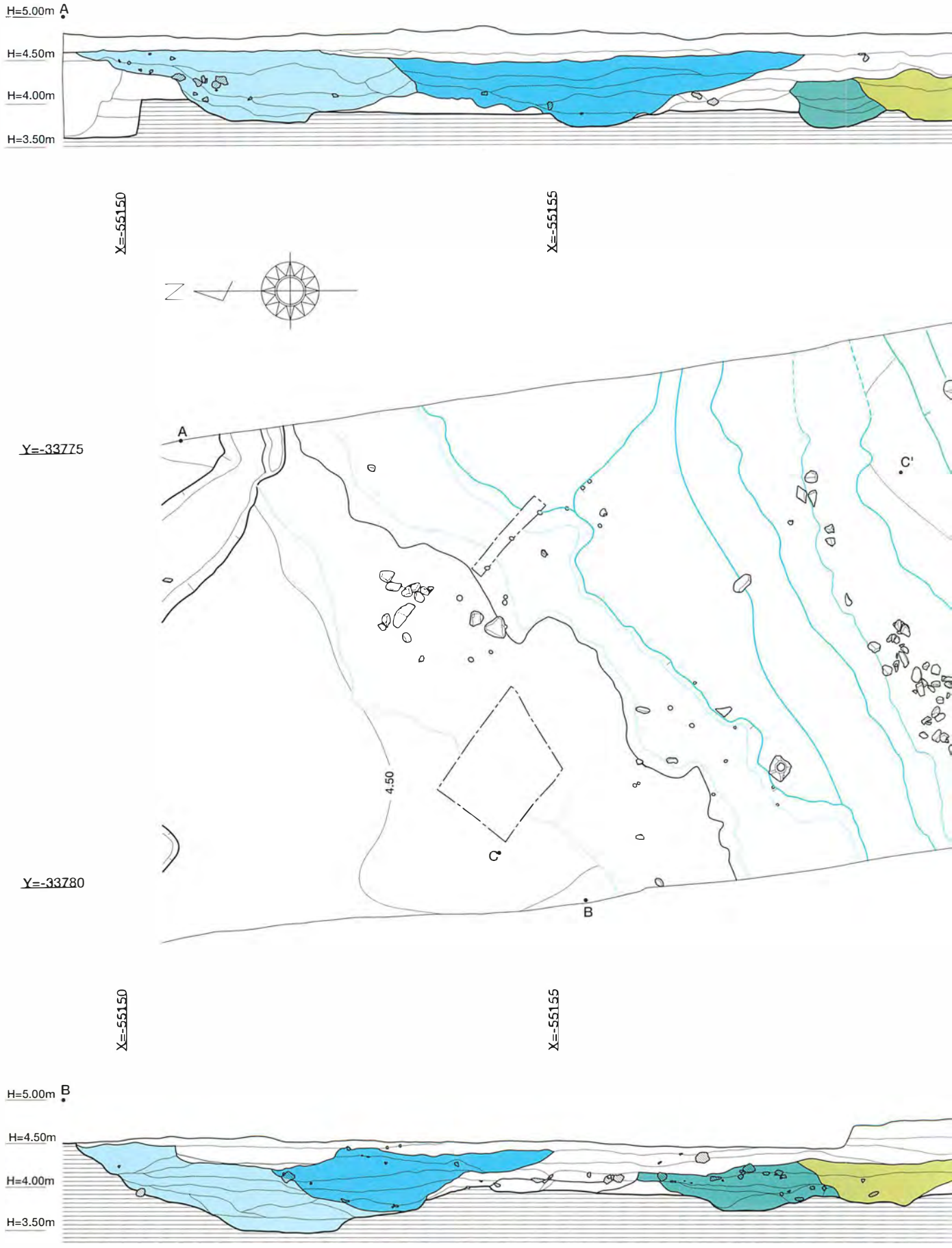
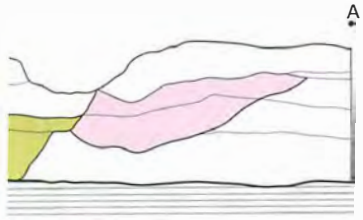
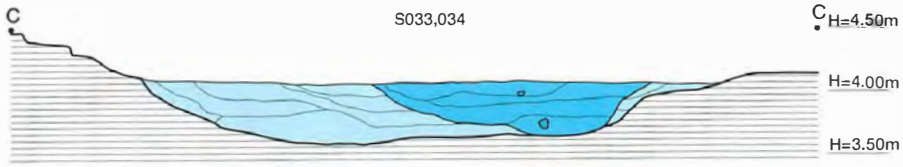


Fig.19　Ⅳ区　近世「大田の井出



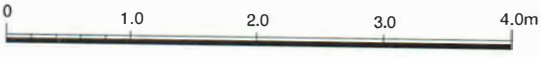


X=-55160

X=-55165

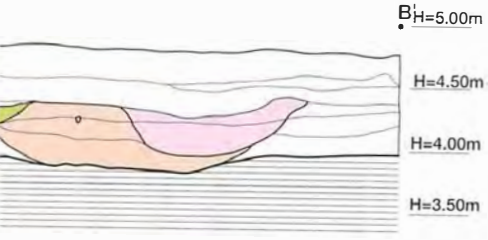
Y=-33775

Y=-33780



X=-55160

X=-55165



用水路完掘図及び土層断面図

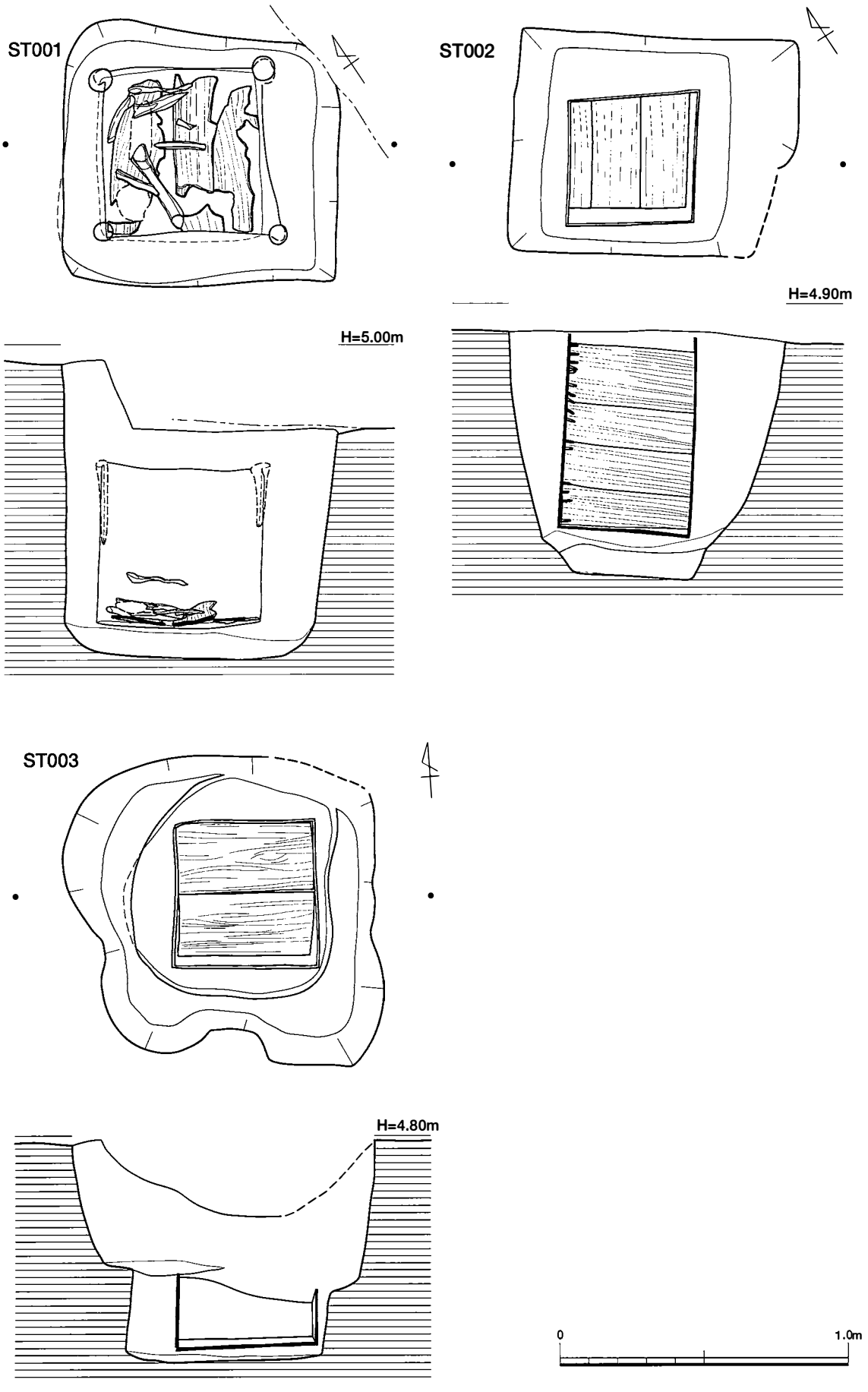
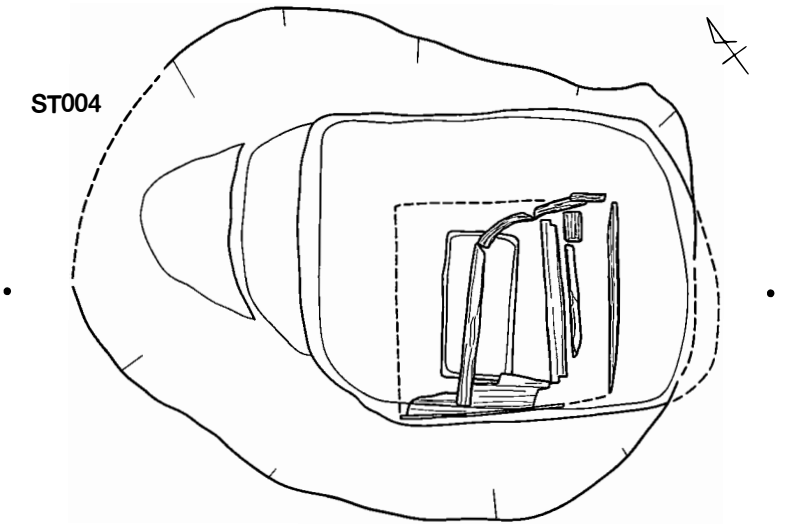
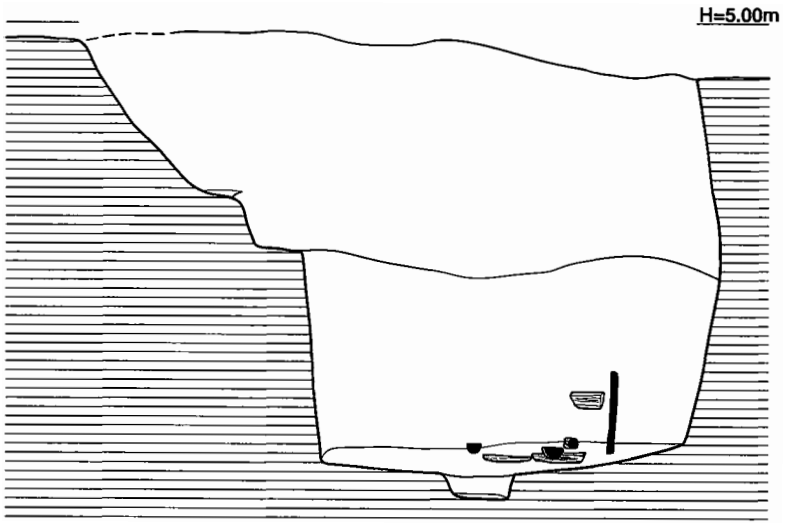
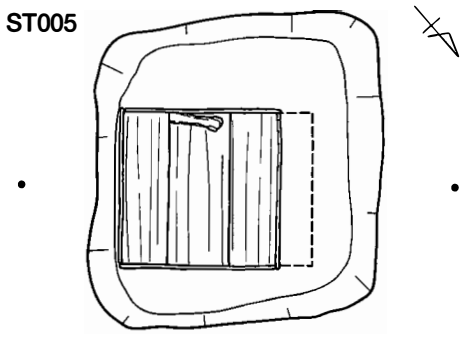
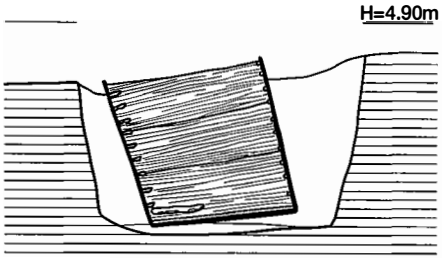


Fig.20　Ⅳ区　近世墓実測図　―1―









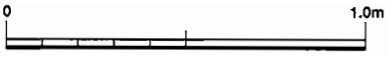


Fig.21　Ⅳ区　近世墓実測図　―2―

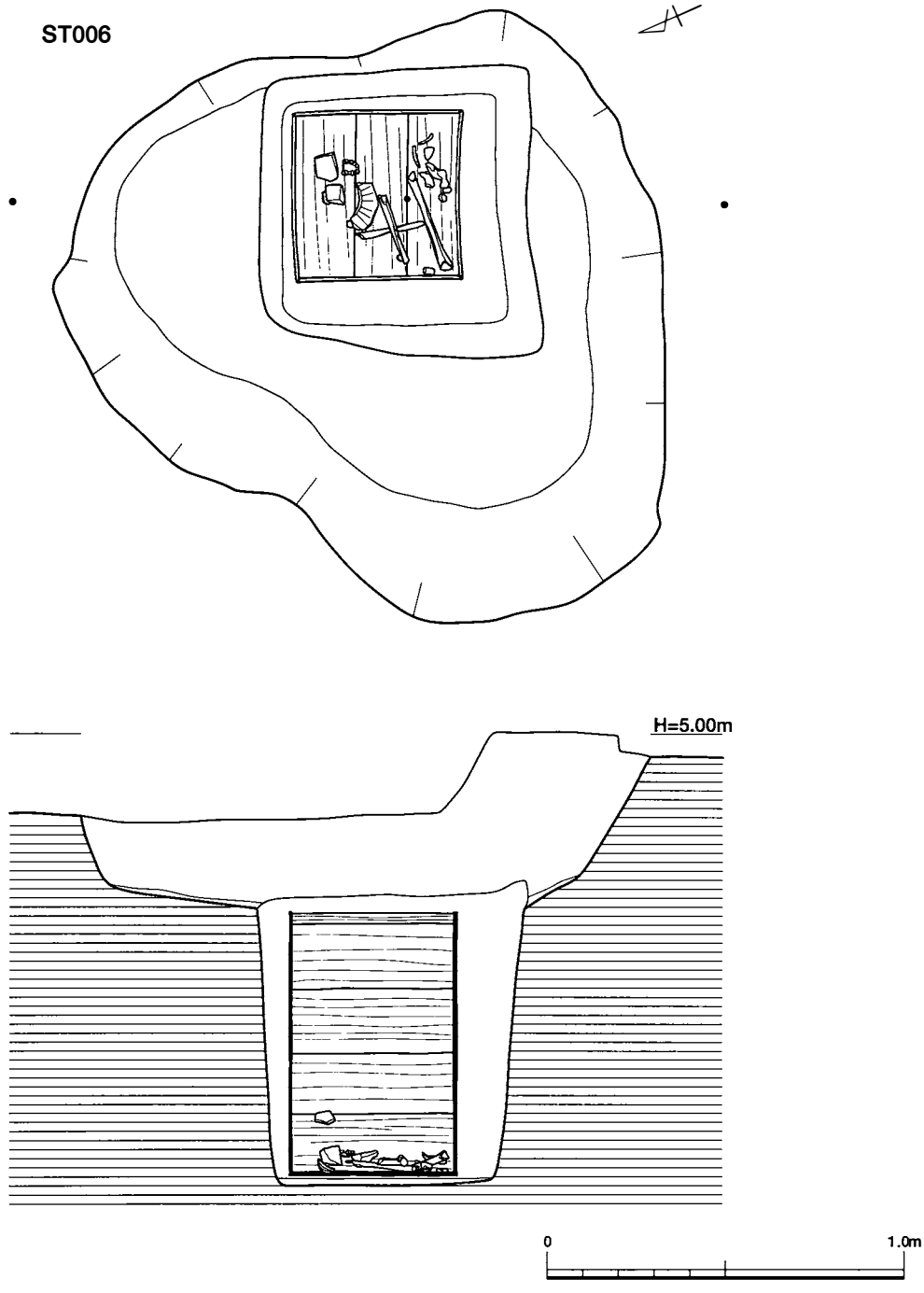


Fig.22　Ⅳ区　近世墓実測図　―3―

近世墓の調査（Fig.21～43）

検出し調査を実施した近世墓は総数72

係を把握するのに手間取ったが、概ね新しい墓壙から古い墓壙へと調査を進め、墓地形成の一端を知ることができた。土坑内には木棺（箱棺）が多数を占めているが、一部に甕棺、土坑墓がある。

箱棺は規模の大小の違いはあまり認められなかったが、側板・底板等、棺材の組合せの違いにより数種に分類することができる。八代地域での近世墓の分類は、九州縦貫自動車道建設に伴い調査された「川田京坪遺跡」に詳細に述べられているため、今回の調査成果においてもその分類を踏襲している。

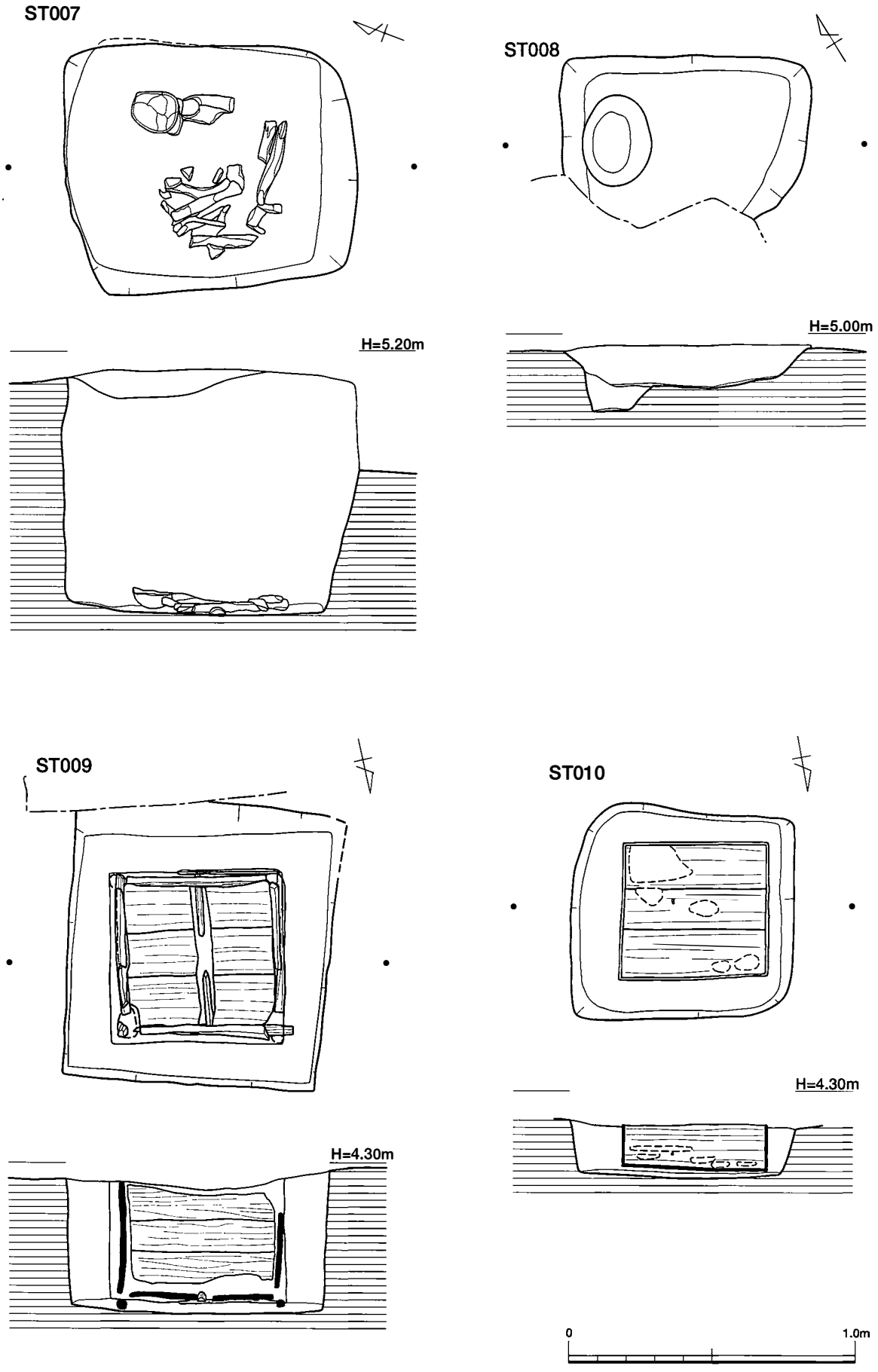


Fig.23　Ⅳ区　近世墓実測図　―4―

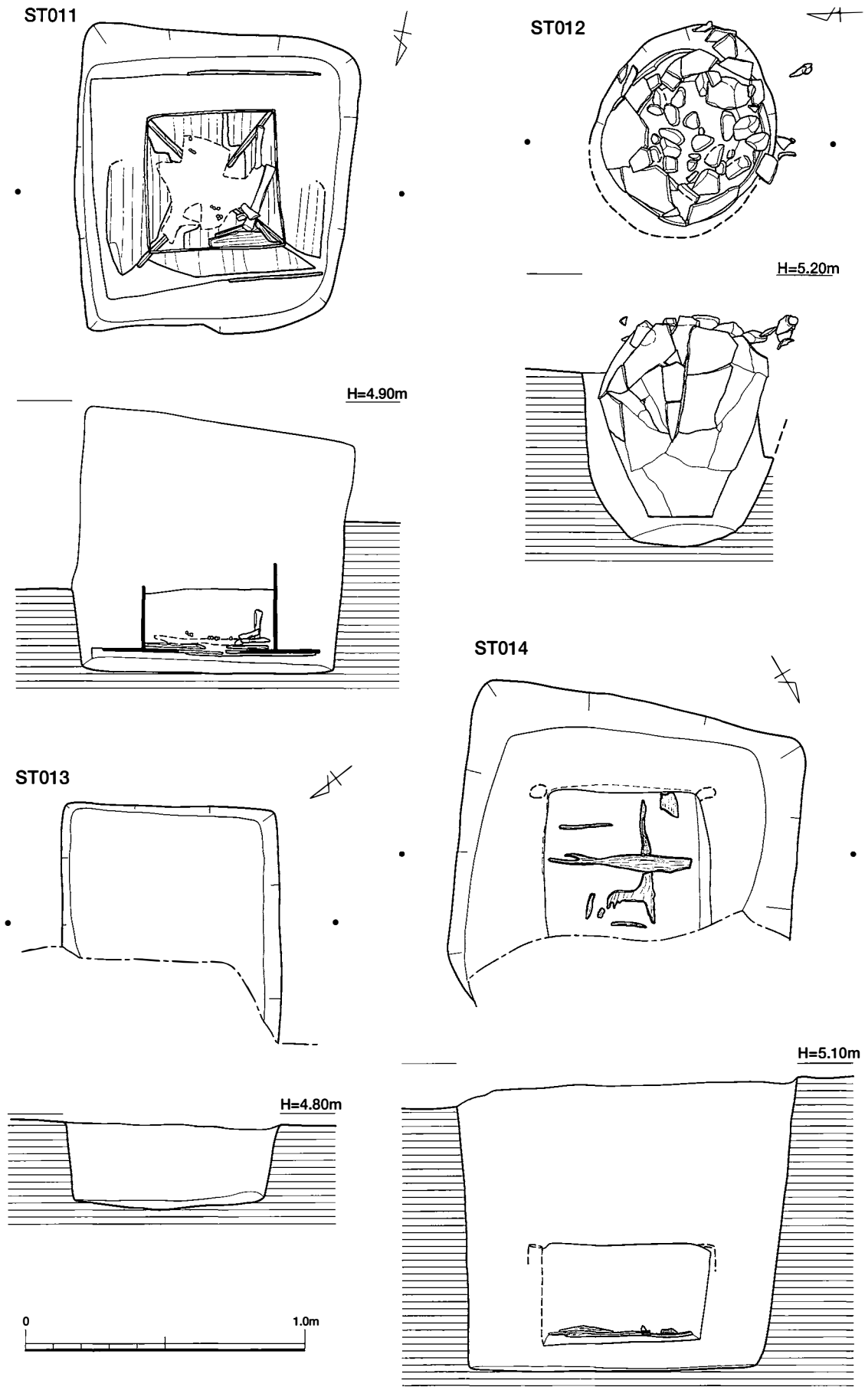


Fig. 24　Ⅳ区　近世墓実測図　―5―

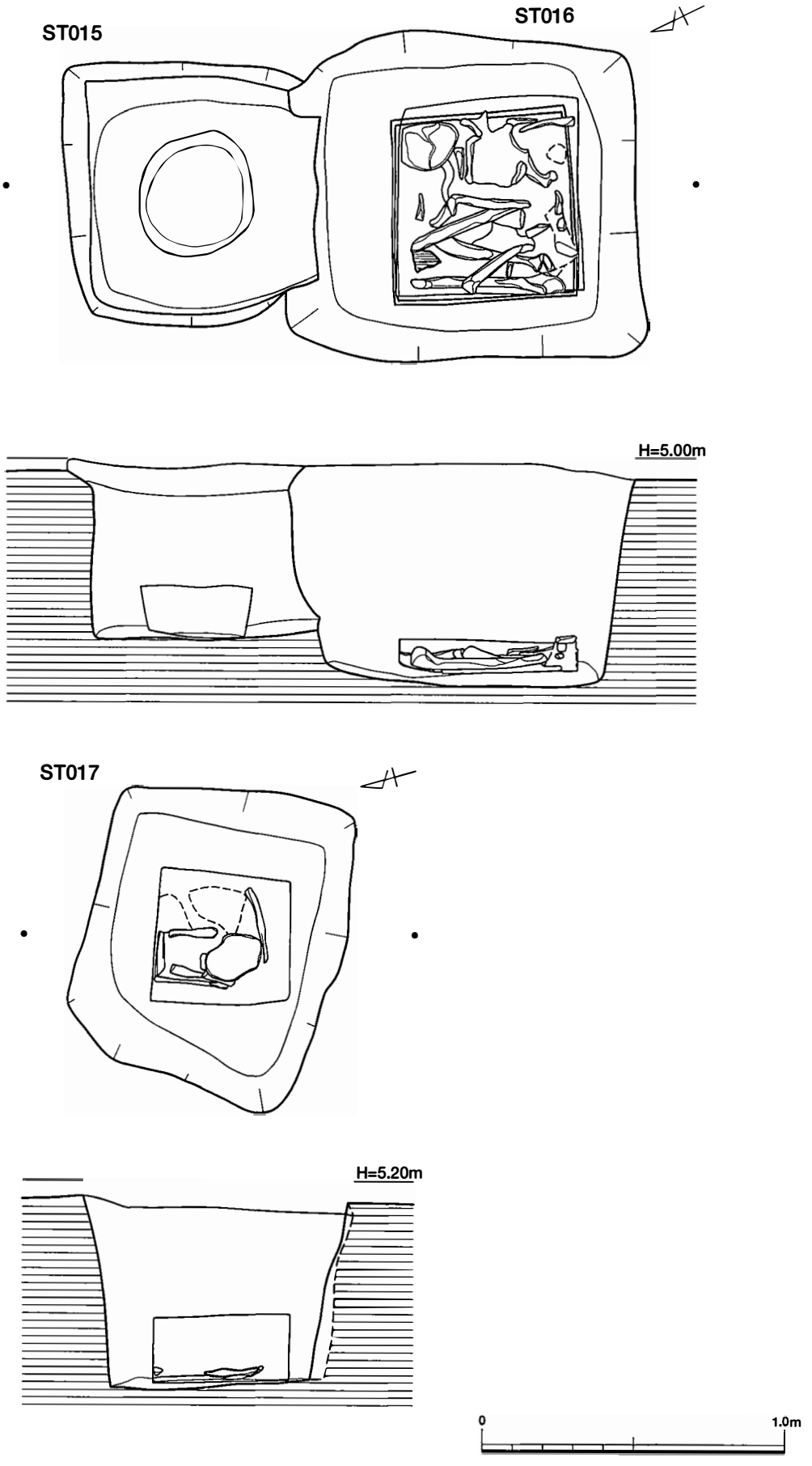


Fig. 25　Ⅳ区　近世墓実測図　―6―

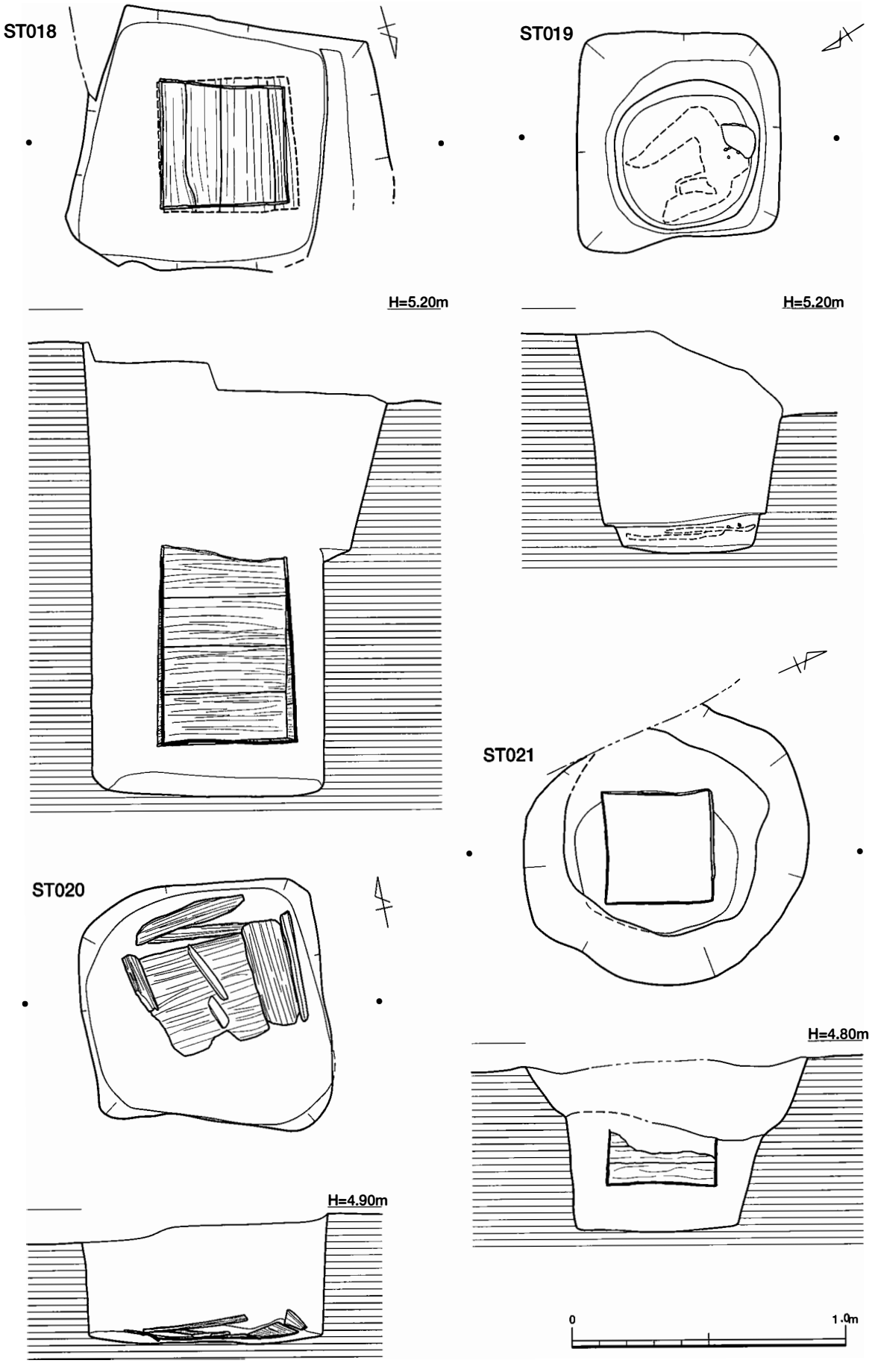


Fig. 26　Ⅳ区　近世墓実測図　―7―

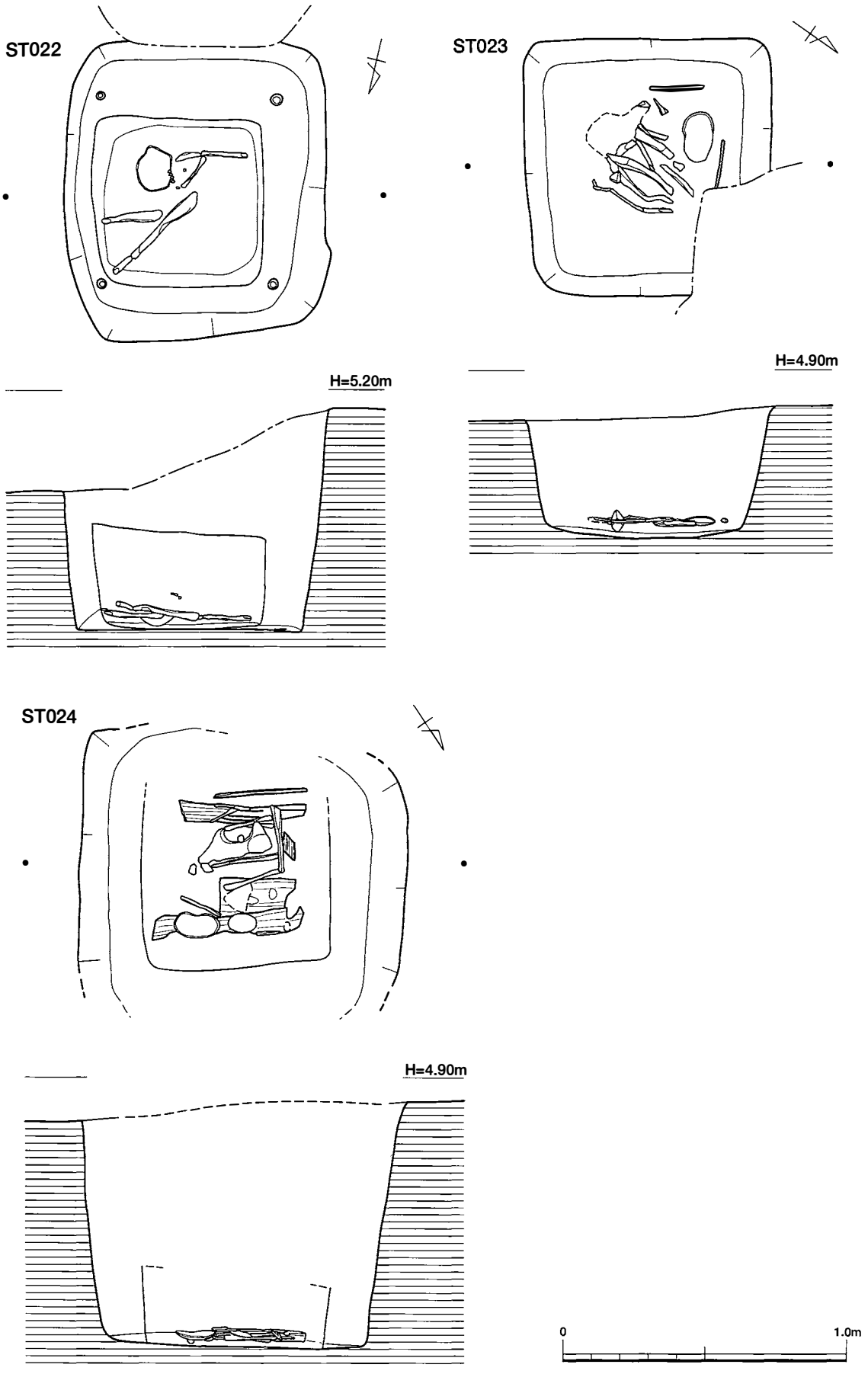


Fig. 27　Ⅳ区　近世墓実測図　―8―

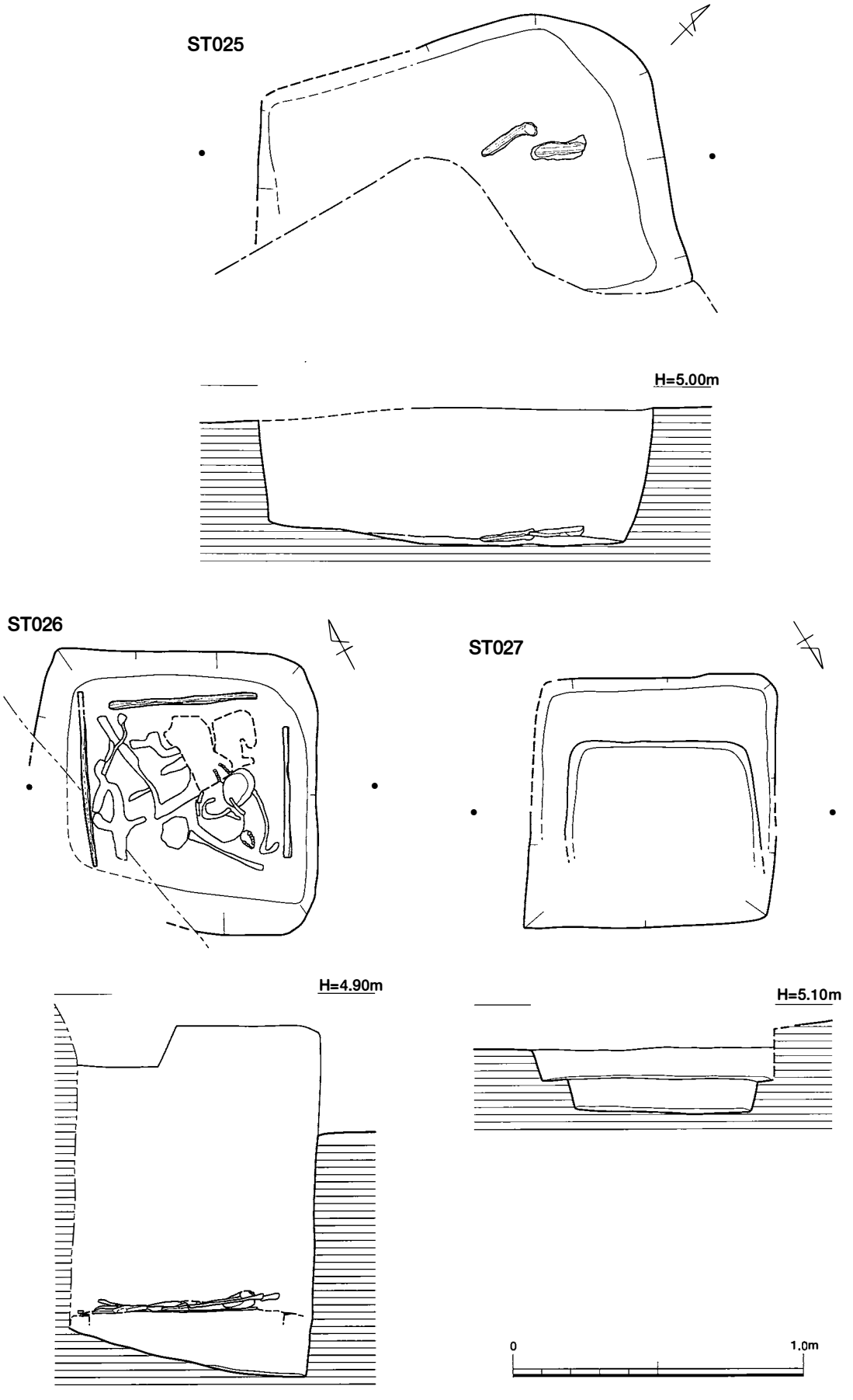


Fig. 28　Ⅳ区　近世墓実測図　―9―

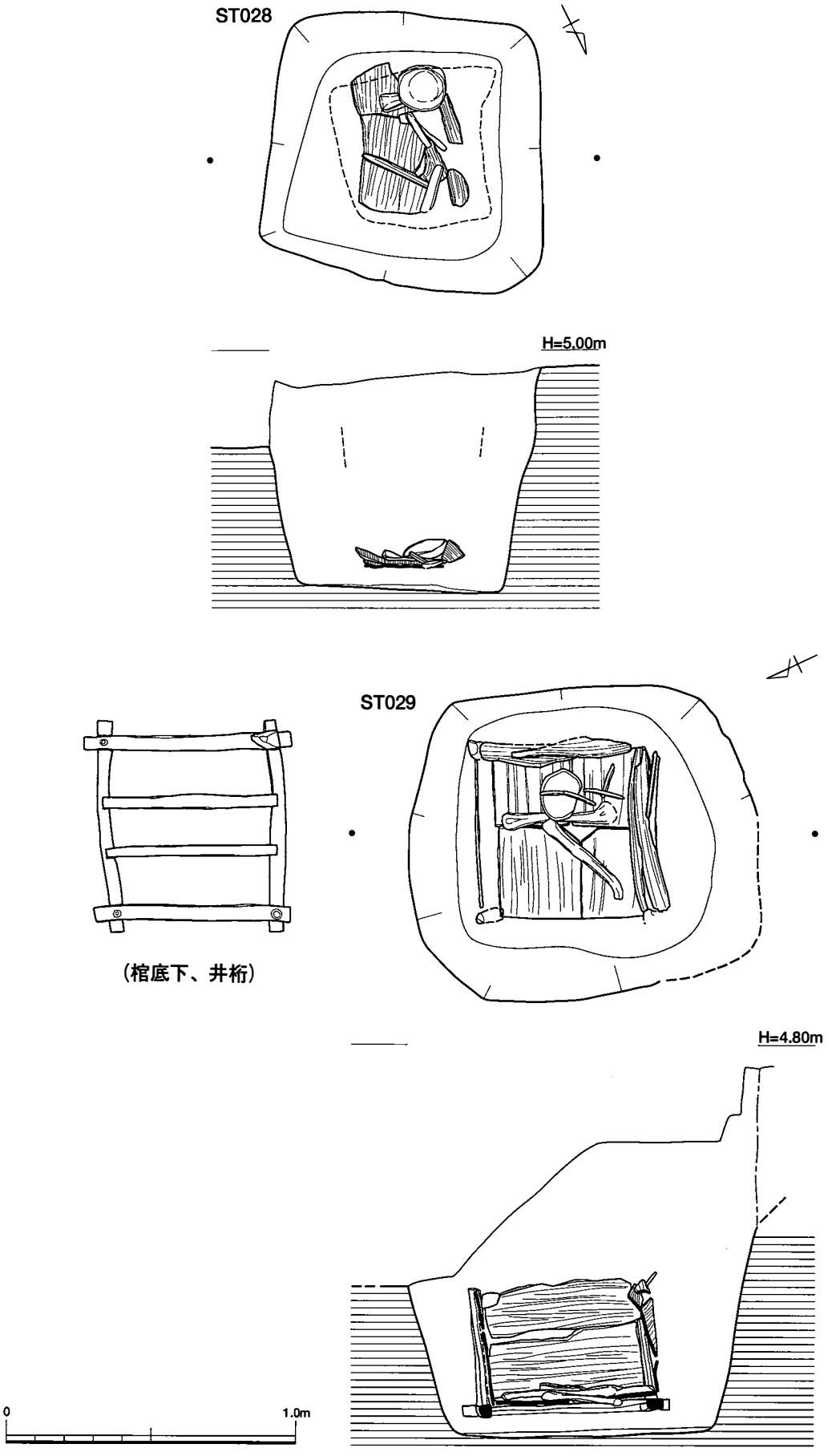


Fig.29　Ⅳ区　近世墓実測図　―10―

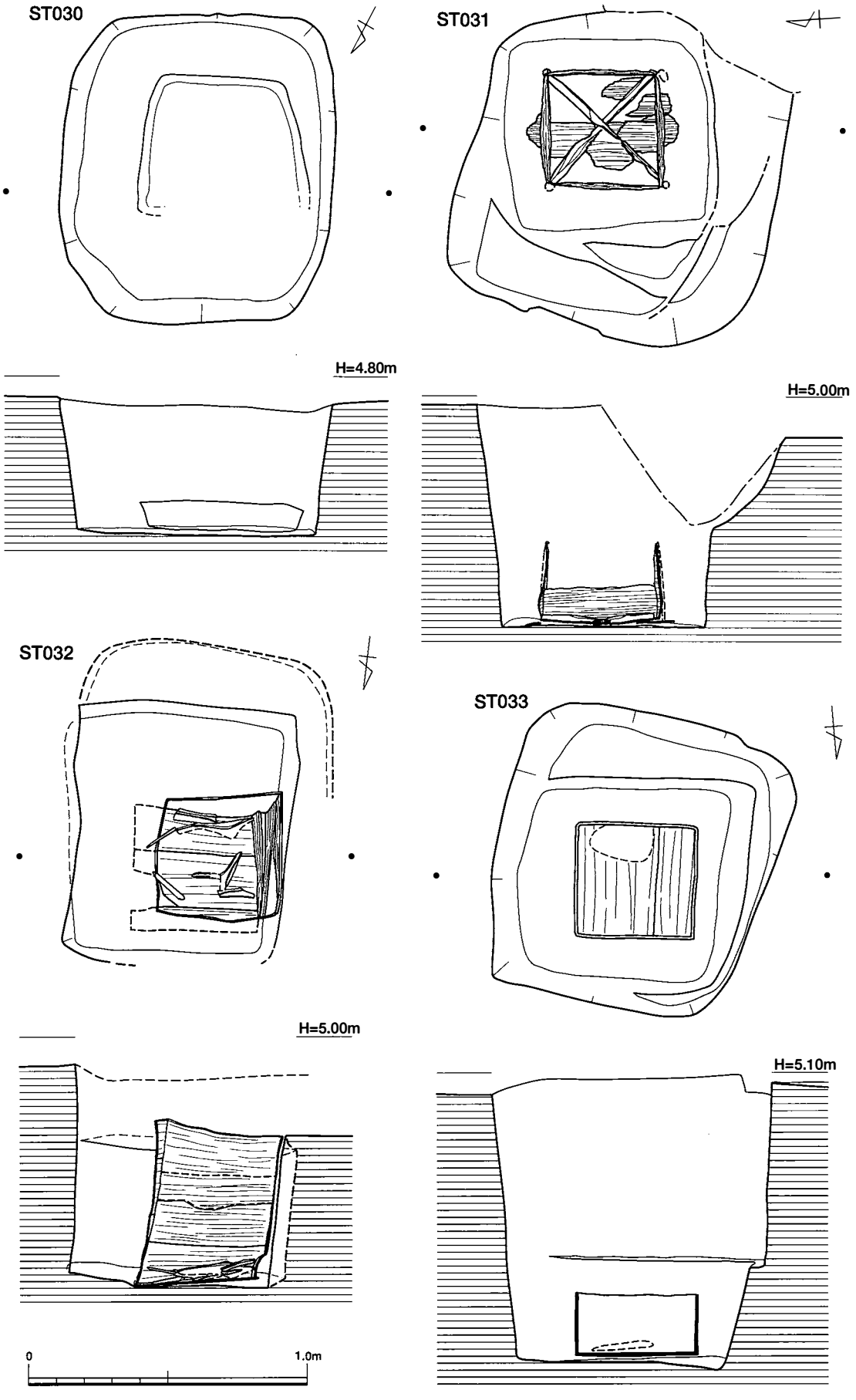


Fig. 30　Ⅳ区　近世墓実測図　—11—

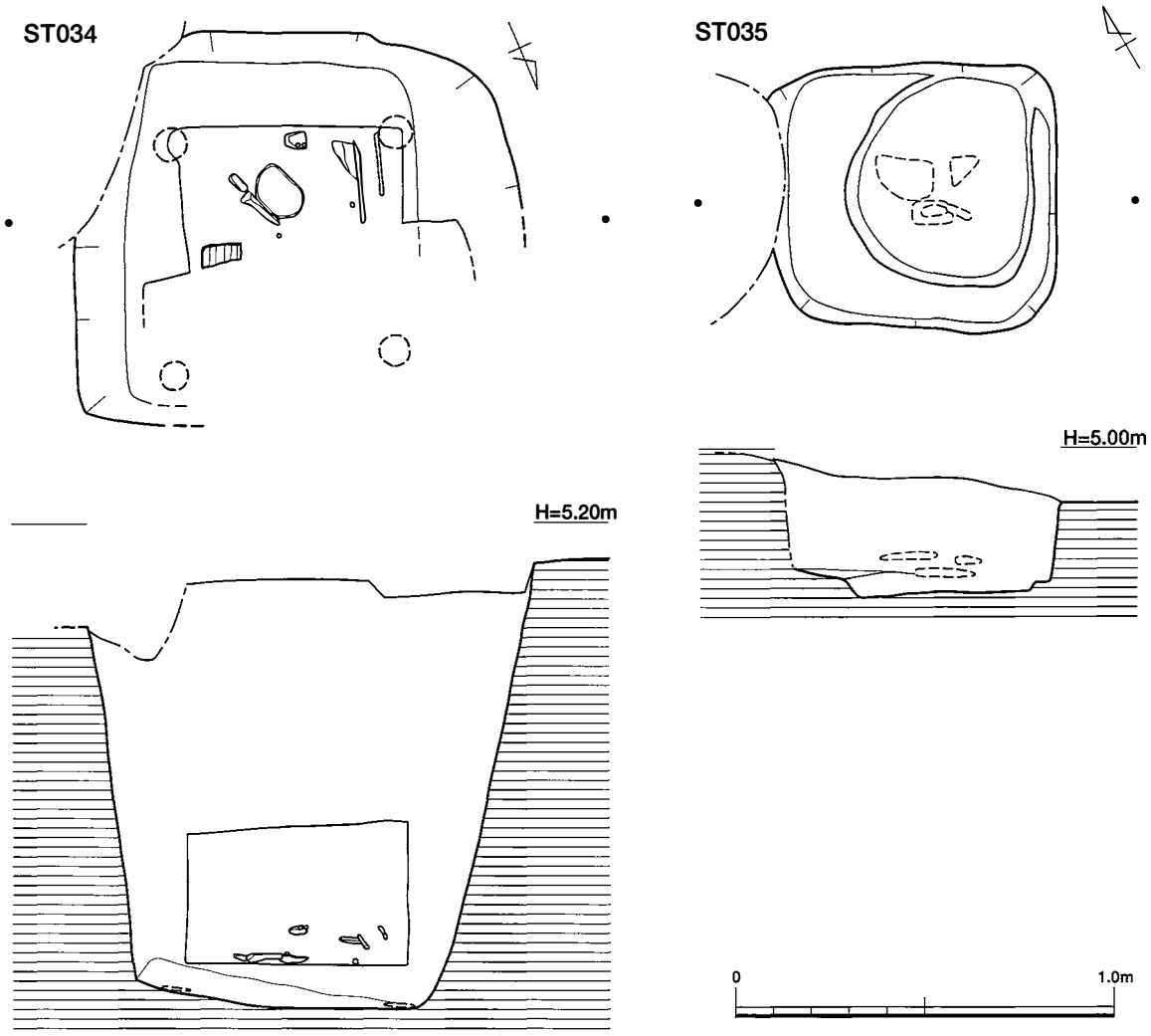


Fig.31　Ⅳ区　近世墓実測図　―12―

木棺土坑墓　内部構造は箱棺・桶棺の２種に大別され、検出時の切り合いの関係等から桶棺が古く、箱棺が新しい埋葬形態であると見る事ができる。桶棺（墓 ST056）からは初鋳年代が寛政９年（1697）以降に鋳造された（新）寛永通宝が出土している。

木棺土坑墓の種別（川田京坪遺跡より転載）

棺ａ　棺身は棺の底の底板より内側に取り付けられる点で棺ｂと共通する。棺外側部の底板は四枚の板で寄せ木造りされ、接合部の下部は対角線に組み合わせた板で補強している。四隅には二対の長方形のほぞが残っている。棺は隅柱横板型で、底板は三角形の板でうめている。

棺ｂ　棺は隅柱横板型であるが、さらに棺の外側に横板を貼っている。すなわち棺の側板が二重になっているものである。

棺ｃ　棺の台座を井桁に組み、交叉する部分はほぞ穴をあけ、隅木を立てている。棺底は２～３枚の板を並列させている。箱棺の中では最も類例が多い。

棺ｄ　棺は隅柱横板式で、棺ｃに類似するが、台座の部分は井桁に組むものの、四隅が突出しない。

棺ｅ　隅柱の外側に横板を貼る点で、棺ｆ・棺ｇと共通する。棺底は一枚板。台座は棺底の両側面に設けている。

棺ｆ　長方形の棺身で、長軸にそって通した２本の横木に細い板を狭間隔に数枚並べて棺底としている。

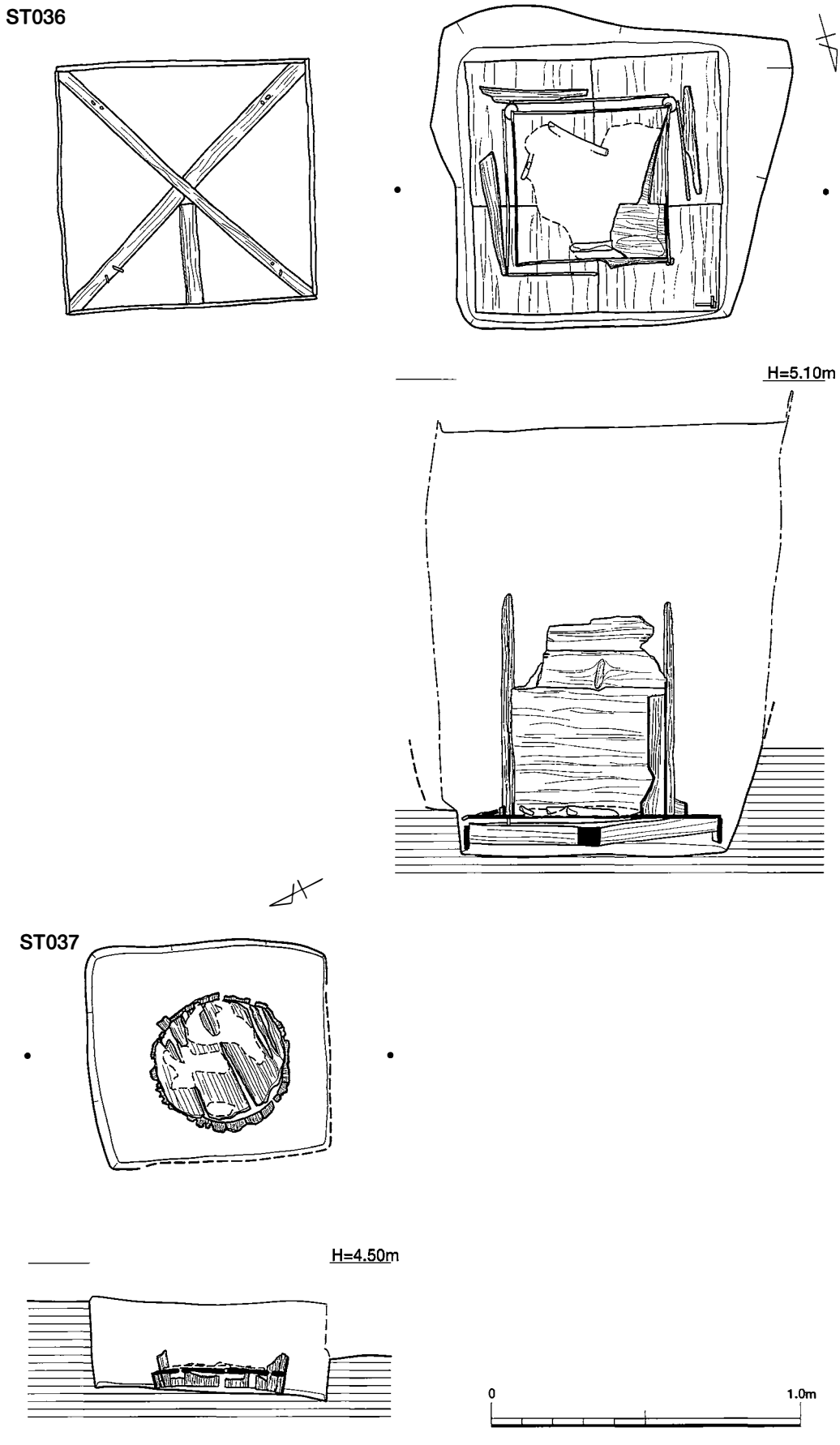


Fig.32　Ⅳ区　近世墓実測図　―13―

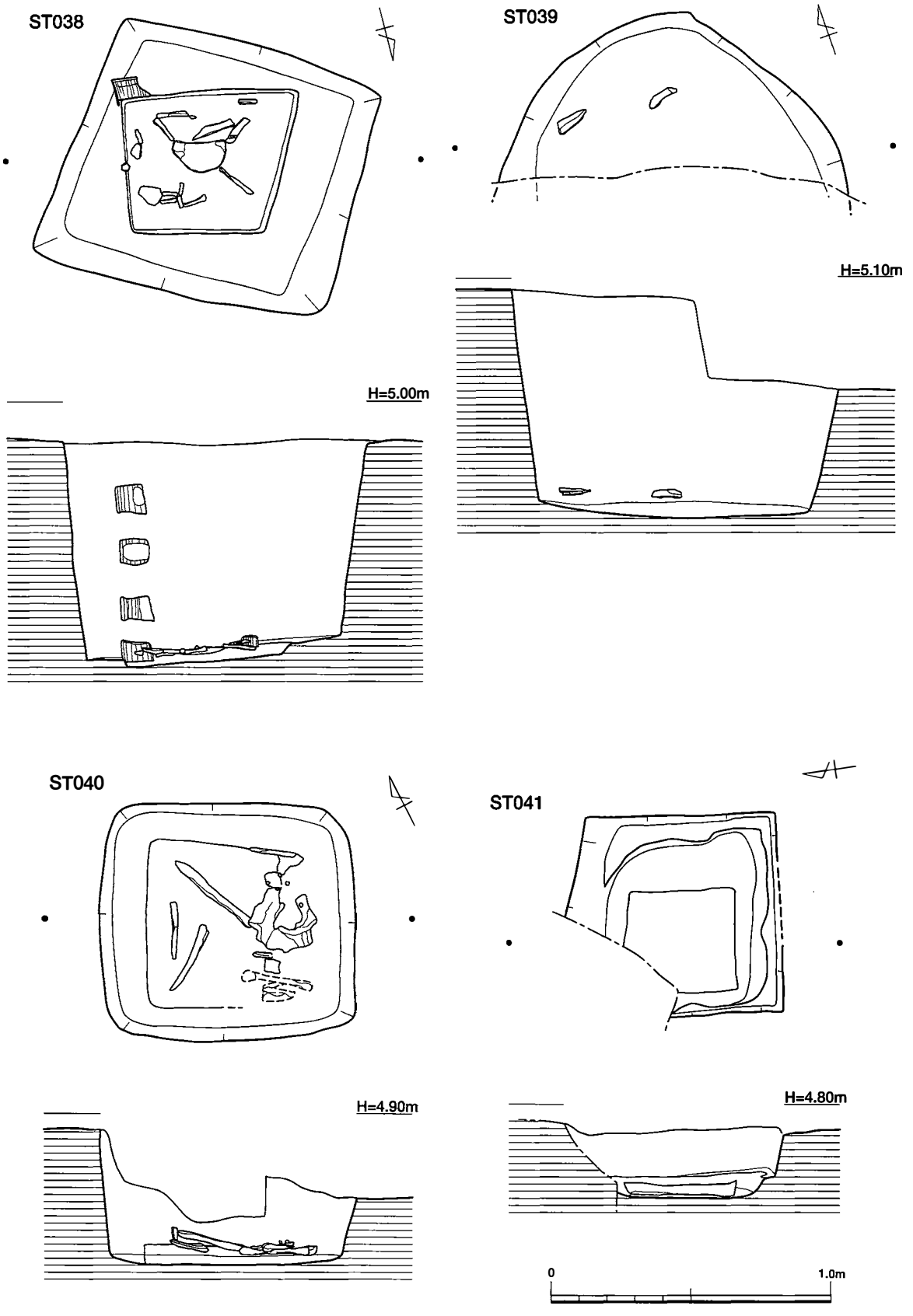


Fig.33　Ⅳ区　近世墓実測図　—14—

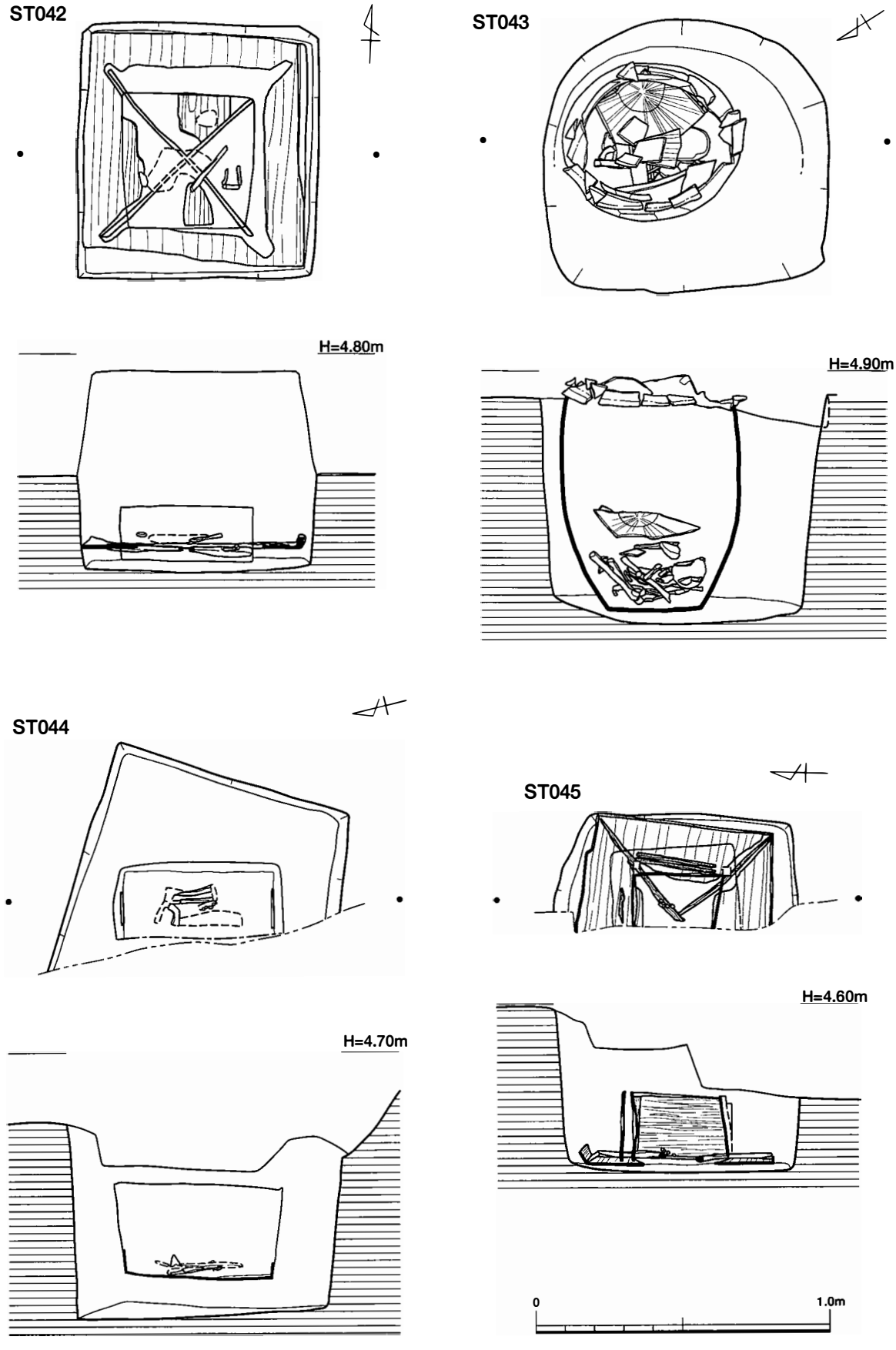


Fig.34　Ⅳ区　近世墓実測図　―15―

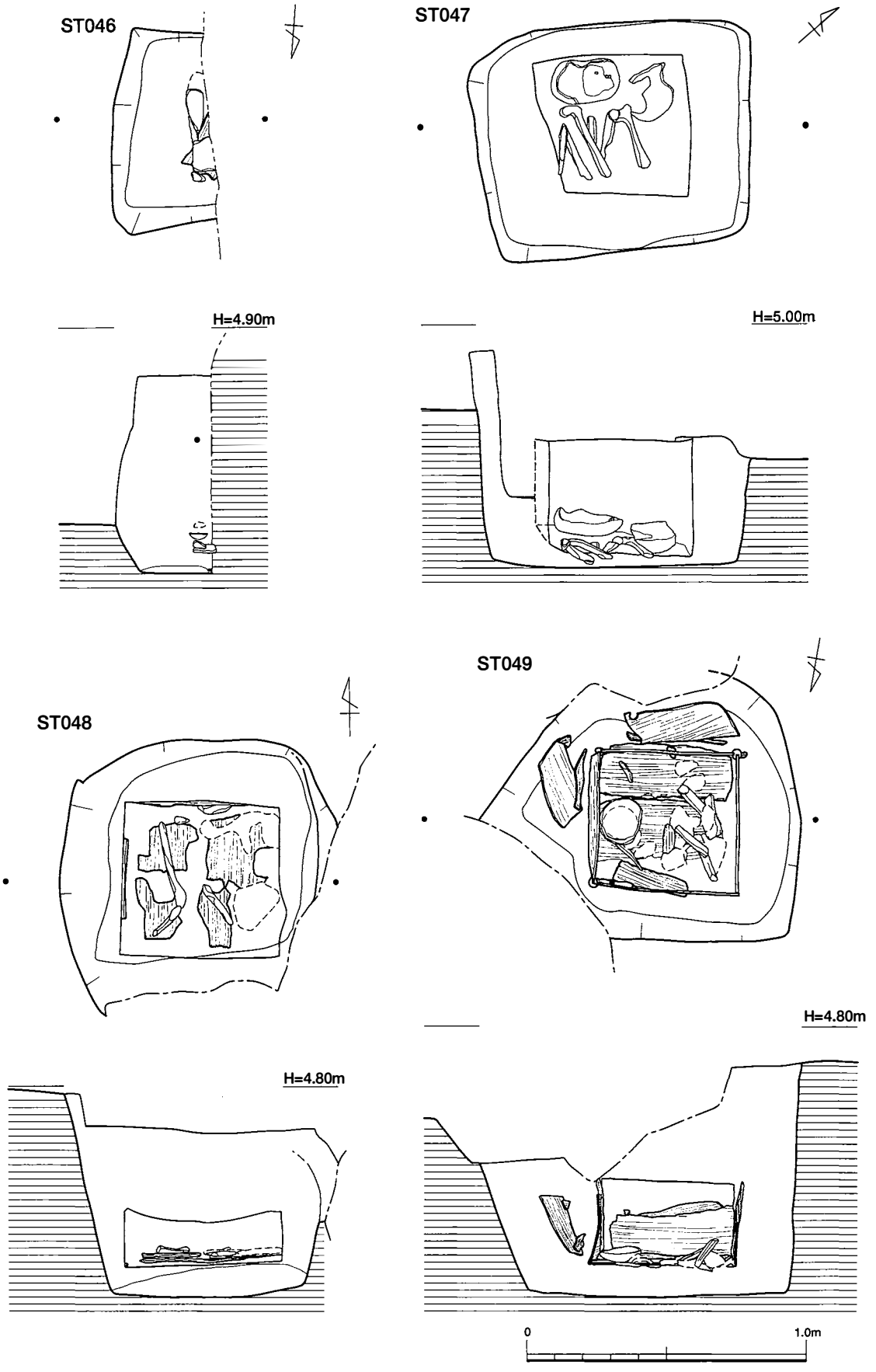


Fig.35　Ⅳ区　近世墓実測図　―16―

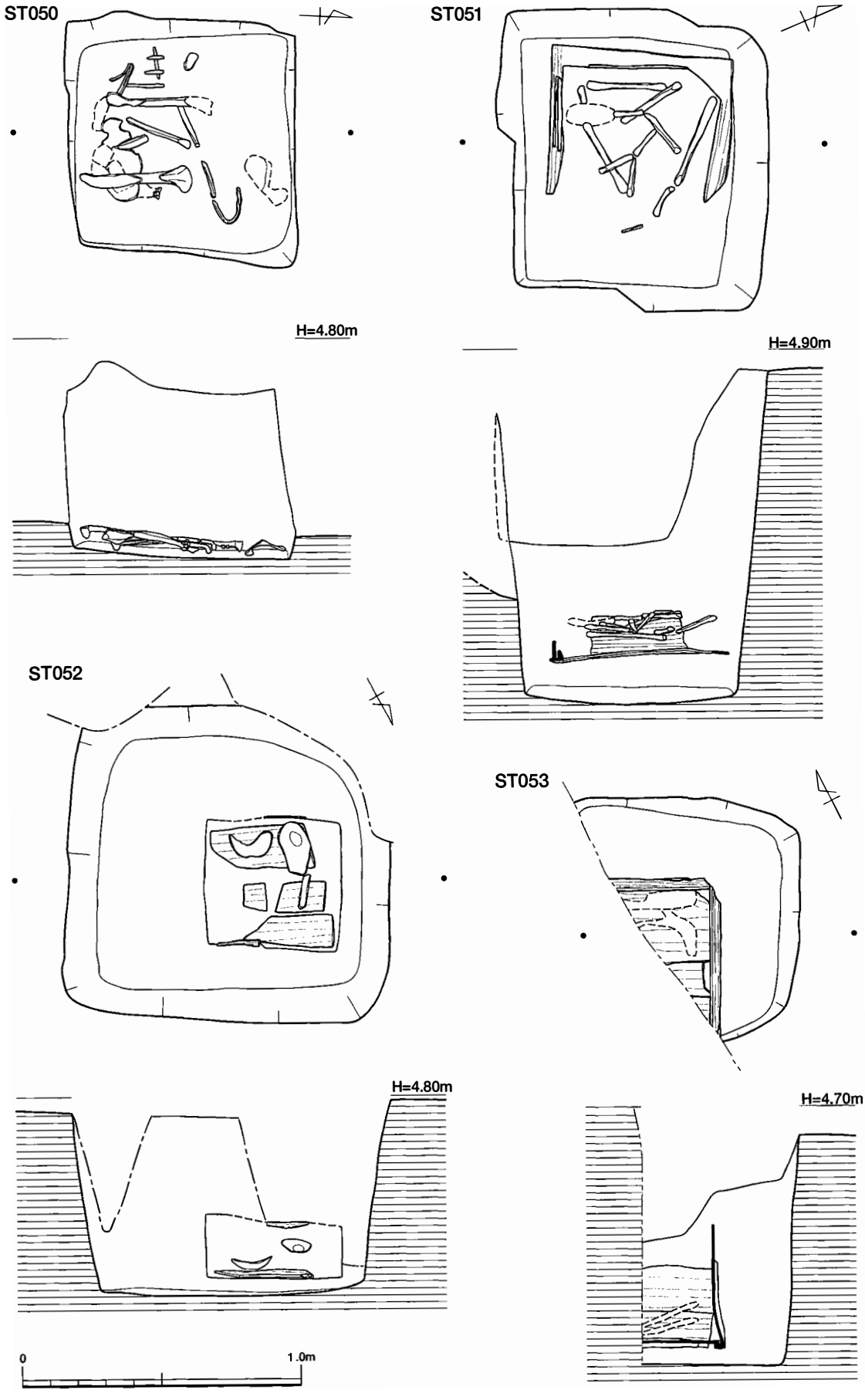


Fig.36　Ⅳ区　近世墓実測図　―17―

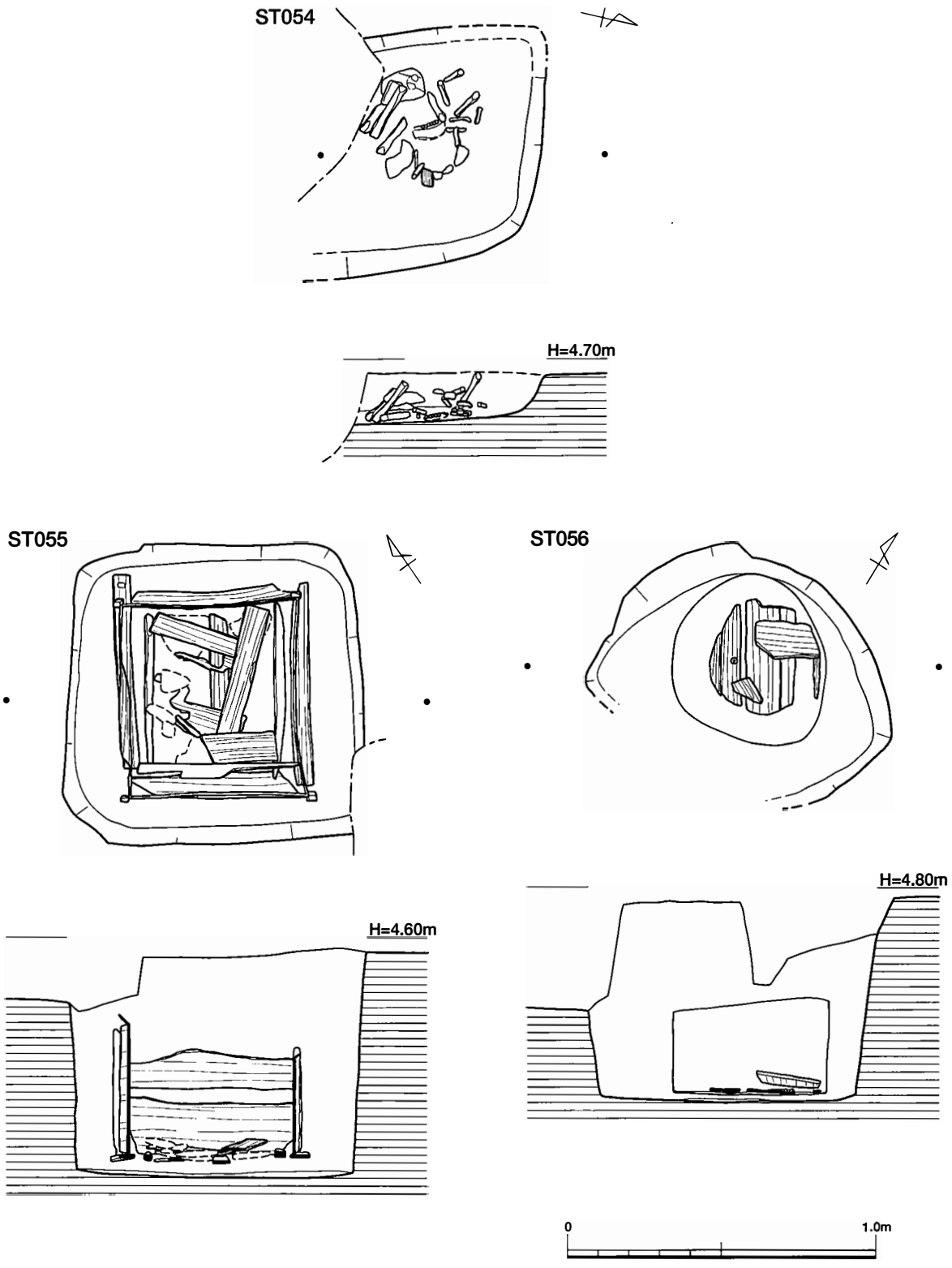


Fig.37　Ⅳ区　近世墓実測図　―18―

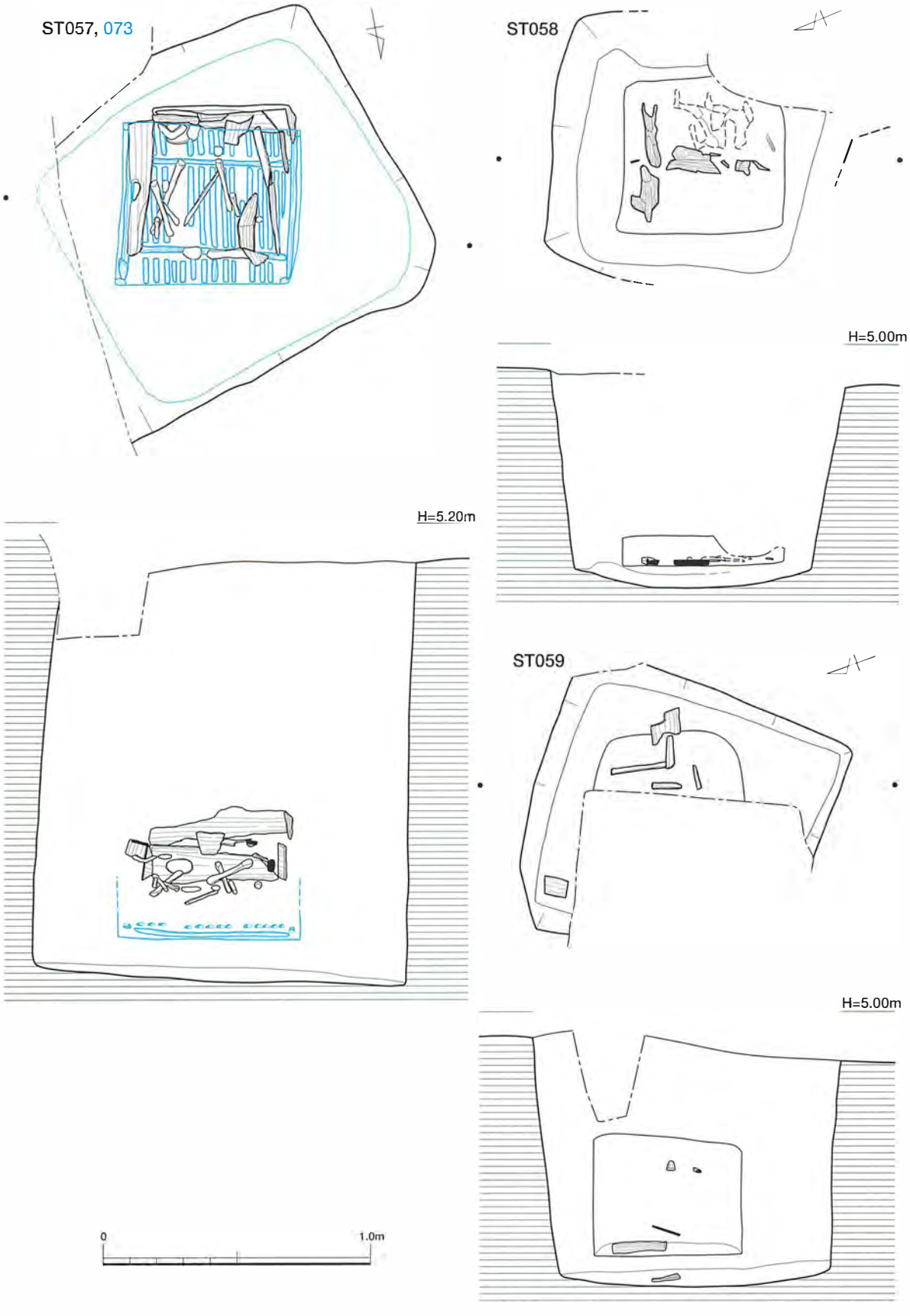


Fig.38　Ⅳ区　近世墓実測図　―19―

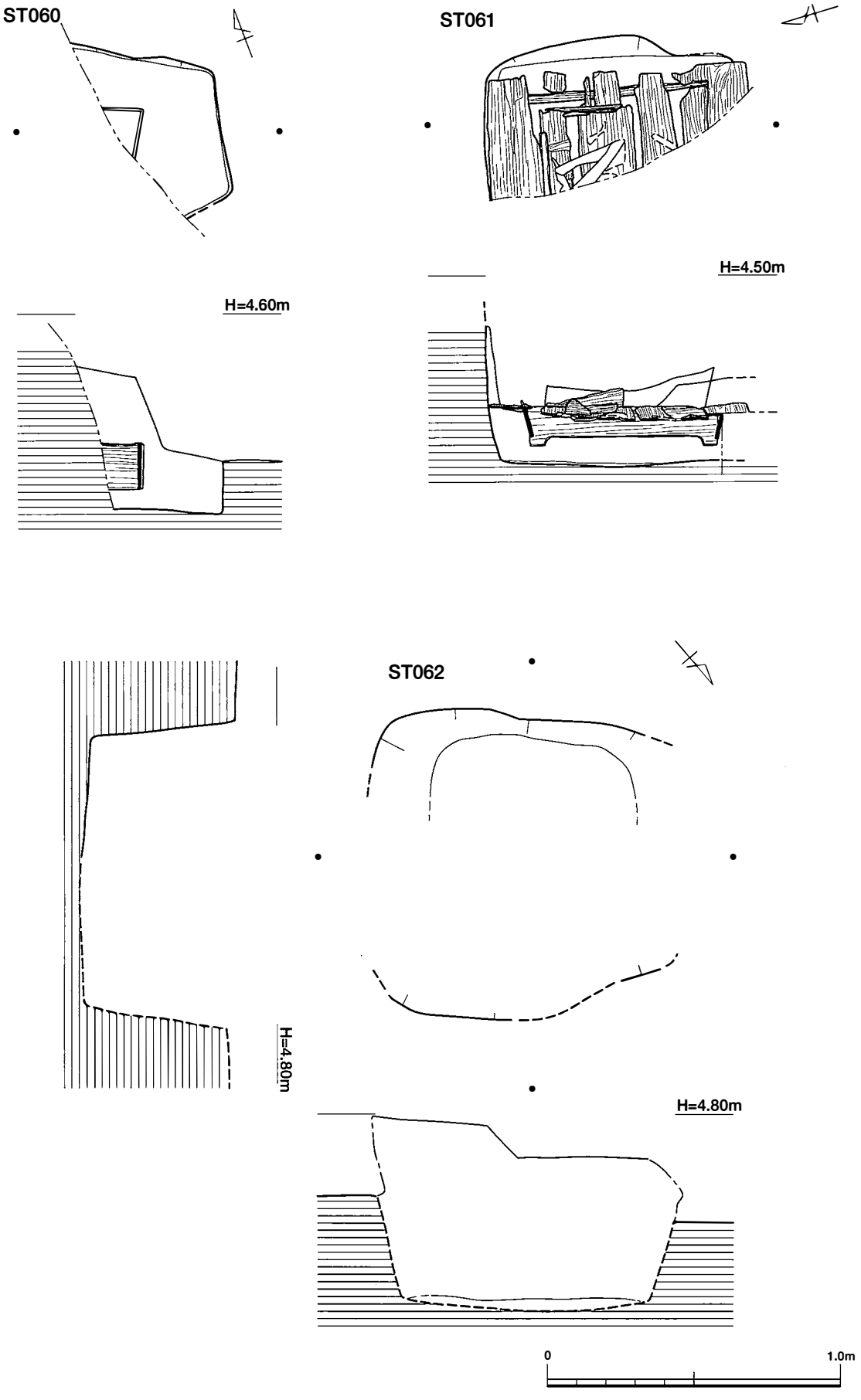


Fig.39　Ⅳ区　近世墓実測図　―20―

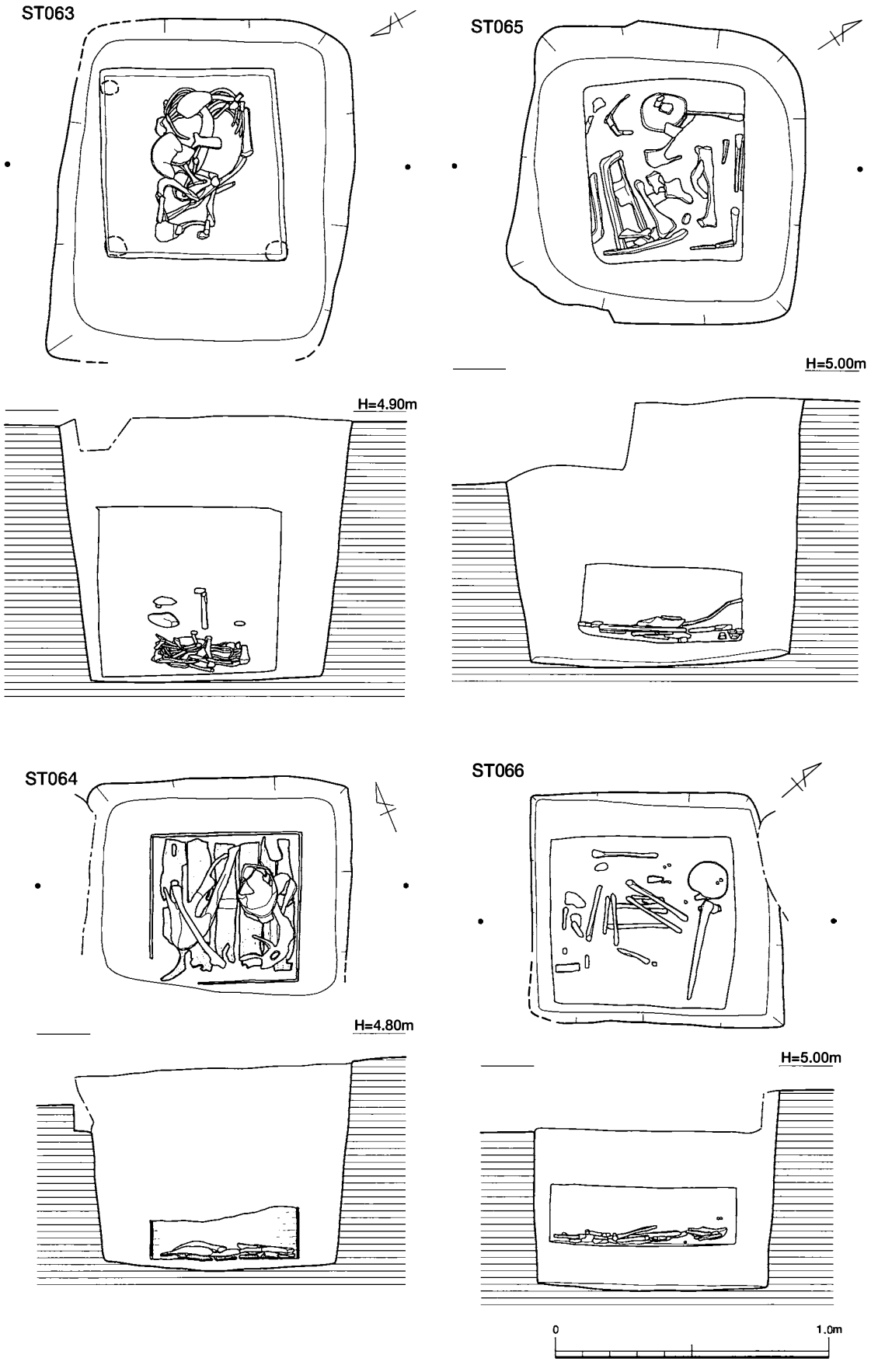


Fig.40　Ⅳ区　近世墓実測図　―21―

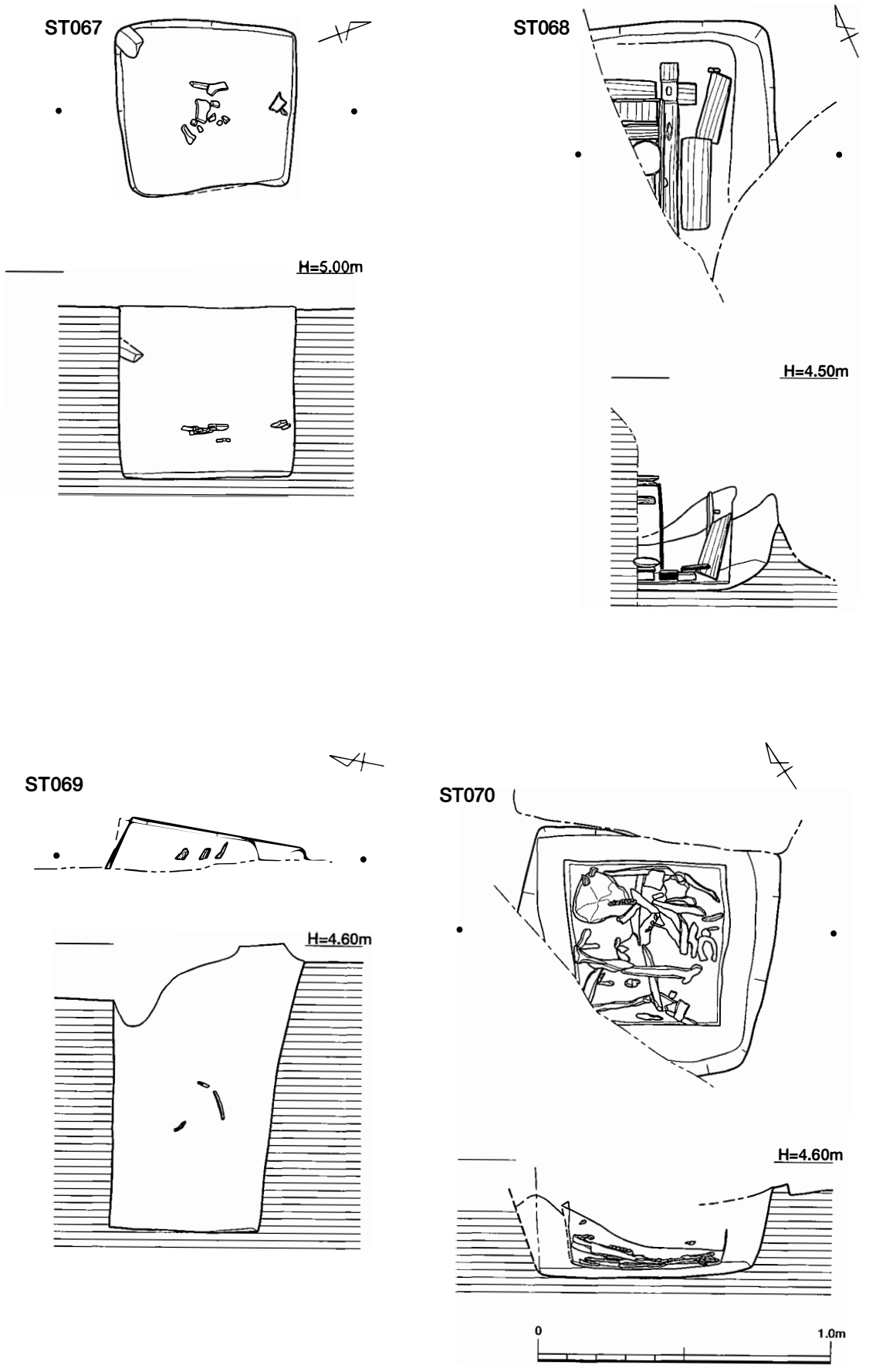


Fig.41　Ⅳ区　近世墓実測図　―22―

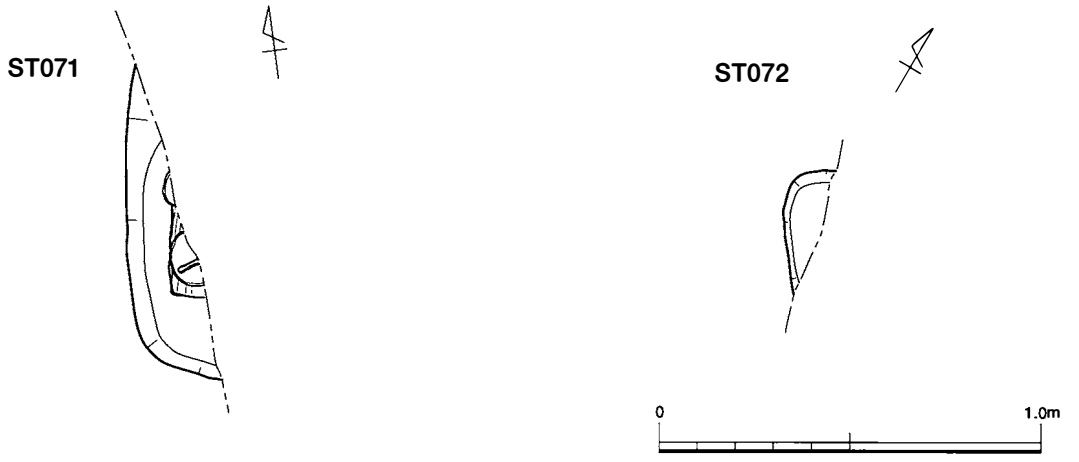


Fig.42　Ⅳ区　近世墓実測図　—23—

棺ｇ　２本の横木の上に２枚の板を置き棺底とするものである。

棺ｈ　鍵形隅柱の内側に観測板を取り付けたもので、棺底は側板最下部内側に取り付けて底としている。

棺ｉ　側板が棺底の上に置くもので、棺底は横木で補強されている。

棺ｊ　棺ｉ同様、側板が棺底の上に置かれているが、その他の工夫が見られず、簡素なものである。

棺ｋ　側板は接合面を斜めに切り組み合わせている。棺底には板のかわりに竹を敷いている。

棺ｌ　いわゆる桶棺のものであり、土壙は方形と円形とが認められる。

甕棺墓・木棺土坑墓・土坑墓ともこの地域では、比較的新しい時期まで営まれていた墓制のひとつである。八代地域では近年まで土葬の風習が一部に残っていたことが窺われる。甕棺墓に使用されている甕は飯胴甕と呼ばれ西北九州の肥前地域で焼かれていたものである。

土坑墓　墓坑内に箱棺・桶棺を入れない掘り込みのみで構成される形態である。方形の掘り込み規模は木棺土坑墓と同じ規模である。

墓ST001【棺ｈ】　墓域の南辺に位置し方形の墓壙で、隅柱を有する箱棺である。側板は大部分が腐食し消滅しているが、一部は内部に向かって崩落している。隅木は円柱状で先端が杭状に加工されたものが用いられる。人骨は大腿部の骨が残されていたが水分を多く含み、取り上げられる状態ではなかった。副葬品等の遺物は出土していない。

墓ST002【棺ｊ】　墓域の南辺に位置し、後に築造された墓ST023により切られている。棺の残存状態は良好で側板、底板とも良く残っている。側板は木釘により接合されているのを見る事ができる。人骨は残っておらず副葬品も出土していない。

墓ST003【棺ｊ】　墓域南辺に位置し不定形の墓壙で箱棺を有している。土坑はそれ以前に作られていた墓壙の掘り込み上にあるため、一部不鮮明な部分があり、検出した時点では不定形であったが、本来は方形の掘り込みであったと思われる。棺は大部分が改葬時に壊されており棺底がわずかに残されていた。棺内からは人骨、副葬品等の出土はなかった。

墓ST004【棺ｊ】　墓域南辺に位置し、２段の掘り方を持つ墓壙を有している。楕円を呈する墓壙は２段のステップを持ち箱棺のある墓壙に至る。箱棺の残存状態は悪く形を残していない。残された板材からわずかに棺形が推定できる。改葬段階で破壊されたものと思われる。人骨、副葬品等は出土していない。

墓ST005【棺ｊ】　墓域南辺に位置する。方形の掘り込みを有し箱棺の埋葬形態をなしている。箱棺は土圧により南東方向に底板を平行に保ったまま押され、側板が傾斜している。側板の残りは良く、木釘も側板に打

たれた状態で観察できた。棺内からは人骨、副葬品等の出土はない。

墓 ST006【棺ｊ】 今回調査した近世墓のなかで最も新しい墓壙と思われるもののひとつである。掘り方は楕円形で２段掘りを呈し埋葬形態は箱棺である。棺の保存状態は良好で直立した状態で約75cm の側板が残る。人骨は僅かではあるが断片的に残されていたがどの部位か判断出来なかった。副葬品として、昭和27年の５円・10円硬貨、昭和35年の10円硬貨が出土している。

墓 ST007【一】方形の掘り込みを持つ墓壙は、調査区の北辺近くに位置する。土坑墓からは、棺の痕跡が無い事、出土人骨片が乱れていない事等から、おそらく棺を有しない方形土坑墓の可能性が高い。副葬品等の出土は無い。

墓 ST008【一】調査区の中央よりやや北側に位置し方形の掘り込みを持つ墓壙である。掘り込みの形は、南側で墓 ST025に切られている事と、上端の一部が崩落していたことから、不明である。底部からは西に寄った位置に楕円形の掘り込みが確認されたが、この土坑に伴うものかどうかは確認できなかった。この土坑でも木棺痕跡は確認されず、おそらく方形の掘り込みを有する土坑墓の可能性が高い。人骨、副葬品等の出土は無い。

墓 ST009【棺ｄ】 調査区のほぼ中央部に位置し墓 ST010を切るように掘り込まれてている。墓壙は方形の掘り込みで箱棺を有する。上部は、後世の整地等で水平に削平され半分以上が失われている。人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST010【棺ｊ】 墓 ST009に隣接し、墓 ST011を切るように築造されている墓壙である。墓壙は方形の掘り込みで箱棺を有する。上部は水平に削平されており墓 ST009よりも残存状況が悪い。人骨は骨粉状に僅かに棺底に残っていたが部位を確認するまでは至らなかった。副葬品等は無い。

墓 ST011【棺ａ】 墓 ST010より先行し、この墓地の最古をなす桶棺（墓 ST056）を切るように築造されている墓壙である。掘り方は方形を呈し箱棺を有している。ここで確認した箱棺は、底部にあたる底板が広くその上に棺を補強するように対角線状に幅の狭い板を渡している。底板が広い分、墓壙も他と比べると一回り広くなっている。棺内には人骨は残っていなかったが、歯が９本出土している。副葬品等の出土は無い。

墓 ST012【甕棺】 円形の墓壙を有し飯胴甕を利用した甕棺墓である。墓壙は飯胴甕より一回り大きく掘り込まれており上端、下端とも円形を呈する。甕は中央に直立するように据えられている。口縁部は内側に割れて落ち込みその周辺から、こぶし大の川原石が多数検出された。蓋となるものは確認できないが、木蓋のあった可能性もある。川原石はその上に配置されていたものではなかろうか。人骨は甕底部に僅かに残っていたが水分を多く含み脆弱であったため取り上げることはできなかった。副葬品等は無い。

墓 ST013【一】墓域の南辺に位置し墓 ST029により切られている。方形の掘り方を呈しているが、内部の埋葬施設、人骨、副葬品等の出土は無かった。埋葬形態は、方形の掘り方を有し内部主体に木棺を有していないため、土坑に直葬された土坑墓の可能性が高い。

墓 ST014【棺ｈ】 墓 ST006に先行する墓壙である。方形の掘り方を呈し箱棺を有する。木棺自体の残存状況は悪く底板の一部と崩落した側板の一部が残るのみである。隅柱の痕跡がわずかに確認できる。棺内からは人骨、副葬品等の出土は無かった。

墓 ST015【棺Ｉ】 墓域北側に位置し、墓 ST016に切られている墓壙である。内部主体の木棺は残されていないが土坑墓内に円形に掘り込まれた痕跡があることから「桶棺」を利用した墓壙だったと思われる。墓壙は方形の掘り方を持ち、中央に桶棺を据えるための掘り込みを有する。人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST016【棺ｊ】 墓 ST015を切る状態で検出された墓壙である。方形の掘り込みを呈し箱棺を有する。箱棺は底部が僅かに残るのみであり、水分を多く含み崩れかかった人骨が残されていた。副葬品等の出土は無い。

墓 ST017【棺ｊ】 やや不定形であるが方形の掘り込みを持ち箱棺を有する土坑墓である。棺の側板・底板は腐食して残っていないが、痕跡として捉えることができる。棺底には人骨が残されていたが、水分を多く含

み取り上げられる状態ではなかった。副葬品等の出土は無い。

墓 ST018【棺ｊ】 墓 ST058と墓 ST056を切るように築造された土坑墓である。方形の掘り込みを有するが、西側に一段ステップを持つ。他の墓壙より残りが良く掘り込まれた墓壙の深度は最大165.0cm を測る。内部主体は板材を利用した箱棺で側板は最大４枚まで確認できる。人骨は骨粉となった状態で確認できたが、部位や範囲は確認できなかった。

墓 ST019【一】 墓域北側に位置し墓 ST022を切るように築造されている墓壙である。上端で方形を呈するが下端で円形をなしている。円形に掘り込まれた部分には骨粉が広がっており桶棺があった可能性も否定できないが円形の掘り込みいっぱいに骨粉が広がっているため、桶棺に葬られたものではなく、直葬の可能性が高い。

墓 ST020【棺ｊ】 墓域のほぼ中央部に位置し墓 ST055に切られている墓壙である。方形の掘り方を呈し箱棺を有する。掘り方の上部は墓 ST055に削平を受けているが、底部には棺底の板材が僅かに残されている。人骨・副葬品等は無い。

墓 ST021【棺ｊ】 墓域の南辺に位置し墓 ST049を切るように位置している。掘り方は上端、下端とも円形を呈するが主体部は箱棺を有する。上端の円形をなす土壙部分は、箱棺の残存状況から改葬時の掘り方の可能性もある。棺内部からの人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST022【棺ｈ】 墓域の北側に位置し墓 ST019に切られている状態で検出された墓壙である。方形の掘り方を呈する。内部主体は箱棺であったと思われるが、調査段階では棺材が腐食していたと見られ掘り方のみの検出であった。掘り方の底部から人の頭骨を含む人骨が出土している。

墓 ST023【一】 墓域の南辺に位置する墓壙である。方形の掘り方を有するが箱棺の存在は確認できない。箱棺の彫り方も確認できなかったため、箱棺を有しない土坑墓の可能性がある。人骨は頭骨を含む数点が出土している。副葬品等の出土は無い。

墓 ST024【棺ｊ】 墓域の南辺に位置し墓 ST004に切られている木棺墓である。方形の掘り込みを呈し、箱棺を有している。箱棺は側板が腐食して残っておらず僅かに底板の部材のみが残る。人骨は頭骨を含む数点が出土している。副葬品等の出土は無い。

墓 ST025【一】 墓域のほぼ中央に位置し墓 ST008を切るように築造されている墓壙である。上端の一部はトレンチにより削平を受け推定線になっているがほぼ方形の掘り方を有している。土壙底部からは箱棺材の一部と思われる木片が出土しているが箱棺の形態までは分からない。土壙底部から人骨、副葬品等の出土はない。

墓 ST026【一】 墓 ST025に切られ一部は調査区外（本線部分）にあたっている。墓壙は方形を呈し箱棺を有する。箱棺は底部の枠材のみ残り、底板・側板は残っていない。人骨は枠材と同レベルに頭骨を含み残されていたが、すべて脆弱であったため取り上げられなかった。上顎には歯が残されていた。

墓 ST027【一】 墓域の南辺近くに位置する。墓壙は方形を呈し底部にさらに一段の掘り方を持つ。内部主体は不明。人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST028【棺ｊ】 墓域の南辺に位置する。方形の掘り込みを呈し箱棺を有する。箱棺は底部の板材のみ残りその上に人骨が僅かに残る。人骨は他の墓壙と同様に内部はスポンジ状になっており取り上げは不可能であった。副葬品等の出土は無かった。

墓 ST029【棺ｃ】 墓域南辺部に位置し、墓 ST003と墓 ST021に切られている。墓壙はやや隅丸の方形を呈し箱棺を有する。ここで使用されている箱棺は「棺Ｃ」タイプで今回の調査では２例しか確認できていない。側板・底材とも板材を使用しているが、箱棺本体下に井桁上に組まれた角材上に安置されている。棺内部からは頭部を含む人骨が検出されたが内部がスポンジ状になっており取り上げはできなかった。副葬品等の出土は無かった。

墓 ST030【一】 墓域の南辺部に位置する墓壙である。隅丸の方形を呈し内部にさらに一段の掘り方を有す

る。内部主体は不明である。人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST031【棺ａ】 調査時の掘り方はやや不定形の墓壙であるが、本来の墓壙は方形の掘り方であったと思われる。恐らく改葬時の掘り方の一部が残っていたものとおもわれ、上端が不定形である。主体部は箱棺を有し残存状況は良い。人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST032【棺ｊ】 墓 ST012（甕棺）に切られている墓壙である。掘り方の一部が掘り足らない部分もあったが、他の墓壙と同様に方形の掘り方を呈し箱棺を有している。箱棺は残存状況が良く底部には人骨の一部も残されている。箱棺底部からは昭和７年鋳造の５銭円硬貨が１点出土している。

墓 ST033【棺ｊ】 墓 ST034を切るように築造されている墓壙である。方形の掘り方を呈し箱棺を有する。掘り方の一部は南側で中段を形成するようにステップを有する。
内部主体は箱棺であるが、内部には人骨の痕跡がうっすら分かる程度に残されている。副葬品には昭和21年鋳造の10銭硬貨が１点出土している。

墓 ST034【棺ｈ】 墓 ST033により切られている墓壙であるため、箱棺の半分程度しか残っていない。掘り方は方形を呈し、他の墓壙と同様の形態である。箱棺は掘り方のみ残り、棺材の残りは少ない。人骨は頭骨を含め僅かに残るが、スポンジ状で取り上げは不可能であった。副葬品等の出土は無い。

墓 ST035【一】 墓域の北辺に位置する墓壙である。隅丸方形の掘り方を呈し、上端・下端とも方形で、底部でさらに円形に掘り込みがある。円形の掘り込みはやや楕円形を呈し棺材の出土は無かった。恐らく、棺を有しない土坑墓の可能性が高い。人骨の一部が残されていたが脆弱で取り上げは不可能であった。副葬品等の出土は無い。

墓 ST036【棺ａ】 墓 ST006に切られている墓壙である。墓壙の掘り方は墓 ST006の掘り方により明確に確認されていないが、掘り方の下端が方形を成しているため上端も同様の掘り方を呈していたものと思われる。棺は側板が良く残っており棺の構造を知ることが出来る。人骨は棺底に僅かに骨粉状で残っており部位等は確認できない。副葬品等の出土は無い。

墓 ST037【棺Ｉ（桶棺）】 墓 ST061に切られている墓壙である。同様の形態をしている墓壙等の切り合い等から桶棺を利用した墓壙は当遺跡では最古段階の埋葬形態であると思われる。
掘り方は上端・下端とも方形を呈しほぼ中央部に桶棺が直に安置される。人骨は棺底に僅かに骨粉状態で残されている。副葬品等の出土は無い。

墓 ST038【一】 墓 ST063を切るように築造された墓壙である。上端の掘り方は方形を呈し下端もやや歪な方形を成している。側板の一部が残されているが、棺底の部材は残されておらず棺形態を復元するまでには至らない。人骨は頭骨を含み検出したがすべてスポンジ状に変化しており取り上げまでには至らなかった。副葬品等の出土は無い。

墓 ST039【一】 墓 ST006と墓 ST036に切られている墓壙である。墓壙は上端・下端とも円形を呈し主体部である箱棺は有していない。墓壙底面は平らで掘り込みも見られないことや、人骨が底面からやや浮いた位置で出土しているため円形の掘り方を呈する土坑墓だった可能性が高い。副葬品等の出土は無い。

墓 ST040【一】 墓域の北辺に位置する墓壙である。この墓壙を境にして地形が北側へ落ち込んでいる。墓壙は上端・下端とも方形を呈している。箱棺の痕跡は無く、土坑底部から検出した人骨が広い範囲で検出されたため土坑墓であった可能性が高い。人骨は骨盤を含み検出されたが水分を多く含んでスポンジ状になっており取り上げは出来なかった。

墓 ST041【一】 墓 ST035・墓 ST047に切られた墓壙である。上端は方形を呈するが下端はやや不定形な掘り込みを有する。底部中央に箱棺の痕跡が僅かに残るが棺は残されていなかった。主体部は箱棺があった可能性が高い。人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST042【棺ａ】 墓 ST020に切られる墓壙である。方形の墓壙を呈し箱棺の主体部を有していたと思われる墓壙である。棺は残っていないが箱棺があった痕跡が墓壙中央部に見られる。棺構造は棺ａのタイプに分類されると思われ棺底に板材を敷き箱棺が安置されていたようである。人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST043【甕棺】 墓 ST012と同様に飯胴甕を利用した埋葬形態を有する。掘り方は方形気味であるが明確に方形・円形いずれかを意識した掘り方ではない。甕は土圧で胴部にひびが入るがほぼ完形で出土している。上部には蓋に利用したと思われる擂鉢が口を合わせるように出土している。擂鉢の底部は割れて甕内部に落ち込んでいる。甕内部には頭骨を含む人骨が検出された。副葬品等の出土は無い。

墓 ST044【棺ｊ】 墓 ST025に切られている墓壙である。上端・下端とも方形の掘り方を有し内部に箱棺の痕跡が残る。箱棺は側板の一部が残されていたが全体に土壌化している。掘り方と箱棺の軸はややずれが見られるが、ほぼ掘り方の中央に安置されている。人骨は箱棺底部に僅かに残されていたが取り上げるまでには至ってない。副葬品等の出土は無い。墓壙の西側の掘り方の２／３、箱棺の１／２が調査区の外に出ており全体形の検出ではない。

墓 ST045【棺ａ】 墓 ST046に切られている墓壙である。方形の掘り方を呈し箱棺を有している。墓壙の１／２は調査区の西側に出ており未調査となっている。棺内部からは人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST046【一】 墓 ST045を切るように築造されていた墓壙である。方形の掘り方を呈する。内部主体には箱棺の痕跡が僅かに残るため、箱棺があったものと思われる。棺の形態は不明である。

墓壙は西側の１／２が調査区外に出ており未調査である。棺内部からは人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST047【一】 墓域の北辺に位置し墓 ST040に切られている墓壙である。方形の掘り方を呈し主体部は箱棺の痕跡が残る。箱棺の形態は確認できないがおそらく棺ｊの可能性が高い。棺内部には人骨が残されていた。副葬品等の出土は無い。

墓 ST048【棺ｊ】 墓 ST003・墓 ST029・墓 ST021の墓壙（墓域南側）に切られている隅丸方形の掘り方を呈する墓壙である。内部主体は箱棺を有する。棺内部には人骨の一部が骨粉状で残っていたが骨部位の確認はできなかった。棺材の一部は土壌化し始めていたが僅かに底板が確認できた。副葬品等の出土は無い。

墓 ST049【棺ｈ】 墓 ST048同様に墓 ST003・墓 ST029・墓 ST021に切られている墓壙である。墓域の南辺に位置している。上端は多数の墓壙に切られておりラインは不鮮明なところもあったが、方形を基調とし、やや不定形な墓壙である。内部主体は箱棺であり側板・底板とよく残っている。棺底には頭骨を含む人骨が残されていた。副葬品等の出土は無い。

墓 ST050【―】 墓 ST032のほぼ直下から検出された墓壙である。上端・下端とも方形を呈している。内部には箱棺の痕跡が確認されないこと、墓壙底部に広く人骨が広がっていることから土坑墓の可能性が高い。人骨は土坑墓底部から出土しているが、水分を多く含みスポンジ状になっていた。副葬品等の出土は無い。

墓 ST051【棺ｊ】 墓 ST012（甕棺）の直下に残されていた墓壙である。方形の掘り方を呈し箱棺を有する。上端の大半は残されていないが底部まで掘り込みを検出した結果、底部が方形であったこと、上端の一部が直線的に確認されたこと等から、方形の掘り方であったことが確認できる。棺材は側板のみ検出できたが底板は検出されなかった。人骨は棺内に一定のレベルで検出され棺底の板があったことが想定される。副葬品等の出土は無い。

墓 ST052【棺ｊ】 墓 ST031に切られ、方形を呈し箱棺を有する墓壙である。箱棺はやや掘り方の西側に位置し、他の墓壙と違い片寄りがある。箱棺は底板が僅かに残るのみであり側板等は腐食して残されていない。棺内からは人骨の一部が出土している。副葬品等の出土は無い。

墓 ST053【棺ｊ】 墓域の南辺近くに位置し墓壙の西側１／２が調査区外に伸びている墓壙である。掘り方は方形を呈し箱棺を有している。箱棺を含む墓壙は上部が改葬時に削平を受けて残りは悪い。僅かに残る箱棺

は底部と側板の下部である。棺内には底部に水分を含み脆弱となった人骨が、部位も分からない状態で検出された。人骨のほかには副葬品等の出土遺物は無い。

墓 ST054【一】 墓 ST043（甕棺）に切られている比較的新しい墓壙のひとつである。方形の掘り方はやや歪んでいるが上端・下端とも平行に検出できたため最初からのものと思われる。他と比べ粗い作りの墓壙である。墓壙底部には人骨が良好な状態で残されている。箱棺等の部材は無く、掘り込みも確認できなかったため、箱棺を有しない土坑墓であろう。棺内からは副葬品等の出土は無い。

墓 ST055【棺ｈ】 墓 ST054に切られている墓壙である。墓壙は隅丸方形を呈し箱棺を有している。箱棺の棺材は他に比べると材質がしっかりと残っている。崩落している部材はすべて側板で天井部材ではない。棺底には僅かに人骨が残るが骨粉状態で残りは悪い。副葬品等の出土遺物は無い。

墓 ST056【棺ｌ】 墓 ST037と同様の桶棺を使用している墓壙である。本調査区では最も古い部類に入る墓壙のひとつである。墓壙はやや崩れかかった方形の掘り方を呈し桶棺を有している。桶棺は残存状況が悪く底板材のみが残され、底板の上から「(新) 寛永通宝」が１枚出土している。人骨は残っていない。

墓 ST057・墓 ST073【棺ｊ・棺ｆ】 墓域の北辺近くに位置し一部が調査区の外になる墓壙である。方形の掘り方は他の墓壙に比べ、一回り大きくほぼ正方形を呈する。墓壙内部からは人骨を伴う箱棺が出土しているが、さらにその下部からもう一基、箱棺が検出されている。

２基の箱棺は当初、上下とも同一の箱棺の想定も検討したが、平面形にややずれがあること、両棺ともそれぞれ別のタイプの棺がある事等から、２時期の埋葬があったと判断した。後に築造された墓 ST057は「棺ｊ」のタイプが用いられ、下部の箱棺は「棺ｆ」のタイプを使用している。

墓 ST057の箱棺からは人骨が出土しているが水分を多く含み脆弱であった。副葬品等の出土遺物は無い。また、墓 ST073は棺底部のみの出土であり、人骨・副葬品等の出土遺物は無い。

墓 ST058【棺ｊ】 墓 ST018に切られている墓壙である。方形の掘り方を呈し僅かに箱棺の痕跡を留めている墓壙である。掘り方下端で棺材の一部と箱棺の掘り込みが見られる。人骨は棺材の横で水分を多く含みスポンジ状と化して出土している。部位は不明である。副葬品等の出土遺物は無い。

墓 ST059【棺ｊ】 墓 ST058に隣接し墓 ST018に切られている墓壙である。墓 ST058同様に方形の掘り方を有し箱棺の痕跡を残している。掘り方底部に僅かに棺材が残っているため箱棺による埋葬があったことが窺える。内部からは棺材の一部が出土しているが人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST060【棺ｊ】 墓 ST042によって切られている墓壙である。２／３は調査区の西側にあり未調査である。墓壙の掘り方はやや不定形で、方形を呈し箱棺を有する。箱棺の残りは良く材質ともしっかりしていた。内部からは人骨・副葬品等の出土は無い。

墓 ST061【棺ｂ】 墓 ST037（桶棺）を切るように築造されている墓壙である。２／３が調査区の外にあたり未調査である。方形の掘り方を呈し箱棺を有している。箱棺内部からは人骨が出土しているが取り上げるには至っていない。副葬品等の出土は無い。

墓 ST062【一】 墓 ST004と墓 ST031によって切られ平面形がほとんど残っていない墓壙である。僅かに方形に掘り込まれた掘り方が確認できた。主体部に箱棺を有していたかは不明だが棺材が出土していないこと等から土壙墓であった可能性が高い。

墓 ST063【棺ｈ】 墓域の北辺に位置し墓 ST038に西側を切られている墓壙である。掘り方は方形であるがやや東西に主軸をおき長方形を呈している。内部主体は箱棺であったと思われるが腐食して残っていない。内部には人骨が良好な状態で検出できた。頭骨は西側に向かって落ち、背は東にありもたれるように西を向かい埋葬されているのが窺えた。副葬品等の出土は無い。

墓 ST064【棺ｊ】 墓域の南辺近くに位置し、墓 ST043、墓 ST054に切られている墓壙である。掘り方は方

形を呈し箱棺を有する。箱棺内部には頭骨を含む人骨が残っていた。副葬品等の出土は無い。

墓 ST065【一】 墓域北辺に位置し、墓 ST070を切り築造されている墓壙である。隅丸方形の掘り方を呈し内部に箱棺の痕跡が残る。内部には掘り方いっぱいに広がった状態で人骨が出土している。人骨は頭骨を含み多く残るが、水分を多く含んでおり取り上げは出来なかった。

墓 ST066【一】 墓 ST016に切られている墓壙である。墓壙は方形を呈し箱棺のあったことを窺わせる掘り方が残る。掘り方底部には頭骨を含み人骨が残る。人骨は水分を多く含み取り上げは難しかった。副葬品等の出土は無い。

墓 ST067【一】 墓域の北辺近くに位置し他の墓壙に切られていない墓壙である。方形の掘り方を呈している。内部には箱棺の掘り方、部材は無く土壙墓の可能性が高い。内部には人骨と陶器の破片があり埋葬されたにしては不自然なため、改葬された可能性がある。箱棺の掘り込みや部材が残っていないため土坑墓の可能性が高い。

墓 ST068【棺ｃ】 墓 ST021と墓 ST048に切られている墓壙である。墓壙全体の半分位しか残されていないが方形の掘り方を呈していたものと思われる。内部の箱棺は底部が良く残っており木材の組み合わせが観察できる。ここにみられる箱棺は当遺跡内では珍しく２例しか確認されていないタイプである。

墓 ST069【一】 墓域の南辺に位置し掘り方のほとんどが調査区の外に出ている墓壙である。墓壙の形態は一辺が直線で隅が２点確認されているため方形を呈していたものと思われる。内部主体は墓壙の一部しか調査を実施していないため不明である。出土遺物は箱棺の一部であると思われる木片が３点出土している。

墓 ST070【一】 墓 ST065に切られている墓壙である。調査区の西側１／５は調査区の外に出ており未調査である。墓壙は方形の掘り方を呈し、内部に箱棺を有していた痕跡としてさらに方形の掘り方を見ることができる。箱棺掘り方の底部には頭骨を含む人骨が多数残されていた。副葬品等を含む遺物の出土は無い。

墓 ST071【棺―】 墓域の北辺に位置し、掘り方の大半が調査区の外にある墓壙である。掘り方内部には箱棺の一部が顔を覗かせているが、調査区の外にあたるため形態は不明である。人骨は僅かに箱棺上に頭骨の一部が出土している。副葬品等を含む出土遺物は無い。

墓 ST072【一】 墓壙の掘り方の大半が調査区外にあたり、方形の掘り方の１角のみ検出された墓壙である。掘り方内部は垂直に掘り込まれ、内部主体は未確認である。副葬品等の出土遺物は確認できていない。

１）溝・土坑・その他の調査（Fig.16～20）

溝 SD001　近世の流路側（東側）から延びる溝状遺構である。幅は不定形であり一定していない。断面形から２本の溝の可能性が高いが掘りこみが、浅いため明確に分けられないところが多い。土層は上下の２層に分層できる。下層に僅かに礫を含む。溝 SD002と主軸が同じであるため、別時期の遺構と言うより溝 SD002が残っていた段階での一部分掘りなおしの遺構と思われる。

溝 SD002　溝 SD001によって切られているが、溝 SD001に先行する時期に掘られていた遺構であろう。遺構の幅は約35.3cm、深さは約20.9cm で逆台形を呈している。出土遺物は無かったが、埋土の状況から近世の遺構と判断した。

溝 SD003　溝 SD001・溝 SD002と平行している遺構である。幅は約65.2cm、深さは約20.5cm で逆台形をなしている。出土遺物は無いが、溝 SD002と同様に埋土の状況から近世の遺構と判断した。

溝 SD004　溝 SD003の北側に位置し、遺構の端が調査区の外に伸びる遺構である。平面形は幅が約35.1cm から70.8cm とやや不定である。

土坑 SK001　長径約65.3cm、短径約50.0cm の擂鉢状の土坑である。土層の堆積状況が底面近くで、薄くキメの細かい土が堆積していたため、自然に埋まったものと思われる。出土遺物は無いため遺構の性格は不明で

ある。

土坑 SK002　長径約7

シルト質が強くなる。堆積状況は長径にそってほぼ水平である。出土遺物は無い。

土坑 SK003　長径約63.1cm、短径約60.5cm のほぼ円形の土坑である。残存土層は上下の 2 層であり、下層においてややシルト質が強くなる傾向がある。断面形は逆台形の状態で下端も円形をなしている。

土坑SK004　溝SD003に切られている土坑である。最大幅は溝SD003に沿っている部分で約225.9cm を測る。溝 SD003の南側に検出できていないので楕円形をなす土坑であろう。残存土層は上下の 2 層でここでも、下層でシルト質が強くなる傾向がある。出土遺物は無い。

土坑SK005　土坑SK007

している。土層は単層（暗灰色粘質土）で堆積状況を確認することはできなかった。出土遺物は無い。

土坑 SK006　土坑 SK005同様に土坑 SK007

60.1cm、深さ約30.8cm を呈している残存土層は単層（暗灰色粘質土）で堆積状況を確認することはできなかった。出土遺物は無い。

土坑 SK007

は単層（暗灰色粘質土）で土坑 SK005・土坑 SK006とも同じ埋土であったため、切りあい関係は不明である。しかし、他の遺構と同様に近世の埋土であるため遺構の時期は近世としている。

土坑SK008　土坑SK007に切

可能性もある。遺構の一部は調査区外（本線部分）に広がっている。出土遺物は無い。

土坑SK009　溝SD002と溝SD003に挟まれた位置に土坑SK001を切っている楕円形を呈している土坑である。長径約126.6cm、短径約110.4cm を測る。断面形は緩やかな擂鉢状である。埋土は単層（暗灰色粘質土）で確認された。出土遺物は無い。

土坑SK010　検出できた範囲ではほぼ円形を呈している。直径は約110.2cm で遺構の一部は調査区外（本線部）にかかっている。断面形は緩やかな擂鉢状をなしている。出土遺物等の出土は無い。

土坑SK011　調査区の東側に位置し平面プランの大部分が調査区の外に出ている。検出プランは隅丸方形を呈し一辺が約105.1cm を測る。埋土は単層（暗灰色粘質土）であった。出土遺物は無い。

土坑SK012　遺構の隅をわずかに土坑SK011に切られている遺構である。底部には柱穴状の窪みがあるが柱痕も確認されずに埋土に単層（暗灰色粘質土）である。これら柱穴状の遺構は土坑SK012に伴うものかどうかは確認できなかった。

土坑SK013　土坑SK014を切るように掘り込まれている遺構である。平面プランは不定形の楕円である。下端のラインがそれぞれ独立しているため本来は 2 つの遺構が切りあっていたものと思われる。出土遺物は無い。

土坑SK014　土坑SK013に切られている遺構である。平面プランは楕円形を呈し埋土に暗灰色粘質土を持つ。断面形は垂直に掘りこまれた U 字状を呈している。遺物は無い。

土坑 SK015　近世墓の北側に位置している遺構である。SK019と SK021に隣接している。直径約32.7

面プランは円形である。断面は浅く、相当削平を受けており遺構の性格を推定するには至らない。出土遺物は無い。

土坑 SK016　直径7

をなしている。埋土中からは礫が 1 点出土しているが、時期を示す遺物等の出土は無い。

土坑 SK017

である。出土遺物は無い。

土坑SK018　長径約1.95m を呈する不定形土坑で全体の 4 分の 1 は調査区外にあたり、一部撹乱により切ら

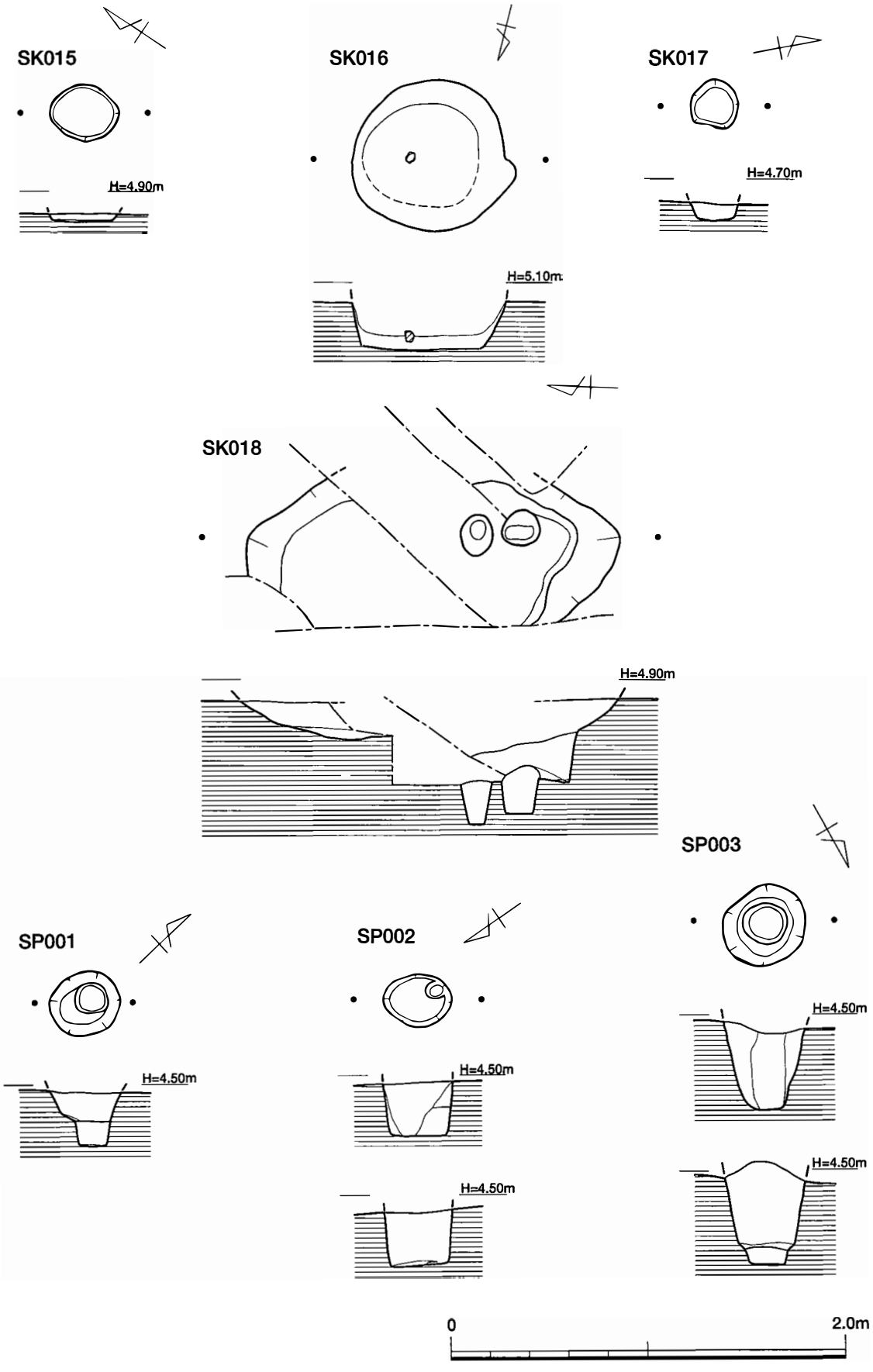


Fig. 43　Ⅳ区　近世遺構実測図

れている。下端はフラットで掘り込みは緩やかである。底部に柱穴と思われる堀込みが２箇所確認されるが、上部を撹乱により失い、この遺構に伴うものかは確認できなかった。土坑内よりの出土遺物等は無い。

柱穴SP001　近世墓の北に位置し１基のみ独立した遺構である。柱穴の可能性がある。しかし、周囲に対応する柱穴が確認されていない。遺構の直径は約35.2cmの円形で途中から二段に掘り込まれているのが確認される。底部はほぼ水平をなしている。出土遺物は無い。

柱穴SP002　近世墓の南に位置し楕円形を呈する遺構である。直径約36.4cm遺構深度は23.5cmで、底部はほぼ水平をなしている。SP003と対応する柱穴の可能性が高い。土層断面では柱抜取り痕と思われるＶ字状の埋土が確認されている。

柱穴SP003　SK017の南に位置する遺構である。直径約40.2cm、深度は約40.5cmを測る。SK017同様柱穴の可能性が高い。土層断面には柱痕と思われる直径16.0cmの柱状土層が残る。また、掘り方は柱痕部分が一段下がっており柱を固定できる工夫が窺われる。出土遺物等は無い。

流路１～５（大田の井出跡）（Fig. 19）　調査区の南に位置し調査区を横切るように検出された。調査区の南端には検出された流路と平行に現在も八代平野に向かう水流がある。
検出された流路はこの大田の井出が作られた江戸時代以降、幾度かの改修を受けながら現在まで至っている。現在の流路と近世薩摩街道は、本調査区の付近で僅かに山側へ膨らんでおり、その際に流路が現在の場所に移動したものと思われる。流路内からは近世の陶器・磁器の類が多数出土している。また、五輪塔（時期不明）の火輪が流路内でローリングを受けた状態で出土している。

その他　上記で報告した以外に近世墓南に位置する（Ｘ＝55120～Ｘ＝55130間）に不定形土坑、溝等が検出されたが、これら遺構には調査前段階に耕作されていた畑の土が入っていたため極めて現在の耕作に伴うものとして、図示はしているが文章には取り上げていない。

２）出土遺物

４区からの出土遺物はコンテナ12箱である。その中には、近世加藤氏による球磨川改修のおりに整備された「大田の井出」跡から出土した大量の近世陶器・磁器を始め、近世墓に伴う同じく陶器・磁器類、中世の流路跡から出土した古代から中世に渡る須恵器・土師器・陶器類がある。しかし、最も注目されるのは中世の土坑から出土している在地系土師皿に東播系の擂鉢片が共伴している資料と、最終遺構面である古墳時代初頭の溝から出土している土師の壺・甕類がある。

近世遺構出土遺物

陶器・磁器

甕棺（Fig. 44）

No.66　甕棺（蓋・擂鉢）口径16.7cm　底径49.4cm　器高19.6cm

ST043の埋葬に利用されていた甕棺の蓋で、内部に使用痕を持つ擂鉢である。体部は粘土紐積成形でナデ調整で仕上げる。内部櫛目は、目が細かく寸分無く詰められ擂り目が施される。口縁部直下は擂り目の上端を揃えるように最後にナデ消されている。釉薬は鉄釉で、器面は外器面と擂り目を除く内器面はやや茶褐色を呈する。焼成は良好である。

No.67　甕棺（飯胴甕）口径49.8cm　底径25.0cm　器高80.0cm

上記の擂鉢と対となり、墓ST043の埋葬用甕である。器面には成形時の粘土紐積上げ痕、叩き痕が僅かに窺えるが図示までは至らない。体部は中位よりやや上方に最大径があり、一度しまり垂直に立ち上がる。口縁端

部は短く外反する。頸部内面に指頭幅の釉拭取り痕跡が見られる。

No.68　甕棺（飯胴甕）口径52.0cm　底径27.0cm　器高80.4cm

墓 ST012に使用されていた甕である。器面には成形時の積上げの痕跡が窺えると共に、胴部内面には板状叩き痕（幅約 5 cm）を見る事ができる。胴部外面には叩き痕は見られない。体部は中位より上方に最大径があり、口縁部立ち上がり下で一度締まる。口縁部はやや外反しながら垂直に立ち上がる。頸部内面に指頭幅の釉拭取り痕跡が見られる。

磁器・陶器（Fig.45）（詳細データは観察表を参照のこと。）

No.69　染付け皿（肥前系）調査区内出土の磁器。描かれている図柄は不明である。

No.70　染付け皿（肥前系）調査区内出土の磁器。描かれている図柄は不明である。

No.71・72　染付け椀（肥前系）調査区内出土の磁器。肥前系磁器で多く使われている網目文の椀である。

No.73　染付け筒型椀　調査区内出土の磁器。描かれている図柄は不明である。

No.74　染付け皿（肥前系）調査区内出土の磁器。図柄は格子文である。

No.75　染付け皿（肥前系）調査区内出土の磁器。描かれている図柄は不明である。

Ⅳ区　近世出土遺物（Fig.46）

No.76　壺（八代産）調査区内出土の遺物である。外面に叩き痕が僅かに残るが、工具までは判別できない。内面は同心円文の工具痕が明瞭に残る。口縁上部は釉薬施されず、貝跡（貝目）が 3 箇所確認できる。

No.77　天目茶椀　調査区内 A－2 ・ 3 Grid から出土した遺物である。天目特有の黒色釉は表面が風化しているせいかやや薄い。施釉は胴部中位までで、約 3 分の 1 は施釉されない。

No.78　土瓶（八代産）注口部及び釣手は残っていない。胴部張り出しより下は削りが明瞭に残る。

No.79　鉢（産地不明）器形は平底を呈し低い鉢形をなす。口縁端部はほぼ直角に屈曲する。

No.80　擂鉢（産地不明）口縁部のみの出土で、内器面に僅かに擂り目を残す。擂り目は一単位が 5 ～ 6 本程度で幅約 2 cm ほどである。

No.81　擂鉢（産地不明）口縁から体部の中位までの破片での出土である。内面に一単位 6 本で幅約 2 cm 程度の擂り目が残る。擂り目は口縁下 2 cm まで施され、口縁部調整の際にナデで消されないところで止まっている。

No.82　擂鉢（産地不明）高台を持たないタイプの擂鉢底部である。擂り目はやや幅が開き気味で一単位が 8 本で幅約 3 cm とやや広い。

No.83　擂鉢（産地不明）貼り付け高台を持つ擂鉢底部である。擂り目は一単位が約12本で幅約1.2cm である。これまでの擂鉢の擂り目と違い、目が詰り密である。底部からの立ち上がり部分に使用痕が残る。

84～87の遺物は近世面で出土している古代～中世の遺物である。土師器皿は後述する中世段階での遺物であるが、須恵器蓋のみは 8 世紀頃まで遡る遺物である。しかし、当調査区ではその時期の遺構は確認していない。

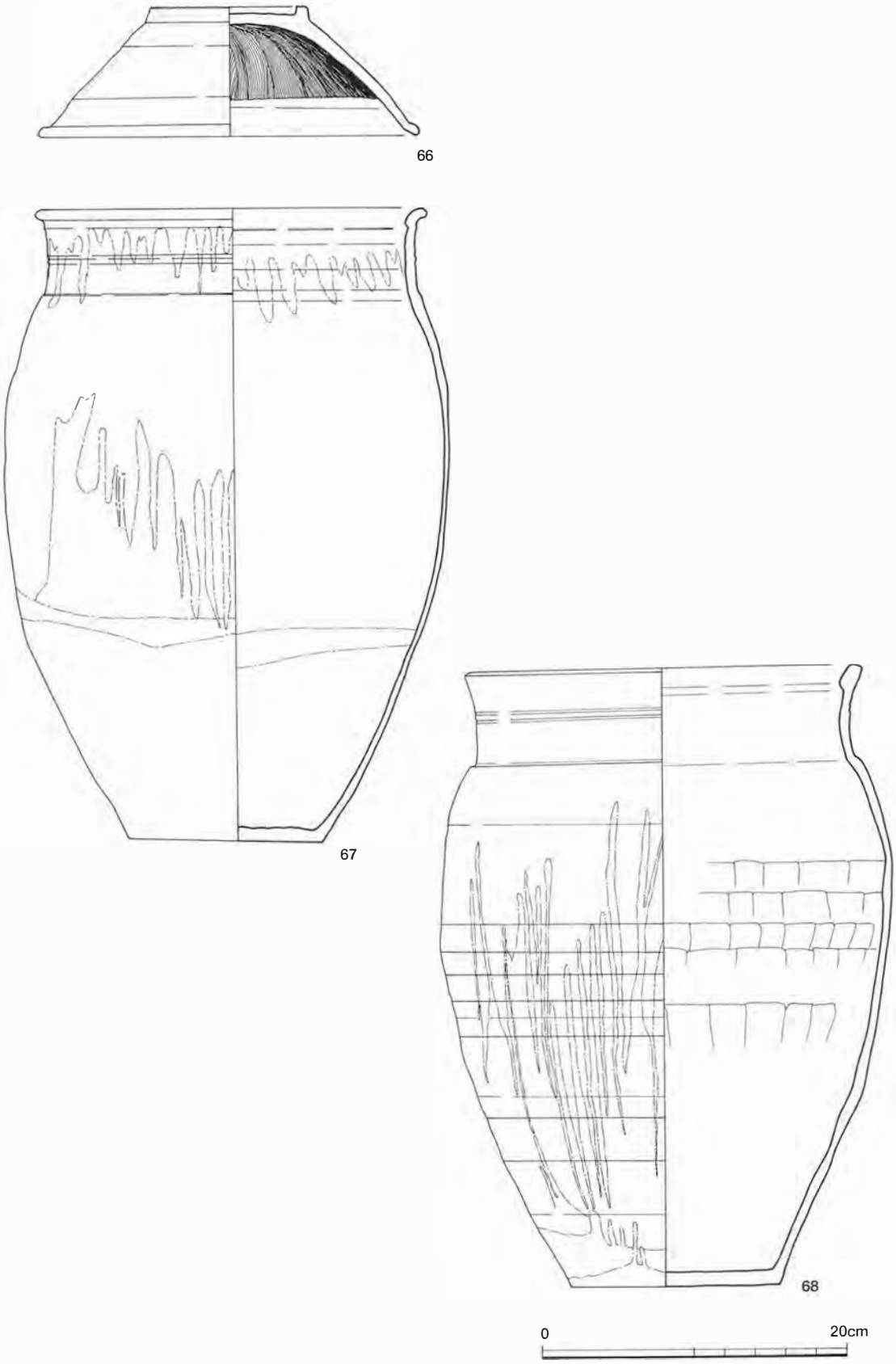


Fig. 44　Ⅳ区　近世出土遺物実測図

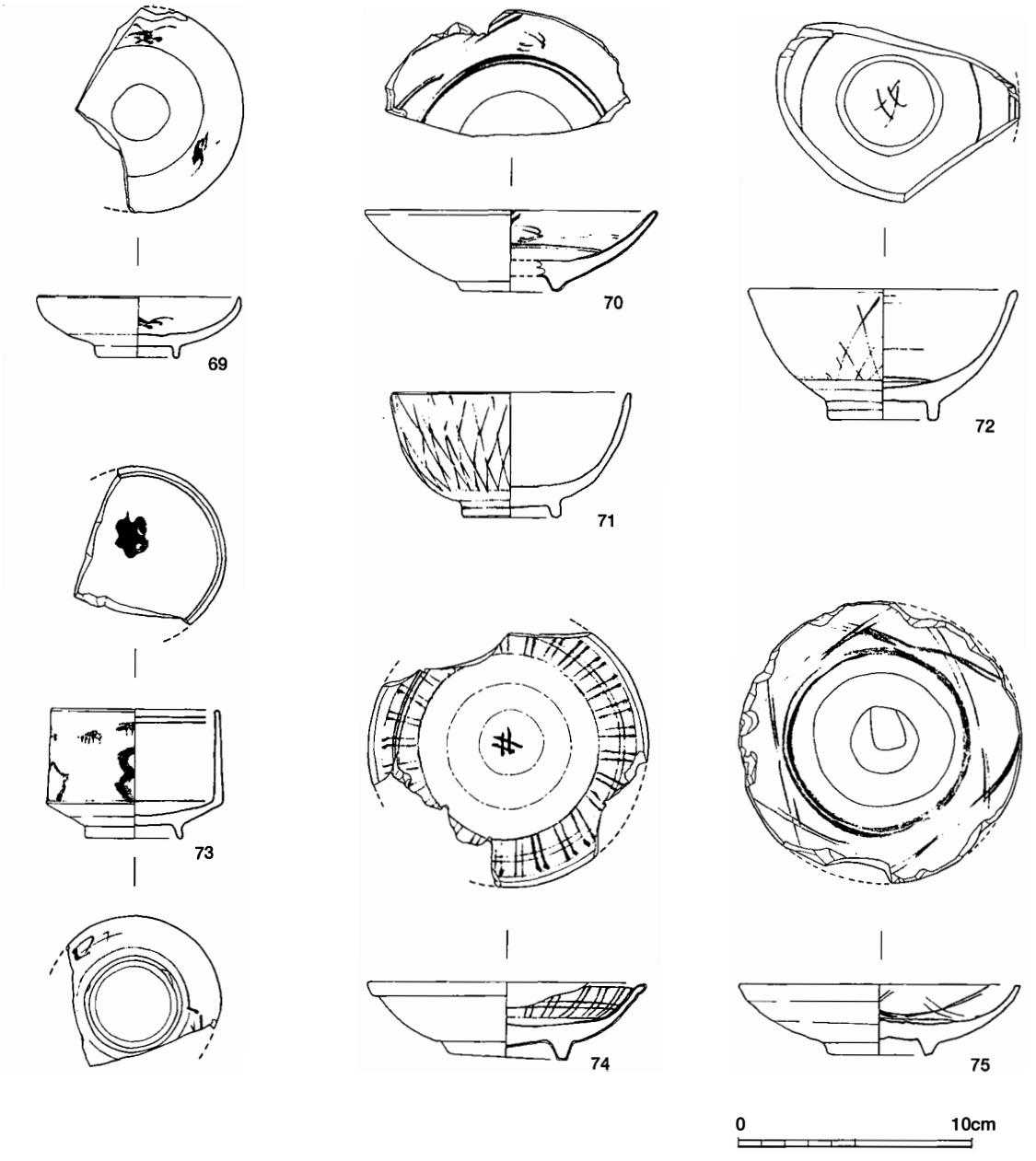


Fig. 45　Ⅳ区　近世出土遺物実測図

Ⅳ区の出土遺物（Fig. 47）

No.84　蓋　須恵器　8 世紀後半　つまみを有しないタイプの蓋である。内外器面とも回転篦削りが明瞭に残り精緻な作りである。

No.85　皿　土師器　14世紀　近世墓埋土中からの出土遺物である。やや器面は摩滅しており調整痕の確認は難しい。

No.86　皿　土師器　14世紀　近世溝埋土中からの出土遺物である。器面は摩滅しており体部の調整は確認できない。底部は糸切り底である。

No.87　皿　土師器　8 世紀後半　近世墓埋土中からの出土遺物である。底部は篦削り後に撫でる。体部の調整も回転篦削りが施される。

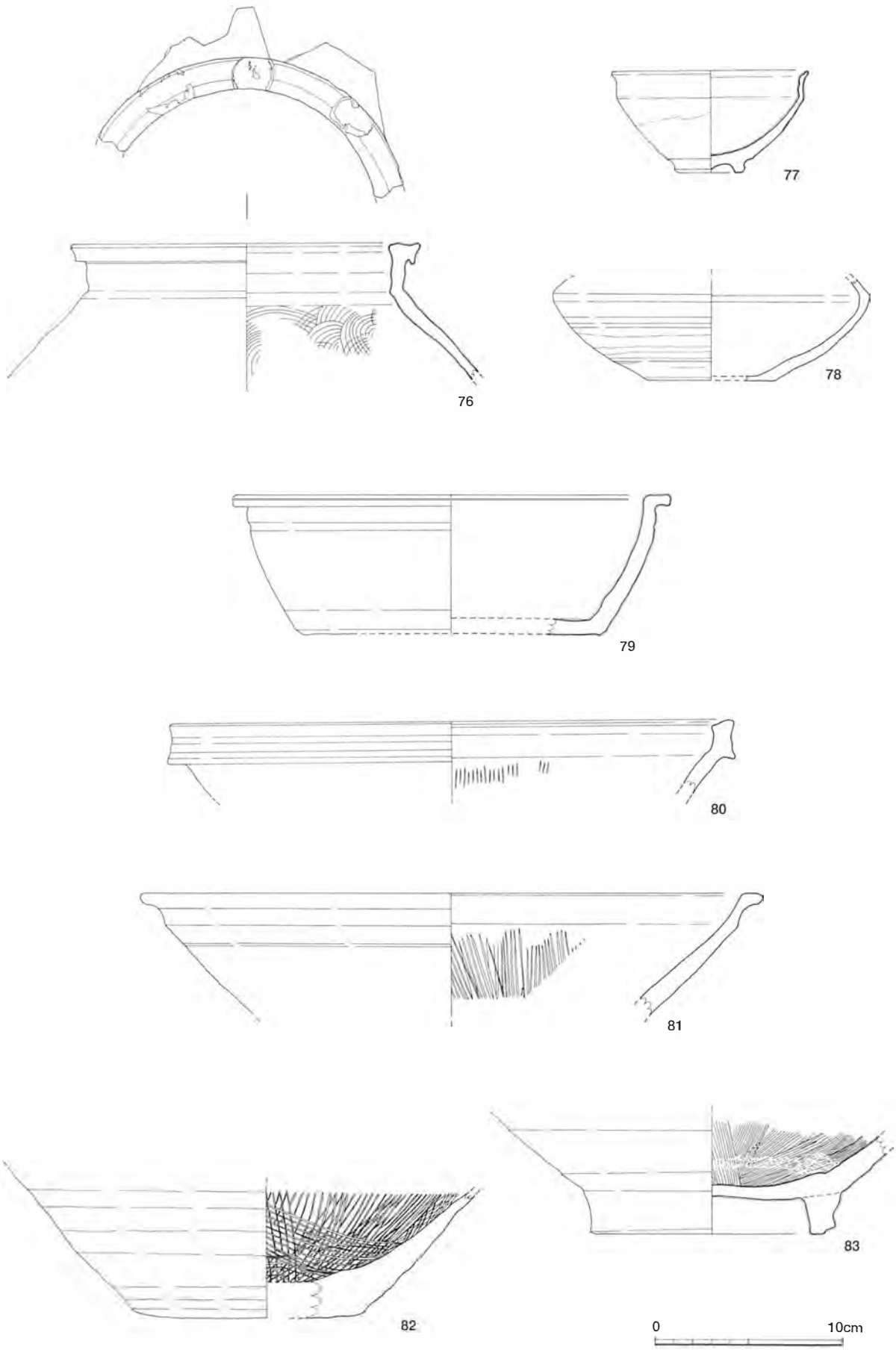


Fig. 46　Ⅳ区　近世出土遺物実測図

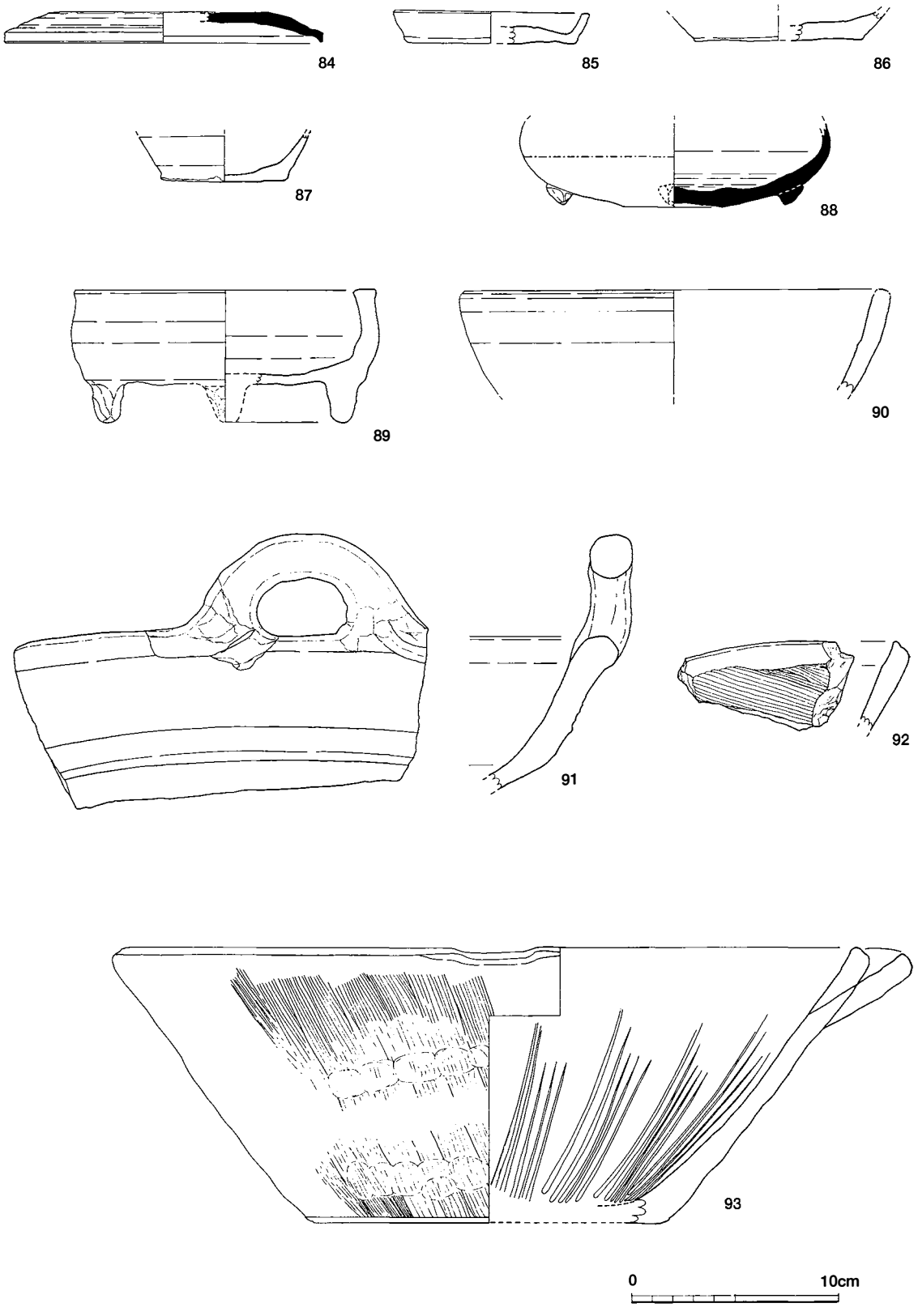


Fig. 47　Ⅳ区　近世出土遺物実測図

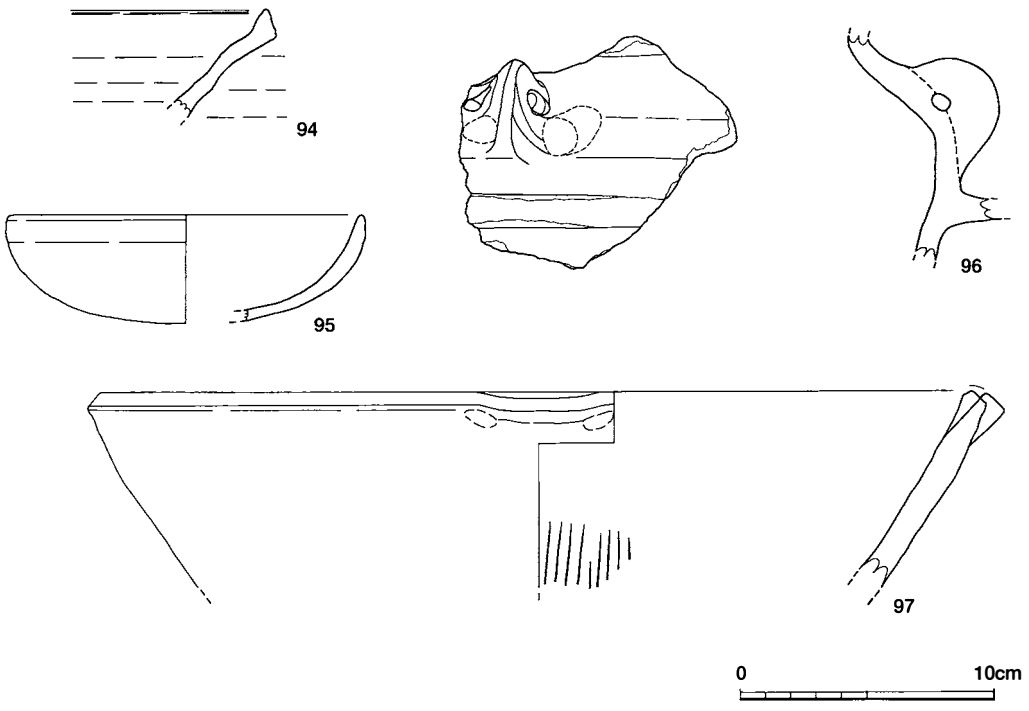


Fig. 48　Ⅳ区　近世出土遺物実測図

No.88　浅鉢　瓦質土器　近世墓埋土中出土の遺物である。外器面には箆を用いたナデ調整が明瞭に残る。内器面は粗い箆削りである。低い脚が１本残るが、本来３本であるか４本であるかは確認できない。

No.89　浅鉢　瓦質土器　近世墓埋土中からの出土遺物である。脚は２本が残され、本来は４箇所に配されていた痕跡が窺える。No.88と違い高い脚を有している。内器面が焼けているため香炉として使用されていた可能性もある。

No.90　鉢　瓦質土器　近世墓埋土中からの出土遺物である。内器面は丁寧なナデが施され、外器面は回転箆削り痕が見られる。

No.91　焙烙　瓦質土器　内外器面とも粗い箆削り痕が残る。外面には煤が付着している。

No.92　擂鉢　瓦質土器　口縁部のみの出土であるが、内器面には擂り目が残る。口縁直下では擂り目を幅約１ cm に亘り、擂り消している。

No.93　擂鉢　瓦質土器　内器面に５本からなる擂り目を有している。擂り目は間隔をおいて配置されており詰まっていない。下から上に掻き上げてある。外器面には指押さえ痕と刷毛目が僅かに残る。口縁部には指押さえによる片口が見られる。

Ⅳ区近世出土遺物（Fig. 48）

No.94　鉢　瓦質土器　口縁部断面が三角形をなす鉢である。内器面には擂り目が確認できないので鉢と報告するが、擂鉢の可能性もある。内外器面とも回転ナデが明瞭に残る。

No.95　杯　土師器　丸底の器形をなし垂直に立ち上がる口縁を持つ。口縁端部はやや尖り気味に成形され、指による丁寧なナデ調整が窺える。

No.96　貫子付羽釜　瓦質土器　胴部の鍔の一部から把手までが残っている。把手は胴部成形後の貼付けで、焼成の前段階に穿孔されている。

No.97

き上げられていないため、何本からなる擂り目かは不明である。口縁には指押さえによる片口が作られる。

2　中世の遺構（Fig.49・50）

中世の遺構は近世の面と同レベルで確認された。そのため、遺構はほとんどが近世の遺構に切られており図示したラインは推定のものも多い。確認した遺構は土坑（SK）と溝状遺構（SD）、流路、柱穴がある。

中世の遺構として確認したものは黒色土を埋土に持ち、近世との遺構の違いを確認しやすい。

溝SD005　近世墓によって切られていた。検出した溝は断面形が（AA'・BB'）とも逆台形をしており下端は平らである。遺構は埋まって行く過程の中で一度掘りなおされた痕跡が窺える（AA'）。しかし平面では確認できなかった。遺構は等高線にほぼ直行するように掘り込まれ、南に行くに従い低くなっている。遺構の両端とも調査区の外に出ており全容が分からないため遺構の用途・性格は分からない。

溝SD006　中世流路に切られている状態で検出された遺構である。幅は約1.1mで深度は約0.4mを測る。遺構は主軸を東西に、両端とも調査区外に延びている。遺構内からは遺物は出土しておらず遺構の切り合いと埋土のパターンから時期を推定した。

土坑SK022　平面プランの大半が近世墓によって切られており、遺構の平面形は推定の部分が多い。遺構の直径約2.2m、中央部での幅1.6mを測り、土坑底部はほぼフラットで水平を意識し掘削されているようである。埋土中に包含されていた礫はいずれも遺構底部から約5 cm浮き、規則性がないため埋没過程で流れ込んだものと思われる。

土坑SK023　この土坑も多数の近世墓に切られており平面プランの大部分は推定である。復元したプランは長径約4.2m短径約3.1mで東西に主軸を持ち楕円形を呈している。遺構深度は最大で33.5cmを測る。土坑内からは土師皿を中心に龍泉窯系青磁椀・東播系中世須恵器が出土している。

土坑SK024　遺構の直径は2.09mで幅1.8m(推定）の土坑である。遺構は後世に大幅な削平を受けているようで、底部近くが僅かに残るのみである。土坑内からは埋土内出土として№108（Fig

土坑SK025　SK022の北に位置し、近世墓に大半を切られている遺構である。現存する遺構は4分の1程度であり、長径1.02m、短径0.31mを測る。遺構からの遺物の出土はなかったが、埋土の状態から中世の土坑と判断し報告している。

柱穴SP004　長径38.2cm遺構深度32.4cmをはかる柱穴である。土層には直径10.3cmの柱痕が残る。柱痕を取り巻くように検出された埋土はやや締りがあり、突き固めた可能性がある。遺構中からの遺物の出土はない。

柱穴SP005　直径29.6cmのほぼ円形を呈する柱穴である。土層断面には縦に一層の土層の違いがあり、柱痕の可能性が高い。SP004ほど明確に確認できないが、土の締り具合から柱を抜き取った痕跡と判断し柱穴として報告する。埋土中からの遺物の出土はない。

流路6・7　中世の遺構が検出されているGridの南側に位置し、これより南には中世の遺構の広がりは見られない。流路は大きく2本の流れがあり、土層の観察から窺い知ることができる。北に位置する流路6とその流路に先行する流路7

へと向かう。流れ込んでいる埋土は大半が砂礫であり、途中に粘土層を挟み厚く堆積している。

遺物は古代の須恵器・土師器及び中世の遺物を多く含んでいるが、いずれもローリングが激しく、実測はしていない。

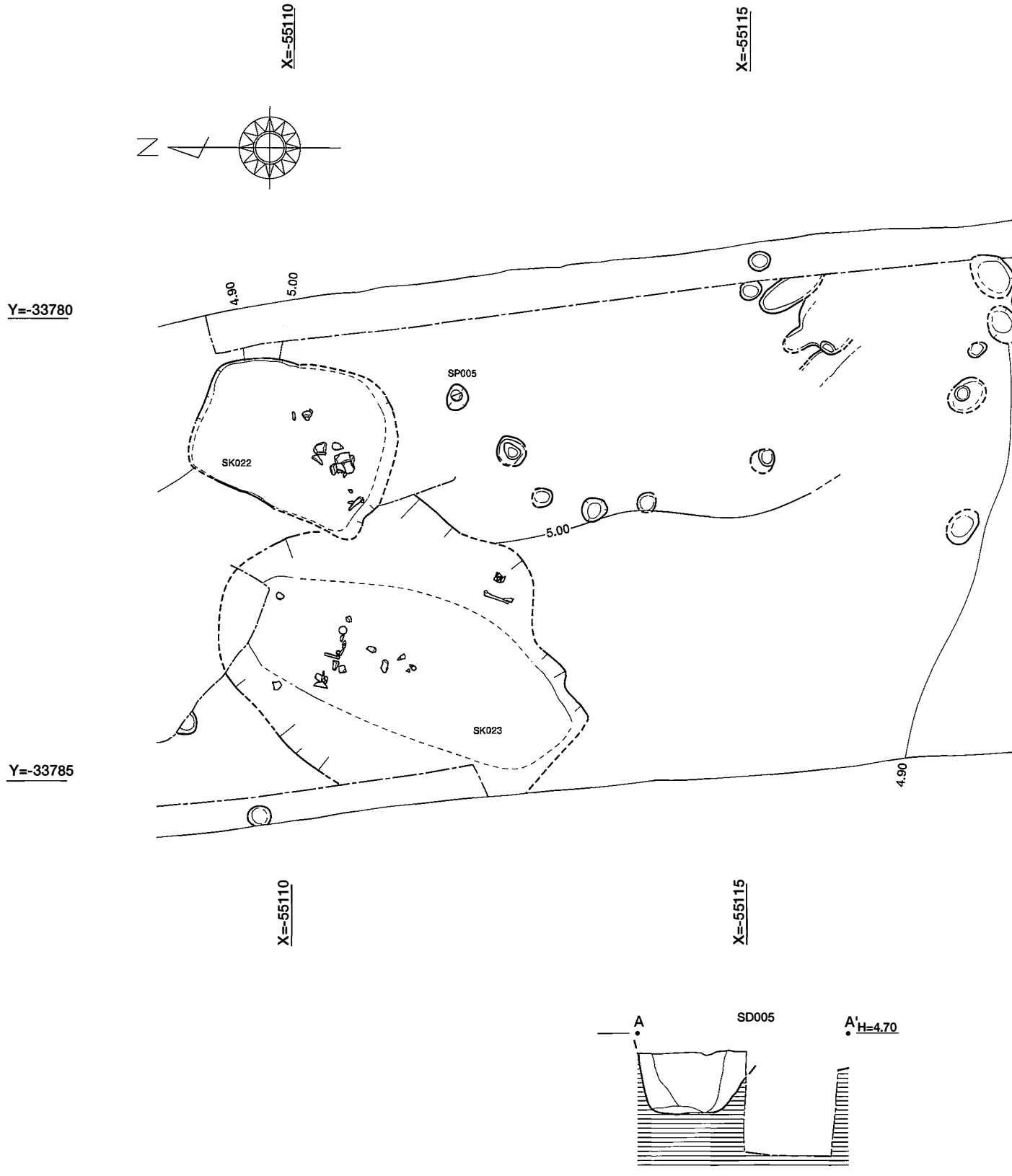
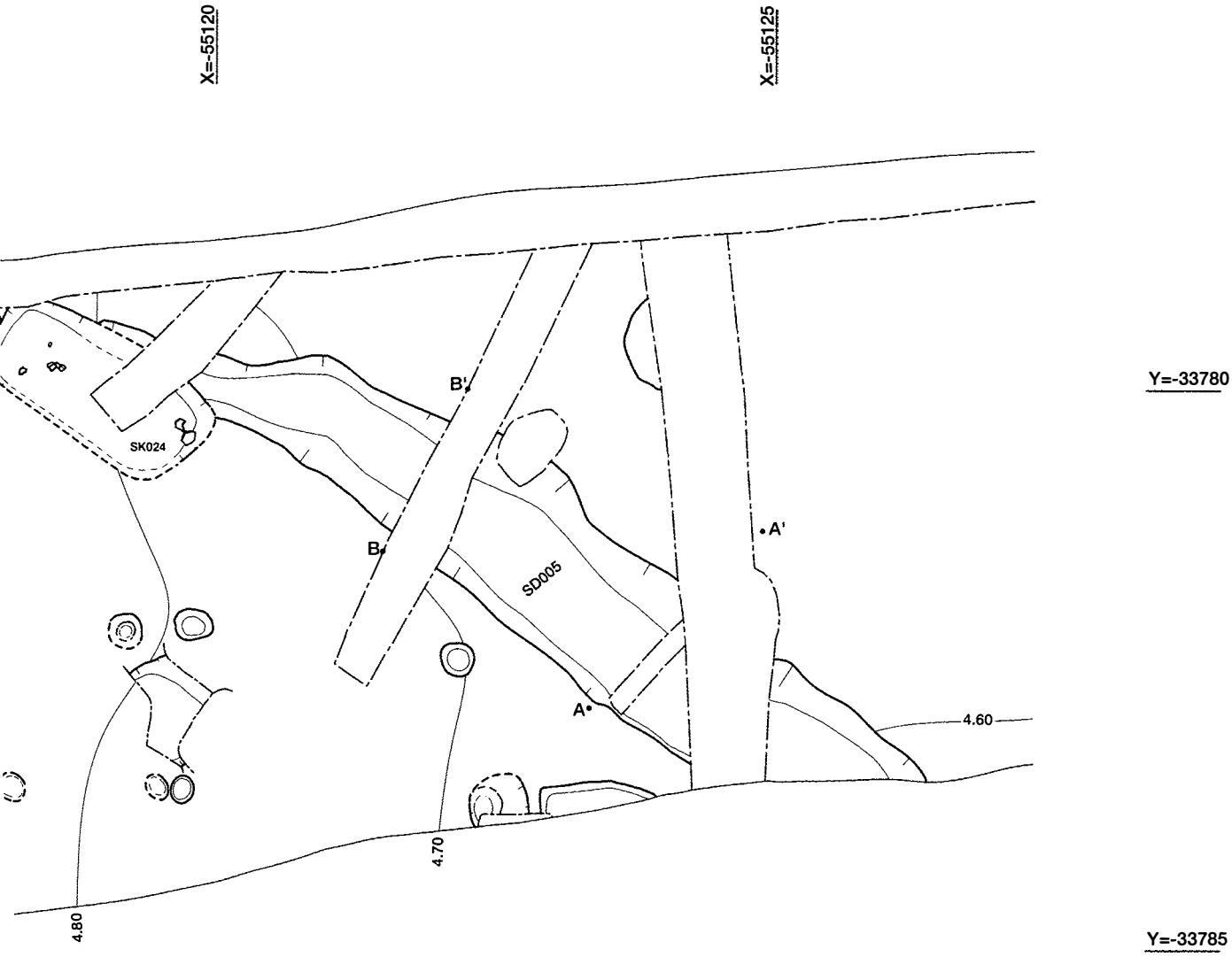
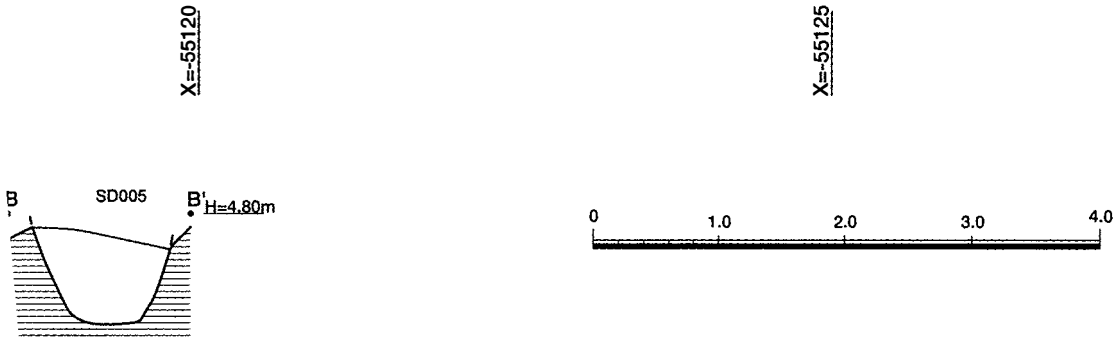

X=-55110
X=-55115
N
Y=-33780
Y=-33785
4.90
5.00
SP005
SK022
SK023
5.00
4.90
X=-55110
X=-55115
A
SD005
A'
H=4.70

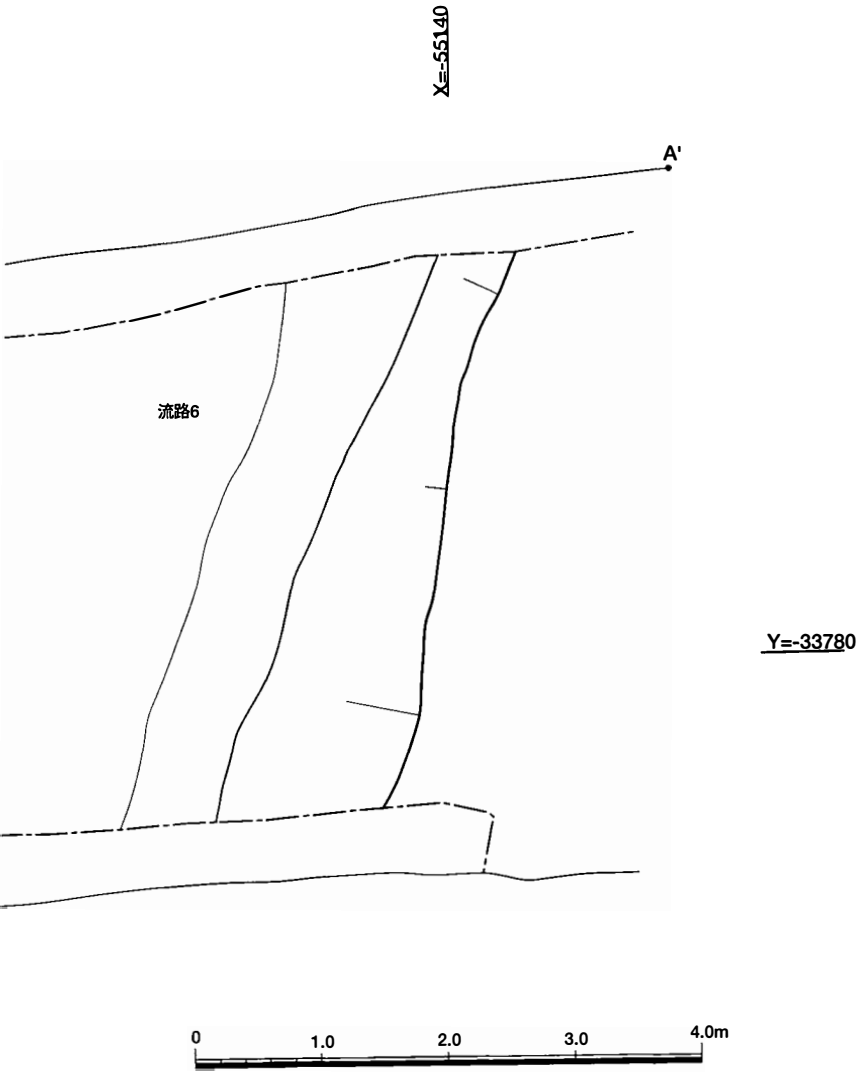
Fig. 49 Ⅳ区

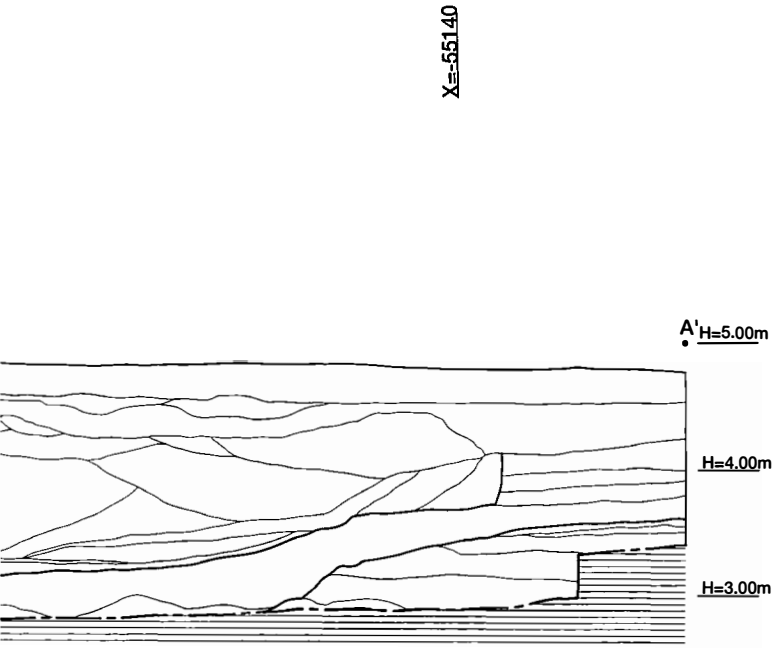

X=-55120
X=-55125
Y=-33780
Y=-33785
SK024
SD005
B
B'
A
A'
4.60
4.70
4.80


X=-55120
X=-55125
B
SD005
B'
H=4.80m
0
1.0
2.0
3.0
4.0

構配置図

Fig. 50　Ⅳ区　中世遺構配置図（旧





河川)

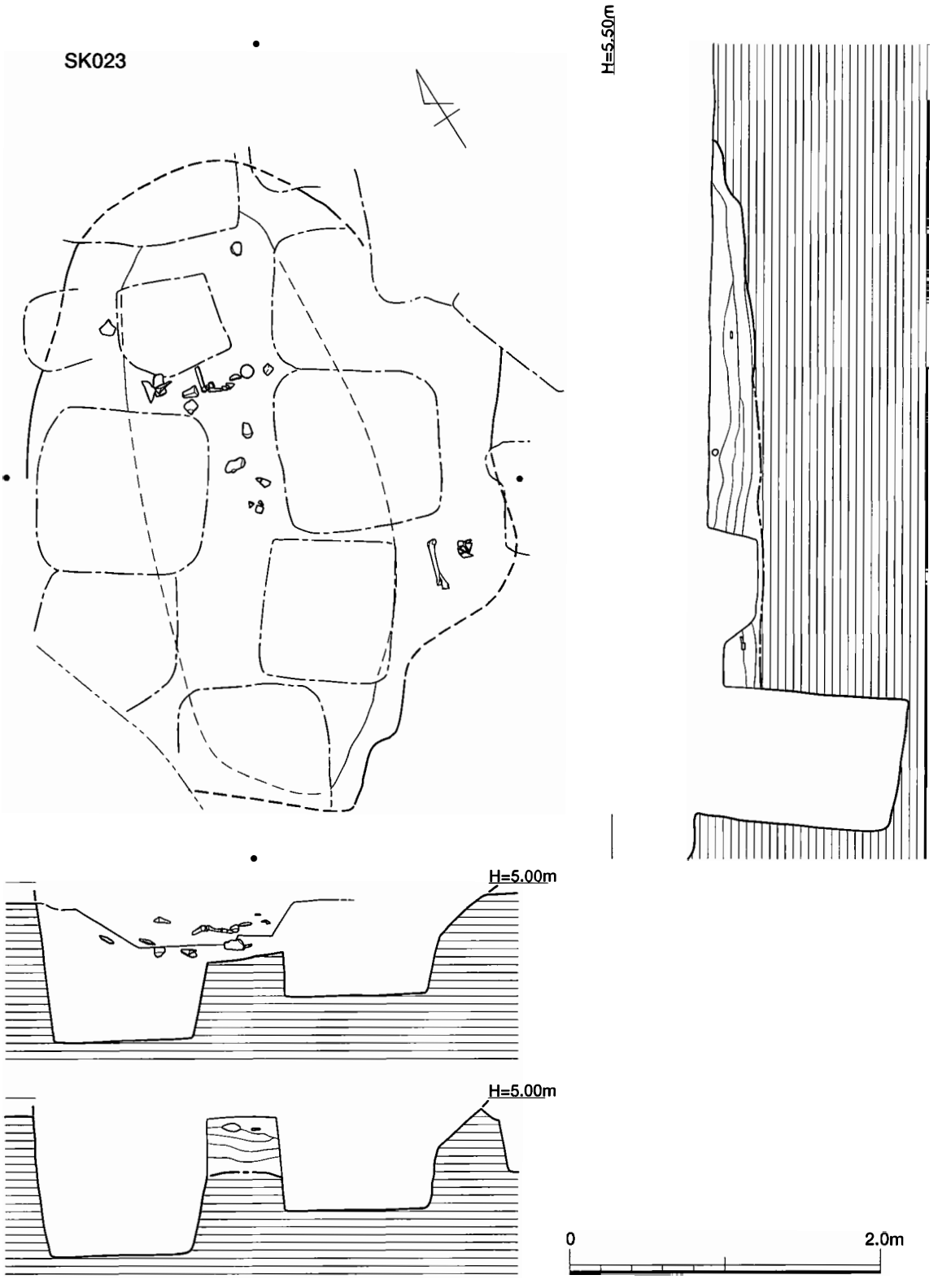


Fig. 51　Ⅳ区　土坑 SK023遺構実測図

中世の出土遺物（Fig. 54）

土坑 SK023から出土した遺物は No.98・100・101・102・103・104・105、No.109（東播系）、No.116（龍泉窯系青磁）の一括資料である。

No.98　皿　土師質土器　内外器面とも横ナデ調整。底面に糸切り痕が明瞭に残る。

No.99　皿　土師質土器　内外器面とも横ナデ調整。底面に糸切り痕が明瞭に残る。

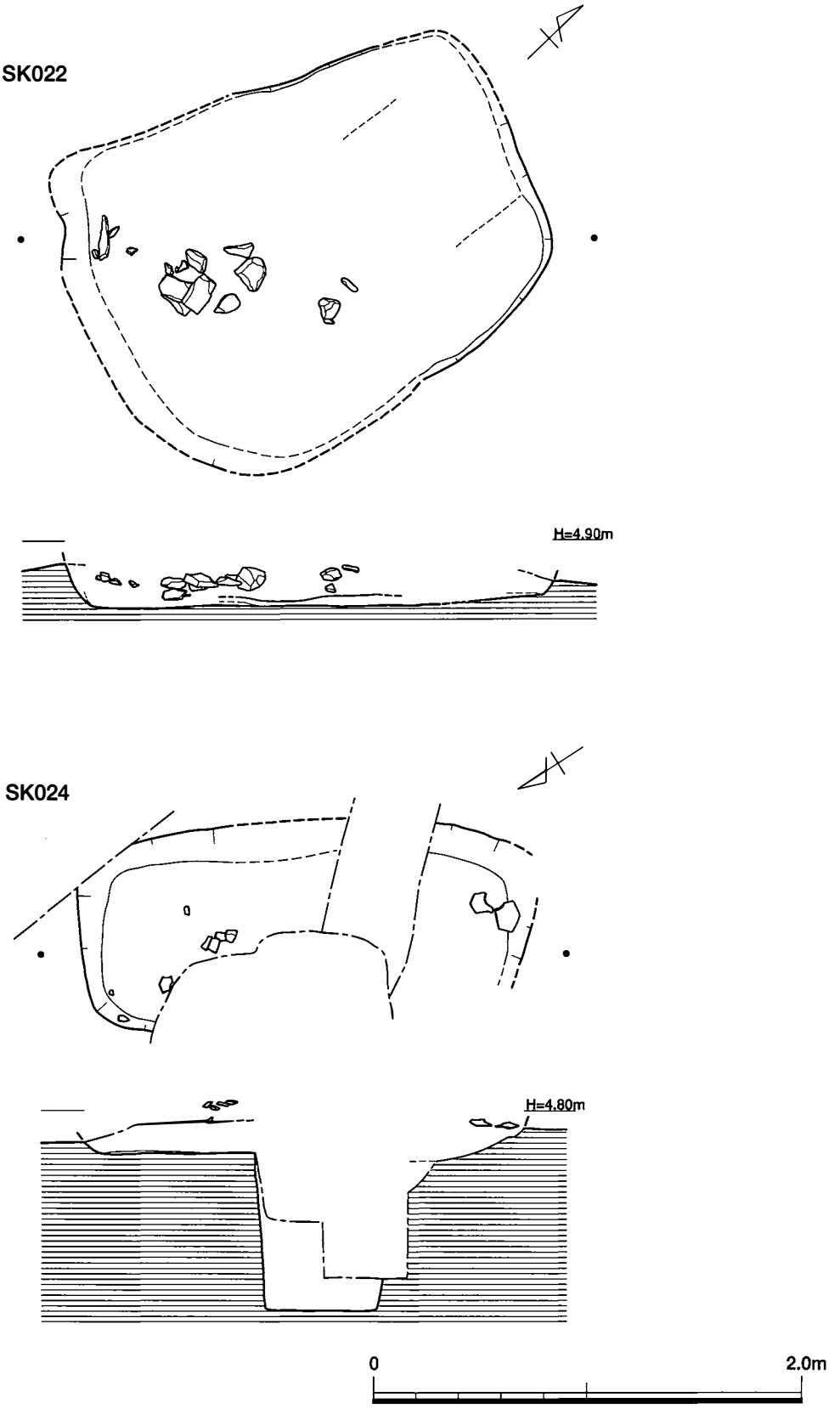


Fig. 52　Ⅳ区　土坑 SK022・024遺構実測図

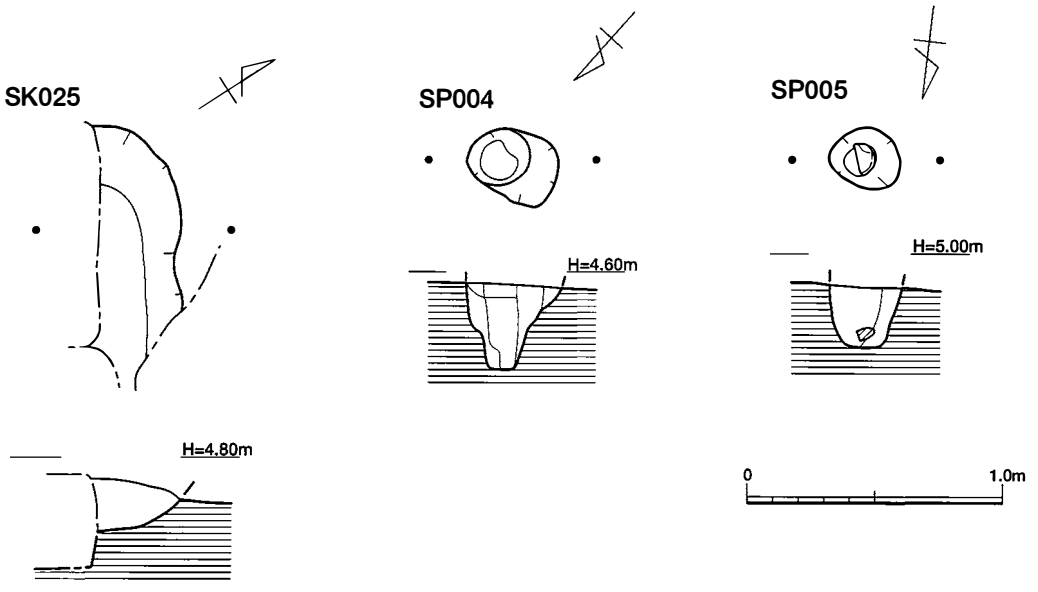


Fig. 53　Ⅳ区　遺構実測図

No.100　皿　土師質土器　内外器面とも横ナデ調整。底面に糸切り痕が明瞭に残る。

No.101　皿　土師質土器　内外器面とも横ナデ調整。底面に糸切り痕が明瞭に残る。

No.102　杯　土師質土器　内外器面とも横ナデ調整。底面は篦削り後ナデ。

No.103　杯　土師質土器　内外器面とも横ナデ調整。底面は篦削り後ナデ。

No.104　杯　土師質土器　内外器面とも横ナデ調整。底面は篦削り後ナデ。

No.105　杯　土師質土器　内外器面とも横ナデ調整。底面は篦削り後ナデ。

No.106　杯　須恵器　平底を呈する須恵器杯である。外器面は篦削り後にナデ成形が施される。底面は篦削り後にナデ。焼成は良好堅緻で胎土は長石粒を少量含む。

No.107　鉢　土師質土器

No.108　横瓶　須恵器　外器面に平行叩き、内器面には当て具痕の同心円叩きが明瞭に残る。口縁部の形態は不明である。焼成は良好堅緻で胎土は長石粒を少量含む。

No.109　鉢　須恵質陶器　口縁部断面形及び内外器面のナデ調整、重ね焼きの特徴から東播系須恵質陶器と判断される。器形は鉢として報告しているが、擂鉢の可能性もある。

（Fig

No.110　白磁皿　朝鮮系　内外器面ともに横方向の横ナデ調整篦削りで成形、指ナデ仕上げで施釉。釉調は灰白色。内器面底部に目跡あり。

No.111　青磁皿（産地不明）　内外器面ともに横方向の横ナデ調整篦削りで成形、指ナデ仕上げで施釉。釉調は灰青色。内器面底部に目跡あり。

No.112　白磁椀　朝鮮系　内外器面ともに横方向の横ナデ調整篦削りで成形、指ナデ仕上げで施釉。釉調は灰白色。内器面底部に目跡あり。

No.113　青磁皿　同安窯系（小皿Ⅰ－１ｂ類）　平底で外反しながら立ち上がり、口縁端部でやや肥厚となる。内器面底部中央には篦描きによる花文が描かれ、それを囲むように櫛点画による櫛点描文を有する。施釉範囲は体部外器面下位より以下には施釉はない。

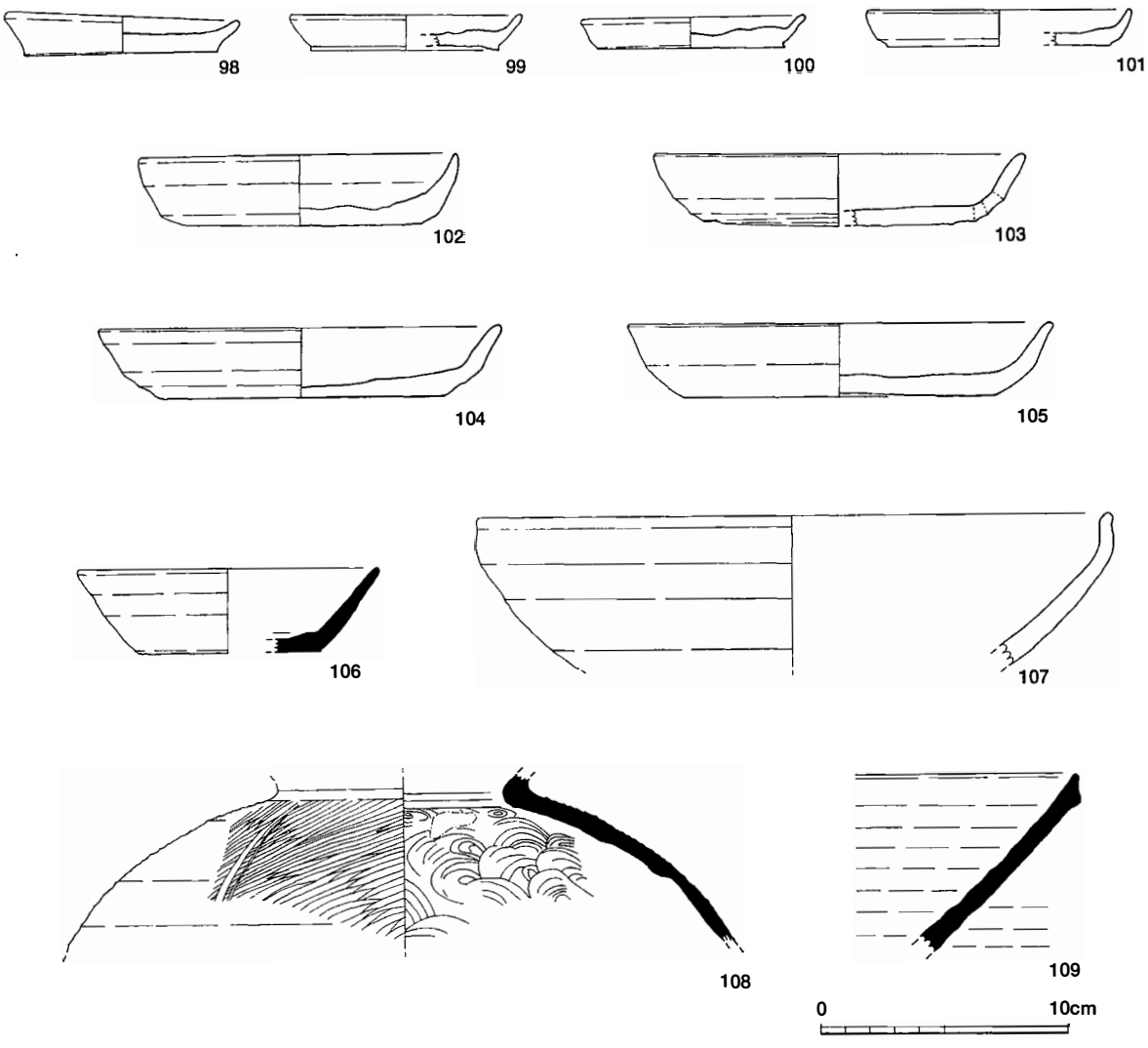


Fig. 54　Ⅳ区　中世の出土遺物実測図

No.114　青磁皿　同安窯系（小皿Ⅰ－２ｂ類）　平底で外反しながら立ち上がり、口縁端部でやや肥厚となる。内器面底部中央には箆描きによる花文が描かれ、それを囲むように櫛点描文を有する。施釉は外器面体部底部以外すべてに施釉される。

No.115　青磁椀　龍泉窯系（椀Ⅱ-d類）　器形は体部の上部が残っていないため詳細は不明であるが、体部の一部に蓮花文が薄く描かれている。底部内器面には箆描きによる花文が一輪見られる。施釉は畳付け及び高台内部には見られないが、高台外器面までは施釉される。釉薬の色調は濃緑で濁化している。

No.116　青磁椀　龍泉窯系（椀Ⅰ－２類）　器形は体部の上部が残っていないため詳細は不明である。体部外器面には文様はなく、内器面壁及び底部に箆描きによる花文が施される。施釉は畳付け及び高台内部には施されず、高台外器面まで施釉される。釉薬の色調は青灰色でやや青みが多いようである。

No.117　青磁椀　龍泉窯系（椀Ⅰ－４類）出土した部位は底部から胴部にかけての一部であり、口縁部付近の様子は不明である。底部内面には「金玉満堂」の押印が施される。施釉は畳付け及び高台内部には施されず、高台外器面まで施釉される。

No.118　青磁椀　龍泉窯系（椀Ⅰ－４ｂ類）出土した部分は高台から口縁端部まで残った状態で全体の四分の一が出土している。体部外器面は施文がないが、体部内器面には箆描きによる飛雲文が施される。釉は畳付け及び高台内部を除き、それ以外の部位には全面に施される。

No.119　青磁椀　同安窯系（椀Ⅲ－１ａ類）出土した部位が底部のみであり口縁部はない。体部外器面には箆による片彫り線が４本から５本を一単位として９箇所に施される。施釉は外器面高台周辺で僅かに高台にかからない程度に残すが、一部高台外器面及び畳付けにまでかかる。高台内部には施釉はない。

No.120　皿　土師質　糸切り底の土師皿。口縁部は低く摘み上げられる。

No.121　皿　土師質　糸切り底の土師皿。口縁部は低く摘み上げられる。120に比べ口縁部は直立する。

No.122　杯　土師質　底面回転箆削り後にナデ。内部底面は緩い傾斜をなす。

No.123　杯　高杯の杯部のみである。脚部は剥れたもので杯身に跡を残す。

No.124　杯　土師質　底面回転箆削り後にナデ。外器面には僅かだが削り痕が残る。

No.125　杯　土師質　底面回転箆削り後にナデ。外器面には僅かだが削り痕が残る。器壁は直線的に外に伸びる。

No.126　甕　土師質　口縁部から胴部へかけての部位である。外器面には縦に刷毛目があり、口縁部下では横方向にナデる。内器面は外反する口縁上に刷毛目が施され、内器面には箆削り痕が残る。

No.127　椀　高台部は接合面から剥げる。器壁は薄く仕上げられ外器面には横ナデ調整痕跡が明瞭に残る。

No.128　椀　貼り付け高台椀である。体部は直線的に外反し外器面に回転箆削り痕を残す。

No.129　擂鉢　瓦質土器　内器面に数本の擂り目を有している。擂り目はいずれも浅く目は詰まっていない。

No.130　甑　土師質土器　把手の部分である。甑本体に跡付けされている。箆削りにより成形され粗く仕上げられている。

No.131　壺　須恵質陶器　内外器面ともに回転箆削り痕が残される。頸部は緩やかに屈曲し丁寧な成形である。

No.132　壺　須恵質陶器　胴部内器面に同心円叩き痕跡を残すが、外器面には叩き痕跡は見られない。口縁端部はやや尖り気味に仕上げられる。

No.133　壺　須恵質陶器　外器面に粗い叩き痕跡を残す。内器面にも僅かに叩き痕が残るが工具の推定までには至らない。

No.134　鉢　須恵器　胴部に貼り付けてある把手状突起下に２条からなる沈線が巡る。鉢本体は垂直に立ち、底部は平底をなすものと思われる。

No.135　杯　須恵質陶器　外器面には深い削り痕跡が残る。底部は平底だが、やや丸みを帯びる。

No.136　浅鉢　瓦質土器　脚付きの鉢である。内器面が煤により黒色を呈し、口縁部近くに多く煤が付着する。香炉として使用されていた可能性が高い。

No.137　石鍋（口縁部）滑石製　外器面に台形状の突起が削り出しで付く。内器面はやや削り痕が残る。

No.138　石鍋（胴部から口縁部）滑石製　外器面突起を挟み、上部に細かな単位で削りがあり、突起下にはやや幅が広い削りが３段に渡り施される。内器面にも口縁端部近くで削り痕があるが、底部に行くに従い不鮮明になる。

No.139　石鍋（口縁部）滑石製　外器面に台形状の突起が削り出しで付く。内器面はやや削り痕が残る。

No.140　石鍋（口縁部）滑石製　外器面突起の上下に削り痕跡が明瞭に残る。上部が狭い削りで、下部が幅の広い削りとなる。

No.141　石鍋（把手部）滑石製　外器面に付く把手は吊り下げ用と思われる。調整は削り調整で吊り下げ孔は一方向からの穿孔である。

No.142　石鍋（底部）滑石製　底部に補修穴を持つ石鍋底部である。一部に器壁の立ち上がりがあるため直径が確認される。No.140の口縁部に伴うものと思われる。

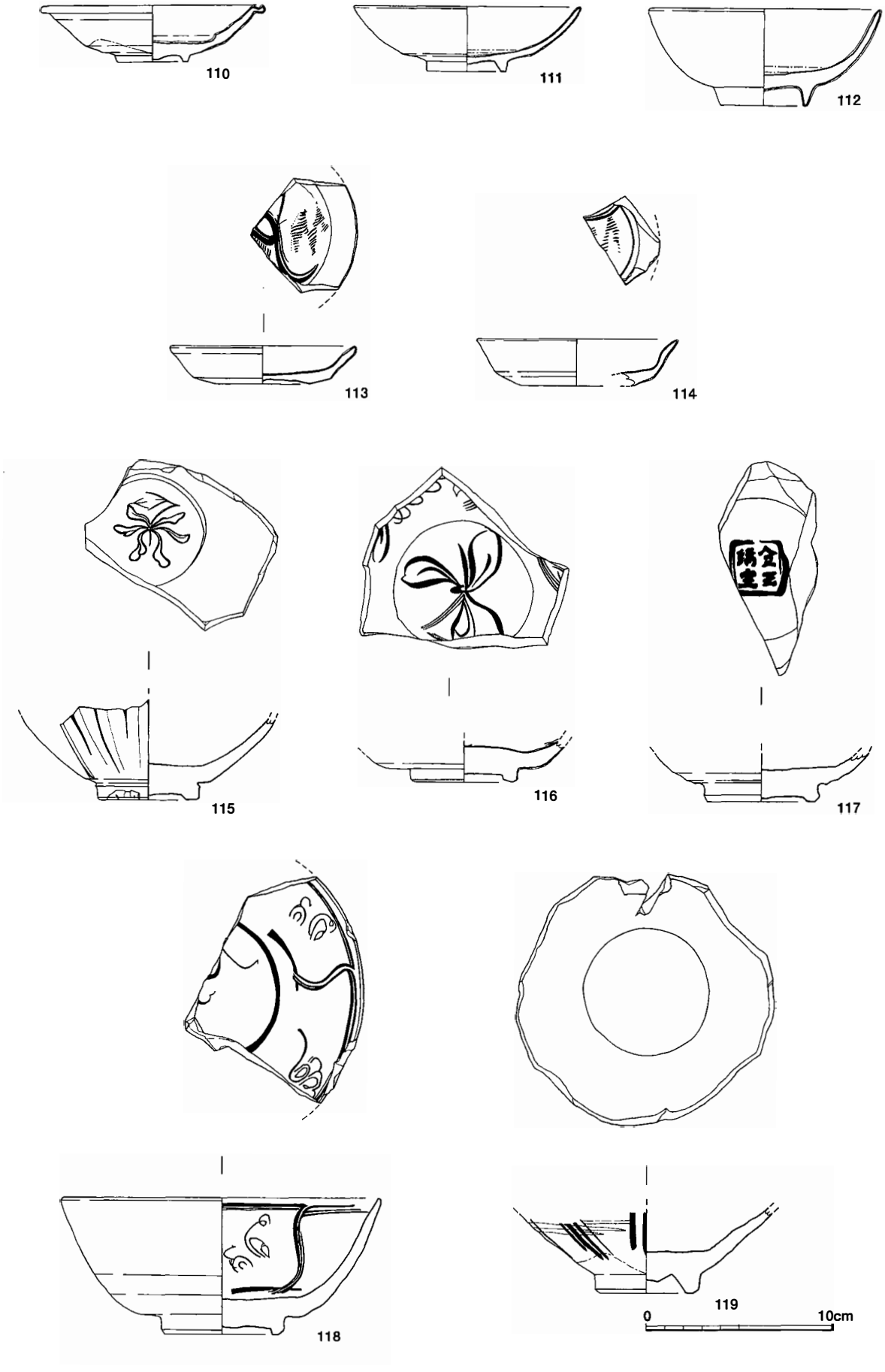


Fig. 55　Ⅳ区　中世出土遺物実測図

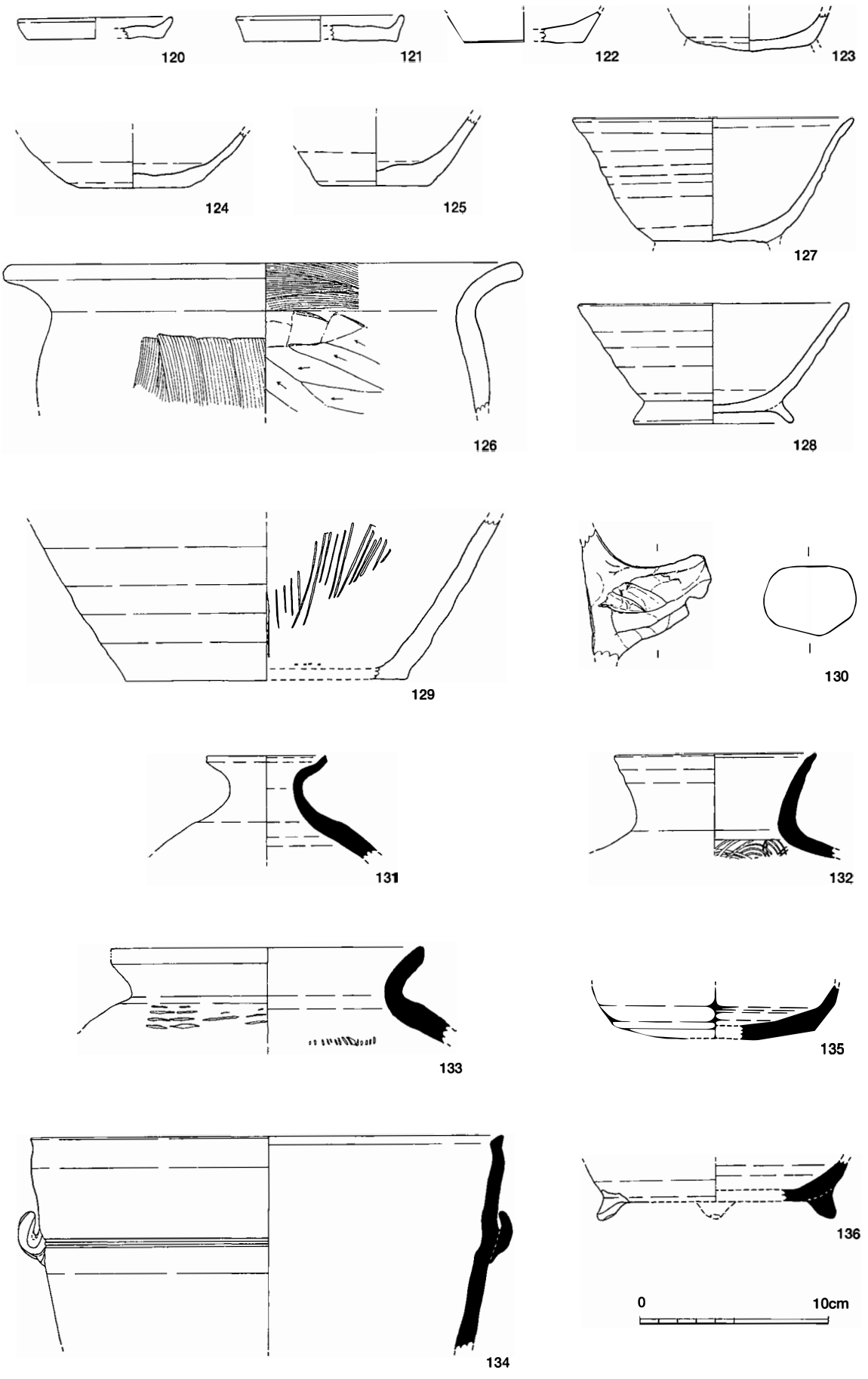


Fig. 56　Ⅳ区　古代～中世出土遺物実測図

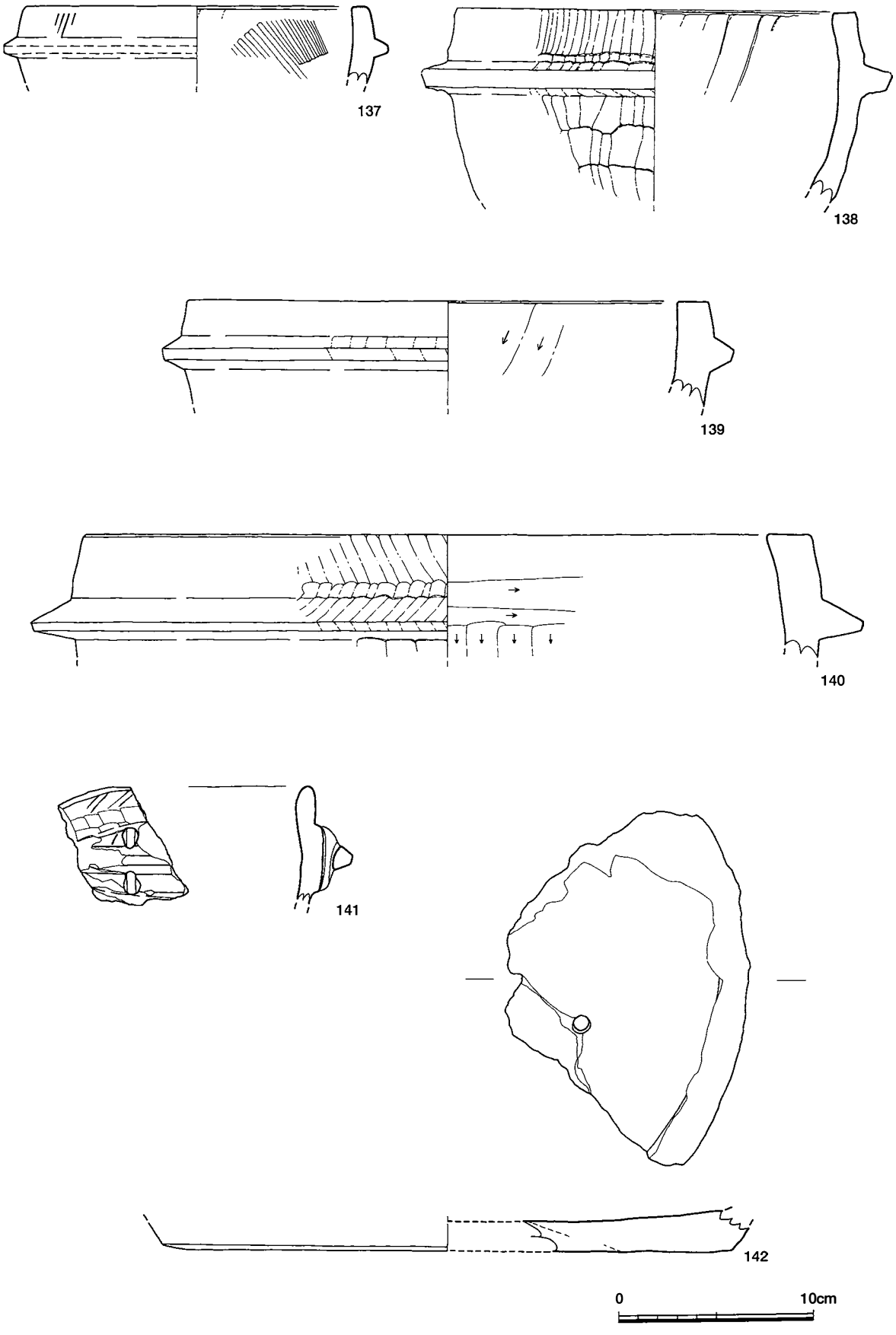


Fig. 57　Ⅳ区　中世出土遺物実測図

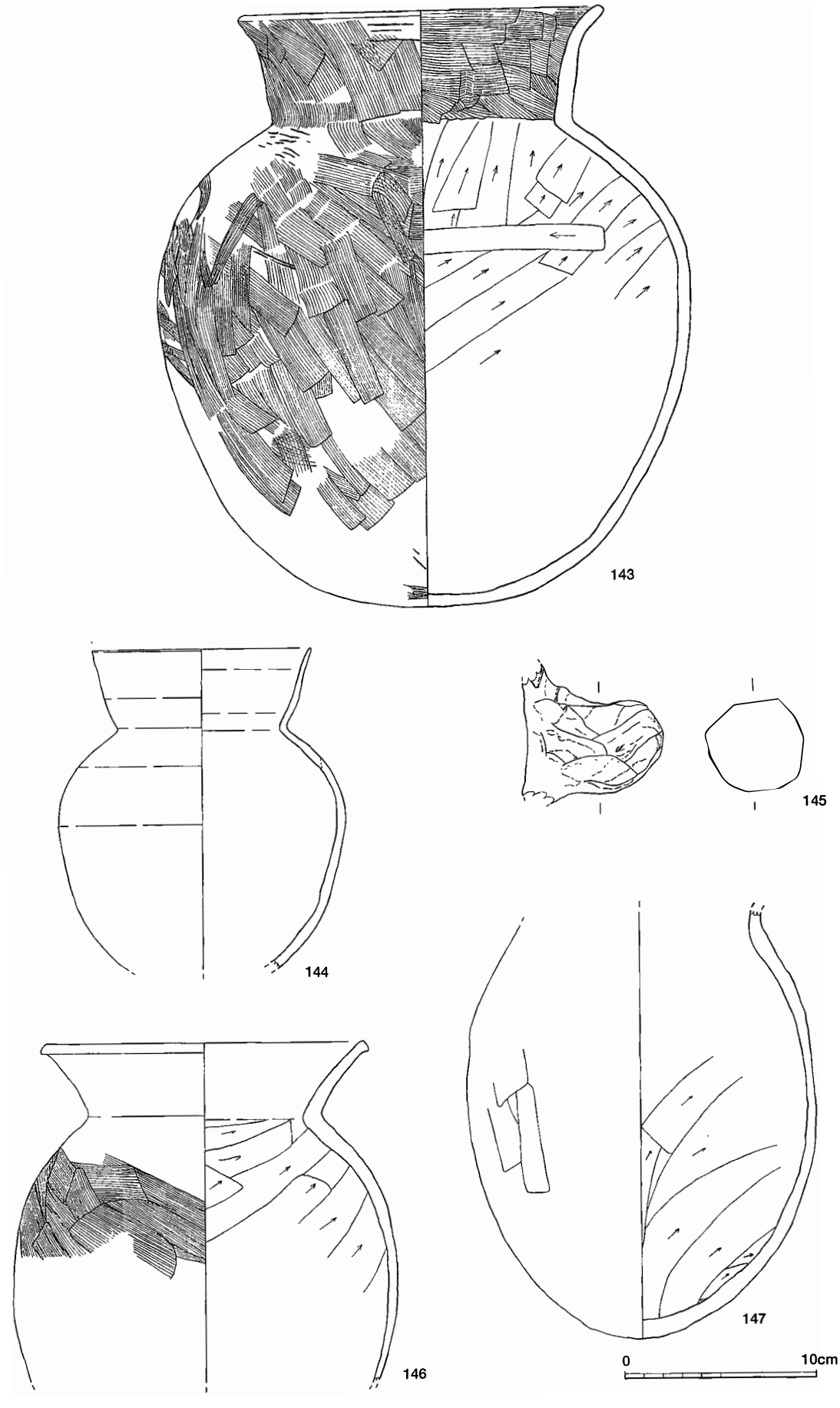


Fig. 58　Ⅳ区　古墳時代出土遺物実測図

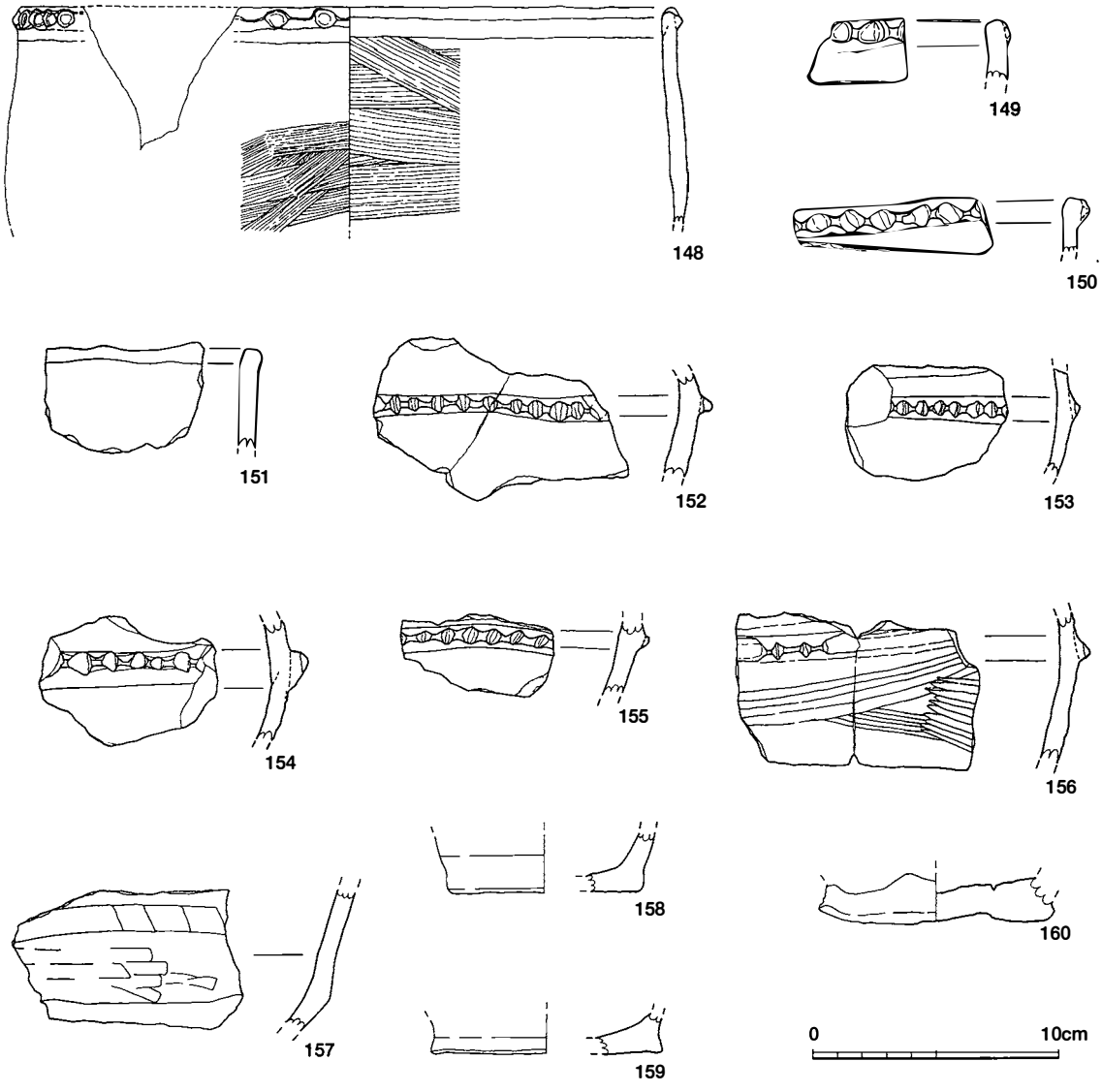


Fig. 59　Ⅳ区　SD007出土遺物実測図

3　古墳時代の遺構（Fig. 58）

No.143　壺　土師器　外器面（底部を除く）から内器面頸部まで刷毛目による調整が施されている。内器面胴部は箆削りが下から上に向かい明瞭に残る。口縁は胴部から直立し端部でやや外反する。

No.144　壺　土師器　口縁部の中ほどがややふくらみを持つ口縁形態をなしている。端部は僅かに薄くなりながら直線的に延びる。内外器面はナデ調整が施され削りや刷毛目は残されていない。

No.145　甑（把手）土師器　断面がほぼ円形を成している把手である。外器面は削りの痕跡が明瞭に残る。

No.146　甕　土師器　外面口縁部下から刷毛目による調整痕が明瞭に残る。内器面は下から上へ箆により削り上げている。口縁部は外側へ強く外反し、端部は工具を使用し成形している。

No.147

しか確認できない。内器面は底部から上へとナデ上げられている。

出土遺物（Fig. 59）

Fig

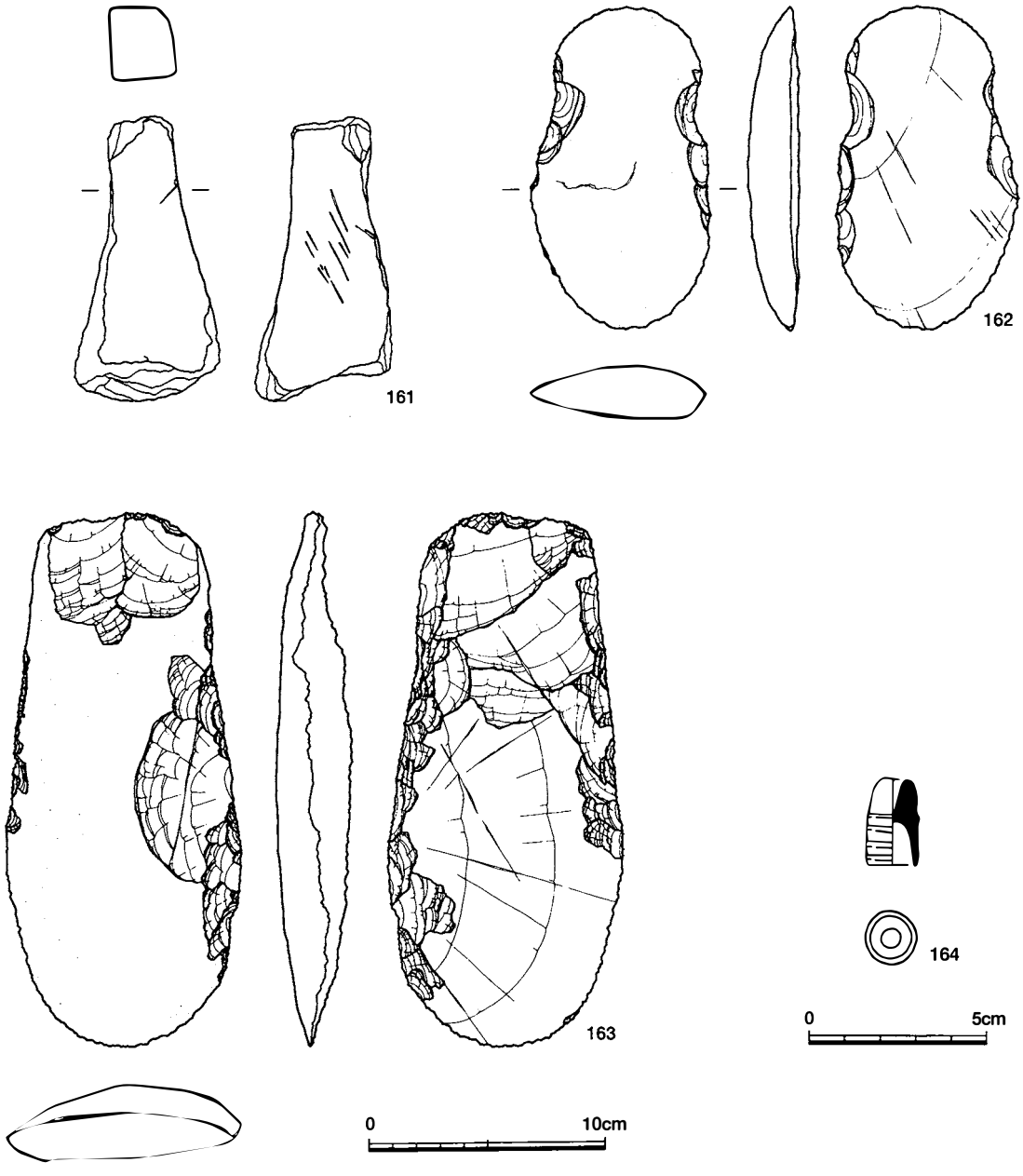


Fig. 60　Ⅳ区　出土遺物実測図

土中から出土した遺物である。土器はいずれも深鉢型土器の口縁部から底部までのものである。

口縁部に施される粘土貼り付け部の刻みは指押さえによるもので、胴部に施される粘土貼り付けは工具を押し当てて刻目が施されている。

No.148　深鉢　縄文土器　胴部から垂直に伸びる口縁部である。口縁端部には粘土貼り付けに指押さえ痕跡が見られる。体部には内外器面ともに箆状工具による調整痕が残る。

No.149　深鉢　縄文土器　口縁端部付近のみの小片である。粘土貼り付けに施されている刻目（指押さえ）が僅かに窺える。

No.150　深鉢　縄文土器　口縁端部付近のみの小片である。粘土貼り付けに施されている刻目（指押さえ）が僅かに窺える。

No.151　深鉢　縄文土器　垂直に立ち上がる口縁部である。粘土貼り付けによる部分は見られない。

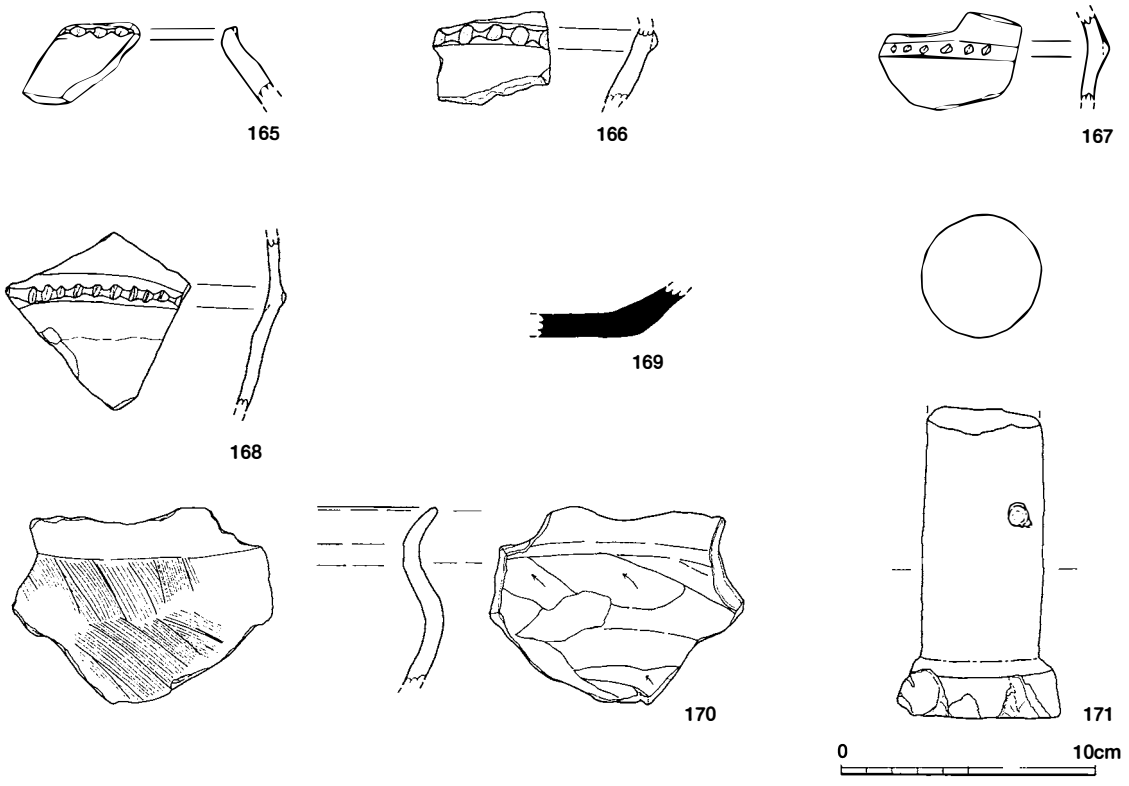


Fig. 61　Ⅳ区　出土遺物実測図

No.152　深鉢　縄文土器　胴部に施された突帯部である。刻目は棒状の工具を用いられ口縁部に比べると細かな刻目となっている。

No.153　深鉢　縄文土器　胴部に施されている刻目突帯文である。刻目は細かい。

No.154　深鉢　縄文土器　胴部に施されている刻目突帯文である。刻目は細かい。

No.155　深鉢　縄文土器　胴部に施されている刻目突帯文である。刻目は細かい。

No.156　深鉢　縄文土器　胴部に施されている刻目突帯文であるが、残存部には貼り付け粘土は剥がれている。外器面には板状の工具痕が残されている。

No.157　深鉢　縄文土器　胴部屈曲部辺で突帯等の貼り付けはない。外器面には横方向の調整痕が残る。

No.158　深鉢　縄文土器　平底をなす底部である。外器面はナデ痕跡が残る。

No.159　深鉢　縄文土器　平底をなす底部片である。小片であるため内外器面とも調整は不明。

No.160　深鉢　縄文土器　やや底部に凸凹があるが、底部をなしていたものと思われる。

No.161　砥石（天草陶石）を利用した砥石である。使用面は4面にわたり一部には溝状の削痕も残る。中央部は使用により磨り減り細い。細い部分で欠損が見られるため、使用時に折れたものと思われる。

No.162　構SD007（古墳時代溝状遺構埋土中出土）の砂岩製打製石斧である。自然の礫表面の曲線を最大限利用したもので、裏面の剥離は一撃で加えられている。短冊形に剥離した石材縁辺部の薄い部分をそのまま刃部として利用し、柄の装着部分と思われる範囲にノッチ状の調整が入る。同じ溝状遺構埋土から刻目突帯文土器が出土している。

No.163　石斧　No.162と同じ溝SD007埋土中より出土している砂岩製打製石斧である。製作技法はNo.162と同様に自然礫の礫面を最大限活かし、刃部は薄く剥離した部分を利用している。表面は柄の装着部分を中心に細かな調整が縁辺部に入る。また裏面の大部分は最初に打ち欠いた剥離面を利用しつつ、刃部を省く範囲に細かな剥離が残る。

No.164　調査区内埋土中より出土した鉛弾である。砲弾型を呈し、外器面下半分には螺旋が施される。上部と下部内器面は空洞である。

No.165から168は刻目突帯文を有する甕形土器の口縁から胴部にかけて出土した遺物である。

出土地点はSD007（古墳時代溝状遺構）にかかるNo.4、No.12トレンチ内から出土している。

No.165　深鉢　縄文土器　刻目突帯文を有する甕形土器の口縁である。口縁上辺は平らに成形され外辺端部には粘土貼り付けの後、刻目が施される。

No.166　深鉢　縄文土器　刻目突帯文を有する甕形土器胴部片である。突帯部は粘土の貼り付け後に箆状の道具で刻まれる。

No.167　深鉢　縄文土器　刻目突帯文を有する甕形土器胴部片である。胴部最大径にあたる部分に粘土貼り付け後、刻目が施される。胴部は薄く成形される。

No.168　深鉢　縄文土器　刻目突帯文を有する甕形土器胴部片である。胴部屈曲部分にあたり内部には粘土継目痕が見て取れる。器壁は薄く成形されている。

No.169　杯（底部）　須恵器

底部から胴部にかけて残る須恵器である。底部は箆削り後にナデが施され、体部は、外器面から内器面にかけて横ナデが見られる。

No.170　甕（口縁部）土師器

口縁から胴部張り出しにかけての部位である。断面形態は緩やかにS字を描き、口縁端部から頸部にかけて丁寧な横ナデが施される。外器面胴部には明瞭な刷毛目が残され、内器面は斜め上方から大胆な削りが施される。

No.171　トチン（窯道具）近世

断面形態は真丸で端部は安定するよう広がっている。胎土には陶石を利用しているため窯内においての使用した結果、陶器化している。器種としては小型の部類に入るものであろう。

考　察

本遺跡から出土した遺物は新しいもので、Ⅲ区で近代の陶器、磁器から古くはⅣ区において縄文晩期の土器群（甕形土器）までと多彩である。Ⅲ区においては、検出された遺構は少なく、包含層出土の遺物が多いため、遺構との絡みでは時期を設定できる資料は少なかった。

唯一、Ⅲ区で検出した井戸状遺構は本調査では大きな成果の一つであろう。井戸は大部分が平成13年度に本線部において調査が実施された部分にあたり、当調査区からは全体の三分の一以下でしか検出されていないが、断面観察の結果、素掘りの掘り方を有し簡易な木枠による施設があった事が窺える。しかし、本調査区内では木枠の痕跡は見受けられなかった。埋土中からは8世紀後半の時期を与えることのできる須恵器が出土しているが遺構検出時の埋土の状態が他に確認された中世の埋土に類似していることから、中世の遺構の可能性が高い。Ⅲ区に対しⅣ区は、遺構内出土の遺物を検出できた。

Ⅳ区では近現代の墓・土坑・溝・流路を始め、中世の土坑・流路・溝・柱穴、古墳時代の溝などを確認することができた。(Fig.16)

最上面遺構として確認できた近世から現代にかけての木棺土坑墓は、棺の形態から8種に分けられる。

まず、桶棺から始まった直葬形態は、箱棺においても継承され、肥前系の飯胴甕を利用した甕棺（蓋は擂鉢）を利用しながら近代まで続いていたようである。調査の結果、Ⅳ区で最も新しい遺構は棺底から昭和34年の十円玉を出土している墓ST006で、最も古い墓は江戸時代を通じて鋳造されている「(新) 寛永通宝」が桶棺底から出土した墓ST056であった。

出土した寛永通宝の鋳造年代が不明であるため、実年代の推定にまでは行かなかったが、この土地で確認できた墓は江戸時代から近代までと広い時間幅が見られ、長期間営まれていた墓域であったことが窺える。内部主体となる箱棺も良好な状態で残されており、九州横断道路建設に伴って調査が実施された「川田京坪遺跡」で報告されている近世墓の分類を基に観察しても、その類例の範疇に収まっており、近世の八代市域での埋葬形態の一端を窺い知ることができよう。

中世の遺構と認定し調査を実施した遺構は、近世墓により壊され、殆どが当時の姿のまま検出されたものはない。しかし、土坑SK023から出土した遺物は、東播系中世須恵器擂鉢（No.109）と越州窯系青磁椀（No.116・118）、糸切り底を呈する土師皿（No.101・102・103・104・105）が一括資料として良好な状態で出土している。また、溝状遺構は溝SD005と溝SD006が調査区の向きと直交する方向で検出されたが、遺構の性格等までの確認はできなかった。

流路６・７

別できた。(Fig

かったが、古墳時代の須恵器・土師器から中世の陶器まで幅広く含まれていた。

古墳時代の遺構は調査区を南北に延びる溝SD007のみである。

出土しているNo.143～147ま

４世紀前半から４世紀中頃と推定できよう。平成13年に本線部で調査を実施している中片小路遺跡Ⅶ区において検出されている溝と合わせると約7

つ遺構と想定出来るものは、灌漑用流路若しくは集落に伴う区画溝の一部の可能性が高い。

当遺跡から東側に直線距離で約100ｍの距離にある大塚古墳群（大塚古墳・茶臼塚古墳・長塚古墳）、乙丸古墳群が同時代の遺構として近い位置にある。それら古墳群を築造した人々の生活の痕跡の一部であることも想定できよう。溝が４区南側の近世流路手前（Ｘ＝55160、Ｙ＝337

の広がりは、段丘上の旧地形の残る南側に向かって広がっていることが予想される。

また、溝埋土からは、八代平野で出土例の少ない刻目突帯文土器が打製石斧とともに出土している。土器は深鉢型を呈し口唇部及び胴部最大径部に突帯を貼り付け刻目を施す土器で、弥生前期後半から末に設定され広く有明海沿岸に分布する「亀ノ甲タイプ」であろうと思われる。

打製石斧は出土している２点とも、作成技法に「素材となる石材の部位の一部に石材表面を利用している」「刃部は自然剥離面を利用している」「柄の装着部分に抉りが入る」事などから、人吉・球磨地方で広く見ることのできる「抉入石斧」と思われる。

このことから、有明海沿岸の土器文化と人吉・球磨地方の石器が同時に近い場所から出土していることが、球磨川が八代海へ流れ込んでいる八代という土地を最も良く説明している材料となろう。

出土遺物のなかで最も新しい遺物に鉛弾（Fig

盛んに輸入された洋式銃（イギリス製ミニエー銃、エンフィールド銃等）に多く採用されており、主に戊辰戦争や西南戦争において使用されている。八代市内においても、187

陸を発端として市内において激しい攻防戦が繰り広げられており、その際の流れ弾であろう。

以上のことから、４区は弥生時代前期の遺物を始めとして、古墳時代初頭・中世、江戸時代～近代まで連綿と土地利用されてきたことが窺える。

本調査の結果、遺跡は南側へ広がることが予想される。当該地域は現在でも住宅が多く、今後も住宅建設が予想されるため、八代地域において開発と文化財保護の両立を諮る必要が高い地域の一つであろう。

（長谷部）

参考文献

中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』1995

東洋陶磁学会『東洋陶磁史』2000

『八代市史第１巻』1992　八代市教育委員会

『新宇土市史』通史編第一巻　自然・原始古代　宇土市 2003

網田龍生「奈良時代肥後国の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会 1994

網田龍生「肥後における須恵器生産の終焉」『中世土器研究論集』日本中世土器研究会 2001

八代市・洗切遺跡調査団『洗切遺跡調査報告』1982

八代市教育委員会『宮地年神遺跡・キリシタン寺院跡・宮地池尻遺跡』八代市文化財調査報告書第20集 2003

太宰府市教育委員会『大宰府条坊ＸＶ－陶磁器分類編－』大宰府市の文化財第49集 2000

熊本県教育委員会『生産遺跡基本調査報告書Ⅰ』熊本県文化財調査報告第38集 1979

熊本県教育委員会『興善寺Ⅰ』熊本県文化財調査報告第45集 1980

熊本県教育委員会『上片町水田遺跡』熊本県文化財調査第109集 1989

熊本県教育委員会『西片町遺跡』熊本県文化財調査報告第153集 1996

熊本県教育委員会『頭地松本Ｂ遺跡（２）』熊本県文化財調査第17

熊本県教育委員会『杉の本遺跡』熊本県文化財調査報告第196集 2001

熊本県教育委員会『長野遺跡』熊本県文化財調査第189集 2000

熊本県教育委員会『古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡』熊本県文化財調査第216集 2003

遺物観察表

Tab. 3　中片小路Ⅲ区土器観察表

fig	遺物番号	種別	器種	出土地点 遺構	Grid	注記	法量(cm) 残存高	最大胴径	口径	底径
10	1	須恵器	蓋		A、B－4 G	一括	1.9	—	(15.4)	—
	2	須恵器	蓋			一括	0.9	—	(15.4)	—
	3	須恵器	杯			一括	4.6	—	12.6	8.4
	4	須恵器	杯			一括	4.4	—	12.6	8.4
	5	須恵器	杯		B－7 G	トレンチ一括	2.3	—	—	(8.0)
	6	須恵器	杯			トレンチ一括	1.4	—	—	(5.2)
	7	須恵器	杯			8 T一括	1.9	—	—	(8.6)
	8	須恵器	杯		B－5 G	一括	1.5	—	—	(6.8)
	9	須恵器	鉢		B－6 G	一括	2.9	—	—	—
	10	須恵器	皿		B－6 G	一括	2.1	—	—	—
	11	須恵器	杯			トレンチ一括	4.6	—	(11.6)	高台 (7.9)
	12	須恵器	椀		B－6 G	一括	1.45	—	—	高台8.0
	13	須恵器	杯		B－4 G	4 T一括	2.0	—	—	高台 (9.2)
	14	須恵器	椀		B－4 G	一括	1.8	—	—	高台 (10)
	15	須恵器	杯	SE001		一括	2.9	—	—	高台 (8.8)
	16	須恵器	無蓋高杯			一括	3.2	—	—	—
	17	須恵器	高杯			トレンチ一括	5.8	—	—	—
	18	須恵器	皿		B－5 G	一括	1.5	—	(12.8)	—
	19	須恵器	皿			一括	4.0	—	(18.6)	高台14.4
	20	須恵器	長胴瓶			トレンチ一括	5.1	—	—	(10)
	21	須恵器	甕			トレンチ一括	5.0	—	(24.0)	—
11	22	土師器	蓋		B－7 G	トレンチ一括	4.3	—	17.8	—
	23	土師器	杯			トレンチ拡張一括	4.1	—	(12.8)	—
	24	土師器	手捏土器椀			一括	2.5	—	—	—
	25	土師器	椀			トレンチ拡張一括	3.8	—	—	(6.6)
	26	土師器	杯			3 T一括	3.9	—	(5.0)	—
	27	土師器	杯		B－4 G	一括	5.0	—	(12.0)	(6.6)
	28	土師器	杯			8 T一括	2.4	—	—	高台 (8.0)
	29	土師器	杯			トレンチ一括	1.9	—	—	—
	30	土師器	杯		B－6 G	一括	4.1	—	(15.6)	高台 (11.2)
	31	土師器	椀			一括	4.2	—	—	高台 (9.2)
	32	土師器	椀			7 T一括	4.8	—	(13)	—
	33	土師器	椀		B－6 G	一括	6.6	—	(12.6)	高台 (6.6)
	34	土師器	椀		B－4 G	一括	5.5	—	—	高台 (8.7)
	35	土師器	皿		B－4 G	一括	1.9	—	—	(13.6)
	36	土師器	小皿	SK005		No.1	0.8	—	—	6.7
	37	土師器	皿		B－4 G	一括	1.8	—	—	(11)
	38	土師器	椀			トレンチ拡張一括	1.8	—	—	高台 (10)
	39	土師器	壺		B－5 G	一括	4.8	—	—	—
	40	土師質土器	鉢		B－4 G	一括	2.9	—	—	(8)
	41	土師器	甕			カクラン②一括	2.8	—	(28.4)	—
	42	土師器	壺			トレンチ一括	12.5	—	14.1	—
	43	土師器	小型甕		B－6 G	一括	6.5	(15.4)	(14)	—
14	58	土錘	土錘		A－3 G	一括	4.1	1.1	—	—
	61	不明	土製品		A、B－4 G	一括	—	—	—	—
	62	瓦	布目瓦		A、B－2 G	一括	2.9	幅1.4	—	—

中片小路Ⅲ区土器観察表

特徴 外器面	外底面	内器面	内底面	備考	PL	遺物番号	fig
回転篦削り後ナデ	―	回転横ナデ	回転横ナデ			1	
回転横ナデ、回転篦削り後ナデ	―	回転横ナデ、回転ナデ	―		7	2	
横ナデ	ナデ	横ナデ	ナデ	底部と体部の接合痕有、体部を底部内側に貼付け	2	3	
回転篦削り、回転横ナデ	ナデ	回転横ナデ	回転ナデ			4	
回転横ナデ後篦ナデ	回転篦切離し後ナデ	回転横ナデ	回転横ナデ	宇城８ｃ前半	4	5	
ナデ	篦切離し	回転横ナデ	回転横ナデ		2	6	
回転篦削り	ナデ	ナデ	ナデ			7	
回転篦削り	回転篦切離し後ナデ	回転横ナデ	回転横ナデ			8	
回転篦削り、横ナデ	回転篦削り後横ナデ	回転ナデ	回転ナデ		7	9	
回転篦削り後横ナデ	回転篦削り後横ナデ	回転横ナデ	回転ナデ			10	
回転篦削り、回転横ナデ	―	回転横ナデ	回転ナデ		2	11	10
―	回転横ナデ、篦切離し後ナデ	―	回転篦削り後横ナデ	底部	7	12	
ナデ	回転篦削り後横ナデ	ナデ	ナデ		5	13	
ナデ	回転横ナデ、回転ナデ	ナデ	回転横ナデ			14	
回転篦削り後横ナデ	ナデ	回転ナデ	ナデ		7	15	
―	回転横ナデ	―	ナデ			16	
―	回転横ナデ	―	回転横ナデ、回転ナデ	沈線	2	17	
回転横ナデ	回転篦切離し	回転横ナデ	回転横ナデ			18	
回転篦削り、回転横ナデ	回転横ナデ	回転横ナデ	―	皿８ｃ		19	
回転篦削り後横ナデ	篦切離し	―	―			20	
横ナデ	―	横ナデ	―	短頸壺８～９ｃ前半迄		21	
回転篦削り、回転篦削り後横ナデ、ナデ	―	回転篦削り後横ナデ	―	つまみ径3.0cm	4	22	
横ナデ	―	ナデ	―	鉢型の杯８ｃ、外面は黒色が広がる	3	23	
ナデ	ナデ後篦調整	ナデ	―		7	24	
回転篦削り、回転横ナデ	回転篦削り	ナデ	回転ナデ			25	
篦削り、ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		3	26	
ナデ	ナデ	ナデ	ナデ			27	
ナデ	ナデ	ナデ	ナデ			28	
ナデ	回転篦切離し後ナデ	ナデ	篦削り	高台剥離		29	
篦削り後横ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		7	30	
ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		3	31	
ナデ	―	ナデ	―	粘土積上げ痕		32	11
横ナデ	ナデ	横ナデ	ナデ	粘土積上げ痕	4	33	
横ナデ	横ナデ、ナデ	横ナデ	横ナデ	内底面にスス付着、内外面に赤彩	5	34	
横ナデ	糸切後ナデ	横ナデ	ナデ			35	
回転篦削り	―	―	ナデ	内外面に黒色炭化物付着	7	36	
回転篦削り	ナデ	ナデ	ナデ		5	37	
ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	外底面に赤彩	3	38	
指押え後ハケメ	―	ナデ	―		2	39	
ナデ	糸切離し後ナデ	ナデ	ナデ	14c～	4	40	
ナデ	―	ナデ	―	角閃石を多く含む		41	
篦削り後ナデ	―	横ナデ、ナデ、篦削り	―		3	42	
横ナデ、ナデ	―	篦削り、ナデ	―			43	
ナデ	―	―	―	網による擂目有		58	
ナデ	―	ナデ	―		6	61	14
ナデ	―	布目痕	―			62	

Tab. 4　中片小路Ⅲ区陶磁器観察表

Fig	遺物番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土地点			法　量(cm)			備考
							遺構	Grid	注記	残存高	口径	底径	
12	44	白磁	皿		11c	Ⅲ－1類		B－6 G	一括	2.1	(9.7)	(4)	区分は大宰府編年より
	45	白磁	椀			Ⅴ－4a類		B－7 G	3 T－括	3.5	－	高台6.3	
	46	白磁	椀			Ⅴ－4a類		A、B－2 G	一括	4.3	－	6.1	区分は高台端部の形状から、貫入有
	47	白磁	椀		11c	Ⅴ－4b類		B－7 G	3 T－括	5.4	－	6.4	区分は見込等の文様より
	48	白磁	皿			Ⅶ－1b類			一括	2.5	(10.2)	(4.8)	中国北部、青島の奥
	49	白磁	椀			Ⅴ－4a類	SE001	A、B－G	一括	4.0	－	高台 (6.7)	貫入有
	50	白磁	椀			Ⅴ－4a類		B－6 G	一括	7.3	(14.6)	高台 (5.6)	
	51	瓷器系陶器	鉢	不明	15c			A、B－2 G	一括	4.7	－	(12.0)	
	52	青磁	椀	龍泉窯系		Ⅰ－2a類		B－4 G	一括	7.0	(15.9)	6.0	貫入有
13	53	青磁	椀	同安窯系	11c	Ⅰ－1b類	SE001		一括	2.5	－	高台5.0	
	54	青磁	椀	同安窯系		Ⅰ－1b類		B－7 G	3 T－括	3.2	－	高台5.0	
	55	青磁	椀	同安窯系	11c	Ⅰ－1b類	SK004		No.1	3.9	－	高台4.9	
	56	青磁	椀	同安窯系		Ⅱ類		A、B－3 G	一括	4.2	－	高台4.9	
	57	青磁	皿	同安窯系	12～13c	Ⅰ－2b類			一括	2.4	(10.8)	4.6	
14	63	染付	徳利						一括	21.8	－	8.4	

中片小路Ⅲ区陶磁器観察表

特徴				色調						
外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	胎土 (notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)	PL	遺物番号	Fig
横ナデ	削り出し高台、箆削り	横ナデ	箆削り、蛇の目釉剥ぎ	銀灰色	C－143	灰白	C－144	4	44	12
回転箆削り	削り出し高台、回転箆削り、釉なし	回転箆削り	見込周囲、沈線	乳白色	C－99	白茶	C－107		45	
横ナデ	削り出し高台、釉なし	横ナデ	回転箆削り	白茶	C－141	銀灰色	C－143	6	46	
横ナデ	削り出し高台、釉なし	横ナデ、櫛描紋	見込、櫛描紋	灰白	C－144	銀灰色	C－143		47	
回転箆削り後横ナデ	回転箆削り後研磨	回転ナデ	横ナデ、見込	乳白色	C－99	鉛の灰色	C－211	8	48	
横ナデ	高台貼付後回転箆削り、骨付け釉かきとり	横ナデ	蛇の目釉かきとり	白茶	C－141	白茶	C－135	7	49	
回転箆削り	削り出し高台、回転箆削り、釉なし	回転箆削り	回転箆削り	銀灰色	C－143	白茶	C－141	4	50	
回転箆削り後横ナデ	―	回転箆削り	―	代赭色	C－74	―	―		51	
回転箆削り、指ナデ、施釉	削り、横ナデ	回転箆削り、刻花紋（草花紋）指ナデ	見込、草花紋	銀灰色	C－143	鉄の緑	C－230	5	52	
回転箆削り、櫛目文	削り出し兜巾高台、回転箆削り、釉なし	回転箆削り、櫛点描文	見込周囲、沈線	銀灰色	C－143	白茶	C－135	7	53	13
回転箆削り、櫛目文	削り出し高台、回転箆削り、釉なし	回転箆削り	見込周囲、沈線櫛目文	鉛の灰色	C－211	軍服の緑	C－177	4	54	
回転箆削り、ナデ、櫛目文	削り出し兜巾高台釉なし	回転箆削り、櫛点描文、見込に深い沈線	―	大理石の色	C－215	鉄の緑／冬の灰色	C－230／C－240	8	55	
回転箆削り	削り出し高台	回転箆削り、ナデ	見込周囲、沈線	鉛の灰色	C－211	焦茶色	C－228	6	56	
横ナデ	箆切、釉なし	横ナデ	見込周囲に沈線、櫛点描文、花文	灰白	C－144	鉄の緑	C－230	8	57	
―	―	回転箆削り	―	亜鉛華の白	C－164	蝋燭色	C－142	8	63	14

Tab. 5　中片小路Ⅳ区土器観察表

Fig	遺物番号	種別	器種	出土地点			法量（cm）			
				遺構	Grid	注記	残存高	最大胴径	口径	底径
47	84	須恵器	蓋			一括	1.45	—	(15.4)	—
	85	土師器	皿	SK001		一括	1.5	—	(9.6)	(8.1)
	86	土師器	皿	SD003		一括	1.2	—	—	(8.0)
	87	土師器	皿			一括	2.2	—	—	(6.1)
	88	須恵器	浅鉢			一括	4.1	(15)	—	—
	89	瓦質土器	浅鉢			一括	6.3	—	(14.6)	高台（10.6）
	90	瓦質土器	鉢	SP003		一括	5	—	(20.8)	—
	91	瓦質土器	焙烙	ST002		一括	12.2	—	—	—
	92	瓦質土器	擂鉢	SK003		一括	4.2	—	—	—
	93	瓦質土器	擂鉢			一括	13.3	—	(36.8)	(17)
48	94	瓦質土器	擂鉢		B－8 G	一括	4.15	—	—	—
	95	土師器	杯		A－5 G	一括	4.2	—	(13.8)	—
	96	瓦質土器	羽釜		A－3 G	一括	8.8	—	—	—
	97	瓦質土器	擂鉢		A－3 G	一括	7.6	—	(35.2)	—
54	98	土師器	皿	SP001		No.6	1.8	—	9.2	7.8
	99	土師器	皿			一括	1.4	—	(9.4)	(7.6)
	100	土師器	皿	SP001		一括	1.3	—	9.1	7.6
	101	土師器	皿	SP001		一括	1.45	—	(10.6)	(8.9)
	102	土師器	杯	SP001		一括	2.8	—	(12.8)	(9.6)
	103	土師器	杯	SP001		No.7	2.9	—	(14.9)	(9.2)
	104	土師器	杯	SP001		一括	2.8	—	(16.2)	(11.6)
	105	土師器	杯	SP001		No.8	2.9	—	(17)	(12.6)
	106	須恵器	坏	SP002		No.8	3.4	—	(12.2)	(7.4)
	107	土師器	鉢	SP002		No.7、一括	6.1	—	(25.8)	—
	108	須恵器	横瓶	SP002		No.10	7.0	—	—	—
	109	須恵器	鉢	SP001		No.1	7.05	—	—	—
56	120	土師器	小皿			一括	1.1	—	(8.2)	(7.2)
	121	土師器	小皿			一括	1.3	—	(9.0)	(8.2)
	122	土師器	小皿			一括	1.6	—	—	(6.4)
	123	土師器	坏			一括	2.0	—	—	(6.5)
	124	土師器	坏			No.3、一括	2.9	—	—	(5.8)
	125	土師器	坏			下一括	3.7	—	—	5.8
	126	土師器	甕			下一括	7.9	—	(27.6)	—
	127	土師器	椀			No.1	6.5	—	14.8	—
	128	土師器	椀			下一括	6.3	—	(14.4)	高台（8.3）
	129	瓦質土器	擂鉢			一括	8.25	—	—	(15)
	130	土師質土器	甑（把手）			一括	6.9	—	—	—
	131	須恵器	壺			No.2	5.4	—	(6.4)	—
	132	須恵器	壺			下一括	5.5	—	(10.6)	—
	133	須恵器	甕			一括	5.0	—	(16.6)	—
	134	須恵器	鉢			下一括	11.3	—	(25.2)	—
	135	須恵器	杯			一括	2.8	—	—	—
	136	瓦質土器	浅鉢			一括	3.1	—	—	高台（12.4）
58	143	土師器	壺	SD006		No.3	30.8	28	19.2	—
	144	土師器	壺	SD006		下一括	16.5	(15)	(11.4)	—
	145	土師器	甑（把手）	SD006		上一括	7.1	—	—	—
	146	土師器	甕	SD006		No.5	17.7	20.2	17.2	—
	147	土師器	甕	SD006		No.2	22.1	18.2	—	—

中片小路Ⅳ区土器観察表

特徴 外器面	外底面	内器面	内底面	備考	PL	遺物番号	Fig
回転篦削り、回転横ナデ	―	回転篦削り	―			84	47
回転篦削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ			85	
回転篦削り	糸切離し	―	ナデ			86	
横ナデ、ナデ	篦削り後ナデ	ナデ	ナデ		27	87	
篦によるナデ	回転横ナデ、回転ナデ	篦削り	回転横ナデ	脚貼付け後施釉	28	88	
回転横ナデ、回転篦削り	回転横ナデ、回転ナデ	回転横ナデ	回転横ナデ	手あぶり14c～、脚３ヶ		89	
回転篦削り	―	ナデ	―	15c		90	
篦削り	―	篦削り	―	14～15c 以降	28	91	
ナデ	―	擂目	―	在地産		92	
指頭圧痕後ハケメ	―	擂目、ナデ	―		30	93	
回転ナデ	―	回転ナデ	―	15～16c、黒色自然釉		94	48
篦削りナデ	―	ナデ	―			95	
ナデ、把手貼付け後指押え	―	ナデ	―		30	96	
ナデ	―	ナデ、擂目	―	口径は片口部分		97	
横ナデ	糸切離し	横ナデ	―		34	98	54
横ナデ	糸切離し	横ナデ	―		29	99	
横ナデ	糸切離し	横ナデ	―			100	
横ナデ	糸切離し	横ナデ	―		34	101	
横ナデ	篦削り後ナデ	横ナデ	剥離			102	
横ナデ	篦削り後ナデ	横ナデ	回転ナデ	粘土積上げ痕		103	
横ナデ	篦削り後ナデ	横ナデ	回転ナデ		29	104	
横ナデ	篦削り後ナデ	横ナデ	ナデ		34	105	
篦削り後ナデ	篦削り後ナデ	回転横ナデ	―			106	
回転横ナデ、回転ナデ	―	回転ナデ	―		33	107	
平行タタキ	―	同心円文タタキ	―			108	
ナデ	―	ナデ	―	東播系、粘土積上げ痕	34	109	
ナデ	ナデ、糸切り	ナデ	ナデ		29	120	56
横ナデ	ナデ、糸切り	横ナデ	ナデ			121	
ナデ	回転篦削り後ナデ	ナデ	ナデ		29	122	
篦ミガキ	篦削り	篦ミガキ	篦ミガキ	内黒		123	
回転ナデ、削り痕	回転篦削り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ			124	
回転ナデ、削り痕	回転篦削り後ナデ	回転ナデ	回転ナデ			125	
横ナデ、ハケメ	―	篦削り	―		30	126	
高台貼付け時における横ナデ	ナデ	回転横ナデ後ミガキ	回転横ナデ後ミガキ	内黒		127	
回転篦削り後ナデ、高台貼付け時における横ナデ	ナデ、脚部は回転横ナデ	篦ミガキ	篦ミガキ	内黒		128	
指押後ナデ、篦削り	―	擂目	―	15c	29	129	
後付け後篦削り、ナデ	―	ナデ	―			130	
回転篦削り	―	回転篦削り	―			131	
回転横ナデ	―	回転横ナデ、同心円文タタキ	―		30	132	
篦削り後回転ナデ、平行タタキ	―	回転ナデ、平行タタキ	―			133	
回転横ナデ	―	回転横ナデ	―	外器面に沈線、内器面に指頭圧痕有		134	
回転横ナデ	―	回転横ナデ	ナデ	自然釉	29	135	
回転横ナデ	ナデ	回転横ナデ	ナデ	自然釉		136	
ハケメ	ハケメ	篦削り	ナデ	外器面に黒斑有、スス付着		143	58
横ナデ	―	篦削り	―	口縁部と胴部の接合部に粘土つぎ目	36	144	
篦削り後ナデ	―	ナデ	―			145	
横ナデ、ハケメ	―	ナデ、ハケメ	―			146	
ハケメ後指ナデ	ハケメ後指ナデ	篦削り、ナデ	篦削り、ナデ			147	

Tab. 6　中片小路Ⅳ区陶磁器観察表

Fig	図版番号	種別	器種	産地	年代	区分	出土地点			法量(cm)			備考
							遺構	Grid	注記	残存高	口径	底径	
44	66	陶器	擂鉢				ST043		一括	16.7	49.4	高台19.6	灰釉
	67	陶器	甕棺				ST043		一括	80.0	49.8	25	灰釉
	68	陶器	甕棺				ST012		一括	80.4	52	27	灰釉
45	69	染付	皿	肥前系	18c～19c				一括	2.6	(8.7)	高台3.3	
	70	染付	皿	肥前系	19c				一括	3.4	(12.6)	高台 (4.4)	
	71	染付	椀	肥前系					一括	5.3	10.4	4.4	
	72	染付	椀	肥前系	18c後～19c初		ST004		一括	5.5	(11.2)	4.6	
	73	染付	筒形椀	肥前系	18c～				一括	5.5	7.2	高台4.2	
	74	染付	皿	肥前系	18c後～19c				一括	3.3	12.0	高台5.2	
	75	染付	皿	肥前系(向付)	19c～				一括	3.0	12.0	高台4.5	
46	76	陶器	壺					A－2 G	一括	7.3	(18.6)	—	
	77	陶器	天目茶椀	建窯系	13c			A－2、3 G	一括	5.4	10.6	高台3.4	鉄質黒釉天目釉
	78	陶器	土瓶	産地不明	19c				一括	5.3	—	(6.8)	
	79	陶器	鉢						一括	7.4	(23.4)	(16.0)	
	80	陶器	擂鉢						一括	3.9	(30.2)	—	灰釉
	81	陶器	擂鉢						一括	6.4	(33.2)	—	
	82	陶器	擂鉢						一括	8.0	—	(12.1)	
	83	陶器	擂鉢				ST002		一括	6.3	—	高台13.0	灰釉
55	110	白磁	皿	朝鮮系	16c				一括	3.0	11.6	高台3.7	
	111	陶器	皿		近世				一括	3.5	12.3	高台4.3	銅緑釉
	112	白磁	碗	朝鮮系	16c				一括	5.1	12.4	高台4.6	
	113	青磁	皿	同安窯系	12c	Ⅰ－1b類	ST004		一括	2	(10)	(5)	
	114	青磁	皿	龍泉窯系		Ⅰ－2b類	ST004		一括	2.4	(10.8)	(5.7)	
	115	青磁	碗	龍泉窯系		Ⅱ－d類		A－2 G	一括	4.4	—	高台5.4	
	116	青磁	碗	龍泉窯系	12c	Ⅰ－2類	SP001		一括	2.3	—	高台5.8	
	117	青磁	碗	龍泉窯系	14c～15c初	Ⅰ－4類		B－7、8 G	一括	2.6	—	高台6.2	「金玉満堂」
	118	青磁	碗	龍泉窯系	12～13c	Ⅰ－4b類	SP001		No.9	7.3	(19.2)	(6.6)	
	119	青磁	碗	同安窯系		Ⅲ－1a類		A－7 G	No.1	4.6	—	高台5.6	

中片小路Ⅳ区陶磁器観察表

特徴				色調						
外器面	外底面	内器面	内底面	胎土	胎土 (notation)	釉薬・染付	釉薬・染付 (notation)	PL	図版番号	Fig
回転横ナデ	ナデ、施釉、削り出し高台	上部ナデ、擂目	擂目	代赭色	C－74	焦茶色	C－129	26	66	44
タタキ	―	タタキ	―	―	―	―	―		67	
タタキ	―	タタキ	―	―	―	―	―		68	
ナデ	削り出し高台	ナデ	蛇の目釉かき取り	亜鉛華の白	C－164	月の白色／サックスブルー	C－209／C－249	27	69	45
ナデ	削り出し高台、釉かき取り	ナデ	釉かき取り	瓦の鼠茶	C－293	灰白／鉄の緑	C－144／C－230	28	70	
ナデ	削り出し高台、釉畳付かき取り	ナデ	ナデ	灰白	C－144	銀灰色／油の緑／カーキー色	C－143／C－231／C－232	27	71	
ナデ	削り出し高台	ナデ	ナデ、蛇の目釉かき取り	雪の灰白	C－282	鉛の灰色／冬の灰色	C－211／C－240		72	
ナデ	削り出し高台	ナデ	ナデ	亜鉛華の白	C－164	貝の白／灰色／濃い灰青	C－163／C－297／C－235		73	
ナデ	削り出し高台	ナデ	釉かき取り	亜鉛華の白	C－164	碧玉色／群青／孔雀の藍	C－195／C－269／C－268	28	74	
ナデ	削り出し高台、釉畳付かき取り	ナデ	蛇の目釉かき取り	雪の灰色	C－282	トルコ石の灰緑／焦茶色／茶の緑	C－219／C－228／C－229	27	75	
上部回転篦削り、タタキ（荒い格子目）	―	同心円紋タタキ	―	煙草色	C－112	カーキー色	C－232		76	46
回転篦削り後ナデ	兜巾高台、無釉	ナデ	ナデ	瓦の鼠茶	C－293	消炭の色	C－274	28	77	
回転篦削り、ナデ	糸切離し	ナデ	―	代赭色	C－74	漆黒／焦茶色	C－303／C－129		78	
回転篦削り、ナデ	―	回転篦削り後ナデ	―	辰砂	C－27	焦茶色	C－129		79	
ナデ	―	口縁部ナデ	擂目	瑪瑙色	C－71	棕櫚色	C－120		80	
回転横ナデ	―	回転横ナデ後擂目	―	油煙墨	C－304	褐色	C－128	27	81	
回転横ナデ	無釉	擂目	擂目	棕櫚色	C－120	―	―		82	
回転篦削り	回転篦削り後施釉	擂目	擂目	代赭色	C－74	焦茶色	C－129	28	83	
横ナデ、篦削り	削り出し高台、兜巾釉畳付かき取り	横ナデ、篦削り	蛇の目釉かき取り、砂目	薄白茶	C－103	白茶	C－107	27	110	55
横ナデ、篦削り指ナデ	削り出し高台、釉剥ぎ（土見せ露胎）	横ナデ、篦削り指ナデ	蛇の目釉かき取り	香色ベージュ	C－109	白茶／銀灰色	C－107／C－143		111	
横ナデ、篦削り指ナデ	削り出し高台、釉畳付かき取り	横ナデ、篦削り指ナデ	蛇の目釉かき取り	雪灰	C－282	薄白茶／かもしか色	C－103／C－106	32	112	
ナデ	回転篦削り、無釉	ナデ	施紋、篦描き	鉛の灰色	C－211	焦茶色	C－228		113	
ナデ	回転篦削り、無釉	ナデ	施紋、篦描き	鉛の灰色	C－211	碧玉色	C－195	27	114	
篦描きの鎬蓮弁	削り出し高台、畳付かき取り、貫入有	ナデ	スタンプ、篦描き	茶紙の色	C－135	カーキー色	C－232	31	115	
ナデ	削り出し高台、畳付かき取り	ナデ	片切彫り、篦描き	雪の灰白	C－282	龍泉窯青磁色	C－207		116	
ナデ	削り出し高台、釉かき取り	ナデ	ナデ、スタンプ	灰白	C－144	白茶	C－135	32	117	
ナデ	削り出し高台	ナデ、施紋、篦描き	ナデ	銀灰色	C－143	碧玉色／橄欖色	C－195／C－179	33	118	
ナデ後鎬	削り出し高台、兜巾、無釉	ナデ	施紋	鉛の灰色	C－211	焦茶色	C－228	31	119	

Tab. 7　中片小路Ⅳ区土器観察表

Fig	遺物番号	種別	器種	出土地点 遺構	出土地点 Grid	注記	法量(cm) 残存高	法量(cm) 最大胴径	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径
59	148	縄文土器	深鉢	SD006		下一括	8.7	—	—	—
	149	縄文土器	深鉢	SD006		下一括	2.4	—	—	—
	150	縄文土器	深鉢	SD006		下一括	2.2	—	—	—
	151	縄文土器	深鉢	SD006		下一括	4.0	—	—	—
	152	縄文土器	深鉢	SD006		下一括	5.4	—	—	—
	153	縄文土器	深鉢	SD006		下一括	4.4	—	—	—
	154	縄文土器	深鉢		A、B－3 G	一括	4.8	—	—	—
	155	縄文土器	深鉢	SD006		上一括	2.9	—	—	—
	156	縄文土器	深鉢	SD006		上一括	6.0	—	—	—
	157	縄文土器	深鉢	SD006		下一括	5.5	—	—	—
	158	縄文土器	深鉢	SD006		下一括	2.3	—	—	(7.6)
	159	縄文土器	深鉢	SD006		上一括	1.6	—	—	(9.2)
	160	縄文土器	深鉢	SD006		下一括	2.0	—	—	9.4
61	165	縄文土器	深鉢			4 T一括	2.9	—	—	—
	166	縄文土器	深鉢			4 T一括	2.9	—	—	—
	167	縄文土器	深鉢			18T一括	3.4	—	—	—
	168	縄文土器	深鉢			12T一括	6.8	—	—	—
	169	土師器	壺			3 T一括	1.9	—	—	—
	170	土師器	小型丸底壺			20T一括	6.9	—	—	—

中片小路Ⅳ区土器観察表

特徴				備考	PL	遺物番号	Fig
外器面	外底面	内器面	内底面				
指によるつまみ成形押圧痕、篦状調整痕	―	篦状工具痕	―	口縁部	37	148	59
刻目突帯文貼付後ナデ	―	ナデ	―	口縁部		149	
刻目突帯文貼付後ナデ	―	ナデ	―	口縁部		150	
横ナデ	―	横ナデ	―	口縁部		151	
刻目突帯文貼付後ナデ	―	ナデ	―	胴部		152	
刻目突帯文貼付後ナデ	―	ナデ	―	胴部	37	153	
刻目突帯文貼付後ナデ	―	ナデ	―	胴部		154	
刻目突帯文貼付後ナデ	―	ナデ	―	胴部		155	
つまみ上げ後指ナデ、篦削り	―	不明	―	胴部		156	
篦削り、横ナデ	―	不明	―	胴部		157	
ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	底部		158	
ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	底部		159	
不明	不明	不明	不明	底部		160	
刻目突帯文貼付後ナデ	―	ナデ	―	口縁部		165	61
刻目突帯文貼付後ナデ	―	ナデ	―	胴部		166	
刻目突帯文貼付後ナデ	―	ナデ	―	胴部		167	
横ナデ、押圧痕	―	ナデ	―	胴部		168	
回転ナデ	糸切離し後ナデ	回転ナデ	―			169	
横ナデ、ハケメ	―	横ナデ、指ナデ、削り	―		37	170	

中片小路Ⅲ区観察表

Fig	遺物番号	器種	出土地点 遺構	Grid	注記	法量(cm・g) 残存高	口径	底径	重量	石材	備考	PL
15	64	石鍋	—	B－3 G	一括	—	—	—	381.6	滑石	胴部	35
	65	石鍋	—	B－6 G	一括	6.8	—	(18.6)	337.4	滑石	底部	
14	59	鉄滓	—	B－6 G	1層 No.1	—	—	—	18.7	—		4
	60	鉄滓	—	B－6 G	1層 No.2	—	—	—	10.2	—		

中片小路Ⅳ区観察表

石鍋

Fig	図版番号	出土地点 遺構	Grid	注記	法量(cm・g) 残存高	口径	底径	重量	石材	備考	PL
57	137				3.9	(17.6)	—	114.2	滑石	口縁部	35
	138		B－7、8G	一括	9.8	(20.6)	—	230.5	滑石	口縁部	
	139	ST004			5.35	(27.0)	—	226.7	滑石	口縁部	
	140			No.6	6.2	(37.6)	—	524.0	滑石	口縁部	
	141				6.0	—	—	78.7	滑石	口縁部	—
	142		B－7、8G	一括	2.2	—	(29.4)	557.9	滑石	底部？穿孔1ヶ有	35

砥石

Fig	図版番号	出土地点 遺構	Grid	注記	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考	PL
60	161	SK016		No.3	11.7	6.1	2.9	365.9	流紋岩		34

石斧

Fig	図版番号	出土地点 遺構	Grid	注記	法量(cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	種類	石材	備考	PL
60	162	SD006		埋土内一括	14.0	7.4	2.15	266.1	打製	黒紋石英安山岩	古墳時代溝	37
	163	SD006		No.1	22.35	9.9	3.2	738.0	打製	砂岩		—

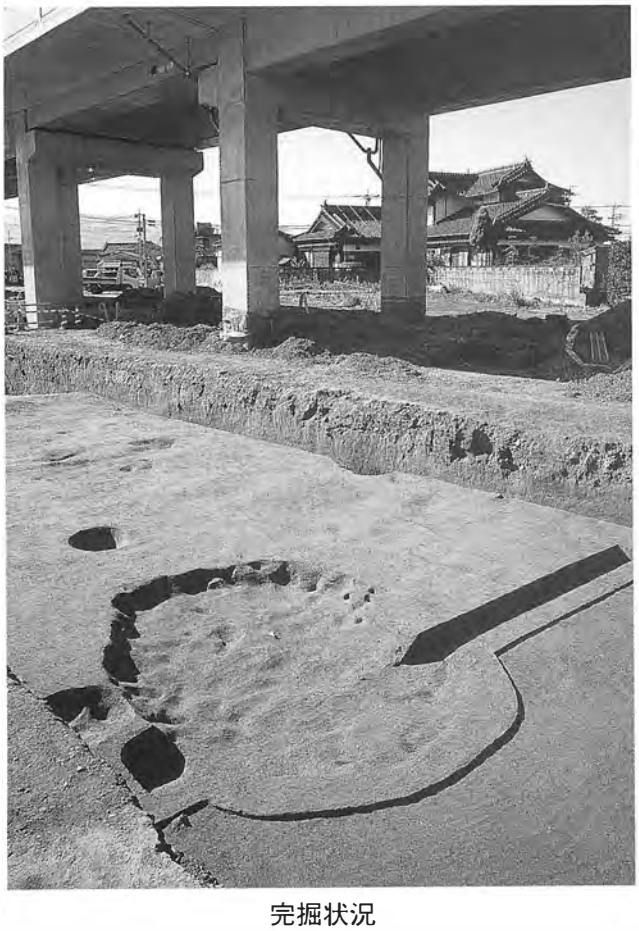
その他

Fig	図版番号	出土地点 遺構	Grid	注記	法量(cm・g) 残存高	口径	重量	石材	備考	PL
60	164	—	—	調査区一括	2.45	1.45	29.8		鉛弾	—
61	171	—		4区一括	12	6.3	379.0	陶器	トチン(窯道具)	28

写 真 図 版

井戸 SE001　土層断面

井戸 SE001　検出状況

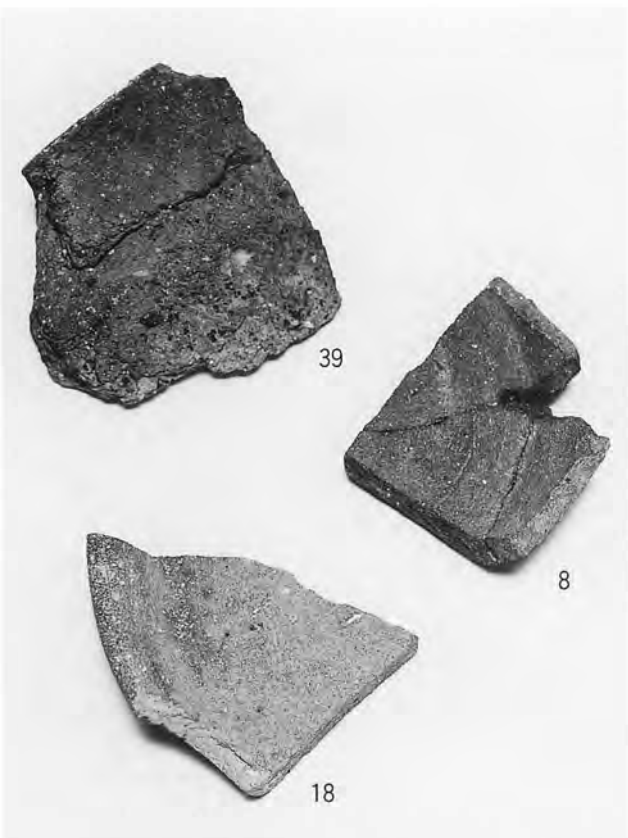


完掘状況

土坑 SK006　土層断面

須恵器　杯

Ⅲ－Fig10　出土遺物



Ⅲ－Fig10・11　出土遺物

Ⅲ－Fig10・11　出土遺物

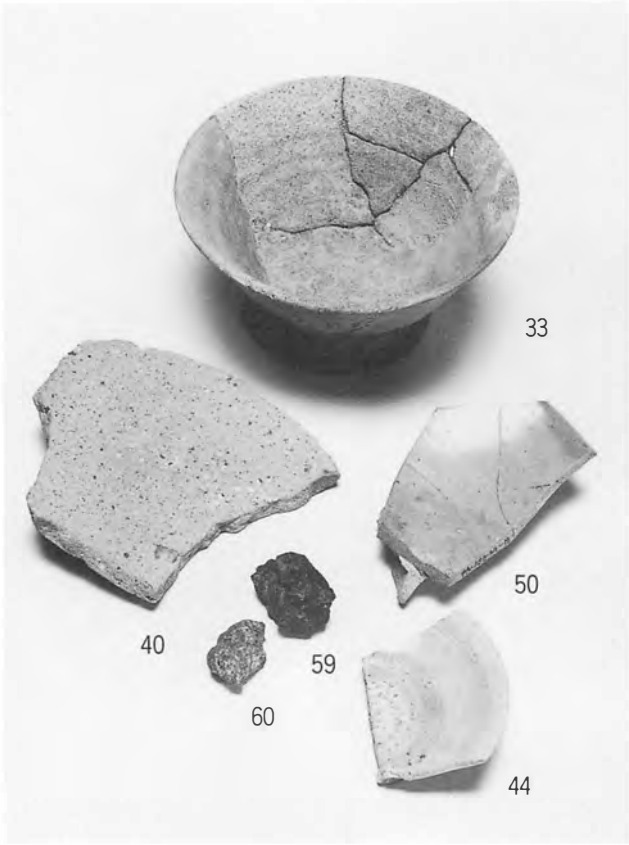
土師器　壺

土師器　杯

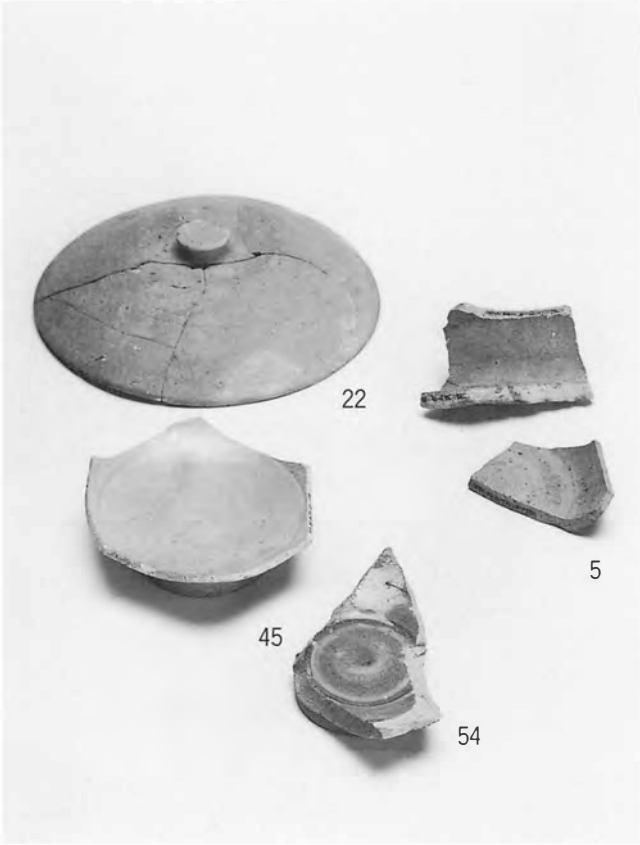
Ⅲ－Fig11　出土遺物

土師器　椀

土師器　蓋



III－Fig11・12・14　出土遺物



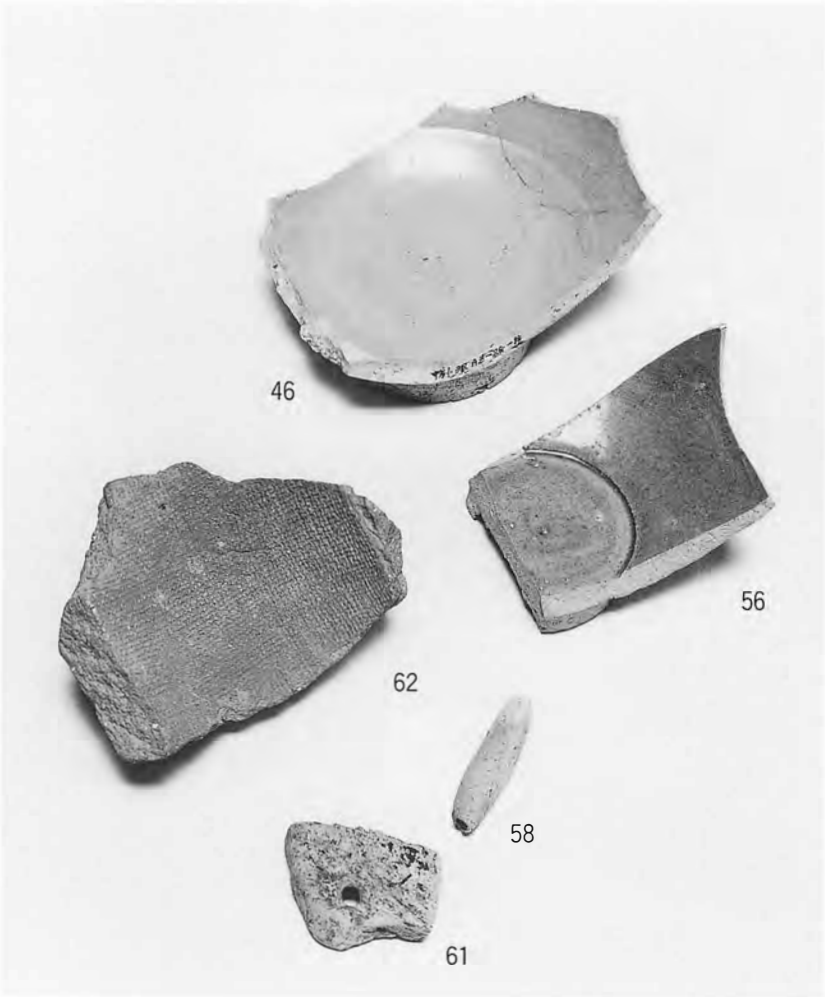
III－Fig10・11・12・13　出土遺物

土師器　椀

龍泉窯系　青磁椀II類

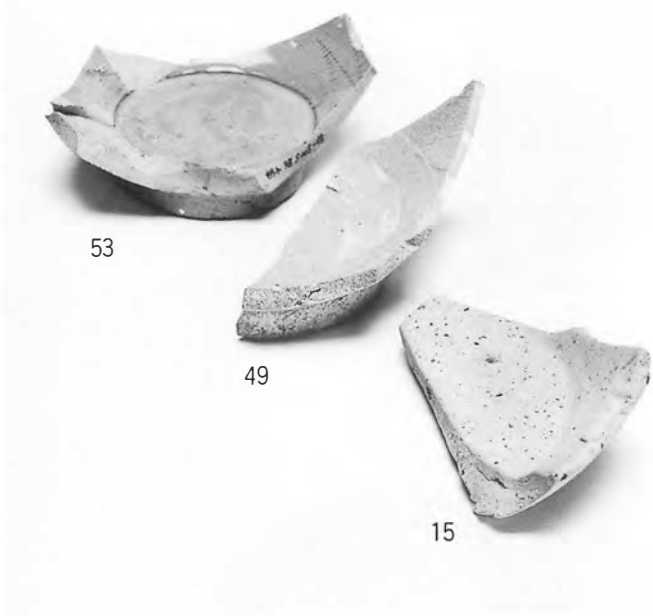
III－Fig10・11・12　出土遺物

白磁椀　V類

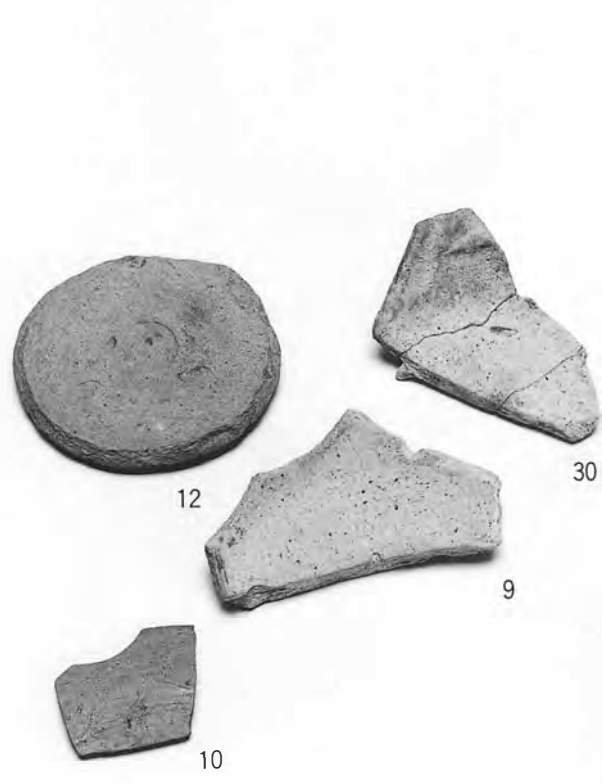


III－Fig12・13・14　出土遺物

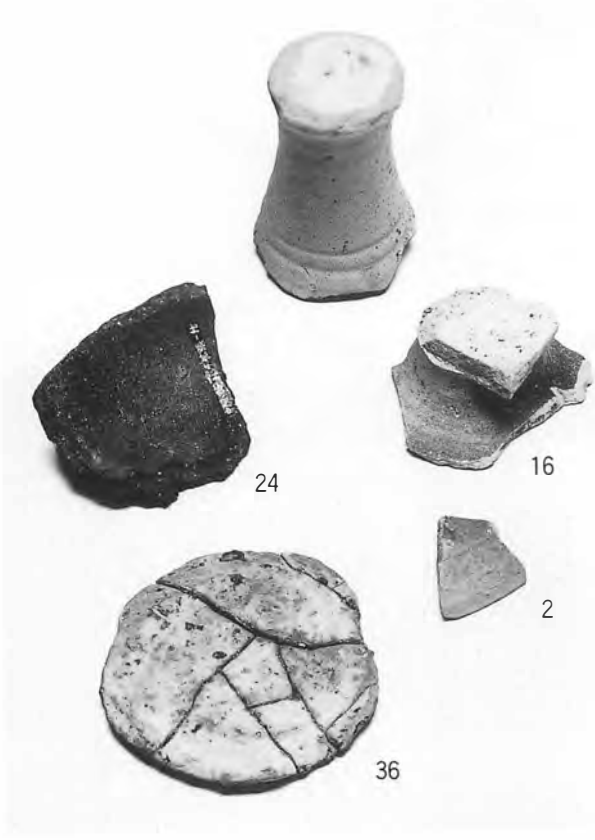
須恵器　杯



井戸 SE001　出土遺物



Ⅲ－Fig10・11　出土遺物



Ⅲ－Fig10・11　出土遺物

同安窯系　青磁椀

III－Fig12　白磁皿

同安窯系　青磁皿

III－Fig14　出土遺物

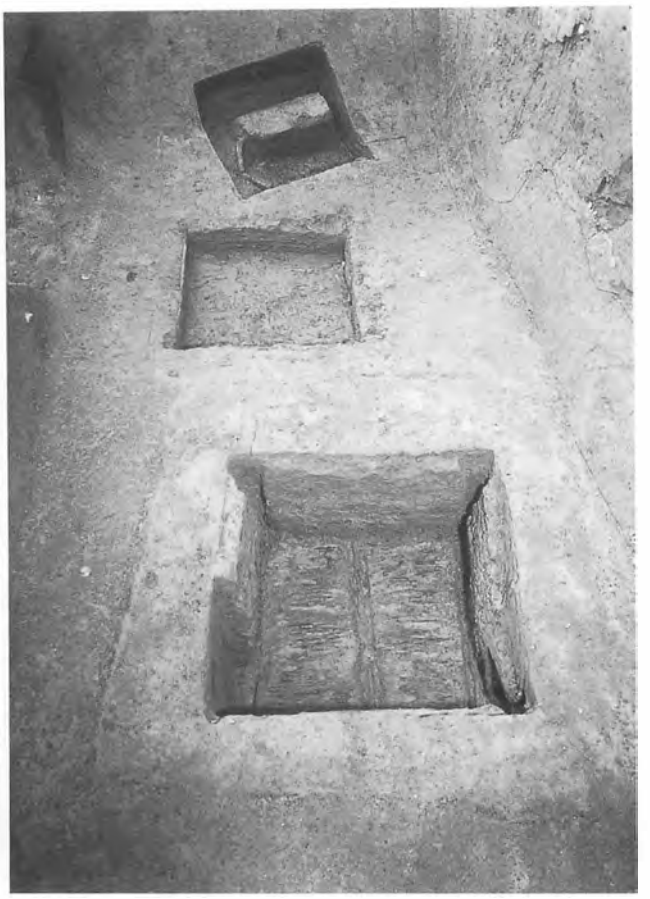
墓 ST001

墓 ST002

墓 ST005

墓 ST006

墓 ST007



墓 ST009

墓 ST011

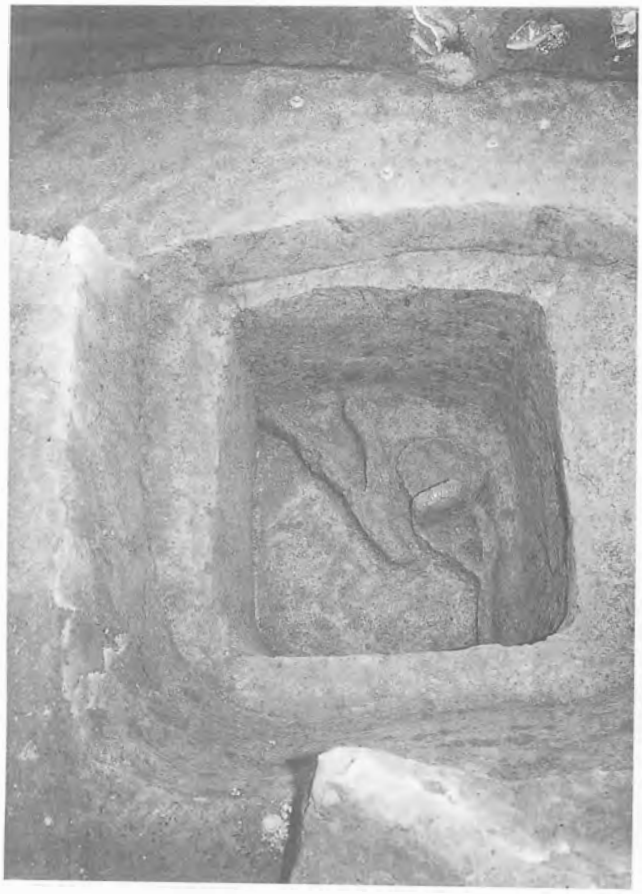
墓 ST012

墓 ST014

墓 ST016

墓 ST020

墓 ST021　木枠掘り込みライン検出状況



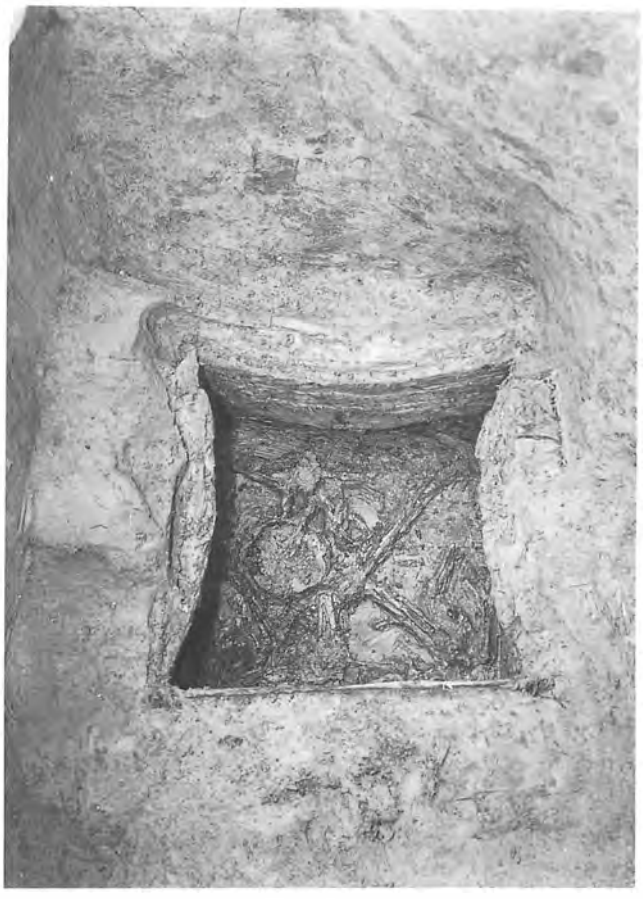
墓 ST022　人骨検出状況

墓 ST023

墓 ST024　人骨出土状況

墓 ST026

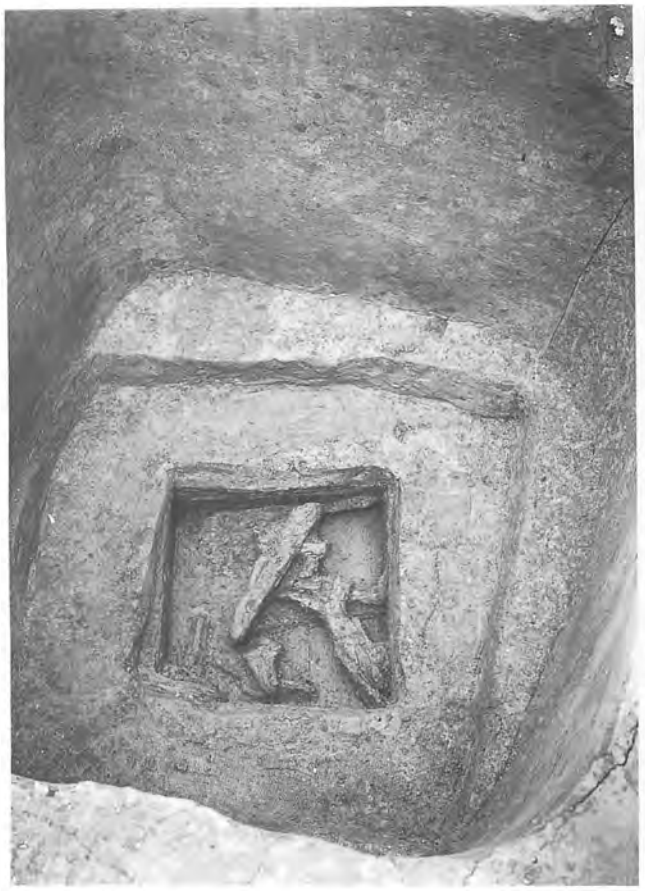
墓 ST028



墓 ST029

墓 ST031

墓 ST032

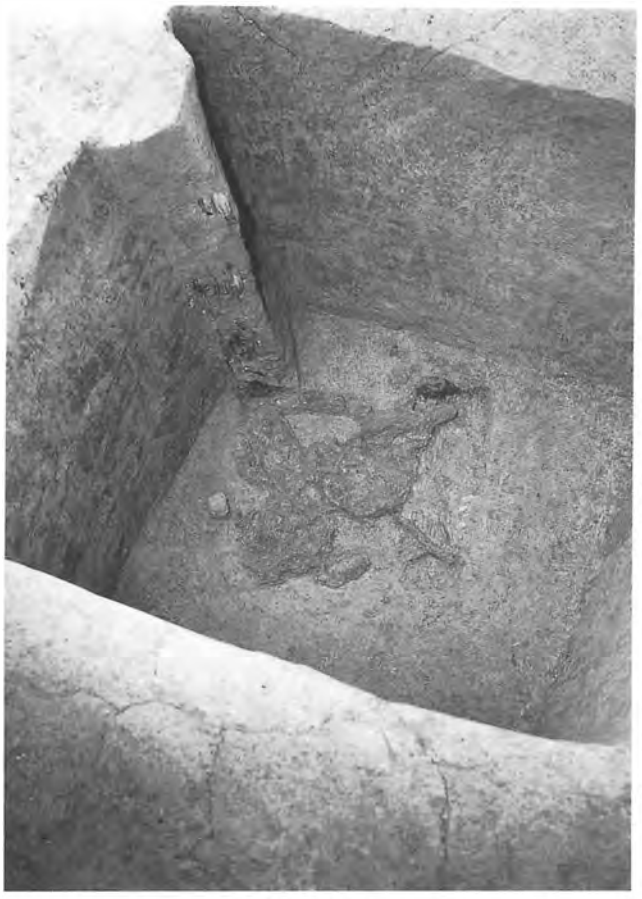


墓 ST033

墓 ST034

墓 ST036

墓 ST037



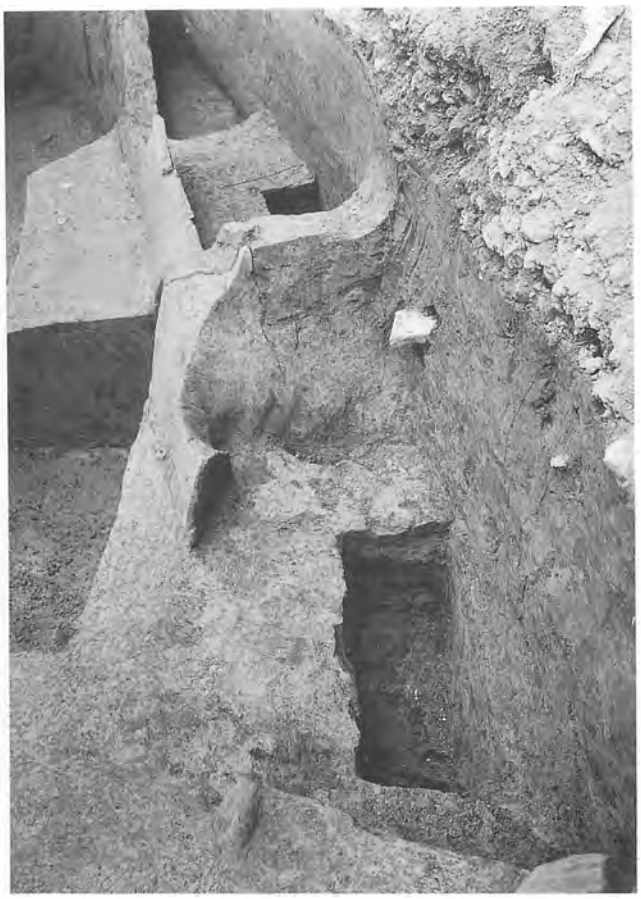
墓 ST038

墓 ST039

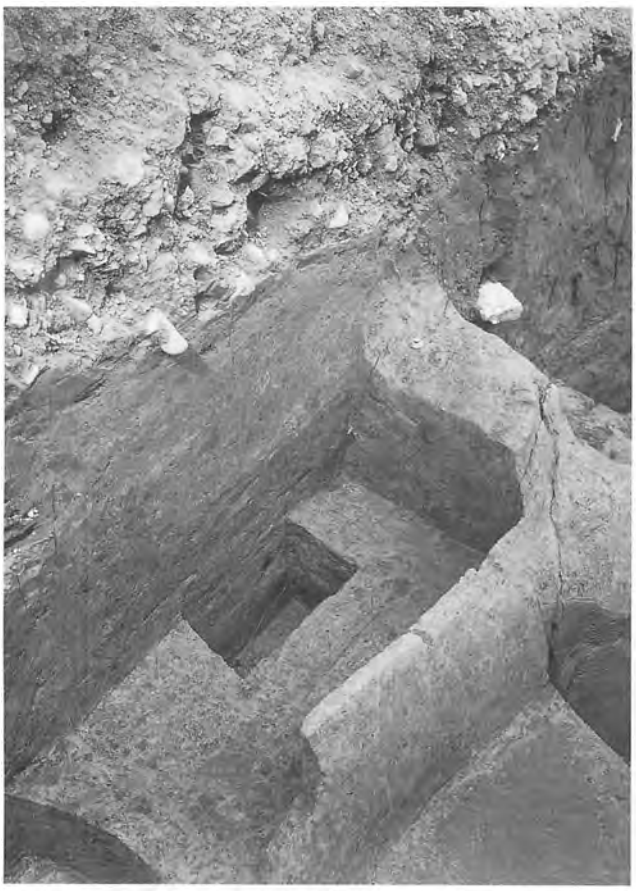
墓 ST040・041

墓 ST042

墓 ST043



墓 ST044

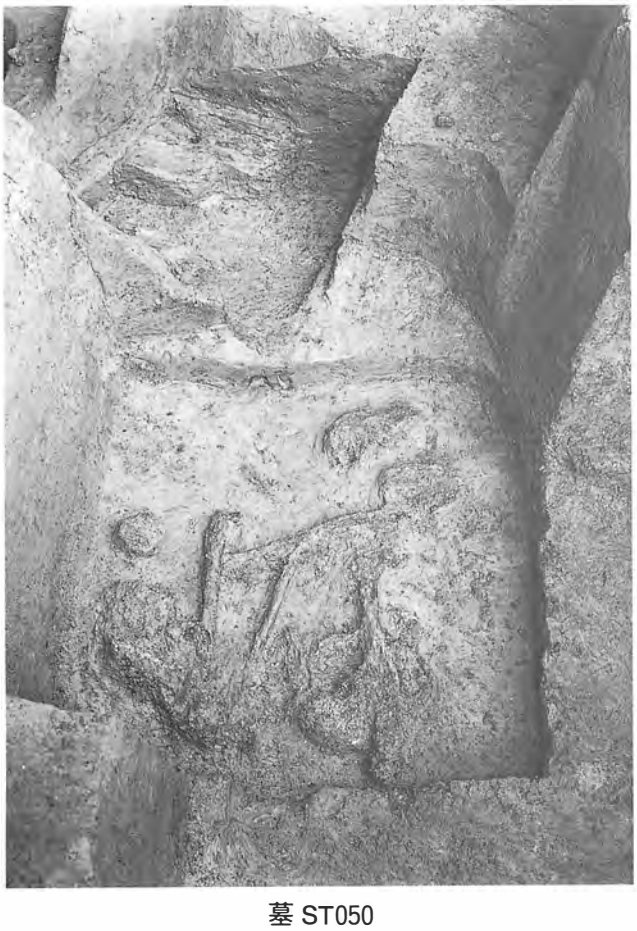


墓 ST045

墓 ST047

墓 ST048

墓 ST049



墓 ST050

墓 ST051

墓 ST052

墓 ST053

墓 ST054

墓 ST055

墓 ST056

墓 ST057

墓 ST058

墓 ST059

墓 ST060

墓 ST061

墓 ST063　人骨出土状況

墓 ST064

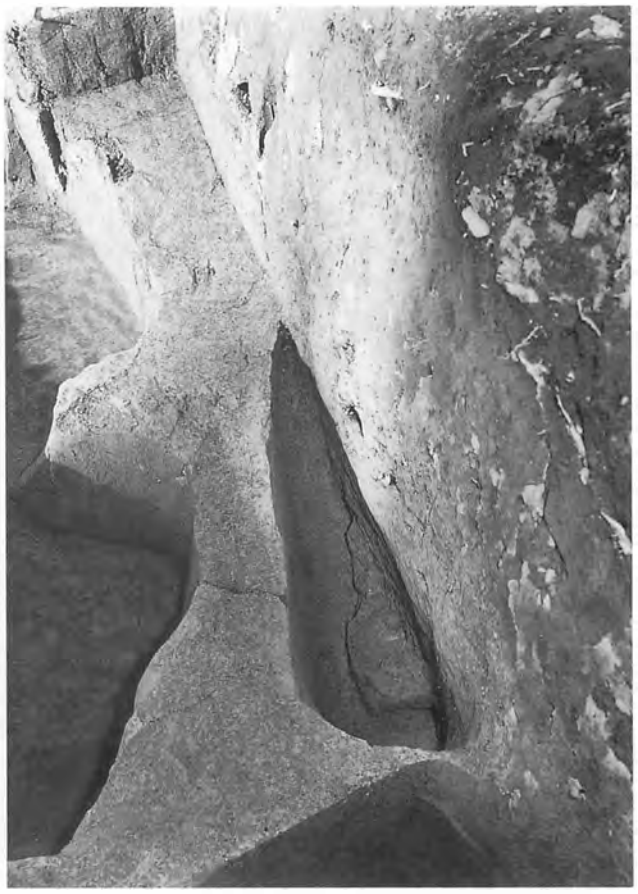
墓 ST066　人骨出土状況

墓 ST067　人骨・土器出土状況

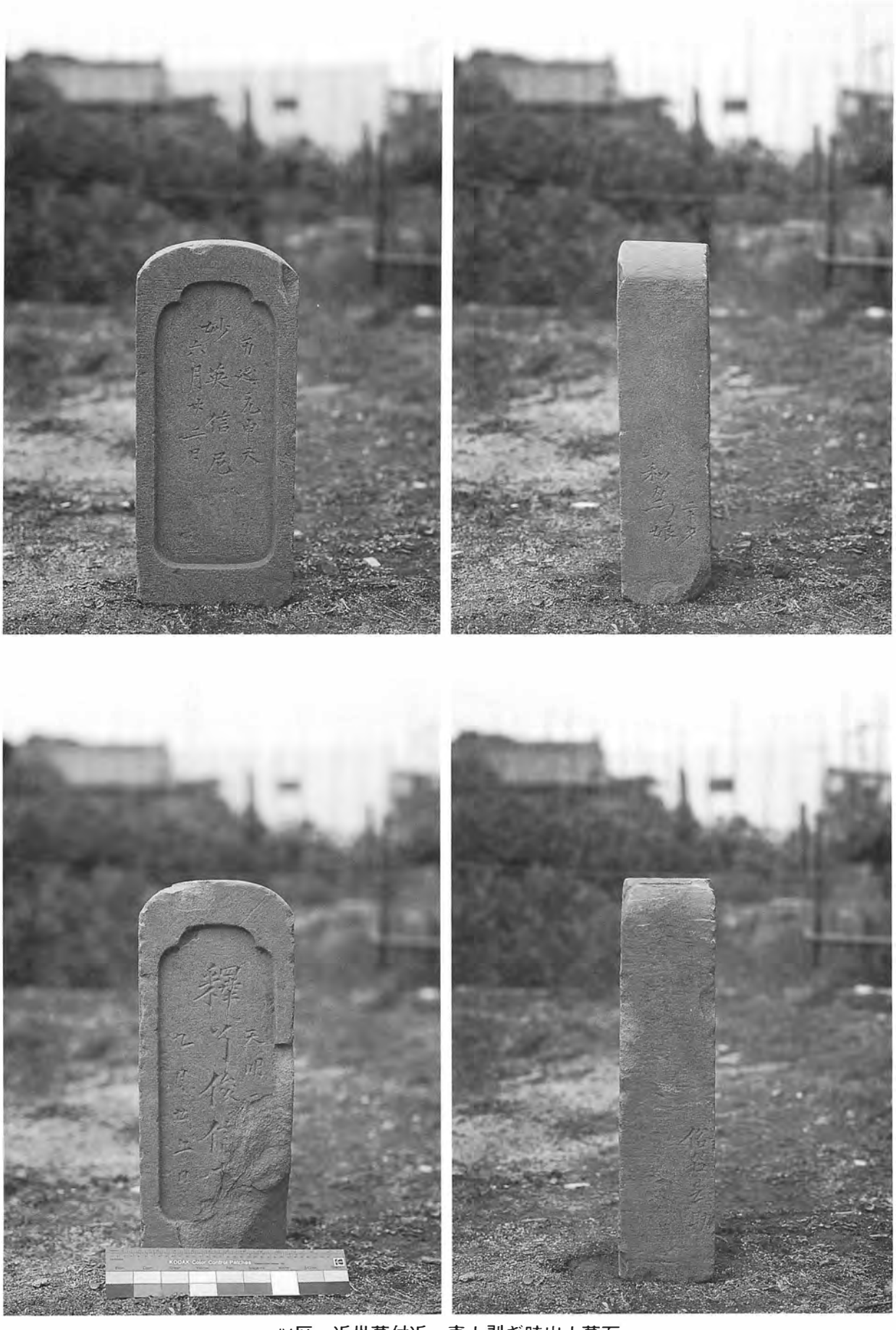
墓 ST068　人骨・木組み検出状況

墓 ST070　木組み出土状況

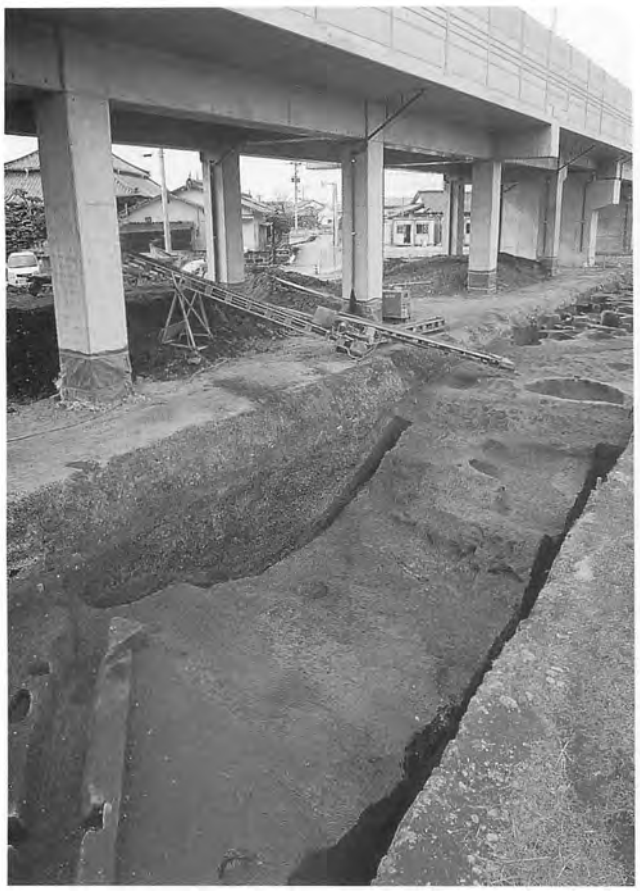
墓 ST071　人骨出土状況



墓 ST072　人骨出土状況



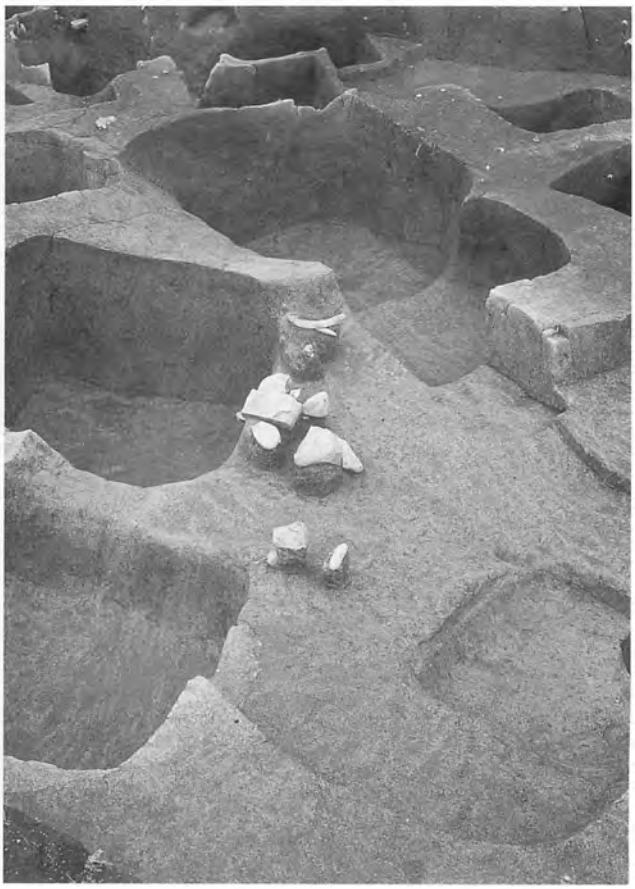
Ⅳ区　近世墓付近　表土剥ぎ時出土墓石



中世　流路６・７完掘状況

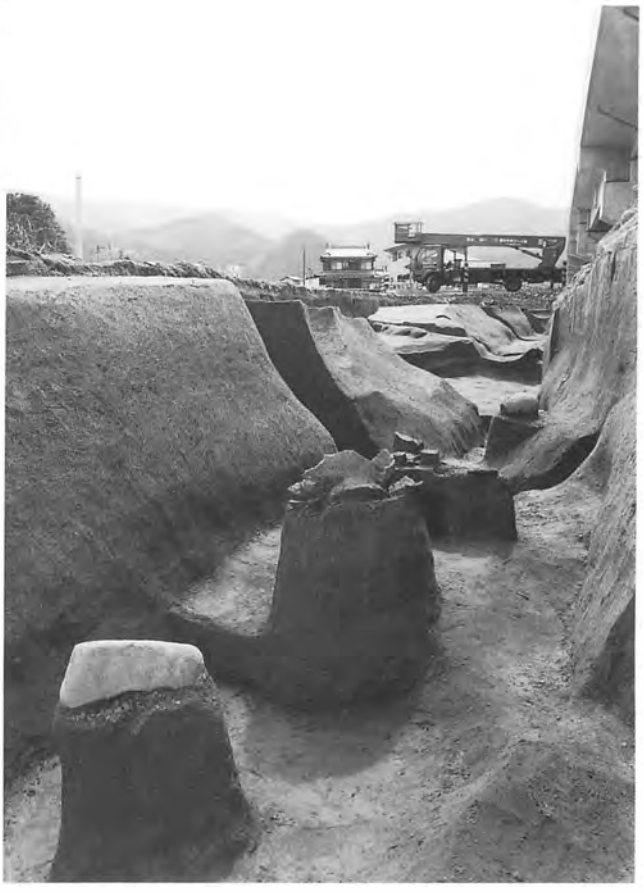
近世流路完掘状況

溝 SD015　完掘状況



土坑 SK015　遺物出土状況

溝 SD007　遺物出土状況



溝 SD007　遺物出土状況

溝 SD007　土層断面（１Ｔ）

溝 SD007　土層断面（２Ｔ）

Ⅳ－Fig44　近世陶器

Ⅳ－Fig45・55　出土遺物

Ⅳ－Fig45・46・55　出土遺物

Ⅳ－Fig45・47・61　出土遺物

天目茶碗

Ⅳ－Fig46・47　出土遺物

Ⅳ－Fig56　出土遺物

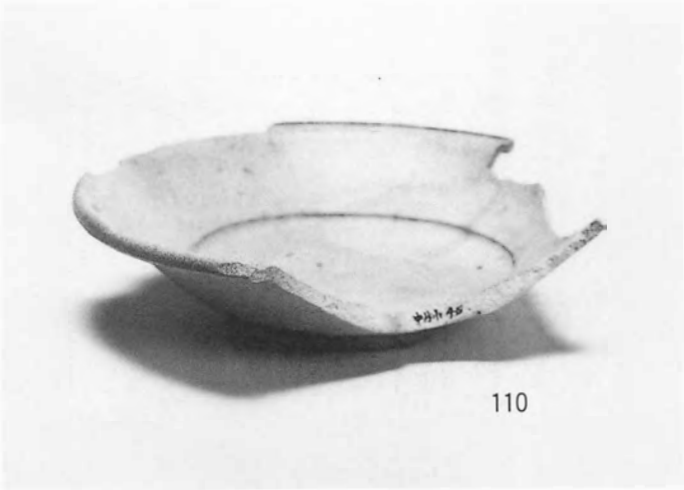
Ⅳ－Fig54・56　出土遺物

Ⅳ－Fig47　瓦質土器　擂鉢

Ⅳ－Fig48　出土遺物

Ⅳ－Fig56　出土遺物

Ⅳ－Fig55　同安窯　青磁椀



Ⅳ－Fig55　朝鮮系　白磁皿

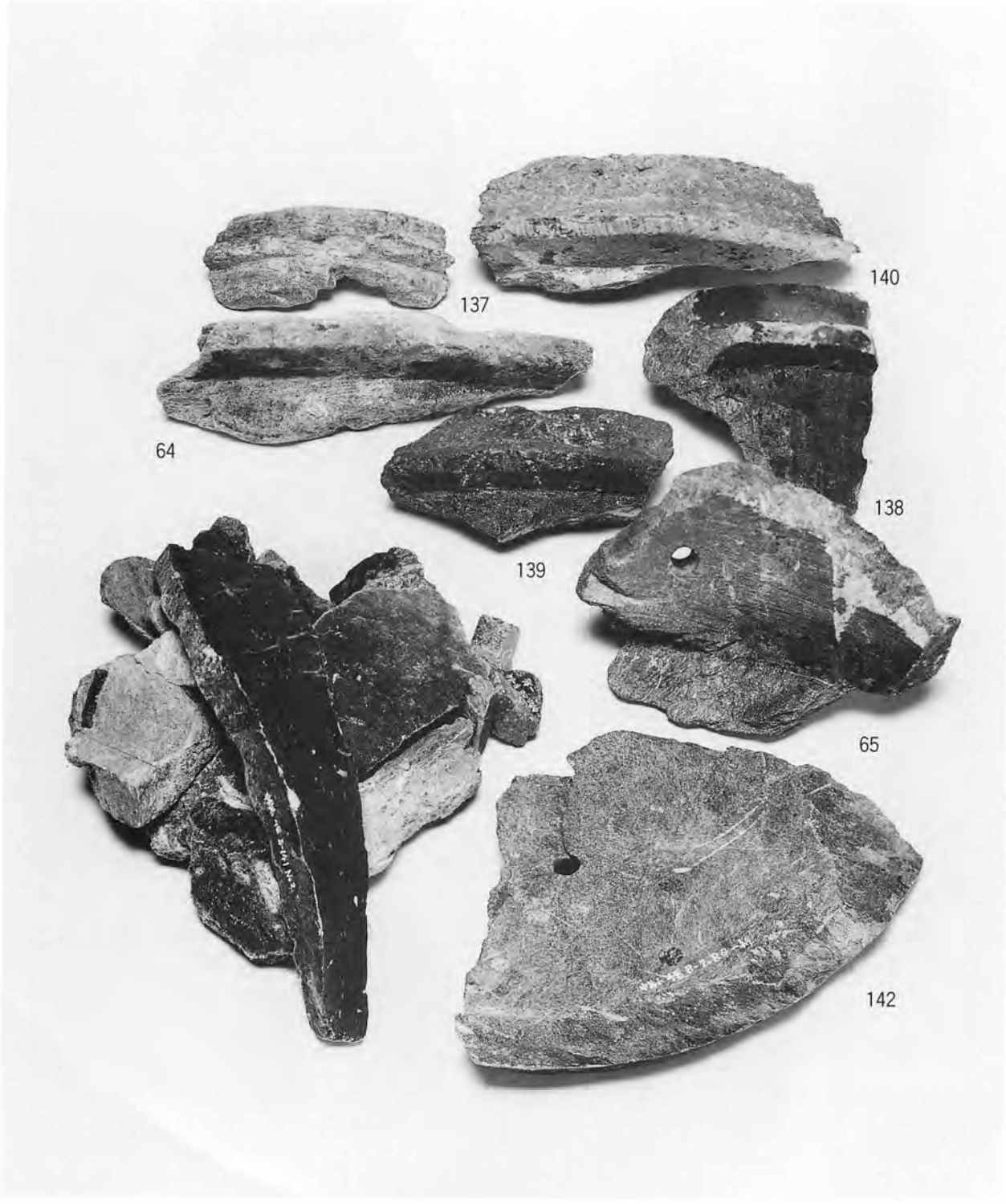
Ⅳ－Fig55　龍泉窯系　椀　Ⅳ類

Ⅳ－Fig55　朝鮮系　白磁椀（112）・同安窯系　青磁皿（113）
龍泉窯系　青磁皿（113）・椀（117）

Ⅳ－Fig55　龍泉窯系　青磁椀

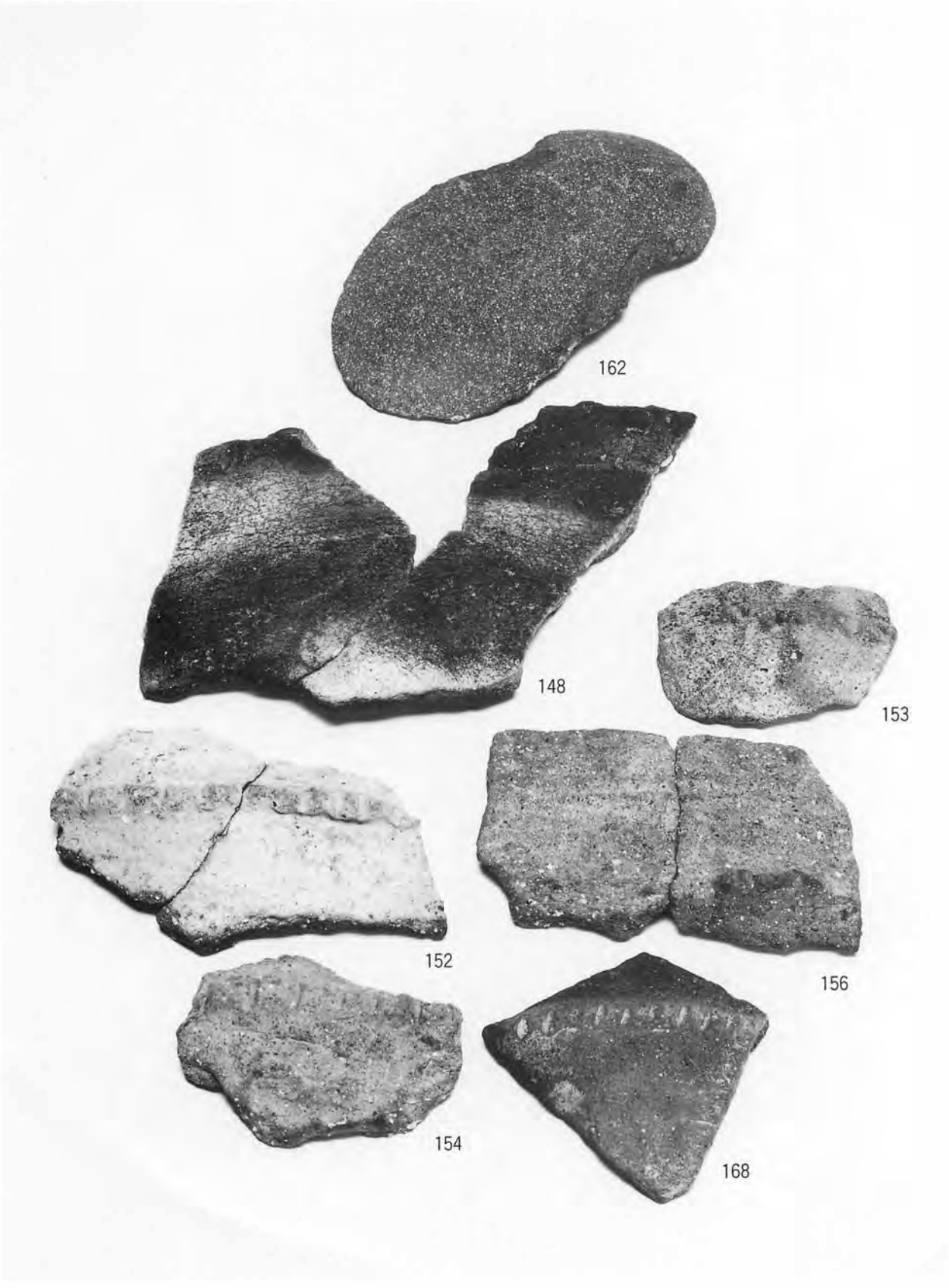
Ⅳ－Fig54　出土遺物

Ⅳ－Fig54・55・60　出土遺物



III－Fig15・IV－Fig57　石鍋

Ⅳ－Fig58　古墳時代出土遺物



Ⅳ－Fig59・60・61　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかかた　しょうじ　いせき
書　名	中片小路遺跡
副書名	九州新幹線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第224集
編集者名	長谷部善一・高田英樹
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-0950　熊本市水前寺６丁目18番１号
発行年月日	2005年３月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中片小路遺跡（なかかたしょうじいせき）	熊本県（くまもとけん） 八代市（やつしろし） 中片町（なかかたまち） 字小路（あざしょうじ）	八代市	223	（３区） 32°30′ 14″7763 （４区） 32°30′ 06″9543	（３区） 130°38′ 24″8989 （４区） 130°38′ 25″9837	02.12.02 ～ 03.03.28	1,200	九州 新幹線 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中片小路遺跡	墓地 集落跡	明治時代 江戸時代 鎌倉時代 平安時代 古墳時代	墓穴 〃 〃 溝 〃	甕棺、貨幣、陶器 磁器（青磁・白磁） 土師器・須恵器 （東播窯中世須恵器）、八代窯系	な　し

印刷仕様
●判型／Ａ４判
●頁数／154頁
●組版／写真写植（13級 ゴシック基本）
●印刷／オフセット印刷
●製版／スクリーン線数200線で製版
●用紙／表紙（アートポスト４／６判220kg）
本文（マットアート４／６判110kg）
●製本／左無線綴じ

熊本県文化財調査報告　第224集
中　片　小　路　遺　跡

平成17年３月31日
発行　熊本県教育委員会
〒862-8570　熊本市水前寺６丁目18番１号
印刷　シモダ印刷株式会社
〒862-0951　熊本市上水前寺２丁目16番16号

16 教委 教文
② 008

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 224 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：中片小路遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日